毘曇部 1

発智論 I

桜部 建
加治 洋一
校註

大蔵出版

目次

阿毘達磨発智論　解題……（一―一八）……五

阿毘達磨発智論　I……一三

凡　例……二四

巻の第一……（一―三五）……二七

雑蘊 第一の中、世第一法納息 第一……二七

雑蘊 第一の中、智納息 第二……三六

雑蘊 第一の中、補特伽羅納息 第三……四九

巻の第二……（三六―七六）……六三

雑蘊 第一の中、愛敬納息 第四……六三

雑蘊 第一の中、無慚納息 第五……七三

雑蘊 第一の中、相納息 第六……八〇

雑蘊 第一の中、無義納息 第七……八五
雑蘊 第一の中、思納息 第八……九〇
巻の第三……〔七七―一〇六〕……一〇三
結蘊 第二の中、不善納息 第一……一〇三
結蘊 第二の中、一行納息 第二の一……一二五
巻の第四……〔一〇七―一三七〕……一三三
結蘊 第二の中、一行納息 第二の二……一三三
巻の第五……〔一三八―一六八〕……一六四
結蘊 第二の中、有情納息 第三……一六四
結蘊 第二の中、十門納息 第四の一……一八四
巻の第六……〔一六九―一九二〕……一九五
結蘊 第二の中、十門納息 第四の二……一九五

目　次

巻の第七 ……〔一九二—二三四〕…… 二一八
智蘊 第三の中、覚支納息 第一 …… 二一八
智蘊 第三の中、五種納息 第二 …… 二三七
巻の第八 ……〔二三五—二五〇〕…… 二五一
智蘊 第三の中、他心智納息 第三 …… 二五一
智蘊 第三の中、修智納息 第四の一 …… 二五七
巻の第九 ……〔二五一—二七四〕…… 二七七
智蘊 第三の中、修智納息 第四の二 …… 二七七
智蘊 第三の中、七聖納息 第五の一 …… 二九〇
巻の第十 ……〔二七五—三〇七〕…… 三〇一
智蘊 第三の中、七聖納息 第五の二 …… 三〇一
テキスト訂正一覧表 …… 三三六
補　註 …… 三四六

阿毘達磨発智論　解題

櫻部　建

一

ここに国訳(漢文からの仮名混じり読み下し)を試みるのは、説一切有部(略して、有部)のアビダルマ論書の中で著名なものの一つ『阿毘達磨発智論(あびだつまほっちろん)』二十巻、迦多衍尼子造、唐玄奘訳、(以下では略して『発智論』あるいは単に『論』という)である。本文は『大正新脩大蔵経』巻二十六(九一八頁以下)に依った。

この書の原文はサンスクリット語で書かれたらしい。もしそうでなかったとしても、サンスクリット文のテクストが作られていたことは確かで、玄奘の翻訳はそれから成された。そのサンスクリット本は他書に引用されたものが、ごく部分的に知られている(たとえばAbhidharmakośabhāṣya, Pradhan ed. p. 74, Abhidharmakośavyākhyā, Wogihara ed. p. 52, etc.)のみであるが、サンスクリット原題がJñānaprasthānaであり、著者の原名がKātyāyanīputraであることは確かである。著者の年代は玄奘系の伝承によれば「仏滅三百年」とされ、その『発智論』述作は『大唐西域

記』によればチーナブクティ(現今のFerozepore)においてであるとする。もっとも『大毘婆沙論』は「尊者此の発智論を造る時、東方に住在」したという。

この論の旧訳には『阿毘曇八犍度論』三十巻、迦栴延子造、符秦僧伽提婆・竺念仏共訳、がある。

二

読者は、既出の『仏書解説大辞典』第一巻「阿毘達磨発智論」の項(坂本幸男・西義雄執筆)、望月信亨編『仏教大辞典』第一巻「阿毘達磨発智論」の項、仏教大学(現、龍谷大学)編『仏教大辞彙』第三巻「発智論」の項、大東出版社刊『国訳一切経』毘曇部第十八所収「八犍度論解題」(坂本幸男・西義雄執筆)などによって、この論書の大要を知り得るであろうが、ここ(八頁第十行から一四頁第二行まで)には、筆者の旧著『倶舎論の研究 界・根品』(一九七四年、法蔵館刊)から『発智論』に関する部分を抄出して、その相貌を示すこととする。

1 集異門・法蘊・施設・識身・界身・品類の六論を六足論とし、それらは身論たる『発智論』の六つの支分を成す、とする考え方は、「長くシナ・日本の研究者をも支配してきたが、もし発達史的にアビダルマを見ようとするならば」それらを倶舎研究のための「補助学の如く考える先入主から、脱却しなければならぬ」(山田龍城『大乗仏教成立史論』八五頁)ことは言うまでもない。しかし、その考え方は、いったい、いつ頃、どのようにして生じたのであろうか。

七論自身はそれについて何も語らない(『集異門足論』、『法蘊足論』というような題号はもちろん本来のものではなく、「発智・六足」という考え方が生じてから、それに支配されて、翻訳の際、足の字を加えたものに相違ない)。『大毘婆沙論』もそれを語っていない。有部派内で、『発智論』が代表的な論書として重んじられたことは確かな事実であるけれども、玄奘訳『倶舎論』、『順正理論』などが「本論」とか「根本阿毘達磨」とか呼んで引用しているものは、必ずしも『発智論』には限らない。『品類論』であることも多いし、『識身論』などのこともある(渡辺楳雄、『有部阿毘達磨論の研究』五七―八二頁)。そこに、特に『発智論』を、「本論」あるいは「身論」として、六つの足論と対比して取り扱っている趣は無い(*)。すなわち、有部のアビダルマ論書自体には、〝六足・発智〟という考え方は見られない、というべきである。

『大智度論』にいう「六分阿毘曇」(巻二、大正二五・七〇a)や、「六足阿毘曇」(巻一〇〇、同七五二a)は、多分いわゆる六足論を指すのであろうが、その箇処の記述には不明瞭な点が多いから、そうと確認できないし、その「六分阿毘曇」と「発智論八犍度度」との関係も、そこでは必ずしもはっきりしない。『成実論』に見える「六足阿毘曇」(大正三二・二九七c)、「阿毘曇六足」(同三一八c)も、同様に、おそらくいわゆる六足論を意味するのであろうが、「阿毘曇身」(同三二〇a)というのが発智身論を指すかどうかはかなり疑わしい。そうすると、やはり、第四世紀の終わり近くにシナで書かれた漢訳『八犍度論』に対する序文の中に、罽賓沙門曇摩卑の言として伝えられている「八犍度是体耳、別有六足可百万言」(大正二六・六八七a)という言葉が、「発智・六足」という考え方の「明文として示される最古の文献」(山田『成立論』八五頁、Cf. J. Takakusu: JPTS 1905, p. 73f.)といわねばならぬ。けれども、その考え方がシナ・日本の仏教においてしか見られないというのでは決してない。称友疏には明瞭に現れている(Yaś

p. 9, l. 11f.; p. 466, l. 11f)のであるから、インドにおいて行われていたことは疑いない。もっとも、チベットに伝わった伝承の中には、七論を枚挙しても、それを身と六足という関係には理解していないものもある(Buston; History, I, p. 49, 50, Cf. Mvy Nos. 1415-1420)から、インドにおいて、「六足・発智身」という考え方が広く一般的であったとは言えないのである。

『大毘婆沙論』から『顕宗論』に至る諸論の中に引かれる有部論書が、ほとんど、『界身論』を除く五論および『発智論』に限られている事実は、確かにそれらの論の重要性を証しているが、しかし、それだからといって、「六足発智の七論」が有部の「最権威的な一団の諸聖典」(渡辺、上掲書四四頁)であったとは考えられず、この「六足・発智」という考え方は、特に、有部論書を成立史的に見ようとする場合、余り意味をもたぬものである。

＊『顕宗論』巻一(大正二九・七七九b)には「発智等諸論」とあるが、それを「発智・六足」を指すものと決めつける(渡辺楳雄『有部阿毘達磨論の研究』三四、三五頁)のは、速断である。

2　『発智論』は、雑・結・智・業・大種・根・定・見の八蘊(八篇)に分かって、あらゆる問題を論じ、有部教義を一論の中にとり纏めた。分量からいっても、先行の論書のどれよりも多い。単に教説をとり纏めたというだけでなく、新しい発展にも貢献した。六因説や、十二縁起の〝胎生学〟的解釈などは、この論に至って明らかな形で説かれる教説である。「法の理論」の発展の上からは、特に結蘊(第二篇)の十門納息(第四章)中に説かれる四十二(『八犍度論』では四十、『阿毘曇婆沙論』では四十一)法が学者によって注目されている(山田『成立論』八二頁、一〇八頁。福原亮厳『有部阿毘達磨論書の発達』一七四頁以下。フラウワルナー、WZKSO 1963, S 29.)。

有部の論書で「本論」、「根本阿毘達磨」などと呼ばれるのが、この論ばかりでないのは上述の通りであるが、この論の場合がやはり最も多いから、有部派内で、この論が代表的論書として認められていたことは疑いない。仏世尊によって諸処に散説された阿毘達磨を迦多衍尼子らの諸大声聞が結集安置したのが阿毘達磨論書である、という有部の伝統説(『大毘婆沙論』巻一、大正二七・一b。Abhidharmakośabhāṣya, Pradhan ed. p. 3 ;『倶舎論』巻一、大正二九・三a)も、有部派内のこの論の地位を物語るものである。

『発智論』は、有部教義の全般に亘る集録であるが、その叙述は決して十分に組織的でない。八蘊の立て方にしても、『大毘婆沙論』(巻二、大正二七・七b)がそれを意味づけているような順序次第を追った、構成的叙述の意図が、最初からあったとは、到底考えられない。まして、そこに「四諦観を根底とした論書の組織」(福原、上掲書一八五頁)を見得ようとは思われない。『発智論』全体の構成は、なお、ただ関係のある論題をある程度一箇処に集めて、論じた、という段階に留まっている。

この点では、『発智論』は『尊婆須蜜菩薩所集論』と同一の段階にある。『婆須蜜論』は聚犍度乃至偈犍度の十四章に分かってそれぞれ相応の論目を挙げて論じているものであるが、そこに包括的・体系的な構成は見られず、広く問題を集録して羅列したに留まっていて、明らかに体系的な意図をもって著わされた『阿毘曇心論』以後の論書とは、明瞭に区別されるものである。『婆須蜜論』の分量は『発智論』より遙かに小さいし、有部派内での地位から言えばもちろん『発智論』とは比較にならないけれども、論書体系化発展の段階からいえば、この二論は並べて考えられてよい。

『発智論』には異訳『八犍度論』がある。二つの訳本の間には、いくぶんの所伝の相違が見出され、それは有部

内の分派の主張の相違を反映していると、考えられている。また、『大毘婆沙論』と旧訳『阿毘曇毘婆沙論』との間にも、同様な事情が考察されている(*)。

* 木村『阿毘達磨論の研究』二〇五頁以下、西・坂本「国訳八犍度論解題、『国訳一切経』毘曇部十八、九頁以下、西「有部宗内における発智系・非発智系の諸種の学説及び学統の研究」(「宗教研究」新一一―四、五)、渡辺『有部阿毘達磨論の研究』第二篇第三章、第四篇。

3 『大毘婆沙論』は言うまでもなく『発智論』の浩瀚な註釈である。このような註釈が造られたところにも有部派内での『発智論』の地位が示されていると言えるし、また逆に、このような註釈が書かれたことによって、有部派内で『発智論』の地位が揺るぎなくなった、とも言えよう。

この厖大な量の註釈によって、論題の分化はますます進められ、考察はいよいよ精密になった。それは単に発智本論の註釈であるばかりでなく、「随応論」として、本論に無い新しい問題を数多く取上げて論じている。また、自派内の種々な異論や、他部派の説を、無数に引用していて、有部教義の、可能な限りの集大成と言ってよい。

一例を挙げれば、『発智論』の冒頭に「云何世第一法?」と問いを起こし、それに答えを与える一節は、玄奘訳にして七十字余りの文章に過ぎないが、それに対する『大毘婆沙論』の註釈は、同じ玄奘の訳において巻二の全部と巻三の一部を占めるから、字数にすれば八千字を上回る。その中、「何故経中世尊先説世第一法?」(大正二七・五c)という設問に対しては、実に三十三種類もの答えを挙げて、あらゆる考え方を網羅しているのである。単に世第一法とはいかなるものかを解説するに留まらず、その法とその法の得との関係、その法と四念住との関係、そ

の法と四縁との関係など、関連するさまざまな問題まで細かく論じている（大正二七・一〇c―一一a）。そこに名前を挙げて引用する論師や異派の説だけを数えても、妙音・法救・覚天・旧阿毘達磨者・分別論者・経量部・犢子部・相似相続論者等々の名を見出すことができる。もってこの論の相貌を知り得るであろう。

『大毘婆沙論』の註釈の仕方は、『発智論』の本文を平等に遍ねく註釈する、というものではない。重要な問題と認めたものには特に多くの巻を割き、そうでないものは甚だ簡略に取り扱っている。そういう点にも、『大毘婆沙論』が、『発智論』より出でて新たに開拓したものが示されている。

その顕著な一例として、上述の十門納息の四十二法（『大毘婆沙論』では「四十二章」）の解説を挙げることができよう。十門とは(1)四十二（法）、(2)（その）随増、(3)二縁、(4)無間、(5)有（尋伺）、(6)根（相応）、(7)成就、(8)不成就、(9)（遍）知、(10)（滅作）証である。玄奘訳『発智論』の十門納息は『大正大蔵経』にして八頁弱（全『発智論』の十五分の一強）であるが、その中、(1)は、四十二種の法の名目を挙げるだけであるから、六分の一頁をも占めていない。ところが、『大毘婆沙論』の十門納息は、玄奘訳にして二二巻、『大正大蔵経』にして一一三頁（全体の十分の一強）もあるが、その中、(1)についての広釈が一五巻を占め、(2)―(10)に関する部分は全部で七巻を占めるに過ぎない。しかも、(1)についての一五巻に含まれているのは、四十二章の中、二十二根乃至十遍処という二十二章についての広釈だけであり、他の二十章についての釈は、別な箇処に（八智乃至三重三摩地については智蘊の中に、三結乃至九十八随眠については結蘊の不善納息の中に）説かれているのであるから、この『大毘婆沙論』結蘊十門納息の初めの三分の二（玄奘訳にして巻七一から巻八五まで、『大正大蔵経』にして七六頁半）は、実に、玄奘訳『発智論』にすれば僅か一〇〇字ばかりの本文に対する註釈のために、費やされているのである。

だから、『大毘婆沙論』が『発智論』の框を越えた、独自な大幅な進展を示していることは、明らかであるが、それでもなお、すべて『発智論』の組織により、『発智論』の文意に基づいて註釈するその態度はくずしていない。

三

『発智論』が全体として十分に組織的な論述とはいい難いことは上に述べたごとくである。それを、法義の上で「未決の諸問題を蒐集し」、「決着し応答した、いわば、諸問題解答集である」とする(西義雄『阿毘達磨仏教の研究』五九頁)のは首肯できるが、その構成を「第一篇〝雑〟論は全巻の総説に当」り「第二篇〝結〟論以下第八篇〝見〟論までは、いわば各論である」というのは必ずしも当たらないし、第一篇の組織的内容を概説して、

(1)まず、凡夫における最上の善根としての「世第一法」から説き起こし、それによって対治される雑染の法たる「二十種の悪見」を明らかにする。(2)次に、これら浄染の法は「聖なる無我智」によって了知せられるからそれが説かれ、(3)無我智は縁起を観ずることによって悟られるから「十二支縁起」が説かれる。(4)縁起を悟るのは三宝に対する愛敬によるから「愛と敬と」が説かれ、(5)愛敬心は凡夫の慚愧心に基づくから「無慚無愧と慚愧と」が説かれる。(6)慚愧の心は法相法義を理解することから起こるから「法相」が説かれ、(7)法相の理解には「有義の修行」を行ずることを要するからそれが説かれ、(8)その有義の修行は八正道とくに「正見と正思惟」によるから、それが説かれる

と述べてこの論書の中に前後相連関した論述が整然と展開されているかのように説くのは、実際の内容とだいぶ隔

たりがある。

第一篇(雑蘊第一)の第一章(世第一法納息第一)では、(1)世第一法の他に、(2)頂、(3)煖を説明し(忍については触れない)、(4)二十種の有身見のいくばくが我見でいくばくが我所見かを分別し、(5)十一種の誤った見は五悪見のいずれに含まれるか、四諦のいずれを見ることによって断ぜられるか、を分別する。

第二章(智納息第二)では、(1)一智あるいは一識がすべての法を知ることはない、と説き、(2)二つの心が相互に因となることはないが相互に縁となることはある、と説き、(3)二心の倶生がない所以と、(4)無我であるのに記憶が可能である所以と、(5)祭祀して餓鬼を招くことのできる所以とを明かし、(6)色(声・香)を捉えるのは両眼(両耳・両鼻孔)によることを説き、(7)過去せると現在せざると滅せるとの一異について四句分別をなし、(8)苦集滅道の各々について疑を起こすはそれぞれ別な心であり、疑をもつ心と疑なき心とも、また、別であると説き、(9)多名身・多句身・多文身を説明し、(10)仏が弟子に対して用いた「癡人」の語の意味と、仏がそれを用いて呵した理由を説き、(11)六因の各々を説明し、最後に、(12)随眠と有随眠心との関係、随眠とその断との関係について、論究する。

これを見れば『発智論』が、説一切有部阿毘達磨の多数の術語について教理的な順序を追って詳しい説明解釈を与えるというよりもむしろ、諸術語間の相互関係を細かに究明し規定するいわゆる〝諸門分別〟をなすことによって、各語が担っている概念の内包と外延を厳密に示そうとすることに最も力を注いでいることが知られる。実際、ここに論究せられる諸術語が密接な教理的な順序次第をもって登場して来る場合はむしろ少ない。たとえば、上記第一篇第一章の(1)(2)(3)と(4)以下とが、能対治と所対治との関係を有するという理由でここに列挙されるのであるとは、『論』の本文も語っていないし、われわれも亦必ずしもそうであるとは考え得ない。また、第二章の(6)(7)(8)(9)

(10)などの上に、いかなる相互の前後関係があってそれらがその順序に説かれねばならぬかを説明することは、まず不可能でなかろうか。「世第一法納息」という標題も、その下にまず世第一法が論ぜられることからそう名付けられるに過ぎず、その章中にただ世第一法のみが、あるいはそれに連関する諸項のみが、取り扱われるのではない。「智納息」の中にもただ智のみが、あるいはそれに連関する諸項のみが、取り扱われるのではない。第三章「補特伽羅納息」以下も、同様である。第二篇結蘊は、三結ないし九十八随眠の十六門についての諸門分別と、同じく二十二根ないし九十八随眠の四十二門についての諸門分別とにほぼ尽きているといえるが、第三篇智蘊は、また、八道支・十無学支・七覚支についての諸門分別、見・智・慧・忍の関係についての論、智・解脱・明・証浄・等持・修などについての論、断と智と作証との関係についての論、七聖と八智との関係についての論などの間に、五悪見や無常想についての論議などをさし挟んでいる。

『論』はこのように全体としては必ずしも、明快な順序次第をもたぬ構成になっているから、説一切有部の教義体系にある程度の知識をもたずに、この書を初めて繙く読者は、それを巻頭から読み進めていっても、おそらく所説の意味を把握するのに困難を感ずるほかはないであろう。次下の本文の頭注の中で、常に『阿毘達磨倶舎論』の参照箇処を示しているのは、読者のために、そこに論ぜられている語句が有部の教義体系の中でいかなる位置を占めるものかを知るために『倶舎論』を参照することは必須であるから、それを参照するよすがとなれば、と考えたからである。括弧の中の「倶」は玄奘訳『阿毘達磨倶舎論本頌』を、ローマ数字は品の番号(たとえばⅠは第一界品)を、アラビア数字はその品の中の偈の番号を示すから、もし読者が大蔵出版株式会社刊『仏典講座18　倶舎論』を座右に置かれるなら、参照に便利であろう。

四

以下には、上記の第一篇第一、二章の内容の摘要に続いて、同第三章以下第三篇第五章まで（すなわち本巻に収められる『論』の前半）の論点を要約して提示することにする。

第一篇第三章（補特伽羅納息）では、(1)十二縁起のいくばくが過去世にいくばくが未来世にいくばくが現在世に属するかの分別と、「無明の縁より行あり」と「取の縁より有あり」とのおのおのの意味およびその差別が説かれ、(2)無明を縁とし明を縁としないものは、原則として無いが、「因縁に依りて説く」場合にはそれが有り得ることが説明され、(3)入出息は心によっても身によっても転ずることを明かし、(4)無色界の有情の心相続が何によって転ずるかを説き、(5)無有愛・愛・無有について説明し、(6)心の解脱について論じ、(7)厭と離染と解脱との関係を説き、(8)断界・離界・滅界および、(9)断想・離想・滅想について明かす。

同じく第四章（愛敬納息）で論ぜられるのは、(1)愛・敬・愛敬とは何か、(2)供養・恭敬・供養恭敬とは何か、(3)身力・身劣とは何か、その二はいくばくの処に含まれいくばくの識に識られるか、(4)択滅・非択滅・無常滅とは何か、その三の別は何か、(5)経にいう「有余依涅槃界」、「無余依涅槃界」とは何か、涅槃は学か無学か、非二か、(6)経にいう「無学の戒蘊・定蘊・慧蘊・解脱蘊・解脱智見蘊」とは何か、慧蘊と解脱智見蘊との別はどこにあるか、(7)経にいう「究竟」の意味は何か、(8)経に、外道が三取を断知すると説くも我語取を断知するとは説かぬ理由は何か、(9)経にいう「智遍知」、「断遍知」の意味は何か、(10)「帰依仏」、「帰依法」、「帰依僧」の意味は何か、などの諸問題

である。

同じく第五章(無慚納息)の論点は、(1)「無慚」、「無愧」の定義、その二つの別、「慚」、「愧」の定義、その二つの別、(2)増上の不善根、微俱行の不善根、欲界の増上の善根、微俱行の善根、(3)過去せる心と変壊せる心との関係、(4)掉挙・悪作の定義、掉挙ある心と悪作相応の心との関係、(5)惛沈・睡眠の定義、惛沈ある心と睡眠相応の心との関係、(6)夢中における福・非福・非福非非福の増長の説明、夢の定義、(7)五蓋ともろもろの蓋との関係、蓋と覆との関係、(8)無明随眠の定義、(9)不共の掉挙纏の無いこと、などである。

同じく第六章(相納息)では、(1)色法(非色法・有見法・無見法・有対法・無対法・有漏法・無漏法・有為法・無為法・過去法・未来法・現在法・善法・不善法・無記法・欲界繫法・色界繫法・無色界繫法・学法・無学法・非学非無学法・見所断法・修所断法・不断法)の生・住・老・無常は非色(色・無見・有見・無対・有対・無漏・有漏・無為・有為・過去・未来・現在・善・不善・無記・欲界繫・色界繫・無色界繫・学・無学・非学非無学・見所断・修所断・不断)であること、(2)「老」の語義、(3)「死」の語義、(4)「無常」の語義および「死」と「無常」との別、(5)業力と無常力との比較、(6)経中の「起」、「尽」、「住異」の語の意味、が説かれる。

同じく第七章(無義納息)に論ぜられるのは、(1)「苦行には意義がない」と経中に説かれた理由、(2)経中の「対面の念に住する」という句の意味、(3)経にいう「第六の無相住」の意味、(4)仏が法輪を転じ五比丘が法を見たことを地神が知ったのは、正知見があってのことではなく、如来を信ずることによってであり、あるいは仏や仏弟子のそれを語るのを聞いたことによってであること、(5)苾芻らが阿羅漢果を得たことを三十三天が知るのは、正知見があってのことではなく、如来を信ずることによってであり、あるいは仏や仏弟子がそれを語るのを聞いたことによっ

てであること、(6)経にいう「化法調伏」、「法随法行」の意味、(7)「多欲」と「不喜足」の語義、この二の別、「小欲」と「知足」の語義、この二の別、(8)「難満」と「難養」の語義、この二の別、「易満」と「易養」の語義、この二の別である。

同じく第八章(思納息)では、(1)「思」と「慮」の語義、この二の別、「尋」と「伺」の語義、この二の別、「掉挙」と「心乱」の語義、この二の別、(2)「無明」の語義、「不正知」の語義、「不正知」と「妄語」との関係、「不正知」と「無明」との関係、(3)「憍慢」と「慢」の語義、この二の別、「増上慢」の所縁、自らを卑しとする慢、(4)欲尋・恚尋・害尋がいかに自らを害し他を害し自他倶に害するかということ、(5)境より智多く、智より識多く、無漏行より有漏行の多いこと、その理由、(6)「行円満」の説明、(7)「護円満」の説明、(8)「異生性」の意味、その無記なること、その善でない理由、その不善でない理由、欲界繫でも色界繫でも無色界繫でもあること、その理由、修所断なること、その理由、異生性の体、(9)邪見相応と邪思惟相応との相互関係、邪見相応と邪精進相応・邪念相応・邪定相応との相互関係、邪思惟相応と邪精進相応・邪念相応・邪定相応との相互関係、邪精進相応と邪念相応・邪定相応との相互関係、が説かれている。

第二篇(結蘊)の第一章(不善納息)では、三結ないし九十八随眠の諸煩悩法が、(1)善・不善・無記(三性門)、(2)有異熟・無異熟、(3)見所断・修所断、(4)見・非見、(5)有尋有伺・無尋唯伺・無尋無伺、(6)楽・喜・苦・憂・捨相応、(7)欲・色・無色界繫、に関して諸門分別され、(8)界に在ると界に堕するとの関係、(9)繫と断との関係、(10)五補特伽羅における三結ないし九十八随眠の成就・不成就、(11)見は他の見に対していかなる縁となるかの問題、が論ぜられる。

同第二章(一行納息)に扱われる問題は、(1)九結のおのおのが繫する事を他の結もまた繫するか、(2)九結のおのおのが三世のおのおのにおいて繫するとき、それ以外の世においても繫するか、(3)三世のおのおのの結の繫とその他の繫とにいかなる相互関係があるか、(4)三結ないし九十八随眠のおのおのは九十八随眠のいくばくを摂するか、(5)三結ないし九十八随眠のいくばくが三界のそれぞれの有を相続せしめるか、(6)三結ないし九十八随眠はそれぞれいずれの定によって滅するか、(7)過去の結にしてすでに繫したもの、未来の結にして繫するであろうものは何か、(8)道によって断ぜられた結は行者が道を退失したとき再びかれを繫するか否か、(9)すべての遍知の中で九遍知に摂せられぬものは何か、そのおのおのにおいて八補特伽羅のいくばくが成就するか、である。

同第三章(有情納息)において論究されるのは、(1)三界のおのおのに属する見所断あるいは修所断の結の中で頓にあるいは漸に繫を得るものあるいは繫を離れるものは何々か、(2)三界のおのおのに属する見所断あるいは修所断の結の尽は四沙門果の中のいずれの摂か、五部の結のそれぞれの尽はいずれの果の摂か、四向四果のそれぞれの中の結の尽はいずれの果の摂か、九部の結のそれぞれの尽はいずれの果の摂か、三界五部の結のそれぞれの尽はいずれの果の摂か、三結ないし九十八随眠のそれぞれの結の尽はいずれの果の摂か、四向四果の中のそれぞれの結の尽はいずれの果の摂か、三界のそれぞれにおいて未離染なる者にとってその界の修所断の結の尽はいずれの果の摂か、(3)四果のおのおのに住する者の成就する学法・無漏法・諸法はいくばくの果の摂か、(4)三界のおのおのに死してまた三界のおのおのに生ずる者およびもはや生じない者はいくばくか、などである。

同第四章(十門納息)には二十二根ないし九十八随眠の四十二門の、(1)おのおのにはいくばくの随眠が随増するか、(2)おのおのの縁識と縁々識とにはいくばくの随眠が随増するか、(3)おのおのはその等無間に三界十五心の中のいく

ばくを生ずるか、(4)おのおのの増すところの随眠は有尋有伺か、無尋唯伺か、無尋無伺か、(5)おのおのの増すところの随眠は憂・喜・苦・楽・捨の五根の中のいくばくと相応するか、(6)おのおのをいかなる者が成就し、いかなる者が成就しないか、(7)おのおのが遍知せられるとき九十八随眠の中のいくばくが遍知され、九結の中のいくばくが尽きるか、(8)おのおのの滅が作証されるとき九十八随眠の中のいくばくが作証され、九結の中のいくばくが尽きるか、といった諸問題が論ぜられる。

第三篇(智蘊)第一章(覚支納息)に扱われるのは、(1)有学の心は八道支の中のいくばくを具えるかという問題、(2)無学の心は十無学支(八道支と正解脱と正智と)の中のいくばくを具えるかという問題、(3)見と智と慧との定義と、それらの間の相互関係、(4)七覚支と正智および八道支との相互関係、(5)有漏(世俗)の正見と世俗の正智との相互関係、(6)無漏の見と智との相互関係、である。

同じく第二章(五種納息)に論ぜられるのは、(1)正見と正智との、邪見と邪智との、相互関係、(2)左慧は結なりや否やの四句分別、(3)学・無学・非学非無学の智と学の慧と学の見との相互関係、(4)諸天の説く「梵」についての見解はいずれの見に摂せられるか、いずれの慧に断ぜられるかの問題、(5)忍ずるということと見との関係、(6)五種の悪見はいずれの見の所摂か、いずれの所断かの問題、である。

同じく第三章(他心智納息)は、(1)他心智と宿住随念智との定義とそれぞれの作用、(2)時愛心解脱と不動心解脱との定義とそれぞれの性質、(3)学の明、学の智、無学の明、無学の智の説明、(4)仏・法・僧に対する証浄と諦現観との関係、(5)預流者の四顚倒における断・未断、および三三昧における成就・不成就、(6)三世の道の已修・未修、などについて論ずる。

同じく第四章(修智納息)では、(1)法・類・他心・世俗・苦・集・滅・道の八智の列挙とその定義、(2)八智相互の摂・所摂、(3)八智の中のある智が成就するときいくばくの智が成就するかの問題、(4)八智の中のある智が修せられるとき他の智も修せられるか否かの問題、(5)八智のおのおのがいくばくの智を縁ずるかの問題、(6)八智のおのおのはおのおのの智のいくばくの縁となるかの問題、(7)結と智による断との関係、(8)智による断と作証との関係、(9)智によって知られる範囲、(10)無常想の説明、(11)七処善智の説明、が説かれる。

同じく第五章(七聖納息)は、(1)八智のおのおのにおける七聖(随信行・随法行・信勝解・見至・身証・慧解脱・倶解脱)のおのおのの成就、(2)八智のおのおのと七聖のおのおのとが相互に現在前する関係、(3)七聖のおのおのの三三摩地のおのおのにおける成就・不成就、(4)三無漏根・七覚支・八道支のおのおのが現在前するとき七聖のおのおのに八智のいくばくが現在前するかの問題、(5)八智・三三摩地・三無漏根・七覚支・八正道(ただし正語・正業・正命を除く)のおのおのが相互に相応する関係、(6)四十四智事と八智との関係、七十七智事と八智との関係、八智のおのおのの相互の成就・不成就の関係、を論究する。

以上で『論』前半の内容の要約を終わる。

五

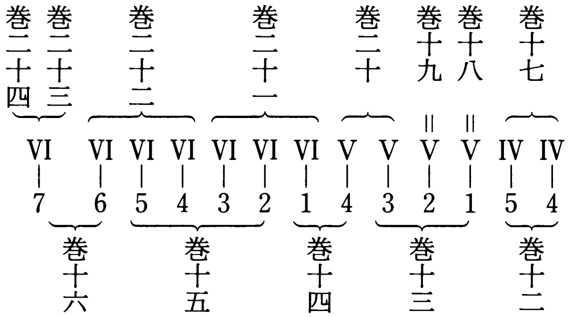
最後に、『論』の各篇各章と玄奘訳・僧伽提婆訳の各巻との対照を図示すれば左のごとくになる。(ローマ数字は篇の番号を、算用数字は章の番号を示す。)

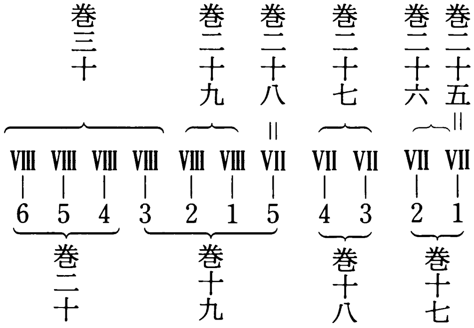
八犍度論		発智論
巻一	I－1、I－2	巻一（I－1、I－2、I－3）
巻二	I－3、I－4、I－5	巻二（I－4、I－5、I－6、I－7、I－8）
巻三	I－6、I－7、I－8	
巻四	＝II－1＝	巻三
巻五・巻六	II－2＝	巻四
巻七	＝II－3	巻五（II－3、II－4）
巻八	＝II－4＝	巻六

八犍度論		発智論
巻九	＝III－1	巻七（III－1、III－2）
巻十	III－2、III－3	巻八（III－3、III－4）
巻十一・巻十二	III－4	巻九（III－4、III－5）
巻十三・巻十四	III－5＝	巻十

（以上、本巻所収）

八犍度論		発智論
巻十五	IV－1、IV－2	巻十一（IV－1、IV－2、IV－3）
巻十六	＝IV－3	


卷十七
卷十八
卷十九
卷二十
卷二十一
卷二十二
卷二十三
卷二十四
IV-4 IV-5 V-1 V-2 V-3 V-4 VI-1 VI-2 VI-3 VI-4 VI-5 VI-6 VI-7
卷十二
卷十三
卷十四
卷十五
卷十六


卷二十五
卷二十六
卷二十七
卷二十八
卷二十九
卷三十
VII-1 VII-2 VII-3 VII-4 VII-5 VIII-1 VIII-2 VIII-3 VIII-4 VIII-5 VIII-6
卷十七
卷十八
卷十九
卷二十

阿毘達磨発智論 I

桜部　建
加治洋一　校註

凡例

一、本巻は『阿毘達磨発智論』(大正新脩大蔵経第一五四四)全二〇巻のうち前半一〇巻の国訳(漢文からの読み下し)およびそれに対する頭註、補註、解題等を含む。

一、大正大蔵経の本文を修正して読んだ箇処は、巻末に附した校異表(三三三、四ページ)に示した。

一、大正大蔵経中の本文との対照の便宜のため、国訳文の上方に細字をもって大正大蔵経巻二六のページ数を示してある。

一、『阿毘達磨発智論』は「雑蘊」ないし「見蘊」の八蘊に分けられているが、それらを本巻の註および解題の中では第一篇ないし第八篇と呼んでいる。また、各「蘊」はそれぞれいくつかの「納息」に分けられている(合計二二納息)が、それらを章と呼んでいる。

例　「結蘊有情納息」を第二篇第三章と呼ぶ。

一、訳文中、理解に必要と思われる場合に限って、本文に無い字句を〔　〕で囲って補足した。

一、本文中の音写語についてだけ、そのサンスクリット原語を訳文中に挿入した。

一、各章の冒頭に掲げられる詩頌(いわゆる「摂偈」)の中に加えた①②等の番号は、次下の本文の中の分節を示す

①②等と対応する。

一、頭註の諸所に附した略記号「(倶II 3)」等については解題(16ページ)参照。

附記　本巻において、本文の読み下しは加治洋一が、解題・頭註・補註は櫻部建が担当した。

㊅九一八上

阿毘達磨発智論

尊者迦多衍尼子 造
三蔵法師玄奘 詔を奉じて訳す

巻の第一

雑蘊 第一の中、世第一法納息 第一

① 世第一法の七と ② 頂の二と ③ 煖と ④ 身見と
⑤ 十一の見の摂と断とを 此の章にて願わくば具さに説かん

①—1 云何んが世第一[一]法なる。

答う。若し心[二]・心所法[三] 等無間[四]と為りて、〔行者〕正性離生[五]に入らば、是〔の心・心所法〕を世第一法と謂う。有るは是の説を作さく、「若し五根[六] 等無間と為りて正性離生に入

一 世第一法 説一切有部の完成された修行階程論(補註1)においては、四善根位の中の最高位。この位において世間、すなわち有漏法(補註2)、の中の最上の善根を得、次の刹那には聖道に入る。(倶VI 20、24)

二 心 五位(補註3)(色・心・心所・心不相応行・無為)の一。こころ。(倶II 24、35)

三 心所法 単に心所というも同じ。五位の一。こころの諸作用。(倶II 24、35)

四 等無間 等無間縁と同じ。前刹那の心・心所が次刹那の心・心所の生ずるための因となるのをいう。註四を見よ。(倶II 63)

五 正性離生 見道の異名。涅槃に向う正しい道であり迷いの生を離れさせるから、そう呼ぶ。(倶VI 27)

六 五根 信・勤・念・定・慧をいう。(倶II 3)

らば、是れを世第一法と謂う」と。此の義の中に於ては、若し心・心所法 等無間と為りて正性離生に入らば、是れを世第一法と謂うなり。

①—2 何の故にか世第一法と名づくる。

答う。是くの如きの心・心所法 余の世間法[七]より最たり、勝たり、長たり、尊たり、上たり、妙たり。故に世第一法と名づく。復た次に、是くの如きの心・心所法 等無間と為り、異生性[八]を捨てて聖性[九]を得、邪性[一〇]を捨てて正性[一一]を得、能く正性離生に入る。故に世第一法と名づくるなり。

①—3—1 世第一法は、当に欲界[一二] 繫[一三]と言うべしや、色界繫[一四]なりや、無色界繫[一五]なりや。

答う。応に色界繫と言うべし。

①—3—2 何の故にか此の法[一六]は応に欲界繫と言うべからざる。

答う。欲界の道[一七]を以っては能く蓋[一八]を断じ、纏[一九]を制し、欲界の纏をして復た現起せざらしむるに非ず。乃ち色界の道を以って能く蓋を断じ、纏を制し、欲界の纏をして復た現起せざらしむるなり。若し欲界の道を以って能く蓋を断じ、纏を制し、今欲界の纏をして復た現起せざらしめば、是くの如きの世第一法は、応に欲界繫と言うべし。然るに欲界の道を以っては能く蓋を断じ、纏を制し、欲界の纏をして復た現起せざらしむるに非ず、乃ち色界の道を以って能く蓋を断じ、纏を制し、欲界の纏をして復た現起せざらしむるなり。是の故に、世第一法は応に欲界繫と言うべからざるなり。

①—3—3 何の故にか此の法は応に無色界繫と言うべからざる。

答う。正性離生に入りて、先ず欲界の苦を苦たりと現観[二〇]し、後に合して色・無色界の苦

七 世間法 有漏法と同じ。(倶I4、8)
八 異生性 凡夫としてのあり方。第四章頭註三七を見よ。(倶II41)
九 聖性 聖者としてのあり方。異生性の対。
一〇 邪性 よこしまなあり方。『大毘婆沙論』の説明によれば、五無間業・三悪趣・五顚倒見を内容とする。
一一 正性 邪性の対。ひろくすべての聖道を意味し、特に見道を指してそう呼ぶ。
一二 欲界 三界の中の最下の領域、およびそこに在る有情。領域としては地下・地上・天界に亘り、有情としては五趣のすべてに亘る(補註4)。(倶III1)
一三 繫 三界のおのおのにおいて煩悩が有漏の法をそれぞれの界に繫属させること、およびそのようにして界に繫属せしめられている法。(倶I30)
一四 色界 三界の中の第二の領域、およびそこに在る有情。領域としては天界に含まれ、有情としては天趣に属する。四静慮の階位とされる(補註5)。(倶III2)
一五 無色界 三界の中の最高の領域、およびそこに在る有情。領域としては天界に含まれ、有情としては天趣に属する。四無色定の階位とされる。(倶III3)
一六 法 説一切有部アビダルマでは「自相(=自性)を保持するから法である」と定義される。(倶I2ab下)
一七 道 道諦と同じ。苦の滅(=涅槃)に趣く道。修行の道。(倶I4、5)

一八 蓋　善心を覆い隠すものの意で、広く煩悩の異名。特に煩悩・随煩悩の中の五種を挙げて五蓋と数える。（第四章頭註三八参照）（倶Ｖ58）

一九 纏　心にまつわりついて善をおこなうことを妨げるものの意で、広く煩悩の異名。睡っている煩悩を随眠と呼び、覚めている煩悩を纏と呼んで区別することもある。特に八種あるいは十種の随煩悩を挙げて八纏あるいは十纏と数える。（倶Ｖ49）

二〇 現観　無漏の慧をもって四諦を見ること。（倶Ⅵ2、27〜29）

二一 聖道　道と同じ。苦の滅に趣く道（道諦）は本来無漏であるが、時には有漏の道をも含めて道の語が用いられることもあるので、それと区別する意味で聖（＝無漏）の語を附する。

二二 無色定　それを修めることによって無色界に生まれるとされる三昧。空無辺処定・識無辺処定・無所有処定・非想非非想処定の四。（倶Ⅷ2〜5）

(大九一八中

を苦たりと現観す。[二一]聖道起こりては、先ず欲界の事を辯じ、後に合して色・無色界の事を辯ず。若し正性離生に入りて、先ず無色界の苦を苦たりと現観し、後に合して欲・色界の苦を苦たりと現観し、聖道起こりて、先ず無色界の事を辯じ、後に合して欲・色界の事を辯ぜば、是くの如きの世第一法は、応に無色界繫と言うべし。然るに正性離生に入りては、先ず欲界の苦を苦たりと現観し、後に合して色・無色界の苦を苦たりと現観し、聖道起こりては、先ず欲界の事を辯じ、後に合して色・無色界の事を辯ず。是の故に、世第一法は応に無色界繫と言うべからず。復た次に、[二二]無色定に入りて色想を除去す。色想を除きては能く欲界を知るには非ず。若し此の法を縁じて[二三]苦法智忍を起こせば、即ち此の法を縁じて世第一法を起こすなり。

①—4—1　世第一法は当に[二四]有尋有伺と言うべしや。[二五]無尋唯伺なりや、[二六]無尋無伺なりや。

答う。応に、或いは有尋有伺、或いは無尋唯伺、或いは無尋無伺と言うべし。

①—4—2　云何んが有尋有伺なる。

答う。若し有尋有伺の[二七]三摩地(samādhi)に依りて正性離生に入らば、彼れの所得の世第一法なり。

①—4—3　云何んが無尋唯伺なる。

答う。若し無尋唯伺の三摩地に依りて正性離生に入らば、彼れの所得の世第一法なり。

①—4—4　云何んが無尋無伺なる。

答う。若し無尋無伺の三摩地に依りて正性離生に入らば、彼れの所得の世第一法なり。

①—5—1　世第一法は当に[二八]楽根相応と言うべしや。[二九]喜根相応なりや、[三〇]捨根相応なりや。

二三　苦法智忍　見道の第一刹那に生ずる無漏の慧。欲界の苦を対象とする。(倶VI 27)

二四　有尋有伺　尋とはものごとを尋ね求め推し量る心のはたらき。伺とは尋よりもさらに細密にものごとを考察思惟する心のはたらき。初静慮(四禅の第一)においては尋も有り伺も有るから、それを有尋有伺三摩地という(三摩地＝三昧＝定、註二七を見よ)。(倶Ⅷ 2)

二五　無尋唯伺　初静慮と、第二静慮に入る準備的段階である近分定との中間の段階である中間定(静慮中間とも中間静慮ともいう)(補註6)においては、尋は存在せずただ伺のみがあるから、それを無尋唯伺三摩地という。(倶Ⅷ 2)

二六　無尋無伺　第二静慮の近分定に至ると尋はもとより伺もまた存在しないから、それおよびそれよりさらに進んだ諸静慮地を無尋無伺三摩地という。(倶Ⅷ 2)

二七　三摩地　三昧というも同じ。「定」と訳する。心を統一静止させる作用、またその状態、また心をその状態に至らしめる修行。(倶II 25、Ⅷ 1)

二八　楽根　五受根(補註7)の一。身に感受される快さ。(倶II 7)

二九　喜根　五受根の一。心に感受される快さ。(倶II 7)

三〇　捨根　五受根の一。苦でも楽でもない中正な印象感受。(倶II 8)

答う。応に、或いは楽根相応、或いは喜根相応、或いは捨根相応と言うべし。
①―5―2　云何んが楽根相応なる。
答う。若し第三[三一]静慮(じょうりょ)に依りて正性離生に入らば、彼れの所得の世第一法なり。
①―5―3　云何んが喜根相応なる。
答う。若し初の二[三二]静慮に依りて正性離生に入らば、彼れの所得の世第一法なり。
①―5―4　云何んが捨根相応なる。
答う。若し未至(みし)[三三]・第四[三四]静慮に依りて正性離生に入らば、彼れの所得の世第一法なり。
①―6―1　世第一法は当に一心と言うべしや、多心なりや。
答う。応に一心と言うべし。
①―6―2　何の故にか此の法　多心に非ざる。
答う。此の心・心所法より無間には余の世間心[三五]を起こさず、唯(た)だ出世心[三六]を起こすのみなり。若し当に余の世間心を起こすべくんば、劣たりや、等たりや、勝たりや。若し当に劣たるべくんば、応に正性離生に入ること能(あた)わざるべし。何を以っての故に。退道[三七]を以っては能く正性離生に入るに非ざるが故なり。若し当に等たるべくんば、亦た能く正性離生に入ること能わず。何を以っての故に。先ず此の類の道を以っては正性離生に入ること能わざるが故なり。若し勝たるべくんば、先なるは応に世第一法に非ざるべく、後のみ方(まさ)に是れ世第一法なるべし。
①―7―1　世第一法は当に退[三八]と言うべしや、不退なりや。
答う。応に不退と言うべし。

三一　**第三静慮**　四静慮の中、浅い方から数えて三番目。その静慮に入れば、心に尋も伺もなく、喜受(喜根)もなくて楽受(楽根)のみがある。(倶Ⅷ1、2、)

三二　**二静慮**　四静慮の中、浅い方から数えて第二。その静慮に入れば、心に尋・伺は無く、喜受・楽受がある。(倶Ⅷ1、2)

三三　**未至**　初静慮の近分をいう。(倶Ⅷ22cd)

三四　**第四静慮**　四静慮の中、最も深い三昧。それに入れば、尋・伺も無く喜・楽も無くて五受根の中では捨受のみがある。(倶Ⅷ1、2)

三五　**世間心**　有漏の心というに同じ。

三六　**出世心**　出世間心の略。無漏の心というに同じ。

三七　**退道**　ある心の無間(直後)にそれより劣った有漏心が生ずるような心相続の経過を意味する。註三八を見よ。　(大)九一八下

三八　**退**　修行の道において後退することを退、退失、退転などという。ここでは、退は「退することもある」の意で、不退は(「退することはけっして無い」の意)に対する。(倶Ⅵ61)

①―7―2　何の故にか此の法は定んで不退なる。

答う。世第一法は、[39]諦に随順し、諦に趣向し、諦に臨入す。此れと彼れとの中間に不相似心を起こして、聖諦現観に入るを得ざらしむることを得容きこと無し。譬えば、壮士の河を度り、谷を度り、山を度り、崖を度るに、中間に能く彼の身を迴転して、還りて本処に至り、或いは余処に往くこと無きが如し。先に発起せる所の増上の身行未だ所趣に至らざれば、必ず止息せず。世第一法も亦復た是くの如し。諦に随順し、諦に趣向し、諦に臨入するに、此れと彼れとの中間に不相似心を起こして、聖諦現観に入るを得ざらしむることを得容きこと無し。[40]贍部洲(Jambu-dvīpa)に五大河有るが如し。一には殑伽(Gaṅ=gā)と名づけ、二には閻母那(Yamunā)と名づけ、三には薩洛踰(Sarayu)と名づけ、四には阿氏羅筏底(Aciravatī)と名づけ、五には莫醯(Mahī)と名づく。是くの如きの五河大海に随順し、大海に趣向し、大海に臨入するに、中間に能く彼の流れを迴転して、還りて本処に至り、或いは余処に往くこと無く、彼れ決定して能く大海に流入す。世第一法も亦復た是くの如し。諦に随順し、諦に趣向し、諦に臨入するに、彼れと此れとの中間に不相似心を起こして、聖諦現観に入るを得ざらしむることを得容きこと無し。復た次に、世第一法苦法智忍の与めに[41]等無間縁と作るに、一法として、速疾に迴転すること心に過ぐる者の、爾の時に於て能く障礙と作り、聖諦現観に入るを得ざらしむるもの有ること無し。是の故に、此の法決定して不退なり。

②―1　云何んが[42]頂なる。

[39] **諦**　苦・集・滅・道の四諦。(倶VI 2、3)

[40] **贍部洲**　世界の中心に聳える須彌山の南方海上に拡がる三角形の大陸。われわれの住む地がそれであると考えられている。(倶VIII 54)

[41] **等無間縁**　間に何も介在しない直接の縁、の意。心・心所の一瞬一瞬の継起(心相続)の中で、前刹那に生じた心・心所を次刹那に生ずる心・心所の等無間縁であるという。(倶II 63)

[42] **頂**　完成された修行階程論にあっては、四善根位の中、低い方から数えて第二位(煖の次、忍の前)。この位に至れば、善根はなお不安定で動揺を免れないけれども、もはやたとえ退して地獄に堕ちても善根を絶つことはない。(倶VI 18)

[43] **摩納婆**　サンスクリット語マーナヴァの音写。若者の意。同じ語が次に儒童と訳されている。

答う。仏・法・僧に於て小量の信を生ずるなり。世尊 波羅衍拏(Pārāyana)四三摩納婆(Mānava)の為めに説きたまうが如し。

若し仏・法・僧に於て　微小の信を生起せんに
儒童(Mānava)、応に知るべし　彼れを 已に頂法を得と名づく、と。

②—2　云何んが頂の堕なる。

答う。一類有りて、善士に親近し、正法を聴聞し、如理に作意し、「仏は菩提なり、法は是れ善く説かれたり、僧は妙行を修す、四四色は無常なり、四五受・想・行・識も無常なり、善く四六苦諦を施設せり、善く四七集・滅・道諦も施設せり」と信ずるに、彼れ 異時に於て善士に親近せず、正法を聴聞せず、如理に作意せずして、已得の世俗の信に於て退没・破壊し、移転・亡失するが故に頂の堕と名づくるが如し。仏 即ち波羅衍拏摩納婆の為めに説きたもうが如し。

若し人 是くの如きの　四八三法に於て退失せん
我れ 説かん、彼等の類を　応に知るべし、頂の堕と名づく、と。

③　云何んが四九煖なる。

答う。正法・五〇毘奈耶(vinaya)の中に於て、少しく信愛有るが若し。世尊 馬師・井宿の二の五一苾芻(bhikṣu)の為めに説きたもうが如し。「此の二の愚人 我が正法及び毘奈耶を離るること、譬えば、大地の虚空を去ること遠きが如し。此の二の愚人 我が正法及び毘奈耶の中に於て、少分の煖も無し」と。

四四 色　五蘊の一。空間的ひろがりを持つ物質的存在。(倶I 9)

四五 受・想・行・識　上記の色とあわせて、すべての有為法を一括して五蘊と数える。受は外界よりの印象を感受する精神作用、想は知覚し表象する精神作用、行とは他のすべての精神作用およびその他の非精神的非物質的要素を含めて言い、識とは心そのものを意味する。(倶I 14、15、16)

四六 苦諦　次出の集・滅・道と併せて四諦という。苦諦とは、生存の内容をなすすべてが苦であること。

四七 集・滅・道諦　集諦とは、苦の原因は飽くなき欲望であること。㊅九一九上 滅諦とは、その欲望の消滅が苦の滅であること。道諦とは、苦の滅に至る道は八正道であること。

四八 三法　上記の善き士に親近すると正法を聴聞すると如理に作意するとの三。

四九 煖　四善根の初位とされる。煩悩を焼く無漏の慧の火の前触れとしてのあたたかみ、と解釈される。(倶VI 18)

五〇 毘奈耶　ふつう「律」と訳される。法と律とが対に言われ、経と律と論とが三蔵と数えられる。律の内容は出家仏教者の生活軌範として定められたもの。

五一 苾芻　「比丘」と書くも同じ。出家して具足戒を受けた男性をいう。(倶IV 17)

④　此の二十句の薩迦耶見[五二](satkāyadṛṣṭi)の幾ばくか我見、幾ばくか我所見なる。

答う。五は我見なり。謂わく、「色は是れ我なり。受・想・行・識は是れ我なり」と等随観するなり。十五は我所見なり。謂わく、「我に色有り。色は是れ我所なり。我は色中に在り。我に受・想・行・識有り。受・想・行・識は是れ我所なり。我は受・想・行・識中に在り」と等随観するなり。

⑤—1　非常なるを常と見るが若きは、五見[五三]に於て、何れの見の摂、何れの見の所断なりや。

答う。辺執見・常見の摂、見苦[五四]の所断なり。

⑤—2　常なるを非常と見るが若きは、五見に於て、何れの見の摂、何れの見の所断なりや。

答う。邪見の摂、見滅の所断なり。

⑤—3　苦なるを楽と見るが若きは、五見に於て、何れの見の摂、何れの見の所断なりや。

答う。劣れる法を取りて勝ると為す見取の摂、見苦の所断なり。

⑤—4　楽なるを苦と見るが若きは、五見に於て、何れの見の摂、何れの見の所断なりや。

答う。邪見の摂、見滅の所断なり。

⑤—5　不浄なるを浄と見るが若きは、五見に於て、何れの見の摂、何れの見の所断なりや。

五二　薩迦耶見　「有身見」と訳することもある。我有り、我所（わがもの、の意）有り、とする誤った見解。五見（五悪見）の一。（倶Ｖ7）

五三　五見　五悪見、すなわち有身見・辺執見・邪見・見取・戒禁取の五つの誤った見解。有身見は上記の薩迦耶見のこと。辺執見は辺見ともいい、極端な考え方に執着する見解の意で、我は死後も常住であるとする常見と、我は死後断滅するとする断見とを含む。邪見は因果の理を否定する見解。見取は誤った見解に執着してそれを正しいものとすること。戒禁取は正しくない制戒や禁誓を正しく涅槃に導くものとする見解。（倶Ｖ7）

五四　見苦　苦諦を見ること、の意。見苦の所断とは、苦諦をみることによって断ぜらるべき煩悩、あるいは広く染汚法の意。次下の見集・見滅等も同様。（倶Ｉ39、Ｖ12、13、28〜30）

答う。劣れる法を取りて勝ると為す見取の摂、見苦の所断なり。

⑤—6　浄なるを不浄と見るが若きは、五見に於て、何れの見の摂、何れの見の所断なりや。

答う。邪見の摂なり。此れに二種有り。若し滅なるを謂いて不浄と為せば、見滅の所断なり。若し道を謂いて不浄と為せば、見道の所断なり。

⑤—7　非我なるを我と見るが若きは、五見に於て、何れの見の摂、何れの見の所断なりや。

答う。有身見の摂、見苦の所断なり。

⑤—8　非因なるを因と見るが若きは、五見に於て、何れの見の摂、何れの見の所断なりや。

答う。非因なるを因と謂う戒禁取の摂、見苦の所断なり。

⑤—9　因なるを非因と見るが若きは、五見に於て、何れの見の摂、何れの見の所断なりや。

答う。邪見の摂、見集の所断なり。

大九一九中

⑤—10　有なるを無と見るが若きは、五見に於て、何れの見の摂、何れの見の所断なりや。

答う。邪見の摂なり。此れに四種有り。若し「苦無し」と謂わば、見苦の所断なり。若し「集無し」と謂わば、見集の所断なり。若し「滅無し」と謂わば、見滅の所断なり。若し「道無し」と謂わば、見道の所断なり。

⑤—11　無なるを有と見るが若きは、五見に於て、何れの見の摂、何れの見の所断なりや。

答う。此れ 見に非ず、是れ邪智なり。

雑蘊 第一の中、智納息 第二

①一の智・識と②因・縁と　③二心と④念と⑤祭祀と
⑥三根の用と⑦過去と　⑧疑と名・句・⑨文身と
⑩仏の訶責と⑪六因と　⑫随眠心及び断と
⑬因・境を断ぜる識との義を　此の章にて願わくば具さに説かん

①—1—1　頗なくも一智にして一切法を知ること有りや。

答う。無し。

①—1—2　若しや此の智 生ぜん、「一切法は我に非ず」と。此の智、何れの所か知らざらん。

答う。[一]自性と、及び此れと相応せる倶有の諸法を知らざるなり。

①—2—1　頗なくも一識にして一切法を了ること有りや。

答う。無し。

①—2—2　若しや此の識 生ぜん、「一切法は我に非ず」と。此の識、何れの所をか了らざらん。

一 自性　ここでは、「一切法は我に非ず」と知る智そのものの自性、の意。

答う。自性と、及び此れと相応せる倶有の諸法を了らざるなり。

②―1　頗なくも二心の展転[二]して相いに因たること有りや。

答う。無し。所以んは何ん。一の補特伽羅[三](pudgala)に、非前非後なる二心の倶生すること無し。又た後心は前心の因と為るに非ざればなり。

②―2　頗なくも二心の展転して相いに縁たること有りや。

答う。有り。心 有りて、「未来 無し」との心を起こし、即ち此れを思惟して第二の心を起こすが如し。心 有りて、「未来 有り」との心を起こし、即ち此れを思惟して第二の心を起こすが如し。心 有りて、「未来の道 無し」との心を起こし、即ち此れを思惟して第二の心を起こすが如し。心 有りて、「未来の道 有り」との心を起こし、即ち此れを思惟して第二の心を起こすが如し。二の他心を知る者 有るに、彼の二心 展転して相いに縁たるが如し。

③　何の故にか、一の補特伽羅に、非前非後なる二心の倶生すること無き。

答う。第二〔心〕に等無間縁 無きが故に。有情の一一の心 相続して転ずるが故なり。

④―1　補特伽羅 既に不可得なり。又た前心の後心に往くこと無し。理として何に縁りてか能く本作す所の事を憶いいだすや。

答う。有情[四]は、法に於て、串習[五]の力に由りて是くの如きの同分[六]の智を得、更る所の事に随いて能く是くの如きを知るなり。二の印を造る者 有るに、能く自他の所造の印字を了

二　展転　一つ一つ次々に、の意。
三　補特伽羅　生存する一個体。

四　有情　生きて存在するものの総称(ただし植物は含まない)。「衆生」(さまざまな生きもの、の意)も同じ語の異訳。有情は「こころをもつもの」の意だから原語から見れば意訳である。(倶III 4～9)
五　串習　串は慣に通ずる。
六　同分の智　ここの同分は「共通な」の意。次下の註(八)にいう同分とは別。

㊅九一九下

るが如し。彼の二人 往きて、相いに「汝 云何んが此の字を造れるや」と問わず、亦た相いに「我れ 是くの如く此の字を造れり」と答えずと雖も、而も彼の二人 串習の力に由りて是くの如きの同分の智を得、能く自他の所造の印字を了る。有情も亦た爾り。串習の力に由りて是くの如きの同分の智を得、更る所の事に随いて能く是くの如きを知るなり。又た二の他心を知る者 有るに、互相いに心を知るが如し。彼の二人 往きて、相いに「汝 云何んが我が心を知る」と問わず、亦た相いに「我れ 是くの如く汝の心を知る」と答えずと雖も、而も彼の二人 串習の力に由りて是くの如きの同分の智を得、互相いに心を知る。有情も亦た爾り。串習の力に由りて是くの如きの同分の智を得、更る所の事に随いて能く是くの如きを知るなり。

復た次に、一切の心・心所法は所縁[七]に於て定まり、所縁に安住するに、又た意を受けて因と為す力の強きを以って、念 便ち忘れざるなり。

④—2 何に縁りてか、有情 忘れて復た憶いいだすや。

答う。有情の同分[八] 相続して転ずる時、法に於て能く相い属せる智見を起こせばなり。又た意を受けて因と為す力の強きを以って、念 便ち忘れざるなり。

④—3 何に縁りてか、有情 憶いいだして復た忘るるや。

答う。有情の異分 相続して転ずる時、法に於て相属せる智見を起こさざればなり。又た意を受けて因と為す力の劣れるを以っては、念 便ち忘失するなり。

⑤ 何に縁りてか、祭祀[九]せば餓鬼[一〇] 則ち到るに、余趣は〔さに〕非ずや。

七 所縁 心や心所の対象。(倶I33)

八 同分 衆同分の略。心不相応行の一種。同種類のものを互いに類似させるはたらき。有情同分(同類の有情相互の間の同分)と法同分(同類の法相互の間の同分)とがある。(倶II42)

九 祭祀 亡者を祀ること。

一〇 餓鬼 五趣(次註を見よ)の一。単に鬼ともいう。鬼は「逝ける者」の意であるが、貪欲な性質をもち悪業を作った者が、この生涯から逝き、次の生には常に飢渇に苦しむ境涯に堕するとされる。その境涯に在る有情を餓鬼といい、その境涯を餓鬼趣、餓鬼道あるいは単に餓鬼という。(倶III1、82)

答う。彼の趣は、[一二]法爾として是くの如きの処・[一三]事・生・我分を得。是の故に、祭祀せば則ち到るも、余〔趣〕は〔さに〕非ざるなり。鵝・雁・孔雀・鸚鵡・[一四]舎利(sāri)・[一五]命命鳥(jīvamjīva)等、意の如く自在に虚空を飛翔すと雖も、而も神力・威徳 人よりも大ならざるが如し。然るに彼の趣 法爾として是くの如きの処・事・生・我分を得て、能く虚空を飛翔するなり。鬼趣も亦た爾り。法爾力に由りて、祭祀せば則ち到るも、余趣は爾らざるなり。又た一類の[一六]那洛迦(naraka)は能く[一七]宿住を憶いいだし、亦た他心を知り、一類の[一八]傍生、一類の餓鬼は能く宿住を憶いいだし、亦た他心を知り、及び烟焔を起こし、雲を興こして雨を致し、寒熱等を作すが如し。能く是の事を作すと雖も、而も神力・威徳 人よりも大ならず。然るに彼の趣 法爾として是くの如きの処・事・生・我分を得、能く是の事を作すなり。鬼趣も亦た爾り。法爾力に由りて、祭祀せば則ち到るも、余趣は爾らざるなり。復た次に、人 有って、長夜に是くの如きの欲、是くの如きの愛楽を起こさん、「我れ当に婦を娶るべし。児の為めに婦を娶り、孫の為めに婦を娶り、子孫を生みて紹継して絶えざらしむべし。我れ 命終し已りて、若し鬼趣に生ぜんに、彼れ 我れを念ずるが故に、当に我れを祭祀すべし」と。彼れ 長夜に此の欲楽有るに由りて、是の故に祭祀せば則ち到り、余〔趣〕は〔さに〕非ざるなり。

⑥ 当に「一眼 色を見る」と言うべしや、二眼 色を見るや。

答う。応に「二眼 色を見る」と言うべし。所以んは何ん。若し一眼を合りて不浄なる識を起こすも、二眼を開く時は[一九]浄識を起こすが故なり。設し一眼を合りて是くの如きの識

一一 趣 趣くべき境涯、の意。有情の生存のあり方に五種の境涯を数え、五趣という。地獄・餓鬼・畜生・人・天。(倶Ⅲ4)

一二 法爾 おのずからなる道理。

一三 処・事・生・我分 語義を明確に知り得ないが、(我鬼趣としての)あり方、生まれつき、分際などの意であろう。

一四 舎利 九官鳥の類ともいうが、明らかでない。

一五 命命鳥 鶉の類ともいうが、明らかでない。

一六 那落迦 地獄とも訳する。五趣の一。その領域は地下にあるとされる。最も甚だしい苦の境涯。また、その境涯に在る有情。(倶Ⅲ1、59)

一七 宿住 宿世(前世。過去の生涯)における生存。

一八 傍生 畜生ともいう。五趣の一。横さまにあるいは曲がりくねって行くもの、の意。鳥獣蟲魚などの動物の境涯。また、その動物。(倶Ⅲ1、82)

一九 浄識 ここでは、明瞭な視覚のはたらきをいうのであろう。

㊅九二〇上

を起こし、二眼を開く時にも亦た此の識を起こさば、則ち応に「二眼 色を見る」と言うべからず。然るに一眼を合りて不浄なる識を起こすも、二眼を開く時は便ち浄識を起こす。是の故に、応に「二眼 色を見る」と言うべし。合るが如く、覆うも、損するも、破るも、壊するも亦た爾なり。眼の色を見るが如く、耳の声を聞き、鼻の香を嗅ぐも亦た爾なり。

⑦―1　諸もろの過去せる、彼の一切は現ぜずや。

答う。応に四句を作るべし。(a)過去して現ぜざるに非ざる有り。謂わく、具寿鄔陀夷[二〇](Udāyin)の言うが如し、

一切の結[二一] 過去せり　林従り林を離れて来たり
諸欲を出離せるを楽しむこと　金の山頂より出ずるが如し、と。

(b)現ぜざるも過去せるに非ざる有り。謂わく、一有りて、或いは神通を以って、或いは呪術を以って、或いは薬物を以って、或いは是くの如きの生処の得智[二二]を以って、隠没する所有りて、顕現せざらしむるが如し。(c)過去し、亦た現ぜざる有り。謂わく、所有の已に起こり等起し、已に生じ等生し、已に転じ現に転じ、已に集まり、已に現じ、已に過去し、已に滅尽し、已に離変せるは、是れ過去にして、過去の分、過去世の摂なり。(d)過去せるにも非ず、亦た現ぜざるにも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除くなり。

⑦―2　諸もろの過去せる、彼の一切は尽くや。

答う。応に四句を作るべし。(a)過去せるも尽くるに非ざる有り。謂わく、具寿鄔陀夷の「一切の結は過去せり」と言い、乃至広く説くが如し。(b)尽くるも過去せるに非ざる有り。

二〇　具寿　長老の意。敬意を含んだ呼称として用いられるので必ずしも高齢者を指すには限らない。

二一　結　煩悩の一般の異名。有情を迷いの境涯に結びつけるもの、の意。また、三結・五順下分結・五順上分結・九結などとして特定のいくつかの煩悩の群を指すこともある。(倶Ⅴ40～45)

二二　生処の得智　語義は明らかでないが、ある処に生まれた者だけが獲得する所の生まれつきの知能によって人の注意を逸らしたりしてものを見難くするのをいうか。

謂わく、仏の言もうが如し、「此の聖弟子已に地獄を尽くし、已に傍生を尽くし、已に餓鬼を尽くし、已に所有る嶮・悪趣・坑を尽くせり」と。(c)過去し、亦た尽くる有り。謂わく、「所有る行の已に起こり等起し」と、乃至広く説くなり。(d)過去せるにも非ず、亦た尽くるにも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除くなり。

復た次に、若し結の断に依りて説かば、(a)結の過去せるも尽くるに非ざる有り。謂わく、結過去せるも、未だ断ぜず、未だ遍知せず、未だ滅せず、未だ変吐せざるなり。(b)結の尽くるも過去せるに非ざる有り。謂わく、結の未来にして、已に断じ、已に遍知し、已に滅し、已に変吐せるなり。(c)結の過去し、亦た尽くる有り。謂わく、結の過去して、已に断じ、已に遍知し、已に滅し、已に変吐せるなり。(d)結の過去せるにも非ず、亦た尽くるにも非ざる有り。謂わく、結の未来にして、未だ断ぜず、未だ遍知せず、未だ滅せず、未だ変吐せざると及び結の現在なるとなり。

⑦—3　諸もろの過去せる、彼の一切は滅せりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)過去せるも滅せるに非ざる有り。謂わく、具寿鄔陀夷の「一切の結は過去せり」と言い、乃至広く説くが如し。(b)滅せるも過去せるに非ざる有り。謂わく、世俗に依らば、小街、小舎、小器、小眼は、是れ滅街、乃至、滅眼なりと言うなり。(c)過去し、亦た滅せる有り。謂わく、「所有る行の已に起こり等起し」と、乃至広く説くなり。(d)過去せるにも非ず、亦た滅せるにも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除くなり。

復た次に、若し結の断に依りて説かば、(a)結の過去せるも滅せるに非ざる有り。謂わく、結の過去せるも、未だ断ぜず、未だ遍知せず、未だ滅せず、未だ変吐せざるなり。(b)結の

㊅九二〇中

滅せるも過去せるに非ざる有り。謂わく、結の未来にして、已に断じ、已に遍知し、已に滅し、已に変吐せるなり。(c)結の過去し、亦た滅せる有り。謂わく、結の過去して、已に断じ、已に遍知し、已に滅し、已に変吐せるなり。(d)結の過去せるにも非ず、亦た滅せるにも非ざる有り。謂わく、結の未来にして、未だ断ぜず、未だ遍知せず、未だ滅せず、未だ変吐せざると及び結の現在なるとなり。

⑧—1　若しや苦に於て疑を生ぜん、「此れは是れ苦なりや、此れ 苦に非ずや」と。当に一心と言うべしや、多心なりや。

答う。応に多心と言うべし。謂わく、「此れは是れ苦なりや」は是れ一心なり。「此れ苦に非ずや」は是れ第二心なり。集[二三]・滅・道に於て疑を生ずるも亦た爾り。

⑧—2　頗(すく)なくも一心の有疑にして無疑なるもの有りや。

答う。無し。所以んは何ん。謂わく、苦諦(くたい)に於て、若し「此れは是れ苦なりや」と言えば、此の心は有疑なり。若し「此れは是れ苦なり」と言えば、此の心は無疑なり。若し「此れ 苦に非ずや」と言えば、此の心は有疑なり。若し「此れ 苦に非ず」と言えば、此の心は無疑なり。集・滅・道に於ても、応に亦た爾りと知るべし。

⑨—1　云何んが多名身(たみょうしん)[二四]なる。

答う。謂わく、多くの名号(みょうごう)・異語[二五]・増語・想・等想・仮施設(けせせつ)あり。是れを多名身と謂う。

⑨—2　云何んが多句身(たくしん)なる。

二三　集・滅・道　苦と併せて四諦(第一章頭註一七、四六、四七、五四を見よ)。生存の内容を成すすべては苦であり(苦諦)、苦の原因は渇愛すなわち渇いた者が水を求めるような欲望にあり(集諦)、渇愛の絶滅が苦の絶滅であり(滅諦)、苦の滅に至る道は八正道である(道諦)。(倶I 4〜8)

二四　多名身　「身」はあつまりの意。名は名辞。心不相応行の一。(倶II 48)

二五　異語・増語・想・等想・仮施設　いずれも「名称」を意味する。多少のニュアンスを異にするが、ほとんど同義語と見てよい(想は五蘊の一の想とは意が異なる)。仮施設はもと「知らしめるもの」の意。

答う。諸もろの句[26]の、能く未だ満足せざるを満たし、義 中に於て連合せるあり。是れを多句身と謂う。世尊の説きたまうが如し、

諸もろの悪は作すこと莫し　　諸もろの善は奉行す
自ら其の心を浄む　　是れ 諸仏の教えなり、と

是くの如きの四句 各おの能く未だ満足せざるを満足し、義 中に於て連合す。是れを多句身と謂うなり。

⑨―3　云何んが多文身なる。

答う。諸もろの字の衆まりあり。是れを多文身と謂う。世尊の説きたもうが如し、

欲は頌の本たり　　文[27]は即ち是れ字なり
頌は名と　　及び造頌者とに依る、と

⑩―1　仏・世尊の 諸弟子を訶り、称して「癡人」と言もうが如きは、此れに何の義か有らん。

答う。是れ訶責の語なり。謂わく、仏・世尊の 弟子を訶責し、称して「癡人」と言もうは、今の親教[28]及び軌範師[29]の、若し近住[30]、依止の弟子[31] 諸もろの過失を起こすこと有らば、便ち訶責して「汝 愚癡たり、不明なり、不善なり」と言うが如く、世尊も亦た爾り。諸弟子を訶り、称して「癡人」と言もうなり。

⑩―2　何の故にか世尊 諸弟子を訶り、称して「癡人」と言もう。

答う。彼れ 世尊の教誡・教授に於て義に随って行ぜず、随順せず、相続せざればなり。

二六 句　いくつかの語をもって構成される章句。名・文と共に心不相応行の一。（倶II 48）

二七 文　より集まって語を構成するところの個々の音節。心不相応行の一。

二八 親教　親教師のこと。日々親しく教えを受ける師、の意。和上、和尚などと訳する。受戒しようとする者に戒を授けるのも親教師で、特にその場合は戒和上という。

二九 規範師　弟子の軌範となるべき師、の意。教授師とも訳する。僧団の長老で指導者たる人。受戒の場合受者に作法を教授するので、人もこう呼び、その場合は特に教授阿闍梨という。戒和上と教授師と、戒場で作法を実行する羯磨師とを併せて、三師という。

三〇 近住　六斎日に八斎戒を保つ在家者をいう。（倶IV 29）　㊅九二〇下

三一 依止の弟子　近住に対して、出家者でその親教師・規範師の指導・教授を受ける者を指すのであろう。

復た次に、彼れ聖教に於て愚癡の事を作し、空しくして、果有ること無く、出[三二]無く、味[三三]無く、勝利有ること無く、仏教に違越し、諸もろの学処[三四]に於て学を受くること能わず。故に仏 彼れを訶り、称して「癡人」と言もうなり。

⑪ 六因有り。謂わく、相応因[三五]、乃至、能作因なり。

⑪—1 云何んが相応因なる。

答う。受は受の相応法の与めに相応因たり。受の相応法は受の与めに相応因たり。想・思[三六]・触[三七]・作意[三八]・欲[三九]・勝解[四〇]・念[四一]・三摩地(samādhi)〔も亦た爾り〕。慧[四二]は慧の相応法の与めに相応因たり。慧の相応法は慧の与めに相応因たり。是れを相応因と謂う。

⑪—2 云何んが倶有因[四三]なる。

答う。心は心所法の与めに倶有因たり。心所法は心の与めに倶有因たり。心は随心転[四四]の身業[四五]・語業の与めに倶有因たり。心は随心転〔の身・語業〕と不相応行の与めに倶有因たりて、随心転〔の身・語業〕と不相応行は、心の与めに倶有因たり。復た次に、倶生[四六]の四大[四七]種は、展転して倶有因たり。是れを倶有因と謂う。

⑪—3 云何んが同類因[四八]なる。

答う。前生[四九]の善根[五〇]は、後生の自界の善根及び相応法[五一]の与めに同類因たり。過去の善根は、未来と現在の自界の善根及び相応法の与めに同類因たり。現在の善根は、未来の自界の善根及び相応法の与めに同類因たり。善根の如く、不善〔根〕と無記根も亦た爾り。差別は、不善の中、自界を除く。是れを同類因と謂う。

三二 出　「出離」の意であろう。
三三 味　解脱の味の意であろう。
三四 学処　戒律の各項目をこう呼ぶ。
三五 相応因　同じ根を従りどころとし、同時に現在する心・心所の中の一と他とは相互に因果関係をなすが、それを因として見るとき相応因といい、果として見るとき士用果という（補註8）。（倶II 54）
三六 思　心所の一。心をある方向に動機づけるはたらき。志向。意志の発動。（倶II 25）
三七 触　心所の一。根（感官および認識思考器官としての眼・耳・鼻・舌・身・意の六）・境（根の対象たる色・声・香・味・触（所触）・法の六）・識（根を通して境をとらえる認識機能としての眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の六）のあい会するところに生ずる主観と客観との接触感覚作用。（倶II 25）
三八 作意　心所の一。認識の対象に注意を向ける作用。（倶II 25）
三九 欲　この場合は、心所の一。希望し意欲する作用。（倶II 25）
四〇 勝解　心所の一。これはこうであると了解する作用。（倶II 25）
四一 念　心所の一。対象を明記して忘れぬ作用。（倶II 25）
四二 慧　心所の一。法を明らかに弁別する作用。（倶II 25）
四三 倶有因　同時に現在する法と法とが相互に因となり果となる関係にあるとき、それを因として見て倶有因と呼び、果と

して見て士用果と呼ぶ。（倶II 51）

四四 随心転　心に随って起こる法、の意。心所と無表業の一部とそれらにあい伴う四相などをいう。ここに身業・語業とあるのは身・語の無表業（律儀無表）を指す。（倶II 51、52、IV 91）

四五 身業・語業　業を三種に分けて身・語・意の三業とする。身業は身体の動作をもってなされる行為や行動、語業はことばを発するという行為、を意味するが、ここではそれらの行為（表業）によって行為者の上に残される余勢あるいは影響（それを無表業という）を指す。（倶IV 1、2）

四六 倶生　ある法が他の法と時を同じくして現在に生起して互いに倶有因（あるいは相応因）―士用果の関係にあること。（倶II 23、24）

四七 四大種　地・水・火・風の四をいう。色（五位の一）を構成する元素というべきもの。（倶I 12）

四八 同類因　前瞬間に生起して現在した法と同種類の法が次の瞬間に続いて生起して前の法を継続するとき、前者を後者の同類因という。（倶II 53、54）

四九 前生　今の生涯の前の、過去の、生涯。後生に対する。

五〇 善根　それが根となって善を生ずる法、の意。無貪・無瞋・無癡を三善根という。三不善根は貪・瞋・癡、三無記根は無記の愛と癡と慧をいう。（倶IV 10、11、V 20、21）

五一 相応法　相応する法、の意。心・心所が、互に所依・所縁・行相・時を共にし同一の刹那にそれぞれ一の体がある点でも共通であるのを、その心・心所は「相応する」という。（倶II 35）

五二 遍行因　遍行の惑が同類因としてあるとき、それを特に遍行因の名で呼ぶ。その場合その煩悩と倶生する法（ただし得を除く）も亦遍行因に含まれる。次註五三を見よ。（倶II 55、56）

五三 遍行　あまねく行く、の意。五部の有漏法（見苦所断・見集所断・見滅所断・見道所断・修所断）のすべてにおいてはたらく煩悩を遍行の惑あるいは遍行の随眠という。（倶V 12、13）

五四 随眠　心の底にひそんで眠っている性向、悪への傾向の表に現れないもの、が原義であるが、説一切有部アビダルマの術語としては六種の基本的な煩悩（貪・瞋・慢・疑・悪見・無明）そのものを指して随眠と呼ぶ。（倶V 1）

五五 見集・滅・道所断　集諦を、滅諦を、道諦を見る（現観する）ことによって断ぜらるべき諸煩悩（あるいはひろく諸染汚法）。（倶I 39、V 12～15、29～31）

五六 修所断　修道の三昧において繰り返して諦の現観を実修することによって断ぜらるべき諸煩悩（あるいはひろく、諸染汚法）。（倶I 39、II 14）

五七 異熟因　不善なる業や善なる有漏の業が因となって無記の果すなわち不善でも善でもない果を引くとき、その因を異熟因という。善・不善なる因がそれと異なった無記なる果を熟するから異熟である。（倶I 36、II 55）

五八 能作因　いかなる法もそれ自身以外のすべての法をその因とする果であると見るとき、因を能作因といい果を増上果という。（倶II 51）

五九 眼　六根（上記註三七を見よ）の第一。視覚器官。色（しき）すなわちいろ・かたちをその対象とする。（倶I 9）

六〇 色　六境（上記註三七を見よ）の第一。視覚の対象。いろ・かたち。（倶I 9）

六一 縁　因と縁とを区別する場合は直接の、あるいは内的な、原因を因とし、間接の、あるいは外的な、原因を縁とするが、説一切有部アビダルマの術語として因も縁も広く法の生起する原因を意味する点では同じである。ただ因は分かって六因（能作・倶有・同類・相応・遍行・異熟）とし、縁は分かって四（因縁・等無間縁・所縁縁・増上縁）とする。（倶II 62、63）

六二 眼識　六識の一（上記註三七を見よ）。心がもつ視覚機能。眼（上記註五九を見よ）を通じて色（上記註六〇を見よ）を対象としてとらえる。（倶I 16、17）

六三 有色・無色　ある空間を占有し同一空間を他が占有することを許さぬ法を有色といい、そうでないものを無色という。有色は眼・耳・鼻・舌・身・色・声・香・味・触（所触）の十。（倶I 29）

⑪—4　云何んが[五二]遍行因なる。

答う。前生の見苦所断の[五三]遍行の[五四]随眠は、後生の自界の[五五]見集・滅・道〔所断〕と[五六]修所断との随眠及び相応法の与めに遍行因たり。過去の見苦所断の遍行の随眠は、未来と現在の自界の見集・滅・道〔所断〕と修所断との随眠及び相応法の与めに遍行因たり。現在の見苦所断の遍行の随眠は、未来の自界の見集・滅・道〔所断〕と修所断の随眠及び相応法の与めに遍行因たり。見苦所断の如く、見集所断も亦た爾り。是れを遍行因と謂う。

⑪—5　云何んが[五七]異熟因なる。

答う。諸もろの心・心所法は、異熟の色・心・心所法・心不相応行を受く。此の心・心所法は、彼の異熟の与めに異熟因たり。復た次に、諸もろの身・語業は、異熟の色・心・心所法・心不相応行を受く。此の身・語業は、彼の異熟の与めに異熟因たり。復た次に、諸もろの心不相応行は、異熟の色・心・心所法・心不相応行を受く。此の心不相応行は、彼の異熟の与めに異熟因たり。是れを異熟因と謂う。

⑪—6　云何んが[五八]能作因なる。

答う。[五九]眼及び[六〇]色 [六一]縁と為りて、[六二]眼識を生ず。此の眼識は、彼の眼と色と、彼の相応法と、彼の倶有法と、及び耳・声・耳識と、鼻・香・鼻識と、舌・味・舌識と、身・触・身識と、意・法・意識と、[六三]有色・無色、[六四]有見・無見、[六五]有対・無対、[六六]有漏・無漏、[六七]有為・無為等の一切の法を以って能作因と為すも、其の[六八]自性を除く。眼識の如く、耳・鼻・舌・身・意識も亦た爾り。是れを能作因と謂う。

六四　有見・無見　目に見えるものを有見といい、そうでないものを無見という。(倶I29)

六五　有対・無対　狭義では有色・無色に同じ(倶I29)。広義には有対に三種を分かつ。障礙有対(有色に同じ)・境界有対(六境をいう)・所縁有対(心・心所の所縁をいう)。

六六　有漏・無漏　漏は煩悩の異名。有漏とは煩悩をもつものの意であるが、説一切有部アビダルマの術語としては、煩悩および煩悩と背馳せずその上に煩悩が増大する性質ある法を有漏法と呼ぶ。したがって、苦諦・集諦の内容をなすすべて

㊅九二一上

の法は有漏法、滅諦・道諦の内容をなすすべての法は無漏法であり、五根・五境はすべて有漏法、意・法(意根の対象である法境)および六識のあるものは有漏法でありあるものは無漏法である(補註2)。(倶I4、5、8、31)

六七　有為・無為　有為とは作り成されたもの、の意。もろもろの因・縁によって生じ滅する法を有為法という。因・縁に関わらず生・滅の無い法を無為法という。(倶I4、5、7)

六八　自性　法それ自体の存在性。他と混乱せず改変もない独自の体、本性。(倶I18参照)

⑫—1　諸もろの心は、随眠に由るが故に有随眠心[六九]と名づく。彼の随眠 此の心に於て随[七〇]増すや。

答う。或いは随増し、或いは随増せず。云何んが随増する。謂わく、彼の随眠にして、此の心と相応し未だ断ぜざると、及び此の心を縁ずるとなり。云何んが随増せざる。謂わく、彼の随眠にして、此の心と相応するも已に断ぜるなり。

⑫—2　設し随眠 心に於て随増するに、此の心は、但だ彼の随眠に由るが故に有随眠心と名づくや。

答う。或いは彼れに由りて余に〔由るに〕非ず、或いは彼れと及び余に由る。云何んが彼れに由りて余に〔由るに〕非ざる。謂わく、此の心の未だ断ぜざるなり。云何んが彼れと及び余に由る。謂わく、苦智[七一] 已に生ずるも集智[七二] 未だ生ぜざるに、若し心 見苦所断ならば、見集所断の随眠の所縁たり。

⑫—3　諸もろの心は随眠に由るが故に有随眠心と名づく。彼の随眠 此の心に於て当に断ずべしや。

答う。或いは当に断ずべく、或いは当に断ずべからず。云何んが当に断ずべき。謂わく、彼の随眠の此の心を縁ずる[七三]なり。云何んが当に断ずべからざる。謂わく、彼の随眠の此の心と相応するなり。

⑫—4　諸もろの随眠は何に因りてか当に断ずべき。

答う。所縁に因る。

汝「随眠は所縁に因りて当に断ずべし」と説くや。

六九　有随眠心　随眠をもつ心、の意。これに三種がある。1不善の心あるいは有覆無記の心であって、それと相応して随増する随眠があり、それを所縁として随増する随眠がある場合、2不善の心あるいは有覆無記の心であって、それと相応して随増する随眠が断ぜられてそこでの随眠の随増はなくなっても、その心を所縁とする随眠はある場合、3善の心あるいは無覆無記の心であって、その心を所縁として随増する随眠がある場合、である。（倶Ⅴ32）

七〇　随増　随眠が有漏法を対象として（すなわち所縁として）、あるいは有漏法にあい伴って（すなわち相応して）、それを離れずそこに染汚を深め染汚性を増大すること。（倶Ⅴ、18）

七一　苦智　苦諦を知る智。それによって見苦所断を断ずる。（倶Ⅵ28、Ⅶ7）

七二　集智　集諦を知る智。それによって見集所断を断ずる。（倶Ⅵ28、Ⅶ7）

七三　縁ず　所縁とする。対象とする。

答う。是くの如し。

若し爾らば、諸もろの随眠の、見滅・〔見〕道所断にして有漏縁（うろえん）[七四]なるあり。彼の随眠は何に因りてか当に断ずべき。若し「此こ（=見苦・見集のとき）に断ず」「彼こ（かしこ）（=見滅・見道のとき）に断ず」と言うも、倶（とも）に理に応ぜず。

答う。見滅・〔見〕道所断の無漏縁（むろえん）[七五]の随眠は、所縁に因るが故に断ず。此の断に由るが故に、彼れ（=有漏縁の随眠）も亦た断ずるなり。

⑫—5　設し随眠は心に於て当に断ずべくんば、此の心は、但だ彼の随眠に由るのみなるが故に有随眠心と名づくるや。

答う。或いは彼れに由りて余に〔由るに〕非ず、或いは彼れと及び余に由る。云何んが彼れに由りて余に〔由るに〕非ざる。謂わく、心の不染汚（ふぜんま）[七六]にして修所断なるなり。云何んが彼れと及び余に由る。謂わく、心の染汚なるなり。

⑬—1　云何んが因・境[七七]を断ずる識なる。

答う。苦智 已に生じて、集智 未だ生ぜざるに、若し心 見集所断にして、見苦所断縁ならば、是れを因・境を断ずる識と謂う。

⑬—2　此の識に於て、幾ばくの随眠 随増すや。

答う。十九なり。

一心なりや。

答う。爾らず。謂わく、未だ欲染[七八]を離れざる苦法智[七九] 已に生じ、集法智[八〇] 未だ生ぜざるに、

七四　有漏縁　有漏法を所縁とする、の意。（倶Ｖ16）

七五　無漏縁　無漏法を所縁とする、の意。（倶Ｖ14〜16）

七六　不染汚　染汚とは不善と有覆無記を、不染汚とは善と無覆無記をいう。有覆無記とは無記ではあるが聖道を覆いさまたげるもので、色界・無色界のすべての煩悩や欲界の煩悩の一部（有身見・辺執見）などがそれに当たる。

（大）九二一中

七七　因・境　この場合、因は苦の因すなわち集、境は心の所縁である見苦所断を指す。

七八　欲染　欲界の染汚法、の意。

七九　苦法智　欲界の苦諦を現観しその理を証する智。（倶VI27）

八〇　集法智　欲界の集諦を現観しその理を証する智。（倶VI28）

若し心欲界の見集所断にして、見苦所断縁ならば、此の因・境を断ぜる識には、欲界の見集所断の七随眠随増す。已に欲染を離れ、未だ色染[八一]を離れざる苦類智[八二]已に生じ、集類智[八三]未だ生ぜざるに、若し心色界の見集所断にして、見苦所断縁ならば、此の因・境を断ぜる識には、色界の見集所断の六随眠随増す。已に色染を離れたる苦類智已に生じ、集類智未だ生ぜざるに、若し心無色界の見集所断にして、見苦所断縁ならば、此の因・境を断ぜる識には、無色界の見集所断の六随眠随増す。

八一 色染 色界の染汚法の意。
八二 苦類智 色界・無色界の苦諦を現観してその理を証する智。(倶VI 28)
八三 集類智 色界・無色界の集諦を現観してその理を証する智。(倶VI 28)

雑蘊第一の中、補特伽羅納息第三

①縁起と②縁と③息の依と④〔無色界の有情の〕心の依と⑤無有愛と
⑥心の脱と⑦依と⑧界と⑨想とを　此の章にて願わくば具さに説かん

①—1　一補特伽羅(pudgala)は此の生に於て十二支[一]に縁起[二]す。幾ばくか過去、幾ばくか未来、幾ばくか現在なる。

答う。二は過去なり。謂わく、無明[三]と行[四]なり。二は未来なり。謂わく、生[五]と老死[六]なり。八は現在なり。謂わく、識[七]と、名色[八]と、六処[九]と、触[一〇]と、受[一一]と、愛[一二]と、取[一三]と、有[一四]となり。世尊の説きたもうが如し、「無明の縁もて行あり、取の縁もて有あり」と。

①—2　云何んが「無明の縁もて行あり」なる。云何んが「取の縁もて有あり」なる。

第一篇第三章

一 十二支 無明・行・識・名色・六処・触・受・愛・取・有・生・老死。(倶III 20)
二 縁起 因に縁って果として生起すること。(倶III 20)
三 無明 明はありのままに物事を知る智、すなわち明らかに澄み切った知性。無明はその智を欠いた状態。無智。それを心所の一として数えるときは、癡。発達した説一切有部の十二縁起論の一つでは、無明を過去世の生存を構成する五蘊と解する。(倶III 21、V 36、38)
四 行 既出。発達した説一切有部の十二縁起論では、果としての現在の生存をもたらした過去世の身・語・意業。(倶III 21)

五 生　輪廻的生存に生まれ出ること。発達した十二縁起論では、来世の生存に生まれ出る瞬間の有情を構成する五蘊、と解する。（倶III 24）

六 老死　老いることと死ぬこと。発達した十二縁起論では、来世に生まれ出てから死に至るまでの間の生存を構成する五蘊の相続と解する。（倶III 24）

七 識　既出。発達した十二縁起論では、初めて母胎に現世の生を結ぶ刹那の五蘊、と解する。（倶III 21）

八 名色　名は心的要素すなわち受・想・行・識の四蘊を、色は身的要素すなわち色蘊を意味し、名色は心身の結合した有情の生存の態をいう。発達した十二縁起論では、母胎に現世の生を結んだのち、六根が生ずるに至る以前の五蘊の相続、と解する。（倶III 21）

九 六処　眼・耳・鼻・舌・身・意の六根。発達した十二縁起論では、母胎に現世の生を結んで六根を具備するに至った時から、母胎を離れて出生するまでの間の五蘊の相続、と解する。（倶III 22）

一〇 触　既出。発達した十二縁起論では、現世において母胎から出生して外界と接触するが、まだそれ以上の精神活動は生じない二歳くらいまでの間の、五蘊の相続、と解する。（倶III 22）

一一 受　既出。発達した十二縁起論では、触を承けて、感受性の勝れている十二、三歳までの間の五蘊の相続、と解する。（倶III 23）

一二 愛　渇愛のこと。渇いた者が水を求めて止まぬように欲望の満足を求めて止まぬ心の動き。発達した説一切有部の十二縁起論では、縁起支の一としての愛を、現世の生存の中で愛欲の盛んな十五、六歳以後の青年期の五蘊の相続、と解する。（倶III 23）

一三 取　広義には、煩悩の異名の一。心所の一としては欲求する対象に離れがたく執着する心の動き。発達した十二縁起論では、縁起支の一としての取を、現世の生存の中で貪著の強い三十歳以後の有情の五蘊の相続、と解する。（倶III 23）

一四 有　有情の輪廻の中での生存をいう。十二縁起支の一として、発達した十二縁起論では、現世において業を造る五蘊の相続が来世の因となるのを指すとする。（倶III 24）

答う。「無明の縁もて行あり」とは、此れ、業[一五] 先の余の生の中に造作増長し、今の有の異熟[一六]と及び已に受けたる異熟とを得ることを顕示するなり。「取の縁もて有あり」とは、此れ、業 現在の生の中に造作増長し、当の有の異熟を得ることを顕示するなり。

①—3　「無明の縁もて行あり」と「取の縁もて有あり」とに、何の差別かある。

答う。「無明の縁もて行あり」とは、広説せば前の如く、此れ 業の縁なり。世尊 一煩悩を説きて「無明」と謂いたもう。「取の縁もて有あり」とは、広説せば前の如く、此れ 業の縁なり。世尊 一切の煩悩を説きて「諸もろの取」と謂いたもう。是れを差別と謂う。

②—1　頗なくも行にして、無明を縁とし、明を縁とせざるもの有りや。

答う。無し。

頗なくも行にして、明を縁とし、無明を縁とせざるもの有りや。

答う。無し。

頗なくも行にして、無明を縁とし、亦た明を縁とするもの有りや。

答う。有り。

頗なくも行にして、無明を縁とせず、亦た明を縁とせざるもの有りや。

答う。無し。所以んは何ん。一の有情として、久遠より来かた、聖道に於て誹りて「非道なり」と言わざるもの無し。先に道を誹り已るも、彼れ 後の時に於て、大地を感ずる業を造作増長し、或いは後の時に於て、小王を感ずる業を造作増長し、或いは後の時に於て、大王を感ずる業を造作増長し、或いは後の時に於て、転輪王[一七]〔を感ずる〕業を造作増長

一五 業　有情の意志をもってする身心の生活行為のいちいち、あるいはその総称。煩悩によって業を起こし、業によって苦を生じ、三界・五趣の有(生存)に輪転する、とされる。(倶IV 1)

一六 異熟　第二章の註三七を見よ。

(大)九二一下

一七 転輪王　古代インドが理念としていだいた聖王。

せん。此の因に由り、此の縁に由り、彼の聖道に由り、展転して、大地の所有る城邑・聚落・人・非人[18]・畜・穀稼・薬草・樹木・叢林の増長し滋茂するを感得す。是くの如く、前心の四縁[19]後心に於て但だ一の増上縁[20]と為るなり。

②—2　復た次に、若し因縁に依りて説かば、頗なくも行にして、無明を縁とし、明を縁とせざるもの有りや。

答う。有り。謂わく、無明の異熟と及び染汚[21]の行なり。

頗なくも行にして、明を縁とし、無明を縁とせざるもの有りや。

答う。有り。謂わく、初の明を除く諸もろの余の無漏の行なり。

頗なくも行にして、無明を縁とし、亦た明を縁とするもの有りや。

答う。無し。

頗なくも行にして、無明を縁とせず、亦た明を縁とせざるもの有りや。

答う。有り。謂わく、無明の異熟を除く諸もろの余の無覆無記[22]の行と及び初の明と善なる有漏の行なり。

③　入息と出息[23]当に身に依りて転ずと言うべしや、心に依りて転ずや。

答う。応に、亦た身に依りて転じ、亦た心に依りて転ずること其れ所応の如しと言うべし。若し入出息但だ身に依りてのみ転じ、心に依りて転ぜざれば、則ち無想定[24]・滅尽定[25]の位に在るにも、入出息亦た応に転ずべし。若し入出息但だ心に依りてのみ転じ、身に依りて転ぜざれば、則ち無色界の有情にも、入出息亦た応に転ずべし。若し入出息但

一八　非人　有情の中で、人でないものを総称して、いう。

一九　四縁　等無間縁・所縁縁・因縁・増上縁。(倶II 62、63)

二〇　増上縁　ある法はその法以外のすべての法を縁(=因)とすると考えるとき、その縁を増上縁という。六因の中では能作因(既出)に当たる。(倶II 63)

二一　染汚　不善と有覆無記とを併せて、いう。無記とは、善でもなく不善でもないものをいう。その無記を分かって有覆と無覆とする。有覆無記とは異熟因となって異熟果をもたらすことはないが、聖道を覆い障げる。(倶II 31)

二二　無覆無記　聖道を障げることのない純粋な無記。不善と有覆無記を併せて染汚(略して、染)とするに対し、善と無覆無記を併せて清浄(略して、浄)とする。(倶II 31)

二三　入息と出息　吸ういきと吐くいき。(倶VI 13、14)

二四　無想定　色界中の無想天に生まれるのを真のさとりの境地であると誤解する凡夫らが実修する定(=三昧)。心・心所がすべて消滅するので、滅尽定と共に二無心定と呼ばれる。(倶II 42、43)

二五　滅尽定　無想定と共に、二無心定の一。聖者が寂静の境地を楽しもうと意図して実修する。(倶II 44、45)

だ身心に依りて転じ、所応の如くなるにあらざれば、則ち卵殻(らんかく)及び母胎(もたい)の中に在る[二六]羯刺藍(からん)(kalala)・[二七]頞部曇(あぶどん)(arbuda)・[二八]閉尸(へいし)(pesi)・[二九]鍵南(けんなん)(ghana)の諸根の未だ満ちず未だ熟さざると、並(なら)びに第四静慮に在るとにも、入出息 亦た応に転ずべし。入出息の亦た身に依りて転じ、亦た心に依りて転じて、及び所応の如くなるを以って、是の故に、下(しも)は[三〇]無間地獄(むけんじごく)より、上(かみ)は[三一]遍浄(へんじょう)に至るまで、其の中の有情の諸根 満熟(まんじゅく)せるに、入息・出息は身心に依りて転ずるなり。

④ 有色の有情の[三二]心相続 身に依りて転ずるが如く、無色の有情の心相続は何に依りてか転ずる。

答う。[三三]命根(みょうこん)と、[三四]衆同分(しゅどうぶん)と、及び余の是くの如き類の[三五]心不相応行とに依る。

⑤―1 [三六]無有愛(むうあい)は、当に見所断と言うべしや、修所断なりや。

答う。応に修所断と言うべし。

有るは是の説を作(な)す。「無有愛は、或いは見所断、或いは修所断なり。云何んが見所断なる。謂わく、見所断の法の無有なるに於て貪(むさぼ)るなり。云何んが修所断なる。謂わく、修所断の法の無有なるに於て貪るなり」と。

此の義の中に於て、無有愛は、但だ応に修所断と言うべし。

⑤―2 汝「無有愛は唯だ修所断のみにして、諸もろの[三七]預流(よる)の者 未だ此の愛を断ぜず」と説くや。

二六 羯刺藍 母胎内に在る胎児を五期に分かつ「胎内の五位」の第一。受胎直後の七日間を指す。(cf. 倶III18、19)

二七 頞部曇「胎内の五位」の第二。胎児が母胎中に在る第二の七日間。(cf. 倶III18、19)

二八 閉尸 「胎内の五位」の第三。第三の七日間。(cf. 倶III18、19)

二九 鍵南 「胎内の五位」の第四。第四の七日間。(cf. 倶III18、19)

三〇 無間地獄 地獄の最下層に位置するとされる。苦を受けること間断ないという。(倶III59、82)

三一 遍浄 遍浄天のこと。天界の中層、色界天、の中の第三禅天の最高処。(cf. 倶III2)

三二 心相続 心が現在に生じて、次の瞬間には過去へ去るけれども、未来から生じて来た心がそれを継続する、ということを繰り返して、有情の生存の中でその精神活動が時間的に持続していくとき、その心の連続的生起を心相続という。

三三 命根 有情の一生涯の間、その心身の相続において煖(体温)と識(認識・思考作用)を保つはたらきをするものとして考えられている。心不相応行の一。 (大)九二二上 (倶II46)

三四 衆同分 多くの有情の個体を、あるいは個体を構成する諸要素の個々を、相互に類似させて一つの類を成り立たしめる働きをなすもの。心不相応行の一。

答う。是くの如し。

汝 何の欲う所ぞ。諸もろの預流の者 是くの如きの心を起こすと為すや。「若し我れ 死して後、断壊して有ること無くんば、豈に安楽ならざらんや」と。

答う。爾らず。

我が説く所を聴け。若し無有愛 唯だ修所断のみにして、諸もろの預流の者 未だ此の愛を断ぜざれば、則ち応に「預流の者 是くの如きの心――若し我れ 死して後、断壊して有ること無くんば、豈に安楽ならざらん――を起こす」と説くべし。若し預流の者 是くの如きの心――若し我れ 死して後、断壊して有ること無くんば、豈に安楽ならざらん――を起こさざれば、則ち応に「無有愛は唯だ修所断のみにして、諸もろの預流の者 未だ此の愛を断ぜず」と説くべからず。是くの如きの説を作すは、倶に理に応ぜざるなり。

⑤―3　汝等も亦た「地獄・傍生・鬼の異熟の愛は唯だ修所断のみにして、諸もろの預流の者 未だ此の愛を断ぜず」と説くや。

答う。是くの如し。

汝 何の欲う所ぞ。諸もろの預流の者 是くの如きの心を起こすと為すや。「我れ 当に哀[三八]羅筏拏(Airāvaṇa)龍王[三九]・善住龍王・琰魔鬼王[四〇](Yamarāja)と作りて、鬼界の諸もろの有情を統摂すべしや」と。

答う。爾らず。

我が説く所を聴け。若し地獄・傍生・鬼の異熟の愛は唯だ修所断のみにして、諸もろの預流の者 未だ此の愛を断ぜざれば、則ち応に「預流の者 是くの如きの心――我れ 当に

(倶II 42)

三五　心不相応行　有為法の中で物的要素でも身的要素でもないある種の能力・勢力・関係などをあらわすもの。色(物質的要素)・心・心所・無為法と共に五位(五法)をなす。

三六　無有愛　生存を否定しようとする欲望、の意に解して無有愛と訳する。この語の原義は、あるいは、繁栄をねがう欲望の意であるかもしれない。(cf. 倶VI 8)

三七　預流　四沙門果の第一。はじめて仏道の流れに預かった位、の意。三結(有身見・戒禁取・疑)を断じ、もはや仏道において退くことがなく、人・天の間を七回生まれ変わるまでの間に必ず覚りに達する、とされる。(倶VI 33～35)

三八　哀羅筏拏　龍王の名。

三九　善住　原名はSupratiṣṭha か。龍王の名。

四〇　琰魔鬼王　冥界(Yama-loka)の王。

四一 乃至広説　引用文の途中あるいは末尾を省略する場合に置く句。

哀羅筏拏龍王と作りて、[四一]乃至広説——を起こす」と説くべし。若し預流の者 是くの如きの心——我れ 当に哀羅筏拏龍王と作りて、乃至広説——を起こさざれば、則ち応に「地獄・傍生・鬼の異熟の愛は唯だ修所断のみにして、諸もろの預流の者 未だ此の愛を断ぜず」と説くべからず。是くの如きの説を作すは、倶に理に応ぜざるなり。

⑤—4　汝等も亦た「諸纏に纏わるるが故に父母の命を害す。此の纏は唯だ修所断のみにして、諸もろの預流の者 未だ此の纏を断ぜず」と説くや。

答う。是くの如し。

汝 何の欲う所ぞ。諸もろの預流の者 是くの如きの纏を起こすが故に父母の命を害すと為すや。

答う。爾らず。

我が説く所を聴け。若し纏に纏わるるが故に父母の命を害せんに、此の纏は唯だ修所断のみにして、諸もろの預流の者 未だ此の纏を断ぜざれば、則ち応に「預流の者 是くの如きの纏を起こすが故に父母の命を害す」と説くべし。若し預流の者 是くの如きの纏を起こすが故に父母の命を害することあらざれば、則ち応に「諸纏に纏わるるが故に父母の命を害す。此の纏は唯だ修所断のみにして、諸もろの預流の者 未だ此の纏を断ぜず」と説くべからず。是くの如きの説を作すは、倶に理に応ぜざるなり。

⑤—5　汝等も亦た「修所断の法の無有なるに於て貪るに、此の貪は唯だ修所断のみにして、諸もろの預流の者 未だ此の貪を断ぜず」と説くや。

答う。是くの如し。

㊅九二二中

汝 何の欲う所ぞ。諸もろの預流の者 此れを縁じて愛を起こすと為すや。

答う。爾らず。

我が説く所を聴け。若し修所断の法の無有なるに於て貪るに、此の貪は唯だ修所断のみにして、諸もろの預流の者 未だ此の貪を断ぜざれば、則ち応に「預流の者 此れを縁じて愛を起こす」と説くべし。若し預流の者 此れを縁じて愛を起こさざれば、則ち応に「修所断の法の無有なるに於て貪るに、此の貪は唯だ修所断のみにして、諸もろの預流の者 未だ此の貪を断ぜず」と説くべからず。是くの如きの説を作すは、倶に理に応ぜざるなり。彼れ 既に理に応ぜば、此れも亦た応に然るべし。

⑤—6　無有は何れの法にか名づくる。

答う。三界(さんがい)の無常なるなり。

⑥—1　世尊の「心は貪(とん)[四二]・瞋(しん)[四三]・癡(ち)[四四]より解脱(げだつ)[四五]す」と説きたもうが如きは、何等の心か解脱を得る。貪・瞋・癡 有る心なりや、貪・瞋・癡を離るる心なりや。

答う。貪・瞋・癡を離るる心 解脱を得るなり。

有るは是の説を作す。「貪・瞋・癡相応の心 解脱を得」と。

彼れ 応に是の説を作すべからず。所以んは何ん。此の心 貪・瞋・癡と相合し、相応し、相雑するに非ずして、貪・瞋・癡 未だ断ぜざれば、心 解脱せず、貪・瞋・癡 断ぜば、心 便ち解脱するなり。

世尊 亦た説きたもう。「苾芻(びっしゅ)(bhikṣu)。当に知るべし。此の日月(にちがつ)の輪 五の翳(おおい)に翳(かく)され

[四二] 貪　自分にとって好ましい対象に向けて、むさぼり求める心の動き。(倶V1、2)

[四三] 瞋　自分にとって好ましからぬ有情に向けてのにくしみの心の動き。(倶V1)

[四四] 癡　智を欠いて心がくらく、正しい判断や思考がなされず迷う心の動き。無明に同じ。(倶II27、V1)

[四五] 解脱　煩悩の縛りから解き放たれ迷いから脱すること。

ば、明らかならず、照らず、広がらず、浄らかならず。何等をか五と為す。一には雲、二には烟、三には塵、四には霧、五には曷邏呼阿素洛[46](Kharaskandha-asura?)の手なり。日月の輪 五の翳と相合し、相応し、相雑するに非ざるに、彼の翳 未だ離れずんば、此の日月の輪 明らかならず、照らず、広がらず、浄らかならず。彼の翳 若し離れれば、此の日月の輪 明らかにして、照り、広がり、浄らかなるがごとく、是くの如く、此の心 貪・瞋・癡と相合し、相応し、相雑するに非ざるも、貪・瞋・癡 未だ断ぜずんば、心 解脱せず、貪・瞋・癡 断ぜば、心 便ち解脱するなり。

⑥—2　何等の心か解脱する。過去なりや、未来なりや、現在なりや。

答う。未来の無学[47]の心 生ずる時、一切の障より解脱す。

其の事は如何ん。

答う。無間道[48]の金剛喩定[49] 将に滅せんとするに、解脱道の尽智[50] 将に生ぜんとするが如し。

若し無間道の金剛喩定 正しく滅し、解脱道の尽智 正しく生ぜば、爾の時を、「未来の無学の心 生ずる時、一切の障より解脱す」と名づく。

⑥—3　未だ解脱せざる心 当に「解脱す」と言うべしや、已に解脱せる心 当に「解脱す」と言うべしや。

答う。已に解脱せる心 当に「解脱す」と言うべし。

若し已に解脱せるならば、応に「解脱す」と言うべからず。若し解脱するならば、応に「已に解脱す」と言うべからず。已に解脱せる心にして、「解脱す」と言うは、正理に応ぜず。

[46] 曷邏呼阿素洛　原音は確認し難いが、あるラーフ(Rāhu)の名であろう。ラーフは手をもって日月を捉えそれによって日月蝕(翳)を起こさしめると考えられている魔神。

[47] 無学　もはや学ぶべきものをもたない、の意。煩悩を断ち尽くして阿羅漢果を得た者、をいう。

[48] 無間道　修行の道において、まさしく煩悩を断ち切る段階を無間道といい、次の瞬間にそれによって煩悩の滅を證得する位を解脱道という。前者を賊を追い出すことに、後者を扉を閉ざすことにたとえる。(倶VI 68)

[49] 金剛喩定　修行がまさに完成しようとして最後の煩悩を断ずる無間道としての三昧。(倶VI 46)

[50] 尽智　最後の煩悩を断じて択滅を得る解脱道をいう。これによって無学の阿羅漢果が完成する。そして尽智に引き続いて必ず無生智が生ずる。(倶VI 46)

㊅九二二下

今応に彼れを問うべし。世尊の説きたもうが如し、

若し愛を断じて余 無くんば　　蓮華の水に処するが如し
苾芻(bhikṣu)の此れと彼れを捨つること　　蛇の故(ふる)き皮を脱ぐが如し、と

汝 此の説は是れ善説なりと許すや。

答う。是くの如し。

汝 何れか欲う所ぞ。已に捨てしを「捨つ」と言うと為(せ)んや、未だ捨てざるを「捨つ」と言うや。

答う。已に捨てしを「捨つ」と言う。

我が説く所を聴け。若し已に捨てしならば、応に「捨つ」と言うべからず。若し捨つるならば、応に「已に捨つ」と言うべからず。已に捨てて而(しか)も「捨つ」と言うは、正理に応ぜず。

又た世尊の説きたまわく、

慢[五一]を断じて自ら善く定まれば　　善く心 一切より脱す
一(ひと)り 静かに居して〔放〕逸ならずんば　　死を越えて彼岸(ひがん)に到る、と。

汝 此の説は是れ善説なりと許すや。

答う。是くの如し。

汝 何れか欲う所ぞ。已に到れるを「到る」と言うと為んや、未だ到らざるを「到る」と言うや。

答う。已に到れるを「到る」と言う。

五一　慢　自他を比較して他を見下し自ら高ぶる心の動き。（倶Ｖ1、10、11）

我が説く所を聴け。若し已に到らば、応に「到る」と言うべからず。若し到るならば、応に「已に到る」と言うべからず。已に到りて而も「到る」と言うは、正理に応ぜず。彼れ既に理に応ぜば、此れも亦た応に然るべし。故に契経[五二]に於て応に義を分別すべし。世尊の説きたもうが如し、

獣は林藪に帰し　鳥は虚空に帰す
聖[五三]は涅槃[五四]に帰し　法は分別[五五]に帰す、と。

⑦ 世尊の説きたまうが如し。「苾芻(bhikṣu)。当に知るべし。厭うに依りて染[五六]を離れ、染を離るるに依りて解脱し、解脱するに依りて涅槃す」と。

云何んが「厭う」なる。

答う。諸行に於て、無学 厭悪し違逆するが若き、是れを「厭う」と謂う。

云何んが「厭うに依りて染を離る」なる。

答う。厭相応の無貪・無等貪・無瞋・無等瞋・無癡・無等癡の善根の若き、是れを「厭うに依りて染を離る」と謂う。

云何んが「染を離るるに依りて解脱す」なる。

答う。離染相応の心の已に勝解せると、今勝解すると、当に勝解すべきとの若き、是れを「染を離るるに依りて解脱す」と謂う。

云何んが「解脱するに依りて涅槃す」なる。

答う。貪 永断し、瞋 永断し、癡 永断して、一切の煩悩 永断するが若き、是れを「解

五二 契経　単に経というも同じ。仏陀の説いた教えをまとめて、文章にあるいは文字にしたもの。

五三 聖　聖者に同じ。異生(凡夫というも同じ)に対する。見道に入る以前の者を異生と、見道に入った以後の者を聖者という。

五四 涅槃　すべての煩悩を滅して心の静けさを得ること。

五五 分別　対象を認識し、判断弁別する心・心所のはたらき。(cf. 倶I 32)

五六 染　ここではラーガの訳。貪(既出)に同じ。また、不善と無覆無記とをあわせて染あるいは染汚という。(cf. 倶II 68)

脱するに依りて涅槃す」と謂う。

⑧—1　世尊の説きたもうが如し。「三界有り。謂わく、断界、離界、滅界なり」と。

云何んが断界なる。

答う。愛結[五七]を除きて余の結[五八]の断を断界と名づく。

云何んが離界なる。

答う。愛結の断を離界と名づく。

云何んが滅界なる。

答う。諸もろの余の結に順ずる法の断を滅界と名づく。

⑧—2　諸もろの断界は是れ離界なりや。

答う。是くの如し。

設し離界ならば、是れ断界なりや。

答う。是くの如し。

諸もろの断界は是れ滅界なりや。

答う。是くの如し。

設し滅界ならば、是れ断界なりや。

答う。是くの如し。

諸もろの離界は是れ滅界なりや。

答う。是くの如し。

㊇九二三上

五七　愛結　九結の一。三界の貪を愛という。

五八　結　有情を迷いの境涯に結びつけるもの、の意。煩悩の異名の一。特に、有身見・戒禁取・疑を三結という。また愛・恚・慢などの九を九結と数える。五上分結・五下分結などを数えることもある。（倶40～45）

設し滅界ならば、是れ離界なりや。
答う。是くの如し。

⑨ 世尊の説きたもうが如し。「三想 有り。謂わく、断想、離想、滅想なり」と。
云何んが断想なる。
答う。愛結を除きて余の結の断の諸想の〔勝〕解を断想と名づく。
云何んが離想なる。
答う。愛結の断の諸想の〔勝〕解を離想と名づく。
云何んが滅想なる。
答う。諸もろの余の結に順ずる法の断の諸想の〔勝〕解を滅想と名づく。

説一切有部発智論 巻の第一

阿毘達磨発智論

尊者迦多衍尼子　造る
三蔵法師玄奘　詔を奉じて訳す

巻の第二

雑蘊　第一の中、愛敬納息　第四

第一篇第四章

①愛〔敬〕と②〔供〕養〔恭〕敬と③〔身〕力と④滅と⑤涅槃と⑥蘊と⑦究竟と
⑧取と⑨遍知と⑩三帰とを　此の章にて願わくば具さに説かん

①—1　云何んが愛[一]なる。
　答う。諸もろの、愛・等愛・喜・等喜・楽・等楽、是れを愛と謂う。
①—2　云何んが敬[二]なる。

一　愛　ここではプレーマン(preman)の訳。師長や徳ある人に対する親愛の情。(倶II33)
二　敬　他に対する敬重の念。それは自らを恥じる慚(ざん)にほかならぬ、とされる。(倶II33)

答う。諸もろの、敬 有り、敬性 有り、自在[三] 有り、自在性 有り、自在者[四]に於て怖畏の転ずる有る、是れを敬と謂う。

①—3　云何んが愛敬なる。

答う。一類 有りて、仏[五]・法・僧と親教〔師〕[六](upādhyāya)・軌範〔師〕(ācārya)及び余の随一の有智の尊重なる同梵行者[七]に於て愛楽し、心 悦び、恭敬して住するが如し。若し是の処に於て愛と及び敬 有らば、是れを愛敬と謂う。

②—1　云何んが供養なる。

答う。此れに二種 有り。一には財供養、二には法供養なり。

②—2　云何んが恭敬なる。

答う。諸もろの、恭敬 有り、恭敬性 有り、自在 有り、自在性 有り、自在者に於て怖畏の転ずる有る、是れを恭敬と謂う。

②—3　云何んが供養恭敬なる。

答う。一類 有りて、仏・法・僧と親教〔師〕・軌範〔師〕及び余の随一の有智の尊重なる同梵行者に於て施設し、供養し、恭敬して住するが如し。若し是の処に於て供養と及び恭敬 有らば、是れを供養恭敬と謂う。

③—1　云何んが身力なる。

答う。諸もろの、身の勇猛・強健・軽捷にして、能く辨ずる所 有る、是れを身力と謂

三 自在　心のままに自由になし得て障りのないことの意に違いなかろうが、「敬有り、敬性あり」に並べて「自在有り、自在性有り、自在者に於て怖畏の転ずる有り」と言われている意味は明らかでない。『大毘婆沙論』では「此の本論に、異なる文義に於て善巧を得たるが故に、種種の文を以て此の敬を顕示するも体に別無し」という。同じ文は次下の恭敬についても繰り返される。

四 自在者　仏・菩薩をこのように呼ぶ例は多い。

五 仏・法・僧　三宝という。仏教者の帰依の対象。覚者とその教えとそれを学ぶ修行者の集まりと。

六 親教師　和尚、和上などは同語。受戒のときの三師の一としては戒和上という。他の二師は羯摩阿闍梨・教授阿闍梨である。軌範師は阿闍梨(ācarya)の訳。

七 同梵行者　同じ僧団に在って共に修行している者。

う。

③—2　云何んが身劣なる。

答う。諸もろの、身の不勇不猛・不強不健・不軽不捷にして、能く辦ずる所無き、是れを身劣と謂う。

③—3　身力と身劣と幾ばくの処[八]の摂にして、幾ばくの識識るや。

答う。一処の摂。謂わく、触処なり。二識識る。謂わく、身識と及び意識となり。二の力士の相い扠撲する時、手腕纔かに交われば、互いに強弱を知るが如し。又た強者の弱者を執えて持つに、力の勝劣を相いに知るが如きも亦た爾り。

④—1　云何んが択滅[九]なる。

答う。諸もろの滅の是れ離繋[一〇]なるなり。

④—2　云何んが非択滅[一一]なる。

答う。諸もろの滅の離繋に非ざるなり。

④—3　云何んが無常滅[一二]なる。

答う。諸もろの行[一三]の散じ、壊し、破し、没し、亡じ、退する、是れを無常滅と謂う。

④—4　非択滅と無常滅と、何の差別かある。

答う。非択滅とは、択力[一四]に由らず、疫癘・災横・愁悩・種種の魔事と行世[一五]の苦法より解脱するも、貪欲に於て調伏[一六]し断越するには非ず。無常滅とは、諸もろの行の散じ、壊し、破し、没し、亡じ、退するなり。是れを二の滅の差別と謂う。

八　処　六根と六境との十二によってすべての法を包摂して、その一つ一つを処と呼ぶ。すなわち、眼処ないし法処。(倶I 14、15)

㊅九二三中

九　択滅　簡択の力によって得られる諸法の滅。簡択とは法を弁別する慧のはたらき。それによって正しく法を知るとき、煩悩の繋縛を離れ、法の滅を得る。(倶I 6)

一〇　離繋　煩悩の束縛を離れること。

一一　非択滅　択滅に対する。すなわち、有為の法が、その生ずべき縁の欠けることによって現在に生ずることなく永遠に未来の領域にとどまるとき、その法は非択滅を得るという。(倶I 6)

一二　無常滅　すべての有為法は、縁に従って(すなわち因によって)未来から現在に生じて来て、次の瞬間に過去へ去る。有為法の本来の性質として必然に過去へ去る。それを有為法の刹那滅といい、無常滅ともいう。(cf.倶II 46)

一三　行　ここでは、すべての有為法を総称して行という。

一四　択力　簡択の力。上掲註九を見よ。

一五　行世　『大毘婆沙論』の釈義によれば「行世の苦法より」の解脱とは無漏法の非択滅を顕すという。

一六　調伏　心身を制御して悪を排すること。

⑤—1 契経に説くが如し。「二の涅槃界[一七] 有り。謂わく、有余依涅槃界と及び無余依涅槃界となり」と。

云何んが有余依涅槃界なる。

答う。阿羅漢[一八]の、諸漏 永く尽くるも、寿命 猶お存し、大種[一九]の造色[二〇]の相続 未だ断ぜず、五根身に依りて心の相続 転ずるが若し。余の依[二一] 有るが故に、諸結 永く尽き、触證を得獲する[二二]を有余依涅槃界と名づく。

云何んが無余依涅槃界なる。

答う。即ち阿羅漢の、諸漏 永く尽き、寿命 已に滅し、大種の造色の相続 已に断じ、五根身に依りて、心 復た転ぜず。余の依 無きが故に、諸結 永く尽くるを無余依涅槃界と名づく。

⑤—2 涅槃は当に学[二三]と言うべしや、無学なりや、非学非無学なりや。

答う。涅槃は応に非学非無学と言うべし。

有るは是の説を作す。「涅槃に、学 有り、無学 有り、非学非無学 有り。云何んが学なる。謂わく、学の、諸結の断ずるを得て触證を得獲するなり。云何んが無学なる。謂わく、無学の、諸結の断ずるを得て触證を得獲するなり。云何んが非学非無学なる。謂わく、有漏の諸結を断ずるを得て触證を得獲するなり」と。

此の義の中に於て、涅槃は但だ応に非学非無学と言うべし。而るに汝「涅槃に学 有り、無学 有り、非学非無学 有り」と説くや。

一七 涅槃界 涅槃の境地、涅槃の領域、という程の意味。

一八 阿羅漢 供養を受けるに値する者、の意で、応供などと訳する。すべての煩悩を断じ尽くした者。

一九 大種 四大種のこと。地・水・火・風。（倶Ⅰ12、13）

二〇 造色 所造色の略。四大によって造られているもの。四大を除いた余他の色（色蘊、色法）のすべて。（倶Ⅰ34）

二一 余の依 残余の依身の意。依身とは生存の拠り所としての身体。

二二 触證を得獲す あるいは「獲を得て證に触る」と読むべきか。『八犍度論』は「彼岸に到るを得て果を取りて證す」と読める。

二三 学 四沙門果（預流・一来・不還・阿羅漢）の一より進んで他を修する道程を学といい、さらに進んで修する果をもたぬ阿羅漢の境位を無学という。（cf. 倶Ⅵ46）

答う。是くの如し。

汝 何の欲う所ぞ。諸もろの 先に世俗の道[二四]を以って永く欲貪・瞋恚を断じ、非学非無学の離繋得[二五]を得るもの、彼れ 四諦に於て未だ現観を得ざるも、現観を修習し、現観を得已って不還果[二六]を證し、転じて学と成るや。

答う。是くの如し。

又た汝 何の欲う所ぞ。諸もろの 先に世俗の道を以って永く欲貪・瞋恚を断じ、非学非無学の離繋得を得しもの、後に不還果を證する時、即ち彼の離繋は応に転じて学と成るべしや。若し彼れ 今の時 転じて学と成らば、先に応に是れ学なるべし。体 常住なるが故なり。未だ不還果を證さず、未だ学の得 有らざるに、已に名づけて学と為すは、正理に応ぜず。

汝 何の欲う所ぞ。阿羅漢向[二七]なる学 諸結 断じて、阿羅漢果を證せば、彼れ 転じて無学と成るや。

答う。是くの如し。

又た汝 何の欲う所ぞ。阿羅漢向なる学 諸結 断じて、阿羅漢果を證する時、即ち彼の結の断は応に転じて無学と成るべしや。若し彼れ 今の時 無学と成らば、先に応に是れ無学なるべし。体 常住なるが故なり。未だ阿羅漢果を證さず、無学の得 無きに、已に無学と名づくるは、正理に応ぜず。

汝 何の欲う所ぞ。諸もろの阿羅漢なる無学の、結 断ぜるもの、阿羅漢果を退する時、彼れ 転じて学と成るや。

二四　世俗の道　世間の道。有漏の道。

二五　離繋得　得とは心不相応行の一で、有情の得る法をその相続に引きつけ繋ぎとめるようはたらく力。離繋についての得を離繋得という。

㊅九二三下

二六　不還果　世間道によって欲界の修惑および有頂地を除く色・無色界の修惑を断じた者は、見道に入って四諦の現観を了った第十六心において不還果を証することになる。(cf. 倶VI 47、48)

二七　阿羅漢向　不還果を得おわった聖者が阿羅漢果に向かって進みゆく過程。

答う。是くの如し。

又た汝 何の欲う所ぞ。諸もろの阿羅漢なる無学の、結 断ぜるもの 阿羅漢果を退する時、即ち彼の結の断は応に転じて学と成るべしや。若し彼れ 今の時 転じて学と成らば、先に応に是れ学なるべし。体 常住なるが故なり。未だ阿羅漢果を退せず、学の得 有ること無きに、已に名づけて学と為すは、正理に応ぜず。

復た次に、涅槃は、応に先に是れ非学非無学にして後に転じて学と成り、先に是れ学にして後に転じて無学と成り、先に是れ無学にして復た転じて学と成るべからず。

又た涅槃は、応に学 有り、無学 有りて、非学非無学 有るべからず。若し是くの如くんば、応に二分を成ずべし。諸法 決定せざるが故に、応に雑乱 有るべし。是れ則ち応に諸法の性相の決定を施設すべからず。仏も亦た「涅槃に有学有無学の性あり」と説きたまわず。涅槃は恒に是れ非学非無学なるを以って、諸法 決定し、雑乱 有ること無く、恒に自性に住し、自性を捨てず。涅槃は常住にして、変易 有ること無し。是の故に、涅槃は、但だ応に非学非無学と言うべし。

⑥—1　契経に説くが如し。「彼れ 無学の[28]戒蘊・定蘊・慧蘊・解脱蘊・解脱智見蘊を成就す」と。

云何んが無学の戒蘊なる。

答う。無学の[29]身律儀と語律儀と[30]命 清 浄なり。

云何んが無学の定蘊なる。

二八　戒蘊・定蘊・慧蘊・解脱蘊・解脱智見蘊　五分法身とも無漏の五蘊ともいう。身心の欲望を自制し(戒)、心を静め(定)、澄み切った理知を得(慧)、すべての束縛から解放され(解脱)、解放された安らかさを知る(解脱知見)こと。

二九　身律儀と語律儀　身および語による行為を自制し、自らを悪から防護すること。あるいはそれによって生じ防非止悪のはたらきをもつ無表業(形あるいは声にあらわされる行為、すなわち表業、によって引き起こされ外部には現れないが内に蓄積される業の影響力)。(cf. 倶IV 15、16)

三〇　命清浄　命は生活の意。生活行為が清浄であること。

三一　三三摩地　人と法との空であることを観ずる空三昧、差別の相を離れた無相三昧、願求の思いを厭い捨てた無願三昧の三。(倶Ⅷ24)

(大)九二四上

三二　尽智と無生智　無学の聖者の得る智。尽智とは、われは四諦を体現し尽くしたと知る智。無生智とは、われはすでに四諦を体現したのでさらに体現すべきものはないと知る智。前章頭註五〇を見よ。(倶Ⅶ7)

答う。無学の[三一]三三摩地(samādhi)なり。謂わく、空と無願と無相なり。

云何んが無学の慧蘊なる。

答う。無学の正見智なり。

云何んが無学の解脱蘊なる。

答う。無学の作意相応の心にして、已に勝解せると、今勝解すると、当に勝解するとなり。

云何んが無学の解脱智見蘊なる。

答う。[三二]尽智と無生智となり。

⑥―2　無学の慧蘊と解脱智見蘊とに何の差別か有る。

答う。無学の苦・集智　是れ無学の慧蘊なり。無学の滅・道智　是れ無学の解脱智見蘊なり。復た次に、無学の苦・集・滅智　是れ無学の慧蘊なり。無学の道智　是れ無学の解脱智見蘊なり。復た次に、無学の苦・集・道智　是れ無学の慧蘊なり。無学の滅智　是れ無学の解脱智見蘊なり。是れを差別と謂う。

⑦　世尊の説きたもうが如し。「苾芻(bhikṣu)　当に知るべし。唯だ一の究竟のみにして、別の究竟　無し」と。此の中、何れの法をか究竟と名づくる。

答う。世尊　或る時は道に於て「究竟」の声を説き、或る時は断に於て「究竟」の声を説きたもう。道に於て「究竟」の声を説くとは、世尊の説きたもうが如し。

一類の聡きなるも慢る者　　究竟を知ること能わず

彼れ 道を證せざるが故に　調伏せずして死す、と。

断に於て「究竟」の声を説くとは、世尊の説きたもうが如し。

已に究竟に到れる者　怖無く、疑悔無し
永く有の箭を抜くが故に　彼れ 後辺身(三三)に住す
此れは是れ最も究竟にして　無上・寂静の迹
清浄なる不死の迹なり　諸もろの相 皆な尽くるが故に、と。

又た契経に説く。「一梵志(三四) 有り。数目連(Gaṇaka-Maudgalyāyana/Gaṇaka-Moggallāna)と名づく。仏の所に来詣して、仏に請問して曰わく。『喬答摩(Gotama)。尊 諸もろの苾芻等を教授・教誡するに、彼れ 教えを受け已りて、皆な 能く最極究竟の涅槃界を證得すや』と。世尊 告げて曰まわく。『此の事 不定なり。一類は能く證するも、一類は能わず』と」と。

⑧―1　契経に説くが如し。「仏 苾芻に告げたまわく。『諸もろの外道(三五) 有り。同じく諸取を断知することを施設すると雖も、而も彼れ 具足して施設すること能わず。謂わく、但だ欲取(三六)・見取・戒取を断知することを施設するも、我語取は〔さに〕非ず』と。此れに何の義 有りや。

有るは是の説を作さく。「此れは是れ、世尊 率爾に法を説きたまうなり」と。彼れ 応に是の説を作すべからず。所以んは何ん。世尊の説法は、全く因 無きにも、或いは因 少なきにも非ざるが故なり。

三三 後辺身　最後の身の意。生死の輪転すなわち迷いの生存の反覆を離れる者は、此の生をおわればさらに次の生を得ることはないから、今の身が最後の身ということになる。

三四 梵志　婆羅門というも同じ。婆羅門教の司祭階級。

三五 外道　仏法以外の道を奉ずる人々。

三六 欲取・見取・戒取・我語取　併せて四取という(前章頭註三参照)。欲取は欲界で五欲の対象に向けて起こす欲、見取は誤った見解を真実であるとして固執すること、戒取(戒禁取ともいう)は正しい道でないことを正しいとして執着すること、我語取は自分の言葉に対して固執すること。(倶V37、38)

復た説く者 有り。「此の少分を断ぜる者を顕わす」と。彼れ 応に是の説を作すべからず。所以んは何ん。[三七]異生も亦た能く少分の我語取を断ずること有るが故なり。然るに、仏・世尊 天・人等の無量の大衆の為めに広く法の要を説き、〔顚〕倒無く開示し、類に随いて解らしめたもう。諸もろの外道 有りて、竊かに仏の蘊・界・処・蓋・念住乃至覚支等の名を説きたもうを聞き、或いは具足する有り、或いは具足せざるなり。是の諸もろの外道 若し欲取の名を聞くことを得るもの有らば、便ち是の言を作さん。「我れも亦た欲取を断知することを施設す」と。若し見取の名を聞くことを得るもの有らば、便ち是の言を作さん。「我れも亦た見取を断知することを施設す」と。若し戒取の名を聞くことを得るもの有らば、便ち是の言を作さん。「我れも亦た戒取を断知することを施設す」と。

多くの苾芻(bhikṣu)集いて一処に在るに、諸もろの外道の来たる有りて是の言を作すが如し。「喬答摩(Gotama)諸もろの弟子の為めに法の要を宣説す。謂わく、是の言を作す。『汝等、苾芻。応に[三八]五蓋を断ずべし。是くの如きの五蓋 能く心を染汚し、慧力をして劣らしめ、覚分を損害し、涅槃を障礙す。[三九]四念住に於て応に善く心を住め、[四〇]七覚支に於て応に勤めて修習すべし』と。我等も亦た能く諸もろの弟子の為めに此の法の要を説けば、則ち喬答摩の説く所の法要と我が〔法要〕と、何の別かありて、今汝等 独り彼れに帰するや」と。然るに彼の外道 尚お五蓋の名相を識ること能わず。況んや能く四念住に住し、七覚支を修するに了達するをや。然るに仏の語を竊むが故に是の説を作すなり。取を断ずるを施設するも、応に亦た然りと知るべし。

三七 異生「凡夫」とも訳す語。聖者に対する。見道に至る以前の者を異生と呼び、それ以後の者(聖道に入った者)を聖者という。

(大)九二四中

三八 五蓋 五つの蓋(第一章頭註一八参照)。貪欲・瞋恚・睡眠・掉悔・疑をいう。睡眠は心が昏く沈み込み眠り込む動きをいい、掉悔は心が浮動したり心配や悔いに悩まされたりする動きをいう。(倶V58)

三九 四念住 身・受・心・法について思いをそそぎ、身は不浄であり受は苦であり心は無常であり法は無我であると観じて、常・楽・我・浄の四顚倒を破ること。(倶VI15〜17、70)

四〇 七覚支 念(心に明らかに憶って忘れぬこと)・択法(慧によって法を弁別すること)・精進(正しいことにたゆまず励むこと)・喜(正法を得て喜ぶこと)・軽安(心身の軽快で安らかなこと)・定(心が静止して散乱せぬこと)・捨(心に偏りがなく平静なこと)の七。(cf. 倶VI70〜74)

又た外道の摩健地迦(Māgandiya)の如し。自らの身の、衆病の集まる所にして、刹那も住まらず、苦・空・非我なることを了らず。仏の所に来詣して、腹を鼓きて言わく。「吾が今の此の身 既に諸病 無し。応に、即ち是れ究竟の涅槃なりと知るべし」と。彼れ尚お無病の名相を知らず。況んや能く究竟の涅槃を了達するをや。然るに仏の語を竊むが故に是の説を作すなり。取を断ずるを施設するも、応に亦た然りと知るべし。

⑧—2　何に縁りて、外道 但だ三取を断知するを施設すること有るに、我語取は〔さに〕非ずや。

答う。彼れ 長夜に於て、真実の我、[四一] 及び有情・命者・生者・能養育者・補特伽羅(pudgala) 有りと執す。彼れ 既に真実の我等を執せば、寧んぞ肯えて我語取を断ずることを施設せんや。

⑧—3　同じく諸取を断知するを施設すと説くは、斯れに何の義か有る。

答う。是れ、仏・世尊 彼の言説に随いたもうなり。世尊の説きたもうが如し。「彼の諸もろの外道 実に有情 有りて断壊す、と施設す」と。然るに勝義に依れば、実の有情 無し。但だ彼の言に随いて是の説を作したもう。此れも亦た是くの如きが故に過 有ること無し。

⑨　契経に説くが如し。「二の遍知[四二] 有り。謂わく、智遍知と及び断遍知となり」と。

云何んが智遍知なる。

答う。諸もろの、智・見・明・覚・現観、是れを智遍知と謂う。

四一　我、及び有情・命者・生者・能養育者・補特伽羅　ここではいずれも、個々の生命体に内在してそれを支配統率しその主体となるものとして考えられているものを指す語として用いられている。

四二　遍知　四諦の理を遍く知ること。それを特に智遍知といって断遍知と区別するとき、後者は智遍知を因とする煩悩の断、すなわち智遍知の果としての択滅、を指す。　㊅九二四下

云何んが断遍知なる。

答う。諸もろの、貪の永断と、瞋・癡の永断と、一切煩悩の永断、是れを断遍知と謂う。

世尊 或る時は智に於て「遍知」の声を説き、或る時は断に於て「遍知」の声を説きたもう。智に於て「遍知」の声を説くとは、伽陀(gāthā)に説くが如し。

儒童の賢にして寂静なるは　能く諸もろの世間を益す
智有るは、能く　貪愛の衆苦を生ずるを遍知す
智有るは、言えば応に作すべく　作さざるは応に言うべからず
智者は、応に　言有りて作無き者を遍知すべし、と。

断に於て「遍知」の声を説くとは、契経に説くが如し。「仏 苾芻(bhikṣu)に告げたまわく。当に汝の為めに、遍知する所の法と遍知の自性と能遍知の者とを説くべし。遍知する所の法とは、謂わく、五取蘊なり。遍知の自性とは、謂わく、貪の永断、瞋・癡の永断、一切煩悩の永断なり。能遍知の者とは、謂わく、阿羅漢の 諸漏永尽して、「如来 死後に有り」等の、応に記すべからざる法を、執せざるなり。

⑩―1　諸もろの、仏に帰依する者 何れの所にか帰依する。

答う。法の、実有・現有にして、想・等想あり、施設し言説するが若きを名づけて「仏陀(buddha)」と為す。彼の所有る無学の菩提(bodhi)を成ずる法に帰依するを「帰依仏」と名づく。

⑩―2　諸もろの、法に帰依する者 何れの所にか帰依する。

答う。法の、実有・現有にして、想・等想あり、施設し言説するが若きを名づけて「達磨(dharma)」と為す。是くの如き愛の尽・離・滅なる涅槃(nirvāṇa)に帰依するを「帰依法」と名づく。

⑩—3　諸もろの、僧に帰依する者　何れの所にか帰依する。

答う。法の、実有・現有にして、想・等想あり、施設し言説するが若きを名づけて「僧伽(saṅgha)」と為す。彼の所有る学・無学の僧伽を成ずる法に帰依するを「帰依僧」と名づく。

雑蘊　第一の中、無慚納息　第五

①黒白と②二根と③心と　④掉・悔と⑤惛・睡と⑥夢と
⑦蓋と⑧無明と⑨不共とを　此の章にて願わくば具さに説かん

①—1　云何んが無慚なる。

答う。諸もろの、慚無く、所慚無く、異慚無きと、羞無く、所羞無く、異羞無きと、敬無く、敬性無きと、自在無く、自在性無く、自在者に於て怖畏無く転ずると、是れを無慚と謂う。

①—2　云何んが無愧なる。

一　無慚　慚の無いこと。慚はもろもろの徳を敬い、自らの罪を省みて恥じる心の動き。(cf. 倶II 26、27)

二　無愧　愧の無いこと。愧はもろもろの罪をおそれ、自らの罪を他に対して恥じる心の動き。(cf. 倶II 26、27)

答う。諸もろの、愧無く、所愧無く、異愧無きと、恥(ち)無く、所恥無く、異恥無きと、諸もろの罪の中に於て怖(おそ)れず、畏(おそ)れず、怖畏を見ざると、是れを無愧と謂う。

㊅九二五上

①—3　無慚と無愧と、何の差別か有る。

答う。自在者に於て怖畏無く転ずる、是れ無慚なり。諸罪の中に於て怖畏を見ざる、是れ無愧なり。是くの如き差別あり。

①—4　云何んが慚なる。

答う。諸もろの、慚有り、所慚有り、異慚有ると、羞有り、所羞有り、異羞有ると、敬有り、敬性有ると、自在有り、自在性有り、自在者に於て怖畏有りて転ずると、是れを慚と謂う。

①—5　云何んが愧なる。

答う。諸もろの、愧有り、所愧有り、異愧有ると、恥有り、所恥有り、異恥有ると、諸罪の中に於て怖れ有り、畏れ有り、深く怖畏を見ると、是れを愧と謂う。

①—6　慚と愧と、何の差別かある。

答う。自在者に於て怖畏有りて転ずる、是れ慚なり。諸罪の中に於て深く怖畏を見る、是れ愧なり。是くの如き差別あり。

②—1　云何んが増上(三ぞうじょう)の不善根なる。

答う。諸もろの不善根の能く善根を断つ〔時〕と、及び欲染を離るる時、最初に捨つる所なり。

三　増上　力ある、優越した、の意。

②—2　云何んが微倶行[四]の不善根なる。

答う。諸もろの不善根の欲染を離るる時、最後に捨つる所なり。彼れを捨つるに由るが故に、欲染を離ると名づく。

②—3　云何んが欲界の増上の善根なる。

答う。菩薩[五]の正性離生に入る時、得る所の欲界の現観辺[六]の世俗智と、及び如来の尽智を得る時、得る所の欲界の無貪・無瞋・無癡の善根なり。

②—4　云何んが微倶行の善根なる。

答う。善根を断つ時、最後に捨つる所なり。彼れを捨つるに由るが故に、善根を断つと名づく。

③—1　諸もろの心の過去なるは、彼の心 変壊せりや。

答う。諸もろの心の過去なるは、彼の心 皆な変壊せり。心 変壊せるに、彼の心 過去に非ざる有り。謂わく、未来と現在の貪・瞋相応の心なり。世尊の説きたもうが如し。「汝等、苾芻(bhikṣu)。設い怨賊に汝の身、或いは諸もろの支節を鋸解せらるるも、汝等、彼れに於て心[七] 変壊すること勿れ。亦た当に口を護りて悪言を出すこと勿れ。若し心変壊して、悪言を出だすに及ばば、自らの求むる所に於て深く障礙と為らん」と。又た世尊の説きたまわく、「汝等、苾芻。妙欲[八]の境に於て、応に変壊の心を発起[九]すべからず」と。

③—2　諸もろの心の染著せんに、彼の心 変壊すや。

答う。諸もろの心 染著せば、彼の心 皆な変壊す。心 変壊せるに、彼の心 染著するに

四 微倶行　僅かにあい伴う、の義。かすかな、力弱い、の意。

五 菩薩　仏となり得べき稀有の徳性・資質を具えて、聖道を歩みつつある行者。(cf. 倶Ⅳ1、10)

六 現観辺の世俗智　見道において苦・集・滅諦を現観するときそれぞれの諦現観の最後において生ずべき有漏智。(倶Ⅶ23)

七 心変壊　ここで、心が変壊するとは、瞋が生じてそれが心と相応することになるのを意味する。

八 妙欲の境　色・声・香・味・所触。

九 変壊の心を発起す　ここで、変壊の心が発起するとは、貪が生じてそれが心と相応することになるのを意味する。

非ざる有り。謂わく、[10]過去の貪と相応せざる心と、及び[11]未来と現在の瞋と相応する心なり。世尊の説きたもうが如し。「汝等、苾芻。設い怨賊に、[12]広説乃至、自らの求むる所に於て深く障礙と為らん」と。

④—1　云何んが[13]掉挙なる。

答う。諸もろの、心の寂静ならず、止息せず、軽躁・掉挙なる、心の躁動性、是れを掉挙と謂う。

④—2　云何んが[14]悪作なる。

答う。諸もろの、心の焦灼・懊変にして、悪作せりとの心の追悔性、是れを悪作と謂う。

④—3　諸もろの心に掉挙有らんに、彼の心は悪作相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)心に掉挙有りて、悪作相応に非ざる有り。謂わく、悪作無き心に躁動性有るなり。(b)心に悪作有りて、掉挙相応に非ざる有り。謂わく、染汚無き心に追悔性有るなり。(c)心に掉挙有りて、亦た悪作相応なる有り。謂わく、染汚心に追悔性有るなり。(d)心に掉挙無く、亦た悪作相応にも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

⑤—1　云何んが[15]惛沈なる。

答う。諸もろの、身の重性と心の重性、身の調柔ならざると心の調柔ならざる、身の[16]瞢瞢なると心の瞢瞢なる、身の[17]憒悶せると心の憒悶せる、心の惛重性、是れを惛沈と謂う。

㊅九二五中

一〇　過去の貪と相応せざる心　過去の心であるから変壊しており、貪と相応しないから染著しない。

一一　未来と現在の瞋と相応する心　過去でないから世(=時)による変壊はないが、瞋と相応する染汚心であるからやはり〔理として〕変壊している。貪と相応しているのでないから染著する心ではない。

一二　広説乃至　③—1に引かれた経と同じだから、中略してある。

一三　掉挙　浮動し騒がしく落ちつかぬ心の動き。(俱II 27、V 48)

一四　悪作（おさ）とも読む。「悔」ともいう。悪を作すことではなくて、悪を作したと追想し後悔する心の動き。(俱II 29、30、V 47、56)

一五　惛沈　惛は「くらい」の意。沈み込んで陰鬱・鈍重・頑迷な心のさま。(俱II 27、V 47、51)

一六　瞢瞢　明らかでない、はきはきしない、の意。

一七　憒悶　乱れた、明らかでないありさま。

⑤—2 云何んが睡眠[一八]（すいめん）なる。

答う。諸もろの、心の睡眠し、惛微（こんみ）にして転ずる、心の味略性[一九]（まいりゃくしょう）、是れを睡眠と謂う。

⑤—3 諸もろの心に惛沈有らんに、彼の心 睡眠相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)心に惛沈有りて、睡眠相応に非ざる有り。謂わく、睡眠無き心に惛沈性有るなり。(b)心に睡眠有りて、惛沈相応に非ざる有り。謂わく、染汚無き[二〇]心に睡眠性有るなり。(c)心に惛沈有りて、亦た睡眠相応なる有り。謂わく、染汚心に睡眠性有るなり。(d)心に惛沈無く、亦た睡眠相応にも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

⑤—4 睡眠は、当に善と言うべしや、不善なりや、無記なりや。

答う。睡眠は、応に、或いは善、或いは不善、或いは無記と言うべし。云何んが善なる。謂わく、善なる心 睡眠して、惛微にして転ずる、心の味略性なり。云何んが不善なる。謂わく、不善なる心 睡眠して、惛微にして転ずる、心の味略性なり。云何んが無記なる。謂わく、無記なる心 睡眠して、惛微にして転ずる、心の味略性なり。

⑥—1 夢中に、当に、福[二一] 増長（ぞうじょう）すと言うべしや、非福[二二] 増長すや、非福非非福 増長すや。

答う。夢中に、応に、或いは福 増長す、或いは非福 増長す、或いは非福非非福 増長すと言うべし。福 増長すとは、夢中に、布施[二三]（ふせ）して福を作り、斎戒[二四]（さいかい）を受持し、或いは余の随一の福 相続して転ずること有るが如し。非福 増長すとは、夢中に、生命を害し[二五]、与（あた）えられざるを取り、欲邪行（よくじゃぎょう）し、故（こと）さらに妄語（もうご）し、諸もろの酒を飲み、或いは余の随一の非福

一八 睡眠 はっきりせず、活動のにぶい心のさま。（倶II 31、32）

一九 味略 味は「くらい」、略は「つまびらかでない」、の意。

二〇 染汚無き心… 心所としての惛眠は必ず染汚心と相応するが、心所としての睡眠は善心にも不善心にも無記心とも相応する、とされる。

二一 福 徳とも福徳ともいう。世間的な（＝有漏の）善業（善い行為）がその行為者の上にもたらす功徳、あるいはその功徳をもたらす善業自体。（倶IV 46）

二二 非福 福でないことを意味するのではなく、福の逆すなわち悪業が行為者の上にもたらす罪禍を意味し、あるいはその罪禍をもたらす悪業自体を意味する。（倶IV 46、47）

二三 布施 単に施ともいう。自己の所有する財物などを他者に与え施して福を積む行為。（倶IV 117、118）

二四 斎戒 在家者が定めの日に身心を清浄に保ち行為を自ら戒め慎むこと。戒めは八種数え挙げられるから八斎戒という。（cf. 倶IV 29）

二五 生命を害し 以下「酒を飲み」に至るまでの五項目は「五戒」として戒められるところ。（cf. 倶IV 17）

㊅九二五下

相続して転ずること有るが如し。非福非非福 増長すとは、夢中に、非福非非福 相続して転ずること有るが如し。

⑥―2　夢は、何れの法にか名づくる。

答う。諸もろの睡眠時の心・心所法 所縁に於て転ずるに、彼れ 覚め已りて、憶いだすに随いて、能く他の為めに「我れ 已に夢に是くの如き是くの如きの事を見る」と説かん。是れを夢と謂う。

⑦―1　契経に説くが如し。「五蓋[二六] 有り」と。五蓋 諸もろの蓋を摂すと為すや、諸もろの蓋 五蓋を摂すと為すや。

答う。諸もろの蓋 五蓋を摂するなり。五蓋 諸もろの蓋を摂するに非ず。何等をか摂せざる。謂わく、無明蓋なり。世尊の説きたもうが如し、

　無明蓋に覆われ　　愛結に繋縛さる
　愚と智と倶に　　是くの如き有識身を感得す、と。

⑦―2　諸もろの蓋、彼れは覆[二七]なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)蓋にして覆に非ざる有り。謂わく、過去と未来の五蓋なり。(b)覆にして蓋に非ざる有り。謂わく、五蓋を除きて、諸余の煩悩の現在前するなり。(c)蓋にして亦た覆なる有り。謂わく、五蓋の随一 現在前するなり。(d)蓋にも非ず覆にも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

二六　五蓋　貪欲・瞋恚・惛眠・掉悔・疑。惛眠は惛沈と睡眠を併せて挙げたもの、掉悔は掉挙と悔すなわち悪作を併せて挙げたもの。(倶V 58)

二七　覆　ここの覆は心所法の一としての覆mrakṣaでなく、心が覆われ正しい活動が障げられているという意味の覆nivṛtaであろう。すべての煩悩は現在時においては覆の作用があり、過去・未来には覆の作用が無い、とされる。

⑧—1 諸もろの欲界繋(よっかいけ)の無明随眠、彼れは一切不善なりや。

答う。諸もろの不善の無明随眠は、皆な欲界繋なるも、[二八]欲界繋の無明随眠にして不善に非ざる有り。謂わく、欲界繋の有身見・辺執見(へんしつけん)相応の無明なり。

⑧—2 諸もろの、色(しき)・無色界繋(むしきかいけ)の無明随眠、彼れは一切無記なりや。

答う。諸もろの、色・無色界繋の無明随眠は、皆な是れ無記なるも、無記なる無明随眠にして、色・無色界繋に非ざる有り。謂わく、欲界繋の有身見・辺執見相応の無明なり。

⑧—3 諸もろの、見苦・集所断の無明随眠、彼れは皆な 是れ[二九]遍行(へんぎょう)なりや。

答う。諸もろの是れ遍行なる無明随眠は、皆な見苦・集所断なるも、見苦・集所断の無明随眠にして遍行に非ざる有り。謂わく、見苦・集所断の非遍行の随眠相応の無明なり。

⑧—4 諸もろの、見滅・道所断の無明随眠、彼れは皆な 非遍行なりや。

答う。諸もろの、見滅・道所断の無明随眠は、皆な非遍行なるも、非遍行の無明随眠にして見滅・道所断に非ざる有り。謂わく、見苦・集所断の非遍行の随眠相応の無明なり。

⑨—1 云何んが[三〇]不共(ふぐう)の無明随眠なる。

答う。諸もろの無明の、苦に於て了(さと)らざると、集・滅・道に於て了らざるなり。

⑨—2 云何んが不共の[三一]掉挙纏(じょうこてん)なる。

答う。不共の掉挙纏 無し。

二八 欲界繋の…非ざる有り　欲界繋の煩悩は原則として不善であり、色・無色界繋の煩悩は原則として無記である。ただ、欲界繋の有身見・辺執見相応の無明は、無慚・無愧と相応しあるいは倶有することがないから、無記である、とされる。

二九 遍行　自界・自地の五部にあまねく行きはたらく煩悩をいう。自界とは欲・色・無色の三界の中かでその煩悩の属する界を、自地とは欲界と色界の四地(初禅地ないし第四禅地)と無色界の四地(空無辺処地・識無辺処地・無所有処地・非想非非想処地)との中でその煩悩の属する地を、指す。五部とは見苦所断・見集所断・見滅所断・見道所断・修所断の五。遍行の随眠(煩悩)としては十一種を数えるが、その中で無明随眠は見苦所断と見集所断の二種である。(倶V12、13)

三〇 不共の無明　無明を分かって相応無明と不共無明との二とする。相応無明とは他の煩悩と相応する無明、不共無明とは他の煩悩と相応せず自力をもって起こる無明をいう。(cf. 倶V12、14)

三一 掉挙纏　掉挙なる纏(=煩悩)、の意(上記頭註一三、および第一章頭註一九参照)。

㊅九二六上

雑蘊 第一の中、相納息(そうのうそく) 第六

①二[一]・三相の同異 と　②老と③死と④無常と⑤強(ごう)と
⑥三相の一刹那(せつな)なるとを　此の章にて願わくば具さに説かん

①—1　色法の生[二]・住・老・無常は、当に色と言うべしや、非色なりや。
答う。応に非色と言うべし。
①—2　非色法の生・住・老・無常は、当に非色と言うべしや、色なりや。
答う。応に非色と言うべし。
①—3　有見の法の生・住・老・無常は、当に有見と言うべしや、無見なりや。
答う。応に無見と言うべし。
①—4　無見の法の生・住・老・無常は、当に無見と言うべしや、有見なりや。
答う。応に無見と言うべし。
①—5　有対(うたい)の法の生・住・老・無常は、当に有対と言うべしや、無対なりや。
答う。応に無対と言うべし。
①—6　無対の法の生・住・老・無常は、当に無対と言うべしや、有対なりや。
答う。応に無対と言うべし。

第一篇第六章

一　二・三相　二相とは色・非色など、三相とは過去・未来・現在など。

二　生・住・老・無常　生・住・異・滅というも同じ。併せて有為法の四相という。すべての有為法は無常であって、縁によって未来から現在に現れその一刹那に現在から過去へ去る。その移りゆきの瞬間の上に四相を見る。四相は心不相応行であるから、それ自体は非色(物質的存在でない)であり、無見(目に見えない)であり、無対(空間を占有するのでないから互いに他の存在と抵触することがない)である。(倶II、47)

①—7　有漏法の生・住・老・無常は、当に有漏と言うべしや、無漏なりや。
答う。応に有漏と言うべし。
①—8　無漏法の生・住・老・無常は、当に無漏と言うべしや、有漏なりや。
答う。応に無漏と言うべし。
①—9　有為法の生・住・老・無常は、当に有為と言うべしや、無為なりや。
答う。応に有為と言うべし。
①—10　無為法の生・住・老・無常は、当に無為と言うべしや、有為なりや。
答う。応に無為法には生・住・老・無常無しと言うべし。[三]
①—11　過去の法の生・住・老・無常は、当に過去と言うべしや、未来なりや、現在なりや。
答う。応に過去と言うべし。
①—12　未来の法の生・住・老・無常は、当に未来と言うべしや、過去なりや、現在なりや。
答う。応に未来と言うべし。
①—13　現在の法の生・住・老・無常は、当に現在と言うべしや、過去なりや、未来なりや。
答う。応に現在と言うべし。
①—14　善法の生・住・老・無常は、当に善と言うべしや、不善なりや、無記なりや。
答う。応に善と言うべし。

三 無為法には…無常無し　無為法には未来から縁によって現在に生じて来ることも現在から過去へ去って行くこともない。

①―15　不善法の生・住・老・無常は、当に不善と言うべしや、善なりや、無記なりや。

答う。応に不善と言うべし。

①―16　無記法の生・住・老・無常は、当に無記と言うべしや、善なりや、不善なりや。

答う。応に無記と言うべし。

①―17　欲界繫の法の生・住・老・無常は、当に欲界繫と言うべしや、色・無色界繫なりや。

答う。応に欲界繫と言うべし。

①―18　色界繫の法の生・住・老・無常は、当に色界繫と言うべしや、欲・無色界繫なりや。

答う。応に色界繫と言うべし。

①―19　無色界繫の法の生・住・老・無常は、当に無色界繫と言うべしや、欲・色界繫なりや。

答う。応に無色界繫と言うべし。

①―20　学の法の生・住・老・無常は、当に学と言うべしや、無学なりや、非学非無学なりや。

㊅九二六中

答う。応に学と言うべし。

①―21　無学の法の生・住・老・無常は、当に無学と言うべしや、学なりや、非学非無学なりや。

答う。応に無学と言うべし。

①—22 非学非無学の法の生・住・老・無常は、当に非学非無学と言うべしや、学なりや、無学なりや。

答う。応に非学非無学と言うべし。

①—23 見所断(けんしょだん)の法の生・住・老・無常は、当に見所断と言うべしや、修所断(しゅしょだん)なりや、不断なりや。

答う。応に見所断と言うべし。

①—24 修所断の法の生・住・老・無常は、当に修所断と言うべしや、見所断なりや、不断なりや。

答う。応に修所断と言うべし。

①—25 不断の法の生・住・老・無常は、当に不断と言うべしや、見・修所断なりや。

答う。応に不断と言うべし。

② 云何んが老なる。

答う。諸行[四]の向(すす)み、背(そむ)き、熟し、変わる相、是れを老と謂う。

③ 云何んが死なる。

答う。彼彼(ひひ)の有情 彼彼の有情の衆同分(しゅどうぶん)より移転し壊没(えもつ)して、寿と煗[五](なん)と命根[六](みょうこん)を捨て、諸[七]蘊を滅棄して、身の殞喪[八](いんそう)する、是れを死と謂う。

四 諸行 「行」はこの場合有為法の意。

五 煗 煖に同じ。あたたかみ。体温。

六 命根 有情の一つの生涯を通じて心身の相続を維持するはたらき。心不相応行の一種。(倶II 46)

七 諸蘊 有情の心身を構成する五蘊。

八 殞喪 殞は「しぬ」、喪は「うしなう」意。

④—1　云何んが無常なる。

答う。諸行 散壊し、破没し、亡退する、是れを無常と謂う。

④—2　死と無常と、何の差別かある。

答う。諸もろの死 是れ無常なるも、無常にして死に非ざる有り。謂わく、死を除きて余の行の滅なり。

⑤　業力(ごうりき) 強しや、無常力 強しや。

答う。業力 強し。無常力は〔さに〕非ず。

有るは是の説を作す。「無常力 強し。業力は〔さに〕非ず。所以(ゆえ)んは何(いか)ん。業も亦た無常なるが故に」と。

此の義の中に於て、業力 強し。無常力は〔さに〕非ず。所以んは何ん。業 能く三世[九]の行を滅するも、無常は唯だ現在の行を滅するのみなるが故なり。

⑥—1　世尊の説きたもうが如し。「三の有為の有為相有り。有為の起も亦た了知すべし。尽(じん)及び住異も亦た了知すべし」と。一刹那(せつな)の中、云何んが起なる。

答う。生なり。

⑥—2　云何んが尽なる。

答う。無常なり。

⑥—3　云何んが住異なる。

九 三世 過去・未来・現在。「世」は時の意。

答う。老なり。

雑蘊 第一の中、無義納息 第七

①無義と②念と③無相と　④法輪を知ると⑤漏尽と
⑥臣と⑦欲・足と⑧満・養とを　此の章にて願わくば具さに説かん

①世尊の説きたもうが如し、
諸余の苦行を修するは　当に、[一]無義と倶なることを知るべし
彼れ利と安を獲ざること　陸に船棹を揮うが如し、と。

何の故に、世尊是くの如きの説を作したもうや。「余の苦行を修するは無義と倶なり」と。

答う。彼の[二]行は死に趣き、死に近づき、死に至る。是くの如きの苦行能く死を超越するに非ざるが故なり。

②又た世尊説きたまわく、「[三]結跏趺坐して、身を端し、正しく願い、対面の念に住す」と。云何んが「対面の念」に住すと名づくる。

答う。観行を修する者念を眉間に繋けて、或いは[四]青淤を観じ、或いは[五]膖脹を観じ、或いは[六]膿爛を観じ、或いは[七]破壊を観じ、或いは[八]異赤を観じ、或いは[九]被食を観じ、或いは[一〇]分離

一 無義　意義が無い、の意。
二 行　この「行」は有為法の意でなく、おこないの意。
三 結跏趺坐　坐法の一。脚を組んで右(左)の足を左(右)のもも(股)の上に置く。最も安定した坐をなす。
四 青淤　以下骨瑣に至るまでの九項は、屍体が次第に変じてついに骸骨となるまでを九段階に分かって、それぞれが観察(不浄観)の対象となることを示す。(cf. 倶VI 9、10)青淤は屍体が青黒く変じた状態をいう。
五 膖脹　腫れてふくれ上がった状態。　(大)九二六下
六 膿爛　膿みただれた状態。
七 破壊　破れくずれた状態。
八 異赤　他の論書に、「血塗」と訳されているものに当たるか。それならば屍体が流れ出た血に塗れているさまと解される。
九 被食　野犬などに喰い散らされるをいうのであろう。
一〇 分離　肢節がばらばらになること。

を観じ、或いは白骨を観じ、或いは一一骨鎖を観ず。此れ等を名づけて対面の念に住すと為すなり。

③ 又た世尊 説きたまわく、「大目乾連(Mahāmaudgalyāyana)。底沙(Tiṣya)梵天は第六の無相住の者を説かざるや」と。云何んが第六の無相住の者と名づくる。

答う。一二随信行・随法行を名づけて一三第六の無相住の者と為す。所以んは何ん。此の二は無相にして、「此こに在り」、「彼こに在り」、若しくは「苦法智忍なり」、若しくは「苦法智なり」、乃至広説、若しくは「道類智忍なり」と安立すべからず、一四施設すべからず。此れ無相にして「此こに在り」、「彼こに在り」と安立すべからず、施設すべからざるを以っての故に、第六の無相住の者と名づく。

④ 契経に説くが如し。「仏 法輪を転じたまい、一五憍陳那(Kauṇḍinya)等の苾芻(bhikṣu)一六法を見るに、地神薬叉(yakṣa)声を挙げて遍ねく告ぐ。『世尊 今婆羅痆斯(Vārāṇasī)の仙人鹿苑に在して、一七三たび法輪を転じ、十二相を具したもう』と」と。彼の地神に正智見有りて、仏の法輪を転じたまい、苾芻の法を見るを知るや。

答う。〔彼れに正智見〕無し。

彼れ 云何んが知る。

答う。世尊を信ずるが故なり。謂わく、仏 世俗心を起こしたまわく、「我れ 法輪を転ずるに、苾芻 法を見る」と。是れに由りて、彼れ 知るなり。或いは仏 他に「我れ 法輪

一一 骨鎖 骸骨。

一二 随信行・随法行 見道に在る鈍根の行者が随信行とされ、同じく見道に在る利根の行者が随法行とされる。(俱VI 31)

一三 第六 右に引用された経典を見ると、俱解脱・慧解脱・身証・未至・信勝解(＝信解)の五種の行者について語ったあとに、随信行・随法行について述べるので、この「第六」の語があるものと思われる。

一四 施設す 原意は「知らしめる」、「示す」。

一五 憍陳那等 憍陳那らの五人。釈迦牟尼が初めて法を説いた時の聴聞者。

一六 法を見る 法を理解する、の意。

一七 三たび法輪を転じ十二相を具す 苦・集・滅・道の四諦についてそれぞれ三様の説き方がされたことをいう。すなわち、これは苦諦である乃至これは道諦である、この苦諦は知らるべきである乃至道諦は修せらるべきである、この苦諦は知られた乃至道諦は修せられた、と説かれたこと。

を転ずるに、苾芻 法を見る」と告げたまうが故に、彼れ 聞くことを得。或いは大徳天仙より聞く所なり。或いは彼の尊者憍陳那等 世俗心を起こすらく、「仏 法輪を転じたまいしに、我れ等 法を見る」と。是れに由りて、彼れ 知るなり。或いは彼れの他に告ぐるを、地神 聞くことを得るなり。

⑤ 又た契経に説く。「諸もろの苾芻の阿羅漢を得、諸漏 已に尽くる有り。[18]三十三天 数数[19]善法堂の中に雲集して、『某処に某尊者、或いは彼れの弟子有り。鬚髪を剃除し、袈裟を被服して、正信もて出家し、聖道を勤修して、諸漏 已に尽き、無漏の心[20]〔解脱〕・慧解脱を證得し、[21]現法中に能く自ら通達して證し、具足して住す。又た自ら《我が[22]生 已に尽き、[23]梵行 已に立ち、[24]所作 已に辨じ、[25]後有を受けず》と了知す』と称説す」と。彼の諸天に正智見有りて、諸もろの苾芻の阿羅漢を得、諸漏 尽くるを知るや。

答う。〔彼れに正智見〕無し。

彼れ 云何んが知る。

答う。世尊を信ずるが故なり。謂わく、仏 世俗心を起こしたまわく、「是の諸もろの苾芻 阿羅漢を得、諸漏 已に尽く」と。是れに由りて、彼れ 知るなり。或いは仏 他に「是の諸もろの苾芻 阿羅漢を得、諸漏 已に尽く」と告げたもうが故に、彼れ 聞くことを得。或いは大徳天仙より聞く所なり。或いは彼の尊者 世俗心を起こすらく、「我れ 已に漏 尽き、阿羅漢を得」と。是れに由りて、彼れ 知るなり。或いは彼れの他に告ぐるを、諸天 聞くことを得るなり。

一八 三十三天 天界がいくつもの層に分かれていると考えられている中で、下から数えて二番目の領域。忉利天ともいう。またその天に在る神々(その王が帝釈天)をも指す(補註9)。(倶III66)

一九 善法堂 三十三天の都城(帝釈天の王宮たる善見城)の外辺の南西隅にある、とされる。(倶III69)

二〇 心・慧解脱 心が解脱することはすなわち慧をもって解脱することであるから、両語は本来同じことを言い表してい ㊅九二七上 るに相違ないが、二語に区別を立てる場合は、心解脱を渇愛の滅、慧解脱を無明の滅、と解する。さらに、心解脱が慧解脱よりも進んだ倶解脱と解されることもある。(cf. 倶VI66)

二一 現法中に 現在において、の意。

二二 生 輪廻的生存、の意。生が尽きるとは、生まれと死を繰り返す輪廻が尽きる、の意味。

二三 梵行 きよらかなおこない。出家の修行。

二四 所作 なすべきこと、の意。

二五 後有 後生、来生、というも同じ。現在の生存ののちの生存。来世の生存。

⑥　契経に説くが如し。「摩掲陀(Magadha)国の諸もろの補佐臣は、或いは是れ化法調伏、或いは是れ法随法行なり」と。云何んが彼れを化法調伏と名づけ、云何んが彼れを法随法行と名づくる。

答う。天中に在りて法を見るが若きを化法調伏と名づけ、人中に在りて法を見るが若きを法随法行と名づく。復た次に、戒を受持せずして法を見るが若きを化法調伏と名づけ、戒を受持して法を見るが若きを法随法行と名づく。

⑦—1　云何んが多欲なる。

答う。諸もろの、欲[二六]と已欲と当欲と、是れを多欲と謂う。

⑦—2　云何んが不喜足なる。

答う。諸もろの、喜ばざる[二七]と、等喜せざると、遍喜せざると、已喜せざると、当喜せざると、是れを不喜足と謂う。

⑦—3　多欲[二八]と不喜足と、何の差別かある。

答う。未だ得ざる可愛の色・声・香・味・触・衣服・飲食・床座・医薬及び余の資具に於て、諸もろの、希み、求め、尋ね、索め、思慕し、方便する、是れを多欲と謂う。已に得たる可愛の色・声・香・味・触・衣服・飲食・床座・医薬及び余の資具に於て、諸もろの、復ねて希み、復ねて欲し、復ねて楽い、復ねて求む、是れを不喜足と謂う。是くの如きの差別あり。

二六　欲・已欲・当欲　現在欲する、過去に欲した、未来に欲するであろう、の意。次下も同様。

二七　喜・等喜・遍喜　強意のために、ほとんど同義に近い語を重ねている、と理解してよい。「等」はサンスクリット語の動詞接頭辞sam-の、「遍」は同じくpari-の直訳である。

二八　多欲　サンスクリット文法でいう所有複合語であって、「多欲」は「多欲をもつ者」の意。「不喜足」以下も同様。

⑦—4　云何んが少欲なる。

答う。諸もろの、欲せざると、已欲せざると、当欲せざると、是れを少欲と謂う。

⑦—5　云何んが喜足なる。

答う。諸もろの、喜び、等喜し、遍喜し、已喜し、当喜する、是れを喜足と謂う。

⑦—6　少欲と喜足と、何の差別かある。

答う。未だ得ざる可愛の色・声・香・味・触・衣服・飲食・床座・医薬及び余の資具に於て、諸もろの、希まず、求めず、尋ねず、索めず、思慕せず、方便せざる、是れを少欲と謂う。已に得たる可愛の色・声・香・味・触・衣服・飲食・床座・医薬及び余の資具に於て、諸もろの、復ねて希まず、復ねて欲せず、復ねて楽わず、復ねて求めざる、是れを喜足と謂う。是くの如きの差別あり。

⑧—1　云何んが難満なる。

答う。諸もろの、重ねて食べ、重ねて噉い、多く食べ、多く噉い、大いに食べ、大いに噉い、少なくして能く済ますに非ざる、是れを難満と謂う。

㊅九二七中

⑧—2　云何んが難養なる。

答う。諸もろの、饕り、極めて饕り、餮い、極めて餮い、耽り、極めて耽り、嗜み、極めて嗜み、好みて咀嚼し、好みて嘗啜し、選択して食べ、選択して噉い、趣やかに能く済ますに非ざる、是れを難養と謂う。

⑧—3　難満と難養と、何の差別か有る。

答う。即ち前の説く所、是れを差別と謂う。

⑧—4　云何んが易満なる。

答う。諸もろの、重ねて食べず、重ねて噉わず、多く食べず、多く噉わず、大いに食べず、大いに噉わず、少なくして便ち能く済ます、是れを易満と謂う。

⑧—5　云何んが易養なる。

答う。諸もろの、饕らず、極めて饕らず、餮わず、極めて餮わず、耽らず、極めて耽らず、嗜まず、極めて嗜まず、好みて咀嚼せず、好みて嘗啜せず、選択して食べず、選択して噉わず、趣やかに便ち済ますことを得る、是れを易養と謂う。

⑧—6　易満と易養と、何の差別か有る。

答う。即ち前の説く所、是れを差別と謂う。

雑蘊 第一の中、思納息 第八

①思・尋・掉等の別と　②愚と知と③憍と慢と④害と
⑤多と⑥行と⑦根と⑧性と⑨邪とを　此の章にて願わくば具さに説かん

①—1　云何んが思なる。

答う。諸もろの、思、等思、増思、思の性、思の類、心行、意業、是れを思と謂う。

①―2　云何んが慮なる。

答う。諸もろの、慮、等慮、増慮、称量、籌度、観察、是れを慮と謂う。

①―3　[一]思と慮と、何の差別かある。

答う。思とは業なり。慮とは慧なり。是れを差別と謂う。

①―4　云何んが尋なる。

答う。諸もろの心の、尋求し、辯了し、顕示し、推度し、構画する、分別の性、分別の類、是れを尋と謂う。

①―5　云何んが伺なる。

答う。諸もろの心の、伺察し、随行し、随転し、随流し、随属する、是れを伺と謂う。

①―6　[二]尋と伺と、何の差別かある。

答う。心の麁なる性を尋と名づけ、心の細なる性を伺と名づく。是れを差別と謂う。

①―7　云何んが[三]掉挙なる。

答う。諸もろの心の、寂静ならず、止息せず、躁動し、掉挙なる、心の躁動の性、是れを掉挙と謂う。

①―8　云何んが[四]心乱なる。

答う。諸もろの心の、散乱し、流蕩し、住まらず、一境性に非ざる、是れを心乱と謂う。

①―9　掉挙と心乱と、何の差別か有る。

答う。寂静ならざる相を掉挙と名づけ、一境に非ざる相を心乱と名づく。是れを差別と謂う。

一　思と慮　思は心所としては十大地法の一、業としては意業。同じく十大地法の一であるが別な心所である慧の作用が慮である。

二　尋と伺　ともに対象に向けて動き、それを尋ね求め推し量る心の作用。尋に比して伺の方が細微なはたらきとされる。

三　掉挙　第五章頭註三を見よ。

四　心乱　心が散乱すること。心が一点に集中する定(三昧)に対する。

②—1　云何んが無明[五]なる。

答う。三界の無智なり

②—2　云何んが不正知[六]なる。

答う。非理の引く所の慧なり。

②—3　汝「不正知は是れ非理の引く所の慧なり」と説くや。

答う。是くの如し。

汝何の欲う所ぞ。諸もろの、正知有りて而も妄語する者、彼れ皆な失念して、不正知なるが故に妄語すや。

答う。是くの如し。

又た何の欲う所ぞ。正知有りて而も妄語するもの無しや。

答う。爾らず。

応に我が語を聴くべし。若し「不正知は是れ非理の引く所の慧なり。諸もろの、正知有りて而も妄語するは、彼れ皆な失念して不正知なるが故に妄語す」と言わば、則ち応に「正知有りて而も妄語するもの無し」と説くべし。若し「正知有りて而も妄語する者無し」と説かずんば、則ち応に「不正知は是れ非理の引く所の慧なり。諸もろの正知有りて而も妄語するは、彼れ皆な失念して不正知なるが故に妄語す」と言うべからず。是くの如きの説を作すは、倶に理に応ぜざるなり。

応に彼れを詰りて言うべし。諸もろの無明は、皆な不正知相応なりや。

㊅九二七下

五　無明　第三章頭註三を見よ。

六　不正知　染汚の慧。第三章頭註二および第二章頭註四三を見よ。(cf. 倶II 27)

答う。是くの如し。
汝 何の欲う所ぞ。諸もろの、正知有りて而も妄語する者、皆な無明に[七]趣（せま）られ、無明に纏（まと）われ、失念して、不正知なるが故に妄語すや。
答う。是くの如し。
又た何の欲う所ぞ。正知有りて而も妄語するもの無しや。
答う。爾らず。
応に我が説を聴くべし。若し「一切の無明は、皆な不正知相応なり。諸もろの正知有りて而も妄語するもの、皆な無明に趣られ、無明に纏われ、失念して、不正知なるが故に妄語す」と言わば、則ち応に「正知有りて而も妄語するもの無し」と説くべし。若し「正知有りて而も妄語する者無し」と説かずんば、則ち応に「一切の無明は、皆な不正知相応なり。諸もろの正知有りて而も妄語するもの、皆な無明に趣られ、無明に纏われ、失念して、不正知なるが故に妄語す」と言うべからず。是くの如きの説を作すも、亦た倶に理に応ぜざるなり。

③—1　云何んが[八]憍（きょう）なる。
答う。諸もろの憍、酔（すい）、極酔、悶（もん）、極悶、心の傲逸（ごういつ）、心の自取、是れを憍と謂う。
③—2　云何んが[九]慢（まん）なる。
答う。諸もろの慢、已慢、当慢、心の挙恃（こじ）、心の自取、是れを慢と謂う。
③—3　憍と慢と、何の差別かある。

七　無明に趣られ　語意は明らかでないが、もし原語がavidyagataだとすれば、同じ語がパーリ語『阿含経』（M I 三二六）に見え、註釈はそれを「無明を具有する」の意に解している。

八　憍　みずからの所有するものについてみずから誇りおごる心の動き。（倶II 34）

九　慢　第三章頭註五一を見よ。（倶II 34）

答う。他に方べず自法に染著する心の傲逸の相の若きを憍と名づけ、他に方べて自ら挙恃する相の若きを慢と名づく。是れを差別と謂う。

③—4　若し[10]増上慢を起こし、「我れ 苦は是れ苦なりと見る」、或いは「集は是れ集なりと見る」とせば、此れ 何をか縁ずる所ぞ。

答う。一類有るが如し。善士に親近し、正法を聴聞し、如理に作意し、此の因縁に由りて[一一]諦順忍を得んに、[一二]苦現観辺の者は、苦に於て「是れ苦なり」と[一三]忍楽顕了し、集現観辺の者は、集に於て「是れ集なり」と忍楽顕了す。彼れ 此の忍と作意の持つに由るが故に、或いは中間に作意せざるに由るが故に、見と疑と行ぜざるなり。設い行ずるも覚らず、便ち是の念を作す。「我れ 苦に於て是れ苦なりと見る」、或いは「集に於て是れ集なりと見る」と。此れに由りて、慢、已慢、当慢、心の挙恃、心の自取を起こすを増上慢と名づく。此れ即ち苦を縁じ、或いは即ち集を縁ずるなり。

③—5　若し増上慢を起こし、「我れ 滅は是れ滅なりと見る」、或いは「道は是れ道なりと見る」とせば、此れ 何をか縁ずる所ぞ。

答う。一類有るが如し。善士に親近し、正法を聴聞し、如理に作意し、此の因縁に由りて諦順忍を得んに、滅現観辺の者は、滅に於て「是れ滅なり」と忍楽顕了し、[一四]道現観辺の者は、道に於て「是れ道なり」と忍楽顕了す。彼れ 此の忍と作意の持つに由るが故に、或いは中間に作意せざるに由るが故に、見と疑と行ぜざるなり。設い行ずるも覚らず、便ち是の念を作す。「我れ 滅に於て是れ滅なりと見る」、或いは「道に於て是れ道なりと見る」と。此れに由りて、慢、已慢、当慢、心の挙恃、心の自取を起こすを増上慢と名づく。

10　増上慢　まださとりを得ていないのに得たと思う慢。(cf. 倶V10)

一一　諦順忍　四聖諦に随順する忍、の意。忍とは四諦の理を明確に認識する慧で、それを得れば善根が定まって動かずもはや悪趣に墜ちることがない。四善根の第三。第一章頭註一八、四三、四九を見よ。

一二　苦現観辺　ここにいう「現観辺」は第五章頭註六にいうのと意味を異にする。ふつう「現観」の語は見道において無漏智をもって四諦のいちいちを観ずることの意に用いられ、したがって、その無漏智による諦現観の辺(すなわち、最後)である類智と共に生ずる有漏の智を「現観辺の世俗智」という。ところが、ここの「苦現観辺」を『大毘婆沙論』(大九二八上)の説明は「苦を縁ずる諦順忍」であるとするから、それは見道以前の順決択分における有漏智(忍)である。そして同じ説明の中で「現観とは見道を謂い、此の忍は彼に近き故に名づけて辺と為す」といわれている。

一三　忍楽　多分「忍」はksamate(正しく判定し認知する)の、「楽」はrocate(照見する)の、訳語であろうと思う(ksamate=rocate)なることは『倶舎論註』(荻原本p. 533,l.4)に見える。

此れ即ち彼れ[一五]の心・心所法を縁ずるなり。

③—6　若し増上慢を起こし、「我が生 已に尽く」とせば、此れ 何をか縁ずる所ぞ。

答う。一類有りて、是の念言を作すが如し。「此れは是れ道。此れは是れ行なり。我れ此の道と此の行とに依りて、已に遍ねく苦を知り、已に永く集を断じ、已に滅を證し、已に道を修せば、我が生 已に尽く」と。此れに由りて、慢、已慢、当慢、心の挙恃、心の自取を起こすを増上慢と名づく。此れ即ち生[一六]を縁ずるなり。

③—7　若し増上慢を起こし、「我が梵行 已に立つ」とせば、此れ 何をか縁ずる所ぞ。

答う。一類有りて、是の念言を作すが如し。「此れは是れ道。此れは是れ行なり。我れ此の道と此の行とに依りて、已に遍ねく苦を知り、已に永く集を断じ、已に滅を證し、已に道を修せば、我が梵行 已に立つ」と。此れに由りて、慢、已慢、当慢、心の挙恃、心の自取を起こすを増上慢と名づく。此れ即ち彼れの心・心所法を縁ずるなり。

③—8　若し増上慢を起こし、「我が所作 已に辦ず」とせば、此れ 何をか縁ずる所ぞ。

答う。一類有りて、是の念言を作すが如し。「此れは是れ道。此れは是れ行なり。我れ此の道と此の行とに依りて、已に遍ねく苦を知り、已に永く集を断じ、已に滅を證し、已に道を修せば、我れ 已に随眠を断ち、已に煩悩を害ち、已に結を吐て、已に漏を尽くし、作す所 已に辦ぜり」と。此れに由りて、慢、已慢、当慢、心の挙恃、心の自取を起こすを増上慢と名づく。此れ即ち彼れの心・心所法を縁ずるなり。

③—9　若し増上慢を起こし、「我れ 後有を受けず」とせば、此れ 何をか縁ずる所ぞ。

答う。一類有りて、是の念言を作すが如し。「此れは是れ道。此れは是れ行なり。我れ

一四　道現観辺　この語も、上記註三に「現観辺」の語義の異例を思わしめる。『倶舎論』に説かれるごとき現観辺の世俗智は道諦についてはあり得ないとされている。

一五　彼れの心・心所　忍位に在る者自身の道諦あるいは滅諦を所縁とするときの心・心所。

一六　生　この念言をなす者自身の生。

此の道と此の行とに依りて、已に遍ねく苦を知り、已に永く集を断じ、已に滅を證し、已に道を修せば、我が生 已に尽き、梵行 已に立ち、所作 已に辦じ、後有を受けず」と。此れに由りて、慢、已慢、当慢、心の挙恃、心の自取を起こすを増上慢と名づく。此れ即ち有[一七]を縁ずるなり。

③―10　云何んが自ら卑しと謂いて而も慢を起こすや。

答う。一類有るが如し。他の、己れの種・姓・族・類・財・位・技・芸及び田・宅等に勝るを見て、是の念言を作す。「彼れ 少しく我れに勝る。我れ 少しく彼れに劣る」と。然るに他に劣ること、多く百千倍なり。此れに由りて、慢、已慢、当慢、心の挙恃、心の自取を起こす、是れを自ら卑しと謂いて而も慢を起こすと名づく。

④　契経に説くが如し。「若し[一八]欲尋・恚尋・害尋を起こさば、或いは自ら害ない、或いは他を害ない、或いは倶に害なう」と。

④―1　云何んが「欲尋 自ら害なう」なる。

答う。一類有るが如し。貪の纏を起こすが故に、身 労れ、心 労れ、身 焼け、心 焼け、身 熱し、心 熱し、身 焦がれ、心 焦がる。復た此の縁に由り、当に長夜の非愛・[一九]非楽・非憙・非悦なる諸もろの異熟果を受くべし。是くの如く自ら害なうなり。

④―2　云何んが「欲尋 他を害なう」なる。

答う。一類有るが如し。貪の纏を起こすが故に、他の妻を観視す。彼の夫 見已りて、心に瞋・忿・結・恨・愁・悩を生ず。是くの如く他を害なうなり。

一七 有　後有を受けずと念言する者自身の有。

㊅九二八中

一八 欲尋・恚尋・害尋　三不善尋という。愛欲の思い、憎しみの思い、加害の思い。

一九 非楽・非喜「楽」はねがう、「喜」はよろこぶ、の意。非楽はねがわしからぬ、非喜はよろこばしからぬ、の意。

④—3　云何んが「欲尋 倶に害なう」なる。

答う。一類有るが如し。貪の纏を起こすが故に、他の妻を汚し奪う。彼の夫 覚り已りて、遂に其の妻及び其の人に於て、打ち縛め、命を断ち、或いは財宝を奪う。是くの如く倶に害なうなり。

④—4　云何んが「恚尋 自ら害なう」なる。

答う。一類有るが如し。瞋の纏を起こすが故に、身 労れ、心 労れ、身 焼け、心 焼け、身 熱し、心 熱し、身 焦がれ、心 焦がる。復た此の縁に由り、当に長夜の非愛・非楽・非憙・非悦なる諸もろの異熟果を受くべし。是くの如く自ら害なうなり。

④—5　云何んが「恚尋 他を害なう」なる。

答う。一類有るが如し。瞋の纏を起こすが故に、他の命を断ち害なう。是くの如く他を害なうなり。

④—6　云何んが「恚尋 倶に害なう」なる。

答う。一類有るが如し。瞋の纏を起こすが故に、他の命を断ち害ない、亦復た他に其の命を断ち害なわる。是くの如く倶に害なうなり。

④—7　云何んが「害尋 自ら害なう」なる。

答う。一類有るが如し。害の纏を起こすが故に、身 労れ、心 労れ、身 焼け、心 焼け、身 熱し、心 熱し、身 焦がれ、心 焦がる。復た此の縁に由り、当に長夜の非愛・非楽・非憙・非悦なる諸もろの異熟果を受くべし。是くの如く自ら害なうなり。

④—8　云何んが「害尋 他を害なう」なる。

答う。一類有るが如し。害の纏を起こすが故に、他を打ち縛(いまし)む。是くの如く他を害なうなり。

④—9　云何んが「害尋　倶に害なう」なる。

答う。一類有るが如し。害の纏を起こすが故に、他を打ち縛め、亦復た他に打ち縛めらる。是くの如く倶に害なうなり。

⑤—1　智　多しや、境[二〇]　多しや。

答う。境　多し。智には非ず。所以んは何ん。智も亦た境なるが故なり。

⑤—2　智　多しや、識　多しや。

答う。識　多し。智には非ず。所以んは何ん。諸もろの智は、皆な識相応なるも、諸もろの識は、皆な智相応なるに非ず。忍[二一]相応の識は、智相応に非ざるが故なり。

⑤—3　有漏行[二二]　多しや、無漏行　多しや。

答う。有漏行　多し。無漏行には非ず。所以んは何ん。有漏行は十処と二処の少分を摂するも、無漏行は唯だ二処の少分を摂するのみなるが故なり。

⑥　云何んが行円満(ぎょうえんまん)[二三]なる。

答う。無学[二四]の身律儀(りつぎ)[二五]・語律儀・命清浄(みょうしょうじょう)なり。

⑦　云何んが護円満(ごえんまん)なる。

二〇　境　心・心所の対象。

二一　忍　智も忍もそれぞれ慧のはたらきの様相。見惑(諦を現観することによって断ぜらるべき煩悩)をまさしく断ずる無間道(むけんどう)の段階においてはたらく無漏の慧は智であり、見惑を断じおわって諦を証知する解脱道の段階においてはたらく無漏の慧が忍である。智はその自性(自体)としては心所(慧)であるから、常に識(すなわち心)と相応するが、智と忍とはそれぞれ慧の別個な様相であるから、慧が忍としてはたらくときは智としてははたらかず、智としてはたらくときは忍としてははたらかぬ。すなわち識が忍と相応するときそれは智と相応せず、識が智と相応するときそれは忍と相応しない。㊅九二八下

二二　行　有為、の意。有漏行は有為であって有漏なるもの、無漏行は有為であって無漏なるもの。有漏行は眼・耳・鼻・舌・身・色・声・香・味・触の十処の全部と法処・意処の各一部分。無漏行は法処・意処の各一部分。

二三　行円満　ここの「行」は行為、行動、の意。「円満」は欠けるところなく完成あるいは充足していること。

二四　無学　阿羅漢果を得ている者を、さらに学ぶべきものを有しないという意味で、無学という。(倶VI46)

答う。無学の根律儀なり。

⑧—1　云何んが異生性なる。

答う。聖法[二六]・聖暖・聖見・聖忍・聖欲・聖慧に於ける、諸もろの、非得・已非得・当非得なるが若き、是れを異生性と謂う。

⑧—2　此の異生性は、当に善と言うべしや、不善なりや、無記なりや。

答う。応に無記と言うべし。

⑧—3　何の故にか異生性は善に非ざる。

答う。善法は、或いは加行[二七]に由るが故に得、或いは余縁に由るが故に得。加行を設けて異生と作るを求むること無し。又た断善の時、善法を皆な捨てて、諸もろの善法の不成就の性を得るに、若し異生性 是れ善性ならば、断善根の者 応に異生に非ざるべし。

⑧—4　何の故にか異生性は不善に非ざる。

答う。欲染[二八]を離るる時、不善を皆な捨てて、不善法の不成就の性を得るに、若し異生性是れ不善ならば、諸もろの異生の欲染を離るるもの、応に異生に非ざるべし。

⑧—5　此の異生性は当に欲界繫[二九]と言うべしや、色界繫なりや、無色界繫なりや。

答う。応に、或いは欲界繫、或いは色界繫、或いは無色界繫と言うべし。

⑧—6　何の故にか異生性は唯だ欲界繫のみに非ざる。

答う。欲界より没し、無色界に生ずる時、欲界の法を皆な捨てて、欲界の法の不成就の性を得るに、若し異生性 唯だ欲界繫のみならば、諸もろの異生 欲界より没し、無色界に

二五　律儀　身・語・意の悪を防ぎ六根（眼耳鼻舌身意）を護るはたらき。身・語・意の悪を防ぐものを身律儀・語律儀・意律儀といい、六根を護るものを根律儀という。無学の身業はおのずから身律儀であり無学の語業はおのずから語律儀であり、無学の身・語業を総称して命清浄という（命とは身・語業をもってする生活、の意）。（倶Ⅳ15～20）

二六　聖法・聖暖・聖見・聖忍・聖欲・聖慧『大毘婆沙論』に種々な解釈を挙げているところから見れば、これらの各語意の理解は定まったものがないとしなければならないが、いずれにしても六語はすべて、行者の上に初めて生起する無漏の慧を指す。それをなお得ていない行者は異生、すなわち凡夫、であり、それを得た行者が聖者である。（cf. 倶Ⅱ41）

二七　加行　努力してなす修行、特にある結果を達成するための準備的実践を意味することもある。

二八　欲染　欲界の煩悩、の意。色界・無色界の煩悩は有覆無記であって不善ではない。（cf. 倶Ⅴ19）

二九　欲界繫　ある法が欲界の煩悩に縛られてそこに繫がっているとき、その法を欲界繫であるという。色界繫・無色界繫も同様。

生ずるとき、応に異生に非ざるべし。

⑧—7　何の故にか異生性は唯だ色界繋のみに非ざる。

答う。色界より没し、無色界に生ずる時、色界の法を皆な捨てて、色界の法の不成就の性を得るに、若し異生性 唯だ色界繋のみならば、諸もろの異生 色界より没し、無色界に生ずるとき、応に異生に非ざるべし。

⑧—8　何の故にか異生性は唯だ無色界繋のみに非ざる。

答う。[三〇]正性離生に入るとき、先ず欲界の苦を現観し、後に合わせて色・無色界の苦を現観す。聖道 起こるとき、先ず欲界の事を辧じ、後に合わせて色・無色界の事を辧ず。是の故に、異生性は唯だ無色界繋のみに非ざるなり。

⑧—9　此の異生性は、当に見所断と言うべしや、修所断なりや。

答う。応に修所断と言うべし。

⑧—10　何の故にか異生性は見所断に非ざる。

答う。見所断の法は皆な染汚なるに、異生性は[三一]不染汚なるが故なり。又た世第一法 正に滅せんとし、苦法智忍 正に生ぜんとする爾の時、[三二]三界の異生性を捨てて、彼の不成就の性を得。爾の時の見所断の法に於て、捨つること有るに非ざるが故なり。

⑧—11　異生性は、何れの法にか名づく。

答う。三界の不染汚なる心不相応行なり。

⑨—1　諸法にして[三三]邪見相応ならば、彼の法は邪思惟相応なりや。

三〇　正性離生　第一章頭註三五を見よ。

三一　不染汚　染汚（第三章頭註三一を見よ）でないもの、すなわち善と無覆無記。この場合異生性は無覆無記。　（大）九二九上

三二　三界　欲界・色界・無色界。

三三　邪見・邪思惟・邪精進・邪念・邪定　八正見の中の正見・正思惟・正精進・正念・正定に対していう。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の邪見と相応するも邪思惟と〔相応する〕に非ざる有り。謂わく、邪見相応の邪思惟と、及び余の邪思惟に相応せざる邪見相応の法なり。(b)法の、邪思惟と相応するも、邪見と〔相応する〕に非ざる有り。謂わく、邪思惟相応の邪見と、及び余の邪見に相応せざる邪思惟相応の法なり。(c)法の、邪見と相応し、亦た邪思惟とも〔相応する〕有り。謂わく、邪見相応の邪思惟を除き、及び邪思惟相応の邪見を除きて諸余の邪見・邪思惟相応の法なり。(d)法の、邪見と相応するにも非ず、亦た邪思惟と〔相応する〕にも非ざる有り。謂わく、邪見と相応せざる邪思惟と、邪思惟と相応せざる邪見と、及び諸余の心・心所法と色と無為と心不相応行となり。

⑨―2　諸法にして邪見相応ならば、彼の法は邪精進相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の、邪見と相応するも、邪精進と〔相応する〕に非ざる有り。謂わく、邪見相応の邪精進なり。(b)法の、邪精進と相応するも、邪見と〔相応する〕に非ざる有り。謂わく、邪見と、及び余の邪見に相応せざる邪精進相応の法なり。(c)法の、邪見と相応し、亦た邪精進とも〔相応する〕有り。謂わく、邪見相応の邪精進を除ける諸余の邪見相応の法なり。(d)法の、邪見と相応するにも非ず、亦た邪精進と〔相応する〕にも非ざる有り。謂わく、邪見と相応せざる邪精進と、及び諸余の心・心所法と色と無為と心不相応行となり。

邪見を以って邪精進に対するが如く、邪見を以って邪念・邪定に対するも亦た爾り。邪見を以って邪精進・邪念・邪定に対するが如く、邪思惟を以って邪精進・邪念・邪定に対するも亦た爾り。

⑨—3　諸法にして邪精進相応ならば、彼の法は邪念相応なりや。
答う。応に四句を作るべし。(a)法の、邪精進と相応するも、邪念と〔相応する〕に非ざる有り。謂わく、邪念なり。(b)法の、邪念と相応するも、邪精進と〔相応する〕に非ざる有り。謂わく、邪精進なり。(c)法の、邪精進と相応し、亦た邪念とも〔相応する〕有り。謂わく、邪精進〔相応〕と邪念相応の法なり。(d)法の、邪精進と相応するにも非ず、亦た邪念と〔相応する〕にも非ざる有り。謂わく、諸余の心・心所法と色と無為と心不相応行となり。

㊅九二九中

邪精進を以って邪念に対するが如く、邪精進を以って邪定に対するも亦た爾り。邪精進を以って邪念・邪定に対するが如く、邪念を以って邪定に対するも亦た爾り。

説一切有部発智論　巻の第二

阿毘達磨発智論

尊者迦多衍尼子 造
三蔵法師玄奘 詔を奉じて訳す

巻の第三

結蘊 第二の中、不善納息 第一

①三結等の性と②〔異〕熟と ③断と④見と⑤有〔尋・伺〕と⑥根と⑦繫と
⑧是の在と⑨具〔見〕と⑩成〔就〕と⑪縁とを此の章にて願わくば具さに説かん

① 三結有り。謂わく、有身見結[一]と戒禁取結[二]と疑結[三]となり。
三不善根あり。謂わく、貪不善根と瞋不善根と癡不善根となり。
三漏[四]あり。謂わく、欲漏[五]と有漏[六]と無明漏[七]となり。

第二篇第一章

一 有身見 薩迦耶見に同じ。第一篇第一章頭註三を見よ。

二 戒禁取 正しい実践の道でないものを正しい道であるとして、それに執着すること。五悪見の一。(倶V3)

三 疑 心が定まらず、ものごとをはっきり理解しかねてためらい、意の決まらぬこと。(倶V1)

四 三漏 漏の語は身内より漏れ出る不浄の意に解せられ、煩悩の異名の一つとして用いられる。(倶V35、36)

五 欲漏 欲界におけるすべての煩悩。ただし無明を除く。

六 有漏 色界・無色界におけるすべての煩悩。ただし無明を除く。

七 無明漏 三界の無明。

[8]四瀑流あり。謂わく、[9]欲瀑流と[10]有瀑流と[11]見瀑流と[12]無明瀑流となり。
[13]四軛あり。謂わく、欲軛と有軛と見軛と無明軛となり。
[14]四取あり。謂わく、[15]欲取と[16]見取と戒禁取と[17]我語取となり。
[18]四身繋あり。謂わく、[19]貪欲身繋と[20]瞋恚身繋と[21]戒禁取身繋と[22]此実執身繋となり。
五蓋あり。謂わく、貪欲蓋と瞋恚蓋と惛沈睡眠蓋と掉挙悪作蓋と疑蓋となり。
五結あり。謂わく、貪結と瞋結と慢結と[23]嫉結と[24]慳結となり。
[25]五順下分結あり。謂わく、[26]貪欲順下分結と瞋恚順下分結と有身見順下分結と戒禁取順下分結と疑順下分結となり。
[27]五順上分結あり。謂わく、色貪順上分結と無色貪順上分結と掉挙順上分結と慢順上分結と無明順上分結となり。
五見あり。謂わく、有身見と辺執見と邪見と見取〔見〕と戒禁取〔見〕となり。
[28]六愛身あり。謂わく、眼触所生愛身と耳・鼻・舌・身・意触所生愛身となり。
七随眠あり。謂わく、[29]欲貪随眠と瞋恚随眠と[30]有貪随眠と慢随眠と無明随眠と見随眠と疑随眠となり。
九結あり。謂わく、[31]愛結と[32]恚結と慢結と無明結と[33]見結と[34]取結と[35]疑結と[36]嫉結と[37]慳結となり。
九十八随眠あり。謂わく、欲界繋の[38]三十六随眠と色・無色界繋の各おの[39]三十一随眠となり。
三結乃至九十八随眠の幾ばくか不善、幾ばくか[40]無記なる。
答う。三結の中、[41]一は無記、二は応に分別すべし。謂わく、戒禁取・疑結は、或いは不

八　四瀑流　瀑流は急流、洪水、などの意。すべての善を押し流すところから煩悩をそれに喩える。(倶V37)
九　欲瀑流　欲界の貪・瞋・慢・疑および纏。
一〇　有瀑流　色界・無色界の貪・慢・疑。
一一　見瀑流　三界の見(悪見)。
一二　無明瀑流　三界の無明。
一三　四軛　軛はくびき。それをもって牛をその牽く車に繋ぐ。有情を迷いの領域に繋ぐところから、煩悩の異称の一つとして軛がある。四軛のそれぞれは四瀑流のそれぞれと同じ。(倶V37)
一四　四取　取は執着の意。広く煩悩の異名の一つとして用いられる。(倶V38)
一五　欲取　欲界のすべての煩悩。ただし五悪見を除く。
一六　見取　戒禁取を除く四悪見。
一七　我語取　色界・無色界の貪・慢・無明・疑。我語とは内身(自己の身体)のこと。内身によって我を語るからである。色界・無色界の煩悩は外界に対してよりも多く内身に対して起こるから我語取と呼ばれる、と解釈される。　㊅九二九下
一八　四身繋　生死の中に有情の身を繋ぐものなどの意に解され、煩悩の異名の一とされる。
一九　貪欲身繋　欲界の貪。
二〇　瞋恚身繋　欲界の瞋。
二一　戒禁取身繋　三界の戒禁取。
二二　此実執身繋　三界の見取(四悪身)。

二三　嫉結　嫉は他人の善事や栄誉をねたむ心の動き。(倶V47、49)

二四　慳結　慳はもの惜しみする心の動き。(倶V47、48)

二五　五順下分結　有情を欲界に結びつける煩悩。(倶V43、44)

二六　貪欲　ここでは欲界繫の貪、の意。『倶舎論』では「欲貪」と書いている。

二七　五順上分結　有情を色界あるいは無色界に結びつける煩悩。(倶V45)

二八　六愛身　眼耳鼻舌身意の六器官のおのおのを通して心が外界に触れることによって生ずる愛(渇愛)。「身」はあつまりの意で、六愛身は六つの愛のあつまり、の意。

二九　欲貪　欲界の貪、の意に解せられている。

三〇　有貪　色界・無色界の貪、の意に解せられている。

三一　愛結　その自体は貪。

三二　恚結　その自体は瞋。

三三　見結　その自体は三界の有身見・辺執見・邪見。

三四　取結　その自体は三界の見取・戒禁取。

三五　疑結　その自体は三界の疑。

三六　嫉結　その自体は欲界の纏に属する。

三七　慳結　その自体は欲界の纏に属する。

三八　三十六随眠(補註10)　見苦所断の十(貪・瞋・無明・慢・疑・五悪見)と、見集所断・見滅所断の各七(貪・瞋・無明・慢・疑・邪見・見取)と、見道所断の八(上の七に戒禁取を加える)と、修所断の四(貪・瞋・慢・無明)と。(倶V1〜5)

三九　三十一随眠　上記三十六随眠から五部(見苦・見集・見滅・見道・修所断)の瞋を除く。

四〇　無記　善でもなく不善でもないのをいう。それを分かって有覆無記・無覆無記とする。第一篇第三章頭註三参照。

四一　一　すなわち有身見結。一般に欲界の煩悩は不善、色界・無色界の煩悩は有覆無記とされる。ただし有身見(と辺執見およびそれらと相応する無明と)は、たとい欲界繫のものであっても無記とされる。その理由およびそれに対する異論は『大毘婆沙論』巻五十に詳しい。

[四二] 無慚無愧　語義は第一篇第五章頭註一、三を見よ。無慚・無愧の二はその本性が悪である(自性不善)とされ、それ自体が不善であると共にそれと相応する心・心所を不善ならしめる。(倶V10、11)

[四三] 三見　有身見・辺執見を除く。上記頭註四一を見よ。

[四四] 一　すなわち我語取。上記頭註一七を見よ。

[四五] 二　すなわち貪欲身繫と瞋恚身繫。上記頭註一九、二〇を見よ。

[四六] 五蓋　五蓋はすべて欲界に属する。(cf. 倶V58)

善、或いは無記なり。欲界なるは是れ不善、色・無色界なるは是れ無記なり。

三不善根は、唯だ不善のみなり。

三漏の中、一は無記、二は応に分別すべし。謂わく、欲漏は、或いは不善、或いは無記なり。[四二]無慚無愧と及び彼れと相応するは、是れ不善、余は是れ無記なり。無明漏は、或いは不善、或いは無記なり。無慚無愧相応は、是れ不善、余は是れ無記なり。

四瀑流の中、一は無記、三は応に分別すべし。謂わく、欲瀑流は、或いは不善、或いは無記なり。無慚無愧と及び彼れと相応するは、是れ不善、余は是れ無記なり。見瀑流は、或いは不善、或いは無記なり。欲界の[四三]三見は是れ不善、欲界の二見と色・無色界の五見は、是れ無記なり。無明瀑流は、或いは不善、或いは無記なり。無慚無愧相応は是れ不善、余は是れ無記なり。

四瀑流の如く、四軛も亦た爾り。

四取の中、[四四]一は無記、三は応に分別すべし。謂わく、欲取は、或いは不善、或いは無記なり。無慚無愧と及び彼れと相応するは、是れ不善、余は是れ無記なり。見取は、或いは不善、或いは無記なり。欲界の二見は是れ不善なり。欲界の二見と色・無色界の四見は、是れ無記なり。戒禁取は、或いは不善、或いは無記なり。欲界なるは是れ不善、色・無色界なるは是れ無記なり。

四身繫の中、[四五]二は不善、二は応に分別すべし。謂わく、戒禁取・此実執身繫は、欲界なるは是れ不善、色・無色界なるは是れ無記なり。

[四六]五蓋は、唯だ不善のみなり。

五結の中、三[四七]は不善、二は応に分別すべし。謂わく、貪・慢結は、或いは不善、或いは無記なり。欲界なるは是れ不善、色・無色界なるは是れ無記なり。

五順下分結の中、二は不善、一は無記、二は応に分別すべし。謂わく、戒禁取・疑結は、或いは不善、或いは無記なり。欲界なるは是れ不善、色・無色界なるは是れ無記なり。

五順上分結は、唯だ無記のみなり。

五見の中、二は無記、三は応に分別すべし。謂わく、邪見・見取・戒禁取は、或いは不善、或いは無記なり。欲界なるは是れ不善、色・無色界なるは是れ無記なり。

六愛身の中、二[四八]は不善、四は応に分別すべし。謂わく、眼・耳・身触所生愛身は、或いは不善、或いは無記なり。欲界なるは是れ不善、梵世（ぼんせ）[四九]なるは是れ無記なり。意触所生愛身は、或いは不善、或いは無記なり。欲界なるは是れ不善、色・無色界なるは是れ無記なり。

七随眠の中、二は不善、一は無記、四は応に分別すべし。謂わく、慢・疑随眠は、或いは不善、或いは無記なり。欲界なるは是れ不善、色・無色界なるは是れ無記なり。無明随眠は、或いは不善、或いは無記なり。無慚無愧相応は是れ不善、余は是れ無記なり。見随眠は、或いは不善、或いは無記なり。欲界の三見は是れ不善、欲界の二見と色・無色界の五見は、是れ無記なり。

九結の中、三は不善、六は応に分別すべし。謂わく、愛・慢・取・疑結は、或いは不善、或いは無記なり。欲界なるは是れ不善、色・無色界なるは是れ無記なり。無明結は、或いは不善、或いは無記なり。無慚無愧相応は是れ不善、余は是れ無記なり。見結は、或いは不善、或いは無記なり。欲界の一[五〇]見は是れ不善、欲界の二見と色・無色界の三見は是れ無

四七　三　瞋結と嫉結と慳結。いずれも欲界のみに属する。上記頭註三九、三六、三七参照。

四八　二　鼻触所生愛身と舌触所生愛身。(大九三〇上) 鼻触・舌触の対象である香・味は色界に(もちろん無色界にも)存しない。(cf. 倶I 30)

四九　梵世　初静慮の天、すなわち色界の十七天の中で最も下の三天。第二静慮以上では眼・耳・身触所生の愛は起こることがない。

五〇　一見　邪見を指す。

記なり。

九十八随眠の中、三十三[五一]は不善、六十四は無記、一は応に分別すべし。謂わく、欲界の見苦所断の無明随眠は、或いは不善、或いは無記なり。無慚無愧相応は是れ不善、余は是れ無記なり。

② 三結乃至九十八随眠の幾ばくか異熟(いじゅく)有り、幾ばくか異熟無き。

答う。諸もろの不善には異熟有り、諸もろの無記には異熟無し。

③—1 三結乃至九十八随眠の幾ばくか見所断(けんしょだん)、幾ばくか修所断(しゅしょだん)なる。

答う。三結の中、有身見結は、見を前行と為(な)して[五二]、二句有り。或いは見所断、或いは見・修所断なり。若し有身見、非想非非想処の繫(け)[五三]にして随信・随法行の現観辺の苦忍[五四]断ぜば、是れ見所断なり。余は、若し異生[五五]断ぜば、修所断なり。世尊(せそん)[五六]の弟子の断ずるは見所断なり。有身見結の如く、五順下分結中の有身見結、五見中の有身見と辺執見も亦た爾り。

戒禁取・疑結は、見を前行と為して、二句有り。或いは見所断、或いは見・修所断なり。若し戒禁取・疑、非想非非想処の繫にして随信・随法行の現観辺の諸もろの忍[五七]断ぜば、是れ見所断なり。余は、若し異生断ぜば、修所断なり。世尊の弟子の断ずるは見所断なり。戒禁取・疑結の如く、四瀑流・軛中の見瀑流・軛、四取中の見取と戒禁取、四身繫中の戒禁取と此実執身繫、五順下分結中の戒禁取・疑結、五見中の邪見と見取と戒禁取、七随眠中の見・疑随眠、九結中の見・取・疑結も亦た爾り。

五一　三十三　欲界繫の三十六随眠の中、見苦所断の無明・有身見・辺執見を除く。

五二　見を前行と為して　見(諦の現観)を前提として、という程の意。

五三　非想非非想処の繫　非想非非想処は有頂に同じ。三界の最高位。そこで、非想非非想処繫の煩悩は有漏道(いわゆる有漏の六行観)によっては断ぜられないから、必ず見所断である。(俱VI 47)

五四　苦忍　苦法智忍あるいは苦類智忍。

五五　異生断ぜば　有漏道による断ならば、の意。

五六　世尊の弟子の断ずるは　無漏道(聖道)による断は、の意。

五七　諸もろの忍　苦・集・滅・道類智忍。

(大)九三〇中

貪不善根は、修を前行と為して、二句有り。或いは修所断、或いは見・修所断なり。若し貪不善根にして、学見迹（がくけんじゃく）[五八]の諸もろの智[五九] 断ぜば、是れ修所断なり。余は、若し異生 断ぜば、修所断なり。世尊の弟子の断ずるは見所断なり。貪不善根の如く、瞋・癡不善根、三漏中の欲漏、四瀑流・軛中の欲瀑流・軛、四取中の欲取、四身繋中の欲貪・瞋恚身繋、五蓋中の悪作と疑とを除ける余の蓋、五結中の瞋結、五順下分結中の貪欲・瞋恚結、七随眠中の欲貪・瞋恚随眠、九結中の恚結も亦た爾り。

[六〇]有漏と無明漏は、見を前行と為して、三句有り。或いは見所断、或いは修所断、或いは見・修所断なり。若し有漏・無明漏にして、非想非非想処の繋にして、随信・随法行の現観辺の諸もろの忍 断ぜば、是れ見所断なり。若し有漏・無明漏、学見迹の諸もろの智 断ぜば、是れ修所断なり。余は、若し異生 断ぜば、修所断なり。世尊の弟子の断ずるは見所断なり。有漏と無明漏との如く、四瀑流・軛中の有・無明瀑流・軛、四取中の我語取、五結中の貪・慢結、六愛身中の意触所生愛身、七随眠中の有・貪・慢・無明随眠、九結中の愛・慢・無明結も亦た爾り。

悪作蓋（あくさがい）[六一]は修所断なり。悪作蓋の如く、五結中の嫉・慳結と、五順上分結[六二]と、六愛身中の前（さき）の五愛身[六三]と、九結中の嫉・慳結も亦た爾り。疑蓋は、若し異生 断ぜば、修所断なり。世尊の弟子の断ずるは見所断なり。

九十八随眠中の二十八[六四]は見所断、十は修所断なり。余は、若し異生 断ぜば、修所断なり。世尊の弟子の断ずるは見所断なり。

③―2　三結乃至九十八随眠の、幾ばくか見苦所断、乃至幾ばくか修所断なる。

五八 学見迹　四諦を現観しおわった有学の聖者、すなわちすべての見所断の煩悩を断じて道類智を起こした者。

五九 諸もろの智　見道においては忍(法智忍あるいは類智忍)が断ずるが、修道においては智が断ずる。

六〇 有漏と無明漏は…見所断なり　意味する所は、有頂地の見所断の煩悩は常に見所断、三界の修所断の煩悩は常に修所断、有頂地以外のすべての見所断の煩悩は異生が有漏道によってそれを断ずる時修所断であり聖者が無漏道(見道)によってそれを断ずる時見所断である、というのである。

六一 悪作蓋は修所断なり　十纏の中、悔(悪作)・嫉・慳・忿・覆の五は唯修所断である。(倶V 51)

六二 五順上分結　不還の身中の色・無色界繋の修所断の煩悩をその体とする。

六三 前の五愛身　眼・耳・鼻・舌・身触の対象である色・声・香・味・触(所触)も、それら五触所生の愛と相応する眼・耳・鼻・舌・身識も、すべて修所断である。(倶I 40)

六四 二十八　無色界の見所断の随眠を指す。無色界の中の非想非非想処(有頂)の見所断の随眠は異生によって有漏道をもって断ぜられる(すなわち修所断となる)ことがない。

(大)九三〇下

答う。三結の中、有身見結は見苦所断なり。有身見結の如く、五順下分結中の有身見結、五見中の有身見と辺執見も亦た爾り。

戒禁取結に二種有り。或いは見苦所断、或いは見道所断なり。戒禁取結の如く、四取中の戒禁取、四身繫中の戒禁取身繫、五順下分結中の戒禁取結、五見中の戒禁取も亦た爾り。

疑結に四種有り。或いは見苦所断、乃至或いは見道所断なり。疑結の如く、四瀑流・軛中の見瀑流・軛、四取中の見取、四身繫中の此実執身繫、五蓋中の疑蓋、五順下分結中の疑結、五見中の邪見と見取、七随眠中の見・疑随眠、九結中の見・取・疑結も亦た爾り。

三不善根に五種有り。或いは見苦所断、乃至或いは修所断なり。三不善根の如く、三漏、四瀑流・軛中の見を除ける余の瀑流・軛、四取中の欲取と我語取、四身繫中の貪欲・瞋恚身繫、五蓋中の悪作と疑とを除ける余の蓋、五結中の貪・瞋・慢結、五順下分結中の貪欲・瞋恚結、六愛身中の意触所生愛身、七随眠中の見と疑とを除ける余の随眠、九結中の愛・恚・慢・無明結も亦た爾り。

悪作蓋は修所断なり。悪作蓋の如く、五結中の嫉・慳結、五順上分結、六愛身中の前の五愛身、九結中の嫉・慳結も亦た爾り。

九十八随眠の中、二十八[六五]は見苦所断、十九[六六]は見集所断、十九は見滅所断、二十二[六七]は見道所断、十[六八]は修所断なり。

④　三結乃至九十八随眠の、幾ばくか見[六九]、幾ばくか非見なる。

答う。三結の中、二[七〇]は見、一は非見なり。

六五　二十八　欲界繫の十(貪・瞋・慢・無明・疑と五悪見)と、色界繫・無色界繫の各九(瞋を除く)。

六六　十九　欲界繫の七(有身見・辺執見・戒禁取を除く)と色界繫・無色界繫の各六(上記の七より瞋を除く)。見滅所断の十九も同じ。

六七　二十二　欲界繫の八(有身見・辺執見を除く)と色界繫・無色界繫の各七(上記の八より瞋を除く)。

六八　十　欲界繫の四(貪・瞋・無明・慢)と、色界繫・無色界繫の各三(上記の四より瞋を除く)。

六九　見・非見　見るものと見るものでないものと。見るは視覚的に見ることのみでなく、知的に見ることをも含む。視覚的に見るのは眼(眼根)である。知的に見るのは慧の作用であるが、前五識(眼・耳・鼻・舌・身識)と相応する慧には断じ決するはたらきが無いから、見る作用をもたない。すなわち非見である。断じ決するはたらきをもつ意識相応の慧、すなわち見なる慧には善なるものも染汚なるもの(五悪見)もあり、有漏なるものも無漏なるものもある。(倶Ⅰ 40、41)

七〇　二　有身見結と戒禁取結。

三不善根は非見なり。
三漏の中、一は非見、二は応に分別すべし。謂わく、欲漏は、或いは見、或いは非見なり。欲界の五見は是れ見、余は非見なり。有漏は、或いは見、或いは非見なり。色・無色界の五見は是れ見、余は非見なり。
四瀑流・軛の中、一は見、三は非見なり。
四取と四身繫の中、倶に二は見、二は非見なり。
五蓋と五結は、倶に非見なり。
五順下分結の中、二は見、三は非見なり。

大九三一上

五順上分結は非見なり。
五見は是れ見なり。
六愛身は非見なり。
七随眠の中、一は見、六は非見なり。
九結の中、二は見、七は非見なり。
九十八随眠の中、三十六は是れ見、六十二は非見なり。

⑤ 三結乃至九十八随眠の、幾ばくか有尋有伺、幾ばくか無尋唯伺、幾ばくか無尋無伺なる。[七一]
答う。三結は三種なり。
三不善根と及び欲漏は有尋有伺なり。有漏・無明漏と、欲瀑流・軛・取を除ける余の瀑

七一 三結乃至九十八随眠の…無尋無伺なる 尋・伺の有無は界繫に関わる。すなわち、欲界繫はすべて有尋有伺、無色界繫はすべて無尋無伺。色界繫の意界・意識界および尋・伺を除く法界の中、初静慮に属するものは無尋無伺、静慮中間（初静慮と第二静慮との中間）に属するものは無尋唯伺、第二静慮以上に属するものは無尋無伺である。（倶I31）

流・軛・取は三種なり。欲瀑流・軛と及び欲取は有尋有伺、余の三取と及び三身繫は有尋有伺、余の二身繫は三種なり。

五蓋と及び三結は有尋有伺、余の二結と及び三順下分結は三種、余の二順下分結は有尋有伺なり。

五順上分結の中、無色貪は無尋無伺、余の四と及び五見は三種なり。

前の五愛身と及び欲貪・瞋(恚)随眠は有尋有伺、第六愛身と及び余の五随眠は三種なり。

九結の中、瞋・嫉・慳結は有尋有伺、余の六は三種なり。

九十八随眠の中、欲界の三十六は有尋有伺、色界の三十一は三種、無色界の三十一は無尋無伺なり。

⑥　[七二]三結乃至九十八随眠の、幾ばくか楽根相応、幾ばくか苦・喜・憂・捨根相応なる。

答う。三結の中、有身見・戒禁取結は三根相応にして、[七三]苦・憂根を除く。疑結は四根相応にして、苦根を除く。

三不善根の中、貪不善根は三根相応にして、苦・憂根を除く。瞋不善根は三根相応にして、楽・喜根を除く。癡不善根と及び欲漏・無明漏は五根相応なり。有漏は三根相応にして、苦・憂根を除く。

四瀑流・軛の中、欲・無明瀑流・軛は五根相応なり。有瀑流・軛は三根相応にして、苦・憂根を除く。見瀑流・軛は四根相応にして、苦根を除く。

四取の中、欲取は五根相応なり。見取は四根相応にして、苦根を除く。戒禁・我語取は

七二　三結乃至九十八随眠の…捨根相応なる　五根はいずれも受(感受)であるが、欲界および初静慮・第二静慮地においては悦ばしい身受が楽、悦ばしい心受が喜、悦ばしからぬ身受が苦、悦ばしからぬ心受が憂である。第三静慮地以上にあっては身受はなくなるから、第三静慮地においては悦ばしい心受が楽である(喜はない)。第四静慮地には楽もない。諸地を通じて悦でも不悦でもない心・身の受が捨である。(倶II7、8)

七三　苦・憂根を除く　苦根は五識相応であるが、有身見・戒禁取はともに意地に属する。憂根は歓ばぬ心情を相とするが、有身見・戒禁取は歓ぶ心情を相とする。根相応についての次下の論議は、同様にして理解され得ると思うから、註記を省略する。『大毘婆沙論』巻五十二を参照せよ。

三根相応にして、苦・憂根を除く。

瞋恚身繫は三根相応にして、楽・喜根を除く。余の三身繫と及び貪欲蓋は三根相応にして、苦・憂根を除く。瞋恚蓋は三根相応にして、楽・喜根を除く。惛沈・掉挙蓋は五根相応なり。睡眠蓋は三根相応にして、楽・苦根を除く。悪作・疑蓋は二根相応、謂わく、憂・捨根なり。

㊅九三一中

五結の中、貪・慢結は三根相応にして、苦・憂根を除く。瞋結は三根相応にして、楽・喜根を除く。嫉結は二根相応、謂わく、憂・捨根なり。慳結は二根相応、謂わく、喜・捨根なり。

五順下分結の中、瞋恚結は三根相応にして、楽・喜根を除く。疑結は四根相応にして、苦根を除く。余の三結は三根相応にして、苦・憂根を除く。

五順上分結の中、無色貪結は一根相応、謂わく、捨根なり。余の四結と及び四見は三根相応にして、苦・憂根を除く。邪見は四根相応にして、苦根を除く。

六愛身の中、前の五愛身は二根相応、謂わく、楽・捨根なり。第六愛身と及び欲〔貪〕・有貪・慢随眠は三根相応にして、苦・憂根を除く。瞋恚随眠は三根相応にして、楽・喜根を除く。見・疑随眠は四根相応にして、苦根を除く。無明随眠は五根相応なり。

九結の中、愛・慢・取結は三根相応にして、苦・憂根を除く。恚結は三根相応にして、楽・喜根を除く。無明結は五根相応なり。見・疑結は四根相応にして、苦根を除く。嫉結は二根相応、謂わく、憂・捨根なり。慳結は二根相応、謂わく、喜・捨根なり。

九十八随眠の中、欲界の四見と慢と及び見所断の貪は二根相応、謂わく、喜・捨根なり。

疑と及び見所断の瞋は二根相応、謂わく、憂・捨根なり。邪見と及び見所断の無明は三根相応にして、楽・苦根を除く。修所断の貪は三根相応にして、苦・憂根を除く。瞋は三根相応にして、楽・喜根を除く。無明は五根相応なり。色界の三十一随眠は三根相応にして、苦・憂根を除く。無色界の三十一随眠は一にして、捨根相応なり。

⑦　三結乃至九十八随眠の、幾ばくか欲界繫、幾ばくか色界繫、幾ばくか無色界繫なる。
答う。三結は三種なり。
三不善根と及び欲漏は欲界繫なり。有漏は二種、或いは色界繫、或いは無色界繫なり。無明漏は三種なり。
欲瀑流・軛と及び欲取は欲界繫なり。有瀑流・軛と及び我語取は二種、或いは色界繫、或いは無色界繫、余の瀑流・軛と及び余の二取は三種なり。
四身繫の中、貪欲・瞋恚と及び五蓋[七四]は欲界繫、余の二身繫は三種なり。
五結の中、貪・慢と及び三順下分結は三種、余の三結と及び貪欲・瞋恚順下分結は欲界繫なり。
五順上分結の中、色貪は色界繫、無色貪は無色界繫、余の三結は二種、或いは色界繫、或いは無色界繫なり。
五見と及び第六愛身は三種なり。眼・耳・身触所生愛身は二種、或いは欲界繫、或いは色界繫なり。鼻・舌触所生愛身は欲界繫なり。
七随眠の中、欲貪・瞋恚は欲界繫なり。有貪は二種、或いは色界繫、或いは無色界繫な

[七四]　五蓋　五蓋はすべて欲界繫である。㊅九三二下『大毘婆沙論』巻四十八参照。（倶V 58）

り。余の随眠は三種なり。
九結の中、恚・嫉・慳結は欲界繋、余の結は三種なり。
九十八随眠の中、三十六は欲界繋、三十一は色界繋、三十一は無色界繋なり。

⑧—1　諸もろの結の欲界に堕する、彼の結　欲界に在りや。

答う。応に四句を作るべし。(a)結の欲界に堕するに、彼の結　欲界に在るに非ざる有り。謂わく、纏に纏ぜられ、色界より没して欲界の中有[七五]を起こすと、及び悪魔の梵世[七六]に住して、纏に纏ぜらるるが故に如来を訶拒する[七七]となり。(b)結の欲界に在るに、彼の結　欲界に堕するに非ざる有り。謂わく、纏に纏ぜられ、欲界より没して色界の中有[七八]を起こすと、及び欲界に住して色・無色界の結　現在前するとなり。(c)結の欲界に堕するに、彼の結　亦た欲界に在る有り。謂わく、纏に纏ぜられ、欲界より没して欲界の中有・生有を起こすと、及び欲界に住して欲界の結　現在前するとなり。(d)結の欲界に堕するに非ず、彼の結　亦た欲界に在るに非ざる有り。謂わく、纏に纏ぜられ、色界より没して色界の中有・生有を起こすと、色界より没して無色界に生ずると、無色界より没して無色界に生ずると、無色界より没して色界に生ずると、及び色界に住して色・無色界の結　現在前すると、無色界に住して無色界の結　現在前するとなり。

⑧—2　諸もろの結の色界に堕する、彼の結　色界に在りや。

答う。応に四句を作るべし。(a)結の色界に堕するに、彼の結　色界に在るに非ざる有り。謂わく、纏に纏ぜられ、欲界より没して色界の中有を起こすと、及び欲界に住して色界の

七五　欲界の中有　欲界に生ずべき中有、の意。色界に死するや(すなわち、色界の死有に至るや)次の瞬間には欲界の中有(先の色界での死と次の欲界での生との中間の位態)に入るが、「かの欲界の中有は色界に在りて起こる」のであり、その「中有に至る時、欲界の三十六随眠の随一を現前」して、次に「生をして相続せしむ」(すなわち、欲界の生有に至る)のである(『大毘婆沙論』巻五十二)。ゆえにその結は「欲界に堕する」(欲界に属している)が「欲界に在る」のでない。

七六　梵世　梵世は色界の初禅天。

七七　如来を訶拒する　覆・嫉・慳あるいはその他の纏に当たるから、いずれにしても欲界に属する煩悩である。

七八　色界の中有　色界に生ずべき中有はこの場合欲界に在りて起こること、上記のごとくである。

㊅九三二上

結 現在前するとなり。(b)結の色界に在るに、彼の結 色界に堕すに非ざる有り。謂わく、纏に纏ぜられ、色界より没して欲界の中有を起こすと、及び悪魔の梵世に住して、纏に纏ぜらるるが故に如来を訶拒すると、及び色界に住して無色界の結 現在前するとなり。(c)結の色界に堕するに、彼の結 亦た色界に在る有り。謂わく、纏に纏ぜられ、色界より没して色界の中有・生有を起こすと、及び色界に住して色界の結 現在前するとなり。(d)結の色界に堕すに非ざるに、亦た色界に在るに非ざる有り。謂わく、纏に纏ぜられ、欲界より没して欲界の中有・生有を起こすと、欲界より没して無色界に生ずると、無色界より没して無色界に生ずると、無色界より没して欲界に生ずると、及び欲界に住して欲・無色界の結 現在前すると、無色界に住して無色界の結 現在前するとなり。

⑧—3　諸もろの結の無色界に堕する、彼の結 無色界に在りや。

答う。諸もろの結の無色界に在るは、彼の結 無色界に堕すれども、結の無色界に堕するに、彼の結 無色界に在るに非ざる有り。謂わく、欲・色界に住して、無色界の結 現在前するなり。

⑧—4　諸もろの結の欲界に堕すに非ざる、彼の結 欲界に在るに非ずや。

答う。応に四句を作るべし。上(かみ)を翻(ひるがえ)して応に知るべし。

⑧—5　諸もろの結の色界に堕すに非ざる、彼の結 色界に在るに非ずや。

答う。応に四句を作るべし。上を翻して応に知るべし。

⑧—6　諸もろの結の無色界に堕すに非ざる、彼の結 無色界に在るに非ずや。

答う。是(か)くの如くなるも、結の無色界に在るに非ざるに、彼の結 無色界に堕さざるに

非ざる有り。謂わく、欲・色界に住して、無色界の結 現在前するなり。

⑨—1　見を具うる世尊の弟子[七九]、諸もろの色 未だ断ぜずんば、彼の色 繫すや。

答う。是くの如し。

設し色 繫さば、彼の色 未だ断ぜずや。

答う。是くの如し。

諸もろの受・想・行・識 未だ断ぜずんば、彼の受・想・行・識 繫すや。

答う。是くの如くなるも、受・想・行・識の繫するに、彼の受・想・行・識の未だ断ぜざるに非ざる有り。謂わく、家家[八〇]、或いは一来[八一]、或いは一間[八二]は、欲界の修所断の上・中品の結 已に断じ遍知すれども、彼れと相応する受・想・行・識は、下品の結 繫するなり。

⑨—2　見を具うる世尊の弟子、諸もろの色 已に断ぜば、彼の色 離繫なりや。

答う。是くの如し。

設し色 離繫ならば、彼の色 已に断ぜりや。

答う。是くの如し。

諸もろの受・想・行・識 已に断ぜば、彼の受・想・行・識 離繫なりや。

答う。諸もろの受・想・行・識 離繫ならば、彼の受・想・行・識 已に断ぜるも、受・想・行・識の已に断ぜるに、離繫に非ざる有り。謂わく、家家、或いは一来、或いは一間は、欲界の修所断の上・中品の結 已に断じ遍知すれども、彼れと相応する受・想・行・識は、下品の結 繫するなり。

七九　見を具ふる　四諦を見おわった、すなわち見所断の煩悩を断じおわった、の意。

八〇　家家　すでに預流果を得て進んで一来果に向かう聖者の中、欲界の修所断の煩悩の前三品（上上品・上中品・上下品。すなわち上品の煩悩のすべて）を、あるいは前四品（上記の三に中上品を加える。すなわち上品の煩悩のすべてと中品の煩悩の一部）を断じおわった者を家家と呼ぶ。（倶VI 36）

八一　一来　四沙門果の第二。欲界修所断の九品の煩悩の第六品（中下品）まで（すなわち上品・中品の煩悩のすべて）を断じおわった境位。（倶VI 36）

八二　一間　すでに一来果を得て進んで不還果に向かう聖者の中、欲界の修所断の煩悩の前七品（上品・中品のすべてと下上品と）あるいは八品（上記の七に下中品を加える）を断じた（すなわち欲界の下下品の煩悩のみはなお未断である）者を一間と呼ぶ。（倶VI 37）

⑩ 五の[八三]補特伽羅(pudgala)有り。謂わく、[八四]随信行と随法行と[八五]信勝解と見至と[八六]身證となり。此の五の補特伽羅、三結乃至九十八随眠に於て幾ばくか[八七]成就し、幾ばくか成就せざる。

答う。随信行は、三結に於て、苦類智の未だ已生ならざるは、皆な成就し、苦類智の已に生ぜるは、二成就し、一成就せざるなり。

三不善根に於て、未だ欲染を離れざるは、皆な成就し、已に欲染を離るるは、皆な成就せざるなり。

三漏に於て、未だ欲染を離れざるは、皆な成就し、已に欲染を離るるは、二成就し、一成就せざるなり。

四瀑流・軛・取に於て、未だ欲染を離れざるは、皆な成就し、已に欲染を離るるは、三成就し、一成就せざるなり。

四身繫に於て、未だ欲染を離れざるは、皆な成就し、已に欲染を離るるは、二成就し、二成就せざるなり。

五蓋に於て、未だ欲染を離れず、道法智の未だ已生ならざるは、皆な成就し、道法智の已に生ぜるは、四成就し、一成就せず、已に欲染を離るるは、皆な成就せざるなり。

五結に於て、未だ欲染を離れざるは、皆な成就し、已に欲染を離るるは、二成就し、三成就せざるなり。

五順下分結に於て、未だ欲染を離れず、苦類智の未だ已生ならざるは、皆な成就し、苦類智の已に生ぜるは、四成就し、一成就せず。已に欲染を離るるも、苦類智の未だ已生

八三 補特伽羅　ここでは聖補特伽羅すなわち聖者、の意。

八四 随信行と随法行　第一篇第七章頭註三を見よ。

㊅九三二中

八五 信勝解と見至　修道の位にある鈍根の者(天性遅鈍な者)を信勝解と呼び、利根の者(天性鋭利な者)を見至と呼ぶ。(倶VI 33)

八六 身證　不還果を得ている聖者であって、滅尽定(第一篇第三章頭註三五)に入って涅槃に似た心の静けさの楽しみを身に証し得た者を、身証とよぶ。(cf. 倶VI 65)

八七 成就　成就するとは具有する、具えもつ、の意。

ならざるは、三 成就し、二 成就せず、苦類智の已に生ぜるは、二 成就し、三 成就せざるなり。

五順上分結に於て、未だ色染を離れざるは、皆な成就し、已に色染を離るるは、四 成就し、一 成就せざるなり。

五見に於て、苦類智の未だ已生ならざるは、皆な成就し、苦類智の已に生ぜるは、三 成就し、二 成就せざるなり。

六愛身に於て、未だ欲染を離れざるは、皆な成就し、已に欲染を離るるも、未だ梵世の染を離れざるは、四 成就し、二 成就せず、已に梵世の染を離るるは、一 成就し、五 成就せざるなり。

七随眠に於て、未だ欲染を離れざるは、皆な成就し、已に欲染を離るるは、五 成就し、二 成就せざるなり。

九結に於て、未だ欲染を離れざるは、皆な成就し、已に欲染を離るるは、六 成就し、三 成就せざるなり。

㊅九三二下

九十八随眠に於て、未だ欲染を離れず、苦法智の未だ已生ならざるは、皆な成就す。苦法智 已に生ぜるに、苦類智の未だ已生ならざるは、欲界の見苦所断は皆な成就せざるも、余は皆な成就す。苦類智 已に生ぜるに、集法智の未だ已生ならざるは、三界の見苦所断は皆な成就せざるも、余は皆な成就す。集法智 已に生ぜるに、集類智の未だ已生ならざるは、三界の見苦所断と及び欲界の見集所断は皆な成就せざるも、余は皆な成就す。集類智 已に生ぜるに、滅法智の未だ已生ならざるは、三界の見苦・集所断は皆な成就せざる

も、余は皆な成就す。滅法智 已に生ぜるに、滅類智（めつるいち）の未だ已生ならざるは、三界の見苦・集所断と及び欲界の見滅所断は皆な成就せざるも、余は皆な成就す。滅類智 已に生ぜるに、道法智の未だ已生ならざるは、三界の見苦・集・滅所断は皆な成就せざるも、余は皆な成就す。道法智 已に生ぜるは、三界の見苦・集・滅所断と及び欲界の見道所断は皆な成就せざるも、余は皆な成就す。已に欲染を離るるも、未だ色染を離れず、苦類智の未だ已生ならざるは、欲界の一切 成就せざるも、余は皆な成就す。苦類智 已に生ぜるに、集類智の未だ已生ならざるは、欲界の一切と及び色・無色界の見苦所断は成就せざるも、余は皆な成就す。集類智 已に生ぜるに、滅類智の未だ已生ならざるは、欲界の一切と及び色・無色界の見苦・集所断は成就せざるも、余は皆な成就す。滅類智 已に生ぜるは、欲界の一切と、色・無色界の見苦・集・滅所断は成就せざるも、余は皆な成就す。已に色染を離るるも、苦類智の未だ已生ならざるは、欲・色界の一切 成就せざるも、余は皆な成就す。滅類智 已に生ぜるに、集類智の未だ已生ならざるは、欲・色界の一切と及び無色界の見苦所断は成就せざるも、余は皆な成就す。集類智 已に生ぜるに、滅類智の未だ已生ならざるは、欲・色界の一切と及び無色界の見苦・集所断は成就せざるも、余は皆な成就す。滅類智 已に生ぜるは、欲・色界の一切と及び無色界の見苦・集・滅所断は成就せざるも、余は皆な成就す。

随信行の如く、随法行も亦た爾り。

信勝解は、三結に於ては皆な成就せざるなり。

三不善根に於て、未だ欲染を離れざるは、皆な成就し、已に欲染を離るるは、皆な成就

せざるなり。
三漏に於て、未だ欲染を離れざるは、皆な成就し、已に欲染を離るるは、二成就し、一成就せざるなり。
四瀑流・軛に於て、未だ欲染を離れざるは、三成就し、一成就せず、已に欲染を離るるは、二成就し、二成就せざるなり。
四取に於て、未だ欲染を離れざるは、二成就し、二成就せず、已に欲染を離るるは、一成就し、三成就せざるなり。
四身繫に於て、未だ欲染を離れざるは、二成就し、二成就せず、已に欲染を離るるは、皆な成就せざるなり。
五蓋に於て、未だ欲染を離れざるは、四成就し、一成就せず、已に欲染を離るるは、皆な成就せざるなり。
五結に於て、未だ欲染を離れざるは、皆な成就し、已に欲染を離るるは、二成就し、三成就せざるなり。
五順下分結に於て、未だ欲染を離れざるは、二成就し、三成就せず、已に欲染を離るるは、皆な成就せざるなり。
五順上分結に於て、未だ色染を離れざるは、皆な成就し、已に色染を離るるは、四成就し、一成就せざるなり。
五見に於ては、皆な成就せざるなり。
六愛身に於て、未だ欲染を離れざるは、皆な成就し、已に欲染を離るるも、未だ梵世の

㊅九三三上

染を離れざるは、四 成就し、二 成就せず、已に梵世の染を離るるは、一 成就し、五 成就せざるなり。

七随眠に於て、未だ欲染を離れざるは、五 成就し、二 成就せず、已に欲染を離るるは、三 成就し、四 成就せざるなり。

九結に於て、未だ欲染を離れざるは、六 成就し、三 成就せず、已に欲染を離るるは、三 成就し、六 成就せざるなり。

九十八随眠に於て、未だ欲染を離れざるは、十 成就し、八十八 成就せず、已に欲染を離るるも、未だ色染を離れざるは、六 成就し、九十二 成就せず。已に色染を離るるは、三 成就し、九十五 成就せず。

信勝解の如く、見至も亦た爾り。

身證は、三結と三不善根に於て、皆な成就せざるなり。

三漏に於て、二 成就し、一 成就せざるなり。

四瀑流・軛に於て、二 成就し、二 成就せざるなり。

四取に於て、一 成就し、三 成就せざるなり。

四身繋と及び五蓋に於ては、皆な成就せざるなり。

五結に於て、二 成就し、三 成就せざるなり。

五順下分結に於ては、皆な成就せざるなり。

五順上分結に於て、四 成就し、一 成就せざるなり。

五見に於ては、皆な成就せざるなり。

六愛身に於て、一 成就し、五 成就せざるなり。
七随眠に於て、三 成就し、四 成就せざるなり。
九結に於て、三 成就し、六 成就せざるなり。
九十八随眠に於て、三 成就し、九十五 成就せざるなり。

⑪ 有身見は、有身見の与めに幾ばく[八八]の縁たりや。有身見は、戒禁取乃至無色界の修所断の無明随眠の与めに幾ばくの縁たりや。乃至無色界の修所断の無明随眠は、無色界の修所断の無明随眠の与めに幾ばくの縁たりや。無色界の修所断の無明随眠は、有身見乃至無色界の修所断の慢随眠の与めに幾ばくの縁たりや。

答う。有身見は、有身見の与めに、或いは四・三・二・一の縁たり。云何んが四なる。有身見の無間[八九]に有身見を起こし、即ち彼れを思惟するが如し。前生は後生の与めに四縁たり。云何んが三なる。有身見の無間に有身見を起こし、彼れを思惟せざるが如し。前生は後生の与めに三縁たり。所縁を除く。或いは有身見の無間に余の心を起こし、後に有身見を起こし、即ち彼れを思惟するがごとし。前生は後生の与めに三縁たり。等無間を除く。云何んが二なる。有身見の無間に余の心を起こし、後に有身見を起こすも、彼れを思惟せざるが如し。前生は後生の与めに二縁たり。謂わく、因と増上なり。云何んが一なる。後生の有身見、前生の有身見の与めに、若し所縁と作れば所縁と増上なるも、所縁と作らざれば、一に増上たり。未来の有身見、過去・現在の有身見の与めに、若し所縁と作れば所縁と増上なるも、所縁と作らざれば、一に増上たり。未来・現在の有身見、過去の有身見

八八 幾ばくの縁 四縁（第一篇第三章頭註九）の中の幾ばく、の意。

八九 無間に 間を置かずに、直後に、の意。

（大）九三三中

の与めに、若し所縁と作らば所縁と増上なるも、所縁と作らずば、一に増上たり。欲界の有身見は、色・無色界の有身見の与めに、一に増上たり。色・無色界の有身見、欲界の有身見の与めに、若し等無間と作らば等無間と増上なるも、等無間と作らずば、一に増上たり。色界の有身見は、無色界の有身見の与めに、一に増上たり。無色界の有身見、色界の有身見の与めに、若し等無間と作らば等無間と増上なるも、等無間と作らずば、一に増上たり。

有身見の有身見の与めに〔縁たる〕が如く、応に知るべし、有身見の余の一切の非遍行の与めに〔縁たる〕と、余の一切の非遍行の一切の非遍行の与めに〔縁たる〕と、一切の遍行の一切の非遍行の与めに〔縁たる〕も亦た爾り、と。

㊅九三三下

有身見は、戒禁取の与めに、或いは四・三・二・一の縁たり。云何んが四なる。有身見の無間に戒禁取を起こし、即ち彼れを思惟するが如し。前生は後生の与めに四縁たり。云何んが三なる。有身見の無間に戒禁取を起こし、彼れを思惟せざるが如し。前生は後生の与めに三縁たり。所縁を除く。或いは有身見の無間に余の心を起こし、後に戒禁取を起こし、即ち彼れを思惟するがごとし。前生は後生の与めに三縁たり。等無間を除く。云何んが二なる。有身見の無間に余の心を起こし、後に戒禁取を起こすも、彼れを思惟せざるが如し。前生は後生の与めに二縁たり。謂わく、因と増上なり。云何んが一なる。後生の有身見、前生の戒禁取の与めに、若し所縁と作らば所縁と増上と為るも、所縁と作らずば、一に増上たり。未来の有身見、過去・現在の戒禁取の与めに、若し所縁と作らば所縁と増上と為るも、所縁と作らずば、一に増上たり。未来・現在の有身見、過去の戒禁取の与め

に、若し所縁と作らば所縁と増上と為るも、所縁と作らずば、一に増上たり。欲界の有身見は、色・無色界の戒禁取の与めに、一に増上たり。色・無色界の有身見、欲界の戒禁取の与めに、若し所縁と作り、等無間に非ずんば、所縁と増上と為り、若し等無間と作り、所縁に非ずんば、等無間と増上と為り、若し等無間と及び所縁と作らば、等無間と所縁と増上と為るも、等無間と及び所縁に作らずば、一に増上たり。色界の有身見、無色界の戒禁取の与めに、一に増上たり。無色界の有身見、色界の戒禁取の与めに、若し所縁と作り、等無間に非ずんば、所縁と増上と為り、若し等無間と作り、所縁に非ずんば、等無間と増上と為り、若し等無間と及び所縁と作らば、等無間と所縁と増上と為るも、等無間と及び所縁と作らずば、一に増上たり。

有身見の戒禁取の与めに〔縁たる〕が如く、応に知るべし、有身見の余の一切の遍行の与めに〔縁たる〕と、一切の遍行の一切の遍行の与めに〔縁たる〕と、余の一切の非遍行の一切の遍行の与めに〔縁たる〕も亦た爾り、と。

結蘊　第二の中、一行納息（いちぎょうのうそく）　第二の一

①結の[一]一行（いちぎょう）と②[二]歴六（りゃくろく）と　③[三]小と大との七と④摂（しょう）と⑤有（う）と
⑥依（え）と⑦繋と⑧道と⑨遍知とを　此の章にて願わくば具さに説かん

第二篇第二章

一　一行（補註11）　九結の中のどれか一つの結の繋とその他の一つの結の繋との相互関係を考えること。

二　歴六　九結の中のどれか一つの結の1過去なるものの繋と未来なるものの繋との相互関係を考え、同様に、その2過去なると現在なると、3未来なると現在なると、4過去なると未来・現在なると、5未来なると過去・現在なると、6現在なると過去・未来なると、の繋の相互関係を考えること。

三　小と大との七　小の七と大の七と。小の七とは、九結の中のどれか一つの1過去なる、あるいは2未来なる、3現在なる、4過去・現在なる、5未来・現在なる、6過去・未来なる、7過去・未来・現在なるものの繋と、その他の一つの結の1過去なる、乃至、7過去・未来・現在なるものの繋と、の間の相互関係を考えること。小の七が一つの結と他の一つの結との間でそれぞれの三世七種のものの繋の相互関係を考えるのに対して、大の七は、一つの結と他の二つの結、あるいは三・四・五・六・七・八つの結との間で同様の考察をなす。

①—1　九結有り。謂わく、愛結乃至慳結なり。

①—1—1　若し此の事[四]に於て愛結の繫すること有らば、亦た恚結の繫するも有りや。

答う。若し此の事に於て恚結の繫すること有らば、必ず愛結の繫する有るも、或いは愛結の繫すること有りて、恚結の繫する無し。謂わく、色・無色界の法に於て、愛結の未だ断ぜざる有るなり。

①—1—2　若し此の事に於て愛結の繫すること有らば、亦た慢結の繫するも有りや。

答う。是くの如し。

設し慢結の繫すること有らば、復た愛結の繫する有りや。

答う。是くの如し。

①—1—3　若し此の事に於て愛結の繫すること有らば、亦た無明結の繫するも有りや。

㊅九三四上

答う。若し此の事に於て愛結の繫すること有らば、必ず無明結の繫する有るも、或いは無明結の繫すること有りて、愛結の繫する無し。謂わく、苦智 已に生ずるに、集智 未だ生ぜざれば、見苦所断の法に於て、見集所断の無明結の未だ断ぜざる有るなり。

①—1—4　若し此の事に於て愛結の繫すること有らば、亦た見結の繫するも有りや。

答う。応に四句を作るべし。(a)或いは愛結の繫すること有りて、見結の繫する無し。謂わく、集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、見滅・〔見〕道所断の見結と相応せざる法に於て、及び修所断の法に於て、愛結の未だ断ぜざる有り。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、見道所断の見結と相応せざる法に於て、及び修所断の法に於て、愛結の未だ断ぜざる有り。見を具うる世尊の弟子にも、修所断の法に於て、愛結の未だ断ぜざる

四 事　五部の法、すなわち見苦所断・見集所断・見滅所断・見道所断・修所断の五種、のいちいちを事という。

有り。(b)或いは見結の繫すること有りて、愛結の繫する無し。謂わく、苦智 已に生じて、集智 未だ生ぜざるとき、見苦所断の法に於て、見集所断の見結の未だ断ぜざる有り。(c)或いは二 倶に繫する有り。謂わく、具縛の者に、見・修所断の法に於て、二結の繫する有り。苦智 已に生じて、集智 未だ生ぜざるとき、見集・〔見〕滅・〔見〕道・修所断の法に於て、二結の繫する有り。集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、見滅・〔見〕道所断の見結相応の法に於て、二結の繫する有り。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、見道所断の見結相応の法に於て、二結の繫する有り。(d)或いは二 倶に繫せざる有り。謂わく、集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、見苦・〔見〕集所断の法に於て、二結の繫する無し。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、見苦・〔見〕集・〔見〕滅所断の法に於て、二結の繫する無し。見を具うる世尊の弟子にも、見所断の法に於て、二結の繫する無し。已に欲染を離れたるに、欲界の法に於て、二結の繫する無し。已に色染を離れたるに、欲・色界の法に於て、二結の繫する無し。已に無色染を離れたるに、三界の法に於て、二結の繫する無し。

①—1—5　見結に対する如く、疑結に対するも亦た爾り。

①—1—6　若し此の事に於て愛結の繫すること有らば、亦た取結の繫するも有りや。

答う。応に四句を作るべし。(a)或いは愛結の繫すること有りて、取結の繫する無し。謂わく、集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、修所断の法に於て、愛結の未だ断ぜざる有り。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、修所断の法に於て、愛結の未だ断ぜざる有り。見を具うる世尊の弟子にも、修所断の法に於て、愛結の未だ断ぜざる有り。(b)

㊅九三四中

或いは取結の繋すること有りて、愛結の繋する無し。謂わく、苦智 已に生じて、集智 未だ生ぜざるとき、見苦所断の法に於て、見集所断の取結の未だ断ぜざる有り。(c)或いは二倶に繫する有り。謂わく、具縛の者に、見・修所断の法に於て、二結の繋する有り。苦智已に生じて、集智 未だ生ぜざるとき、見集・〔見〕滅・〔見〕道・修所断の法に於て、二結の繋する有り。集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、見滅・〔見〕道所断の法に於て、二結の繋する有り。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、見道所断の法に於て、二結の繋する有り。(d)或いは二 倶に繫せざる有り。謂わく、集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、見苦・〔見〕集所断の法に於て、二結の繋する無し。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、見苦・〔見〕集・〔見〕滅所断の法に於て、二結の繋する無し。見を具うる世尊の弟子にも、見所断の法に於て、二結の繋する無し。已に欲染を離れたるに、欲界の法に於て、二結の繋する無し。已に色染を離れたるに、欲・色界の法に於て、二結の繋する無し。已に無色染を離れたるに、三界の法に於て、二結の繋する無し。

①—1—7　若し此の事に於て愛結の繋すること有らば、亦た嫉結（しっけつ）の繋するも有りや。

答う。若し此の事に於て嫉結の繋すること有らば、必ず愛結の繋する有るも、或いは愛結の繋すること有りて、嫉結の繋する無し。謂わく、欲界の見所断の法に於て、及び色・無色界の法に於て、愛結の未だ断ぜざる有り。

①—1—8　嫉結に対するが如く、慳結に対するも亦た爾り。

①—2　愛結の後に対して一行を作す如く、慢結の後に対して一行を作すも亦た爾り。

①—3—0　若し此の事に於て恚結の繋すること有らば、亦た慢結の繋するも有りや。

答う。若し此の事に於て恚結の繫すること有らば、必ず慢結の繫する有るも、或いは慢結の繫すること有りて、恚結の繫する無し。謂わく、色・無色界の法に於て、慢結の未だ断ぜざる有り。

①―3―1　若し此の事に於て恚結の繫すること有らば、亦た無明結の繫するも有りや。

答う。若し此の事に於て恚結の繫すること有らば、必ず無明結の繫する有るも、或いは無明結の繫すること有りて、恚結の繫する無し。謂わく、未だ欲染を離れざるに、苦智已に生じて、集智未だ生ぜざるとき、欲界の見苦所断の法に於て、見集所断の無明結の未だ断ぜざる有り、色・無色界の法に於て無明結の未だ断ぜざる有り。

①―3―2　若し此の事に於て恚結の繫すること有らば、亦た見結の繫するも有りや。

答う。応に四句を作るべし。(a)或いは恚結の繫すること有りて、見結の繫する無し。謂わく、未だ欲染を離れざるに、集智已に生じて、滅智未だ生ぜざるとき、欲界の見滅・〔見〕道所断の見結に相応せざる法に於て、及び欲界の修所断の法に於て、恚結の未だ断ぜざる有り。滅智已に生じて、道智未だ生ぜざるとき、欲界の見道所断の見結に相応せざる法に於て、及び欲界の修所断の法に於て、恚結の未だ断ぜざる有り。見を具うる世尊の弟子にも、未だ欲染を離れざるとき、欲界の修所断の法に於て、恚結の未だ断ぜざる有り。

(b)或いは見結の繫すること有りて、恚結の繫する無し。謂わく、未だ欲染を離れざるに、苦智已に生じて、集智未だ生ぜざるとき、欲界の見苦所断の法に於て、見集所断の見結の未だ断ぜざる有り、色・無色界の法に於て、見結の未だ断ぜざる有り。(c)或いは二倶に繫する有り。謂わく、具縛の者に、欲界の見・修所断の法に於て、二結の繫する有り。

㊅九三四下

未だ欲染を離れざるに、苦智 已に生じて、集智 未だ生ぜざるとき、欲界の見集・〔見〕滅・〔見〕道・修所断の法に於て、二結の繋する有り。集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、欲界の見滅・〔見〕道所断の見結相応の法に於て、二結の繋する有り。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、欲界の見道所断の見結相応の法に於て、二結の繋する有り。(d)或いは二 倶に繋せざる有り。謂わく、集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、見苦・〔見〕集所断の法に於て、及び色・無色界の見滅・〔見〕道所断の見結に相応せざる法と並びに色・無色界の修所断の法に於て、二結の繋する無し。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、見苦・〔見〕集・〔見〕滅所断の法に於て、及び色・無色界の見道所断の見結に相応せざる法と並びに色・無色界の修所断の法に於て、二結の繋する無し。見を具うる世尊の弟子の未だ欲染を離れざるにも、見所断の法に於て、及び色・無色界の修所断の法に於て、二結の繋する無し。已に欲染を離れたるに、欲界の法に於て、二結の繋する無し。已に色染を離れたるに、欲・色界の法に於て、二結の繋する無し。已に無色染を離れたるに、三界の法に於て、二結の繋する無し。

①—3—3　見結に対するが如く、疑結に対するも亦た爾り。

①—3—4　若し此の事に於て恚結の繋すること有らば、亦た取結の繋するも有りや。

答う。応に四句を作るべし。(a)或いは恚結の繋すること有りて、取結の繋する無し。謂わく、未だ欲染を離れざるに、集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、欲界の修所断の法に於て、恚結の未だ断ぜざる有り。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、欲界の修所断の法に於て、恚結の未だ断ぜざる有り。見を具うる世尊の弟子の未だ欲染を離れ

ざるにも、欲界の修所断の法に於て、恚結の未だ断ぜざる有り。(b)或いは取結の繫すること有りて、恚結の繫する無し。謂わく、未だ欲染を離れざるに、苦智 已に生じて、集智未だ生ぜざるとき、欲界の見苦所断の法に於て、見集所断の取結の未だ断ぜざる有り、色・無色界の法に於て、取結の未だ断ぜざる有り。(c)或いは二 倶に繫する有り。謂わく、具縛の者に、欲界の見・修所断の法に於て、二結の繫する有り。未だ欲染を離れざるに、苦智 已に生じ、集智 未だ生ぜざるとき、欲界の見集・〔見〕滅・〔見〕道・修所断の法に於て、二結の繫する有り。集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、欲界の見滅・〔見〕道所断の法に於て、二結の繫する有り。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、欲界の見道所断の法に於て、二結の繫する有り。(d)或いは二 倶に繫せざる有り。謂わく、未だ欲染を離れざるに、集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、見苦・〔見〕集所断の法に於て、及び色・無色界の修所断の法に於て、二結の繫する無し。滅智 已に生じて、道智未だ生ぜざるとき、見苦・〔見〕集・〔見〕滅所断の法に於て、及び色・無色界の修所断の法に於て、二結の繫する無し。見を具うる世尊の弟子の未だ欲染を離れざるにも、見所断の法に於て、及び色・無色界の修所断の法に於て、二結の繫する無し。已に欲染を離れたるに、欲界の法に於て、二結の繫する無し。已に色染を離れたるに、欲・色界の法に於て、二結の繫する無し。已に無色染を離れたるに、三界の法に於て、二結の繫する無し。

大九三五上

①—3—5　若し此の事に於て恚結の繫すること有らば、亦た嫉結の繫するも有りや。

答う。若し此の事に於て嫉結の繫すること有らば、必ず恚結の繫する有るも、或いは恚結の繫すること有りて、嫉結の繫する無し。謂わく、欲界の見所断の法に於て、恚結の未

だ断ぜざる有るなり。

①―3―6　嫉結に対するが如く、慳結に対するも亦た爾り。

説一切有部発智論　巻の第三

阿毘達磨発智論

尊者迦多衍尼子 造
三蔵法師玄奘 詔を奉じて訳す

巻の第四

結蘊 第二の中、一行納息 第二の二

①—4—1　若し此の事に於て無明結の繫すること有らば、亦た見結の繫するも有りや。

答う。若し此の事に於て見結の繫すること有らば、必ず無明結の繫する有るも、或いは無明結の繫すること有りて、見結の繫する無し。謂わく、集智(じっち) 已(すで)に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、見滅・〔見〕道所断の見結に相応せざる法に於て、及び修所断の法に於て、無明結の未だ断ぜざる有り。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、見道所断の見結に相応せざる法に於て、及び修所断の法に於て、無明結の未だ断ぜざる有り。見を具(そな)うる世

㊅九三五中

尊の弟子にも、修所断の法に於て、無明結の未だ断ぜざる有り。

①―4―2　見結に対するが如く、疑結に対するも亦た爾り。

①―4―3　若し此の事に於て無明結の繫すること有らば、亦た取結の繫するも有りや。答う。若し此の事に於て取結の繫すること有らば、必ず無明結の繫する有るも、或いは無明結の繫すること有りて、取結の繫する無し。謂わく、集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、修所断の法に於て、無明結の未だ断ぜざる有り。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、修所断の法に於て、無明結の未だ断ぜざる有り。見を具うる世尊の弟子にも、修所断の法に於て、無明結の未だ断ぜざる有り。

①―4―4　若し此の事に於て無明結の繫すること有らば、亦た嫉結の繫するも有りや。答う。若し此の事に於て嫉結の繫すること有らば、必ず無明結の繫する有るも、或いは無明結の繫すること有りて、嫉結の繫する無し。謂わく、欲界の見所断の法に於て、及び色・無色界の法に於て、無明結の未だ断ぜざる有り。

①―4―5　嫉結に対するが如く、慳結に対するも亦た爾り。

①―5―1　若し此の事に於て見結の繫すること有らば、亦た取結の繫するも有りや。答う。若し此の事に於て見結の繫すること有らば、必ず取結の繫する有るも、或いは取結の繫すること有りて、見結の繫する無し。謂わく、集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、見滅・〔見〕道所断の見結に相応せざる法に於て、取結の未だ断ぜざる有り。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、見道所断の見結に相応せざる法に於て、取結の未だ断ぜざる有り。

㊅九三五下

①―5―2　若し此の事に於て見結の繫すること有らば、亦た疑結の繫するも有りや。

答う。応に四句を作るべし。(a)或いは見結の繫すること有りて、疑結の繫する無し。謂わく、集智已に生じて、滅智未だ生ぜざるとき、見滅・〔見〕道所断の見結相応の法に於て、見結の未だ断ぜざる有り。滅智已に生じて、道智未だ生ぜざるとき、見道所断の見結相応の法に於て、見結の未だ断ぜざる有り。(b)或いは疑結の繫すること有りて、見結の繫する無し。謂わく、集智已に生じて、滅智未だ生ぜざるとき、見滅・〔見〕道所断の疑結相応の法に於て、疑結の未だ断ぜざる有り。滅智已に生じて、道智未だ生ぜざるとき、見道所断の疑結相応の法に於て、疑結の未だ断ぜざる有り。(c)或いは二倶に繫する有り。謂わく、具縛の者に、見・修所断の法に於て、二結の繫する有り。苦智已に生じて、集智未だ生ぜざるとき、見苦・〔見〕集・〔見〕滅・〔見〕道・修所断の法に於て、二結の繫する有り。(d)或いは二倶に繫せざる有り。謂わく、集智已に生じて、滅智未だ生ぜざるとき、見苦・〔見〕集所断の法に於て、及び見滅・〔見〕道所断の見・疑の二結に相応せざる法に於て、并びに修所断の法に於て、二結の繫する無し。滅智已に生じて、道智未だ生ぜざるとき、見苦・〔見〕集・〔見〕滅所断の法に於て、及び見道所断の見・疑の二結に相応せざる法に於て、并びに修所断の法に於て、二結の繫する無し。見を具うる世尊の弟子にも、見・修所断の法に於て、二結の繫する無し。已に欲染を離れたるに、欲界の法に於て、二結の繫する無し。已に色染を離れたるに、欲・色界の法に於て、二結の繫する無し。已に無色染を離れたるに、三界の法に於て、二結の繫する無し。

①―5―3　若し此の事に於て見結の繫すること有らば、亦た嫉結の繫するも有りや。

答う。応に四句を作るべし。(a)或いは見結の繫すること有りて、嫉結の繫する無し。謂わく、欲界の見所断の法に於て、及び色・無色界の法に於て、見結の未だ断ぜざる有り。(b)或いは嫉結の繫すること有りて、見結の繫する無し。謂わく、未だ欲染を離れざるに、集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、欲界の修所断の法に於て、嫉結の未だ断ぜざる有り。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、欲界の修所断の法に於て、嫉結の未だ断ぜざる有り。見を具うる世尊の弟子の未だ欲染を離れざるにも、欲界の修所断の法に於て、嫉結の未だ断ぜざる有り。(c)或いは二 倶に繫する有り。謂わく、具縛の者に、欲界の修所断の法に於て、二結の繫する有り。未だ欲染を離れざるに、苦智 已に生じて、集智 未だ生ぜざるとき、欲界の修所断の法に於て、二結の繫する有り。(d)或いは二 倶に繫せざる有り。謂わく、未だ欲染を離れざるに、集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、見苦・〔見〕集所断の法に於て、及び見滅・〔見〕道所断の見結に相応せざる法に於て、並びに色・無色界の修所断の法に於て、二結の繫する無し。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、見苦・〔見〕集・〔見〕滅所断の法に於て、及び見道所断の見結に相応せざる法に於て、並びに色・無色界の修所断の法に於て、二結の繫する無し。見を具うる世尊の弟子の欲染を離れざるにも、見所断の法に於て、及び色・無色界の修所断の法に於て、二結の繫する無し。已に欲染を離れたるに、欲界の法に於て、二結の繫する無し。已に色染を離れたるに、欲・色界の法に於て、二結の繫する無し。已に無色染を離れたるに、三界の法に於て、二結の繫する無し。

①―5―4　嫉結に対するが如く、慳結に対するも亦た爾り。

①―6　見結の後に対して一行を作すが如く、疑結の後に対して一行を作すも亦た爾り。

①―7―0　若し此の事に於て取結の繋すること有らば、亦た疑結の繋するも有りや。

答う。若し此の事に於て疑結の繋すること有らば、必ず取結の繋する有るも、或いは取結の繋すること有りて、疑結の繋する無し。謂わく、集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、見滅・〔見〕道所断の疑結に相応せざる法に於て、取結の未だ断ぜざる有り。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、見道所断の疑結に相応せざる法に於て、取結の未だ断ぜざる有り。

㊅九三六上

①―7―1　若し此の事に於て取結の繋すること有らば、亦た嫉結の繋する有りや。

答う。応に四句を作るべし。(a)或いは取結の繋すること有りて、嫉結の繋する無し。謂わく、欲界の見所断の法に於て、及び色・無色界の法に於て、取結の未だ断ぜざる有り。(b)或いは嫉結の繋すること有りて、取結の繋する無し。謂わく、未だ欲染を離れざるに、集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、欲界の修所断の法に於て、嫉結の未だ断ぜざる有り。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、欲界の修所断の法に於て、嫉結の未だ断ぜざる有り。見を具うる世尊の弟子の未だ欲染を離れざるにも、欲界の修所断の法に於て、嫉結の未だ断ぜざる有り。(c)或いは二 倶に繋する有り。謂わく、具縛の者に、欲界の修所断の法に於て、二結の繋する有り。未だ欲染を離れざるに、苦智 已に生じて、集智 未だ生ぜざるとき、欲界の修所断の法に於て、二結の繋する有り。(d)或いは二 倶に繋せざる有り。謂わく、未だ欲染を離れざるに、集智 已に生じて、滅智 未だ生ぜざるとき、見苦・〔見〕集所断の法に於て、及び色・無色界の修所断の法に於て、二結の繋する無

し。滅智 已に生じて、道智 未だ生ぜざるとき、見苦・〔見〕集・〔見〕滅所断の法に於て、及び色・無色界の修所断の法に於て、二結の繫する無し。見を具うる世尊の弟子の未だ欲染を離れざるにも、見所断の法に於て、及び色・無色界の修所断の法に於て、二結の繫する無し。已に欲染を離れたるに、欲界の法に於て、二結の繫する無し。已に色染を離れたるに、欲・色界の法に於て、二結の繫する無し。已に無色染を離れたるに、三界の法に於て、二結の繫する無し。

①―7―2　嫉結に対するが如く、慳結に対するも亦た爾り。

①―8　若し此の事に於て嫉結の繫すること有らば、亦た慳結の繫するも有りや。
答う。是(か)くの如し。
設(も)し慳結の繫すること有らば、復た嫉結の繫するも有りや。
答う。是くの如し。

②―1―1　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た未来なるも有りや。[補註12]
答う。是くの如し。
設し未来なる有らば、復た過去なるも有りや。
答う。若し前(さき)に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設(たと)い生ずるも、已に断ぜば、則ち繫せず。

②―1―2　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た現在なるも有りや。
答う。若し現在前(げんざいぜん)せば〔則ち繫す〕。

設し現在なる有らば、復た過去なるも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも、已に断ぜば、則ち繫せず。

②—1—3　若し此の事に於て未来の愛結の繫すること有らば、亦た現在なるも有りや。

答う。現在前せば〔則ち繫す〕。

設し現在なる有らば、復た未来なる有りや。

答う。是くの如し。

㊅九三六中

②—1—4　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た未来・現在なるも有りや。

答う。未来なるは必ず繫す。現在なるは、若し現在前せば〔則ち繫す〕。

設し未来・現在なる有らば、復た過去なる有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

②—1—5　若し此の事に於て未来の愛結の繫すること有らば、亦た過去・現在なるも有りや。

答う。(a)或いは未来なる有りて、過去・現在なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結未だ断ぜざるも、而(しか)も前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断じて、現在前せざるなり。(b)或いは未来なると及び過去なると有りて、現在なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有りて、現在前せざるなり。(c)或いは未来なると及び現在なる

と有りて、過去なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結の現在前する有りて、而も前に未だ生ぜず、設い生ずるも、已に断ぜるなり。(d)或いは未来なると及び過去なると現在なると有り。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じ未だ断ぜざる有りて、亦た現在前するなり。

設し過去・現在なる有らば、復た未来なる有りや。

答う。是くの如し。

②—1—6　若し此の事に於て現在の愛結の繋すること有らば、亦た過去・未来なるも有りや。

答う。未来なるは必ず繋す。過去なるは、若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繋す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繋せず。

設し過去・未来なる有らば、復た現在なる有りや。

答う。若し現在前せば〔則ち繋す〕。

②—2〜6　愛結の六を歴るが如く、応に知るべし、(②—2)恚・(②—3)慢・(②—4)嫉・(②—5)慳と(②—6)非遍行の無明結の六を歴ることも亦た爾り、と。

②—7—1　若し此の事に於て過去の見結の繋すること有らば、亦た未来なるも有りや。

答う。是くの如し。

設し未来なる有らば、復た過去なるも有りや。

答う。是くの如し。

②—7—2　若し此の事に於て過去の見結の繋すること有らば、亦た現在なるも有りや。

答う。若し現在前せば〔則ち繫す〕。
設し現在なる有らば、復た過去なる有りや。
答う。是くの如し。
②―7―3　若し此の事に於て未来の見結の繫すること有らば、亦た現在なるも有りや。
答う。若し現在前せば〔則ち繫す〕。
設し現在なる有らば、復た未来なる有りや。
答う。是くの如し。
②―7―4　若し此の事に於て過去の見結の繫すること有らば、亦た未来・現在なるも有りや。
答う。未来なるは必ず繫す。現在なるは、若し現在前せば〔則ち繫す〕。
設し未来・現在なる有らば、復た過去なる有りや。
答う。是くの如し。
②―7―5　若し此の事に於て未来の見結の繫すること有らば、亦た過去・現在なるも有りや。
答う。過去なるは必ず繫す。現在なるは、若し現在前せば〔則ち繫す〕。
設し過去・現在なる有らば、復た未来なる有りや。
答う。是くの如し。
②―7―6　若し此の事に於て現在の見結の繫すること有らば、亦た過去・未来なるも有りや。

㊅九三六下

答う。是くの如し。
設し過去・未来なる有らば、復た現在なる有りや。
答う。若し現在前せば〔則ち繫す〕。
②―8〜10　見結の六を歴るが如く、応に知るべし、（②―8）取と（②―9）疑と（②―10）遍行の無明結の六を歴るも亦た爾り、と。

③―1―1―1　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た過去の恚結の繫するも有りや。[補註13]
答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。
設し過去の恚結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。
答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。
③―1―1―2　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た未来の恚結の繫するも有りや。
答う。若し未だ断ぜずば〔則ち繫す〕。
設し未来の恚結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。
答う。若し前に生じて、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③―1―1―3　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た現在の恚結の繫するも有りや。

答う。若し現在前せば〔則ち繫す〕。

設し現在の恚結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ前に生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③1―1―4　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た過去・現在の恚結の繫するも有りや。

答う。(a)或いは過去の愛結の繫すること有りて、過去・現在の恚結の繫する無し。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有りて、恚結の前に生ずる無く、設い生ずるも已に断じて、現在前せざるなり。(b)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び過去の恚結の繫する有りて、現在なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結・恚結の前に生じて未だ断ぜざる有りて、恚結の現在前する無きなり。(c)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び現在の恚結の繫する有りて、過去なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有りて、恚結の現在前する有り、而も前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜるなり。(d)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び過去・現在の恚結の繫する有り。謂わく、此の事に於て、愛結・恚結の前に生じて、未だ断ぜざる有り、及び恚結の現在前する有るなり。

設し過去・現在の恚結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③—1—1—5　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た未来・現在の恚結の繫するも有りや。

答う。(a)或いは過去の愛結の繫すること有りて、未来・現在の恚結の繫する無し。謂わく、色・無色界の法に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有るなり。(b)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び未来の恚結の繫する有りて、現在なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有り、及び恚結の未だ断ぜざる有りて、現在前せざるなり。(c)或いは過去の愛結の繫すること有りて、亦た未来・現在の恚結の繫するも有り。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有り、及び恚結の現在前する有るなり。

㊅九三七上

設し未来・現在の恚結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③—1—1—6　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た過去・未来の恚結の繫するも有りや。

答う。(a)或いは過去の愛結の繫すること有りて、過去・未来の恚結の繫する無し。謂わく、色・無色界の法に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有るなり。(b)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び未来の恚結の繫する有りて、過去なる無し。謂わく、此の事に

於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有り、及び恚結の未だ断ぜざる有りて、而も恚結の前に生ずる無く、設い生ずるも已に断ぜるなり。(c)或いは過去の愛結の繫すること有り、亦た過去・未来の恚結の繫するも有り。謂わく、此の事に於て、愛結・恚結の前に生じて未だ断ぜざる有るなり。

設し過去・未来の恚結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫する有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③—1—1—7　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た過去・未来・現在の恚結の繫するも有りや。

答う。(a)或いは過去の愛結の繫すること有りて、過去・未来・現在の恚結の繫する無し。謂わく、色・無色界の法に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有るなり。(b)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び未来の恚結の繫する有りて、過去・現在なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有り、及び恚結の未だ断ぜざる有りて、而も前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断じて、現在前せざるなり。(c)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び未来・現在の恚結の繫する有りて、過去なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有り、及び恚結の現在前する有りて、而も前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜるなり。(d)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び過去・未来の恚結の繫する有りて、現在なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結・恚結の前に生じて未だ断ぜざる有りて、而も恚結の現在前する無きなり。(e)或いは過去の愛結の繫

することが有りて、亦た過去・未来・現在の恚結の繫する有り。謂わく、此の事に於て、愛結・恚結の前に生じて未だ断ぜざる有り、及び恚結の現在前する有るなり。

設し過去・未来・現在の恚結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③—1—2・3　恚結に対するが如く、(③—1—2)嫉結・(③—1—3)慳結に対するも亦た爾り。差別は、欲界の見所断の法に於て、及び色・無色界の法に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有りて、過去・未来・現在の嫉結・慳結無きなり。

③—1—4—1　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た過去の慢結の繫するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

設し過去の慢結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫する有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③—1—4—2　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た未来の慢結の繫するも有りや。

答う。是くの如し。

設し未来の慢結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫する有りや。

㊅九三七中

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③―1―4―3　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た現在の慢結の繫するも有りや。

答う。若し現在前せば〔則ち繫す〕。

設し現在の慢結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③―1―4―4　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た過去・現在の慢結の繫するも有りや。

答う。(a)或いは過去の愛結の繫すること有りて、過去・現在の慢結の繫する無し。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有りて、慢結の前に生ずる無く、設い生ずるも已に断じて、現在前せざるなり。(b)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び過去の慢結の繫する有りて、現在なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結・慢結の前に生じて未だ断ぜざる有りて、慢結の現在前する無きなり。(c)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び現在の慢結の繫する有りて、過去なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有り、及び慢結の現在前する有りて、而も前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜるなり。(d)或いは過去の愛結の繫すること有り、亦た過去・現在の慢結の繫するも有り。謂わく、此の事に於て、愛結・慢結の前に生じて未だ断ぜざる有り、及び慢

結の現在前する有るなり。
設し過去・現在の慢結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。
答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。
③—1—4—5　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た未来・現在の慢結の繫するも有りや。
答う。未来なるは必ず繫す。現在は、若し現在前せば〔則ち繫す〕。
設し未来・現在の慢結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。
答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。
大九三七下
③—1—4—6　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た過去・未来の慢結の繫するも有りや。
答う。未来は必ず繫す。過去は、若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。
設し過去・未来の慢結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。
答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。
③—1—4—7　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た過去・未来・現在の慢結の繫するも有りや。

答う。(a)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び未来の慢結の繫する有りて、過去・現在なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有りて、慢結の前に生ずる無く、設い生ずるも已に断じて、現在前せざるなり。(b)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び過去・未来の慢結の繫する有りて、現在なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結・慢結の前に生じて未だ断ぜざる有りて、慢結の現在前する無きなり。(c)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び未来・現在の慢結の繫する有りて、過去なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有り、及び慢結の現在前する有りて、而も前に生ずる無く、設い生ずるも已に断ぜるなり。(d)或いは過去の愛結の繫すること有り、亦た過去・未来・現在の慢結の繫するも有り。謂わく、此の事に於て、愛結・慢結の前に生じて未だ断ぜざる有り、及び慢結の現在前する有るなり。

設し過去・未来・現在の慢結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③—1—5—1　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た過去の無明結の繫するも有りや。

答う。是くの如し。

設し過去の無明結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③—1—5—2　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た未来の無明結の繫するも有りや。

答う。是くの如し。

設し未来の無明結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③—1—5—3　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た現在の無明結の繫するも有りや。

答う。若し現在前せば〔則ち繫す〕。

設し現在の無明結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③—1—5—4　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た過去・現在の無明結の繫するも有りや。

㊅九三八上

答う。過去は必ず繫す。現在は、若し現在前せば〔則ち繫す〕。

設し過去・現在の無明結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③—1—5—5　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た未来・現在の無

明結の繫するも有りや。
答う。未来は必ず繫す。現在は、若し現在前せば〔則ち繫す〕。
設し未来・現在の無明結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。
答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。
③—1—5—6　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た過去・未来の無明結の繫するも有りや。
答う。是くの如し。
設し過去・未来の無明結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。
答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。
③—1—5—7　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た過去・未来・現在の無明結の繫するも有りや。
答う。過去・未来は必ず繫す。現在は、若し現在前せば〔則ち繫す〕。
設し過去・未来・現在の無明結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。
答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。
③—1—6—1　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た過去の見結の繫するも有りや。

答う。若し未だ断ぜずば〔則ち繋す〕。

設し過去の見結の繋すること有らば、復た過去の愛結の繋するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繋す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繋せず。

③―1―6―2　若し此の事に於て過去の愛結の繋すること有らば、亦た未来の見結の繋するも有りや。

答う。若し未だ断ぜずば〔則ち繋す〕。

設し未来の見結の繋すること有らば、復た過去の愛結の繋するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繋す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繋せず。

③―1―6―3　若し此の事に於て過去の愛結の繋すること有らば、亦た現在の見結の繋するも有りや。

答う。若し現在前せば〔則ち繋す〕。

設し現在の見結の繋すること有らば、復た過去の愛結の繋するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繋す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繋せず。

③―1―6―4　若し此の事に於て過去の愛結の繋すること有らば、亦た過去・現在の見結の繋するも有りや。

答う。(a)或いは過去の愛結の繋すること有りて、過去・現在の見結の繋する無し。謂わ

㊅九三八中

く、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有り、而も見結の已に断ぜるなり。(b)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び過去の見結の繫する有りて、現在なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有り、及び見結の未だ断ぜざる有りて、而も現在前せざるなり。(c)或いは過去の愛結の繫すること有り、亦た過去・現在の見結の繫するも有り。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有り、亦た見結の現在前するも有るなり。

設し過去・現在の見結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③—1—6—5　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た未来・現在の見結の繫するも有りや。

答う。(a)或いは過去の愛結の繫すること有りて、未来・現在の見結の繫する無し。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有り、而も見結の已に断ぜるなり。(b)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び未来の見結の繫する有りて、現在なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有り、及び見結の未だ断ぜざる有りて、而も現在前せざるなり。(c)或いは過去の愛結の繫すること有り、亦た未来・現在の見結の繫するも有り。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有り、及び見結の現在前する有るなり。

設し未来・現在の見結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③―1―6―6　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た過去・未来の見結の繫するも有りや。

答う。若し未だ断ぜずば〔則ち繫す〕。

設し過去・未来の見結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已に断ぜば、則ち繫せず。

③―1―6―7　若し此の事に於て過去の愛結の繫すること有らば、亦た過去・未来・現在の見結の繫するも有りや。

答う。(a)或いは過去の愛結の繫すること有りて、過去・未来・現在の見結の繫する無し。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有りて、而も見結の已に断ぜるなり。(b)或いは過去の愛結の繫すること有り、及び過去・未来の見結の繫する有りて、現在なる無し。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有り、及び見結の未だ断ぜざる有りて、而も現在前せざるなり。(c)或いは過去の愛結の繫すること有り、亦た過去・未来・現在の見結の繫するも有り。謂わく、此の事に於て、愛結の前に生じて未だ断ぜざる有り、亦た見結の現在前する有るなり。

設し過去・未来・現在の見結の繫すること有らば、復た過去の愛結の繫するも有りや。

答う。若し前に生じ、未だ断ぜずば、則ち繫す。若し前に未だ生ぜず、設い生ずるも已

に断ぜば、則ち繋せず。

③—1—7・8　見結に対するが如く、(③—1—7)取結・(③—1—8)疑結に対するも亦た爾り。

③—2～8　愛結の後に対して小の七を作るが如く、乃至[五]嫉結の慳結に対して、其の応ずる所に随って小の七を作ることも亦た爾り。

小の七の如く、大の七[六]も亦た爾り。差別は、二を以って一に対し、乃至八を以って一に対するなり。過去の愛等を首と為して七有るが如く、乃至過去・未来・現在の愛等を首と為すも亦た各おの七有り。是くの如く、応に七七句有りと知るべし。

④—1　三結乃至九十八随眠は、九十八随眠の中に於て、一一幾ばくの随眠か摂むる。

答う。一切、応に分別すべし。謂わく、三結の中、有身見結は三を摂め、戒禁取見結は六を摂め、疑結は十二を摂む。

三不善根の中、貪・瞋不善根は各おの五[七]を摂め、癡不善根は四と一の少分[八]とを摂む。

三漏の中、欲漏は三十一を摂め、有漏は五十二を摂め、無明漏は十五を摂む。

四瀑流の中、欲瀑流は十九を摂め、有瀑流は二十八を摂め、見瀑流は三十六を摂め、無明瀑流は十五を摂む。

四瀑流の如く、四軛も亦た爾り。

四取の中、欲取は二十四を摂め、見取は三十を摂め、戒禁取は六を摂め、我語取は三十八を摂む。

㊅九三八下

五 乃至　③—5～③—7を略する。③—1—1～③—8—1については補註4を見よ。

六 大の七も亦た爾り　『大毘婆沙論』の説明によれば、まず、愛・恚二結を慢・無明・見・取・疑・嫉・慳の各一結に対し、次に恚・慢二結を無明乃至慳の各一結に対し、同様にして、疑・嫉二結を嫉に対し、小の七の場合のごとき考察を行う。

七 各おの五　欲界五部の貪・瞋。色界・無色界の貪は無記であるから除かれる。

八 一の少分　欲界見苦所断の無明の中、有身見・辺執見と相応するものを除く。上記第一章頭註四参照。

四身繋の中、貪欲・瞋恚身繋は、各おの五を摂め、戒禁取身繋は六を摂め、此実執身繋は十二を摂む。

五蓋の中、貪欲・瞋恚蓋は、各おの五を摂め、疑蓋は四を摂め、[九]余の蓋は摂むる所無し。

五結の中、貪・慢結は、各おの十五を摂め、瞋結は五を摂め、嫉・慳結は摂むる所無し。

五順下分結の中、貪欲・瞋恚結は、各おの五を摂め、有身見結は三を摂め、戒禁取結は六を摂め、疑結は十二を摂む。

五順上分結の中、色貪結は[一〇]一の少分を摂め、無色貪結は一の少分を摂め、掉挙結は摂むる所無く、慢結は[一一]二の少分を摂め、無明結は二の少分を摂む。

五見の中、有身見・辺執見は、各おの[一二]三を摂め、邪見・見取は、各おの[一三]十二を摂め、戒禁取は[一四]六を摂む。

六愛身の中、眼・耳・身触所生愛身は、各おの[一五]二の少分を摂め、鼻・舌触所生愛身は、各おの[一六]一の少分を摂め、意触所生愛身は[一七]十三と二の少分を摂む。

七随眠の中、欲貪・瞋恚随眠は、各おの五を摂め、有貪随眠は十を摂め、慢・無明随眠は、各おの十五を摂め、見随眠は三十六を摂め、疑随眠は十二を摂む。

九結の中、愛・慢・無明結は、各おの十五を摂め、恚結は五を摂め、見・取結は、各おの十八を摂め、疑結は十二を摂め、嫉・慳結は摂むる所無し。

九十八随眠の中、欲界の有身見は欲界の有身見を摂め、乃至無色界の修所断の無明は無色界の修所断の無明を摂む。

④—2　三結乃至九十八随眠は、前後を摂むと為すや、後前を摂むや。

九　余の蓋　惛沈睡眠・掉挙悪作は纏であって随眠でない。次に出る嫉・慳も同じ。

一〇　一の少分　色界修所断の随眠(ここでは貪)の中、不還の聖者の起こすものを指す。

一一　二の少分　二とは色界および無色界に属する随眠(ここでは慢)をいう。少分と限定するのは直前の註一〇にいうとおり。

一二　三　三界の見苦所断。

一三　十二　三界の見苦・見集・見滅・見道所断。

一四　六　三界の見苦・見道所断。

一五　二の少分　欲界の修所断の貪で、自ら以外の五愛身を除いたもの、および、色界の修所断の貪で、意触所生愛身ならぬもの。

一六　一の少分　欲界の修所断の貪で、自ら以外の五愛身を除いたもの。

㊅九三九上

一七　十三と二の少分と　三界四部(修所断以外)の貪と、無色界の修所断の貪と、および、欲界修所断の貪の中で自ら以外の五愛身を除いたものと、色界修所断の貪の中で眼・耳・身触所生の三愛身を除いたものと(鼻・舌触所生の二愛身はもとより色界修所断に属しない)。

答う。三結と三不善根とは、互いに相(あ)い摂めず。
三結と三漏とは、三結と二[18]漏の少分と互いに相い摂むるも、余は相い摂めず。
三結と四瀑流とは、三結と三[19]瀑流の少分と互いに相い摂むるも、余は相い摂めず。
四瀑流に対するが如く、四軛に対するも亦た爾り。
三結と四取とは、三結と一[20]取と三〔取〕の少分と互いに相い摂むるも、余は相い摂めず。
三結と四身繫とは、一結と一身繫と互いに相い摂むるも、余は相い摂めず。
三結と五蓋とは、一[21]結の少分と一蓋と互いに相い摂むるも、余は相い摂めず。
三結と五結とは、互いに相い摂めず。
三結と五順下分結とは、三結と三順下分結と互いに相い摂むるも、余は相い摂めず。
三結と五順上分結とは、互いに相い摂めず。
三結と五見とは、二結と二見と互いに相い摂むるも、余は相い摂めず。
三結と六愛身とは、互いに相い摂めず。
三結と七随眠とは、三結と一[22]随眠と一〔随眠〕の少分と互いに相い摂むるも、余は相い摂めず。
三結と九結とは、三結と一[23]結と二〔結〕の少分と互いに相い摂むるも、余は相い摂めず。
三結と九十八随眠とは、三結と二十一随眠と互いに相い摂むるも、余は相い摂めず。
是くの如く、乃至九結と九十八随眠とは、七結と九十八随眠と互いに相い摂むるも、余は相い摂めず。

一八　二漏の少分　欲漏・有漏の中の有身見・戒禁取・疑。
一九　三瀑流の少分　欲・有・見瀑流の中の有身見・戒禁取・疑。
二〇　一取と三の少分　戒禁取と、その他の三取の中の有身見と疑と。
二一　一結の少分と一蓋と　疑結の中の不善なるものと、疑蓋と。
二二　一随眠と一の少分と　疑随眠と、見随眠の中の有身見・戒禁取と。
二三　一結と二の少分と　疑結と、見結の中の有身見および取結の中の戒禁取と。

⑤ 三結乃至九十八随眠の、幾ばくか欲有[二四]をして相続せしめ、幾ばくか色有をして相続せしめ、幾ばくか無色有をして相続せしむる。

答う。一切、応に分別すべし。謂わく、三結は、三有をして相続せしむ。

三不善根と及び欲漏は、欲有をして相続せしめ、有漏は、色・無色有をして相続せしめ、無明漏は、三有をして相続せしむ。

四瀑流・軛の中、欲瀑流・軛は、欲有をして相続せしめ、有瀑流・軛は、色・無色有をして相続せしめ、無明瀑流・軛は、三有をして相続せしむ。

四取の中、欲取は、欲有をして相続せしめ、見・戒禁取は、三有をして相続せしめ、我語取は、色・無色有をして相続せしむ。

四身繫の中、初の二は、欲有をして相続せしめ、後の二は、三有をして相続せしむ。

五蓋は、欲有をして相続せしむ。

五結の中、貪・慢結は、三有をして相続せしめ、余の三結は、欲有をして相続せしむ。

五順下分結の中、初の二は、欲有をして相続せしめ、後の三は、三有をして相続せしむ。

五順上分結の中、色貪は、色有をして相続せしめ、無色貪は、無色有をして相続せしめ、余の三は、色・無色有をして相続せしむ。

五見は、三有をして相続せしむ。

六愛身の中、眼・耳・身触所生愛身は、欲・色有をして相続せしめ、鼻・舌触所生愛身は、欲有をして相続せしめ、意触所生愛身は、三有をして相続せしむ。

七随眠の中、欲貪・瞋恚は、欲有をして相続せしめ、有貪は、色・無色有をして相続せ

㊅九三九中

二四 欲有　欲界における生存、の意。次下の色有・無色有も同様。色界における生存、無色界における生存、の意。欲有・色有・無色有を三有という。

しめ、余の四は、三有をして相続せしむ。
九結の中、恚・嫉・慳結は、欲有をして相続せしめ、余の六は、三有をして相続せしむ。
九十八随眠の中、欲界の三十六は、欲有をして相続せしめ、色界の三十一は、色有をして相続せしめ、無色界の三十一は、無色有をして相続せしむ。

⑥ 三結乃至九十八随眠 何れの定に依りてか滅する。

答う。三結は、或いは四[25]に依り、或いは未至[26]に依りて滅す。
三不善根と及び欲漏は未至に依りて滅す。
有漏と無明漏は、或いは七[27]に依り、或いは未至に依りて滅す。
四瀑流・軛の中、欲瀑流・軛は未至に依りて滅し、有・無明瀑流・軛は、或いは七に依り、或いは未至に依りて滅し、見瀑流・軛は、或いは四に依り、或いは未至に依りて滅す。
四取の中、欲取は未至に依りて滅し、見・戒禁取は、或いは四に依り、或いは未至に依りて滅し、我語取は、或いは七に依り、或いは未至に依りて滅す。
四身繫の中、初の二は未至に依りて滅し、後の二は、或いは四に依り、或いは未至に依りて滅す。
五蓋は未至に依りて滅す。
五結の中、貪・慢結は、或いは七に依り、或いは未至に依りて滅し、余の三結は未至に依りて滅す。
五順下分結の中、初の二は未至に依りて滅し、後の三は、或いは四に依り、或いは未至

二五 四　四(根本)静慮。
二六 未至　未至定、すなわち初静慮の近分定、と静慮中間を含む。
二七 七　四静慮と下三無色(四無色定の中、非想非非想処定を除く)。

に依りて滅す。

五順上分結の中、色貪は、或いは四に依り、或いは未至に依りて滅し、余の四は、或いは七に依り、或いは未至に依りて滅す。

五見は、或いは四に依り、或いは未至に依りて滅す。

六愛身の中、鼻・舌触所生愛身は未至に依りて滅し、眼・耳・身触所生愛身は、或いは初[二八]に依り、或いは未至に依りて滅し、意触所生愛身は、或いは七に依り、或いは未至に依りて滅す。

七随眠の中、欲貪と瞋恚は未至に依りて滅し、有貪・慢・無明は、或いは七に依り、或いは未至に依りて滅し、見と疑は、或いは四に依り、或いは未至に依りて滅す。

九結の中、愛・慢・無明は、或いは七に依り、或いは未至に依りて滅し、恚・嫉・慳は未至に依りて滅し、見・取・疑は、或いは四に依り、或いは未至に依りて滅す。

九十八随眠の中、欲界の三十六は未至に依りて滅し、色界の三十一と及び無色界の見所断は、或いは四に依り、或いは未至に依りて滅し、無色界の修所断は、或いは七に依り、或いは未至に依りて滅す。

(大)九三九下

⑦—1　諸もろの結の過去なる、彼の結 已(すで)に繋せりや。

答う。諸もろの結の過去なる、彼の結は已に繋せるも、結の已に繋せるに、彼の結の過去に非ざる有り。謂わく、結の未来・現在にして、已に繋せるなり。

⑦—2　諸もろの結の未来なる、彼の結 当(まさ)に繋すべしや。

二八　初　初静慮(の根本定)。

答う。当に四句を作るべし。(a)結の未来なるに、彼の結 当に繫すべきに非ざる有り。謂わく、結の未来なるに、已に断じ、已に遍知し、已に滅し、已に吐て、[二九]定んで当に退くべからざるなり。(b)結の当に繫すべきに、彼の結 未来に非ざる有り。謂わく、結の過去なるに、已に断じ、已に遍知し、已に滅し、已に吐つるも、定んで当に退くべきなり。(c)結の未来なるに、彼の結も亦た当に繫すべき有り。謂わく、結の未来なるに、已に断じ、已に遍知し、已に滅し、已に吐つるも、定んで当に退くべきなり。(d)結の未来に非ざるに、彼の結も亦た当に繫すべきに非ざる有り。謂わく、結の過去なるに、已に断じ、已に遍知し、已に滅し、已に吐て、定んで当に退くべからざると、及び現在の結となり。

⑦—3　諸もろの結の現在なる、彼の結 今繫すや。

答う。諸もろの結の現在なる、彼の結 今繫するも、結の 今繫して、彼の結 現在に非ざる有り。謂わく、結の過去・未来にして、今繫するなり。

⑧—1　諸もろの、此の道を用って欲界の結を断ずるもの、此の道より退く時、還た彼の結の繫するを得や。

答う。還た彼の結の繫するを得。

⑧—2　諸もろの、此の道を用って色・無色界の結を断ずるもの、此の道より退く時、還た彼の結の繫するを得や。

答う。還た彼の結の繫するを得。

二九　定んで当に退くべからざる　不退法阿羅漢（生まれつき鋭利な資質をもち、煩悩を離れた境地を退失することのない阿羅漢）のもつ未来の結をいう。

三〇　遍知　ここでは、遍く煩悩を知る智（智遍知）を意味するのでなく、遍く知ることによって煩悩を断ずること（断遍知）を意味する。

（大）九四〇上

⑨—1　九遍知[三〇]有り。謂わく、欲界の見苦・〔見〕集所断の結の尽 第一遍知なり。色・無色界の見苦・〔見〕集所断の結の尽 第二遍知なり。欲界の見滅所断の結の尽 第三遍知なり。色・無色界の見滅所断の結の尽 第四遍知なり。欲界の見道所断の結の尽 第五遍知なり。色・無色界の見道所断の結の尽 第六遍知なり。五順下分結の尽 第七遍知なり。色〔界〕の愛結の尽 第八遍知なり。一切の結の尽 第九遍知なり。九遍知 一切の遍知を摂むと為すや、一切の遍知 九遍知を摂むと為すや。

答う。一切〔の遍知〕九〔遍知〕を摂む。九の一切を摂むるに非ず。何等をか摂めざる。謂わく、苦智 已に生じ、集智 未だ生ぜざるとき、三界の見苦所断の結の尽 九の摂むる所に非ず。見を具うる世尊の弟子の未だ欲染を離れざるとき、欲界の修所断の結の尽 九の摂むる所に非ず。已に欲染を離れ、未だ色染を離れざるとき、色界の修所断の結の尽 九の摂むる所に非ず。已に色染を離れ、未だ無色染を離れざるとき、無色界の修所断の結の尽 九の摂むる所に非ず。

⑨—2　八補特伽羅(pudgala)有り。一は預流向、二は預流果、三は一来向、四は一来果、五は不還向、六は不還果、七は阿羅漢向、八は阿羅漢果なり。此の八補特伽羅 九遍知に於て、幾ばくか成就し、幾ばくか成就せざる。

答う。預流向は、或いは成就せず、或いは一、二、三、四、五を成就す。謂わく、苦法智忍乃至集法智忍の位には成就せず。集法智・集類智忍の位に一を成就し、集類智・滅法智忍の位に二を成就し、滅法智・滅類智忍の位に三を成就し、滅類智・道法智忍の位に四を成就し、道法智・道類智忍の位に五を成就す。預流果は六を成就す。

一来向は、[三一]倍離欲染にして、[三二]正性離生に入るが若き者は、預流向の如し。預流果より一来果に趣くが若き者と、及び一来果は六を成就す。

不還向は、已に欲染を離れ、正性離生に入るが若き者は、預流向の如し。一来果より不還果に趣くが若き者は六を成就す。不還果は一を成就す。謂わく、五順下分結の尽なり。阿羅漢向は、或いは一[三三]を成就し、或いは二[三四]を成就す。謂わく、未だ色染を離れざる者は一を成就し、已に色染を離れたる者は二を成就す。阿羅漢果は一を成就す。謂わく、一切の結の尽なり。

説一切有部発智論　巻の第四

三一　倍離欲貪　有漏道によって欲界の修所断の煩悩の六・七あるいは八品を断じた者をいう。

三二　正性離性　第一篇第一章頭註五を見よ。

三三　一　第七遍知。

三四　二　第七および第八遍知。

(大)九四〇中

阿毘達磨発智論

尊者迦多衍尼子 造る
三蔵法師玄奘 詔を奉じて訳す

巻の第五

結蘊 第二の中、有情納息 第三

第二篇第三章

①頓・漸の繫・離繫と　②果の摂の七と③成の三と
④死して生ずると〔生ぜ〕ざるとの六種とを此の章にて願わくば具さに説かん

①—1—1　三界に、各おの二部の結有り。謂わく、見〔所断〕と修所断となり。欲界の見〔所断〕・修所断の二部の結に、頗なくも頓に繫を得るもの有りや。
答う。有り。謂わく、已に欲染を離れたる異生の、欲染を離るるより退く時と、及び色

一　頓に　一挙に、いっぺんに、の意。「頓に繫を得る」とは、見所断の煩悩と修所断の煩悩とによる繫を同時に得る、という意味。

・無色界より没（もっ）して欲界に生ずる時なり。

①―1―2　頗なくも頓に繋を離るるもの有りや。

答う。有り。謂わく、異生の欲染を離るる時なり。[二]

①―1―3　頗なくも漸（ざん）[三]に繋を得るもの有りや。

答う。無し。

①―1―4　頗なくも漸に繋を離るるもの有りや。

答う。有り。謂わく、世尊の弟子の、先に彼の見所断の結を離れ、後に彼の修所断の結を離るるなり。

①―2―1　色界の見・修所断の二部の結に、頗なくも頓に繋を得るもの有りや。

答う。有り。謂わく、已に色染を離れたる異生の、色染を離るるより退く時と、及び無色界より没して欲・色界に生ずる時なり。

①―2―2　頗なくも頓に繋を離るるもの有りや。

答う。有り。謂わく、異生の色染を離るる時なり。

①―2―3　頗なくも漸に繋を得るもの有りや。

答う。無し。

①―2―4　頗なくも漸に繋を離るるもの有りや。

答う。有り。謂わく、世尊の弟子の、先に彼の見所断の結を離れ、後に彼の修所断の結を離るるなり。

①―3―1　無色界の見・修所断の二部の結に、頗なくも頓に繋を得るもの有りや。

二　異生の欲染を離るる時　異生が有漏道によって煩悩を断ずる場合は、見所断・修所断を一束にして断ずる、とされる。

三　漸に　次第に、順序を追って、次々に、の意。

答う。無し。

①—3—2　頗なくも頓に繫を離るるもの有りや。

答う。無し。

①—3—3　頗なくも漸に繫を得るもの有りや。

答う。無し。

①—3—4　頗なくも漸に繫を離るるもの有りや。

答う。有り。謂わく、世尊の弟子の、先に彼の見所断の結を離れ、後に彼の修所断の結を離るるなり。

②—1—1　欲界の見所断の結の尽は、何れの果の摂[四]なる。

答う。四沙門果〔の摂〕、或いは処無し[五]。

②—1—2　欲界の修所断の結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。不還・阿羅漢果〔の摂〕、或いは処無し。

②—1—3　色界の見所断の結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。四沙門果〔の摂〕、或いは処無し。

②—1—4　色界の修所断の結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。阿羅漢果〔の摂〕、或いは処無し。

②—1—5　無色界の見所断の結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。四沙門果〔の摂〕なり。

四　摂　含むこと。包含すること。「何れの果の摂なる」とは、四沙門果の中の何れに含まれるか、の意。

五　処無し　四沙門果の何れにも含まれない、属する処がない、の意。

㊅九四〇下

②―1―6　無色界の修所断の結の尽は、何れの果の摂なる。
答う。阿羅漢果〔の摂〕なり。
②―2―1　五部の結有り。謂わく、見苦所断の結、乃至修所断の結なり。見苦所断の結の尽は、何れの果の摂なる。
答う。四沙門果〔の摂〕、或いは処無し。
②―2―2　見集所断の結の尽は、何れの果の摂なる。
答う。四沙門果〔の摂〕、或いは処無し。
②―2―3　見滅所断の結の尽は、何れの果の摂なる。
答う。四沙門果〔の摂〕、或いは処無し。
②―2―4　見道所断の結の尽は、何れの果の摂なる。
答う。四沙門果〔の摂〕なり。
②―2―5　修所断の結の尽は、何れの果の摂なる。
答う。阿羅漢果〔の摂〕なり。
②―3―1　九部の結有り。謂わく、苦法智所断の結、乃至修所断の結なり。苦法智所断の結の尽は、何れの果の摂なる。
答う。四沙門果〔の摂〕、或いは処無し。
②―3―2　苦類智乃至道法智所断の結の尽は、何れの果の摂なる。
答う。四沙門果〔の摂〕、或いは処無し。
②―3―3　道類智所断の結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。四沙門果〔の摂〕なり。

②—3—4　修所断の結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。阿羅漢果〔の摂〕なり。

②—4—1　十五部の結有り。謂わく、三界（さんがい）に、各おの五部有り。見苦所断の結、乃至修所断の結なり。欲界の見苦・〔見〕集・〔見〕滅・〔見〕道所断の結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。四沙門果〔の摂〕、或いは処無し。

②—4—2　欲界の修所断の結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。不還・阿羅漢果〔の摂〕、或いは処無し。

②—4—3　色界の見苦・〔見〕集・〔見〕滅・〔見〕道所断の結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。四沙門果〔の摂〕、或いは処無し。

②—4—4　色界の修所断の結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。阿羅漢果〔の摂〕、或いは処無し。

②—4—5　無色界の見苦・〔見〕集・〔見〕滅所断の結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。四沙門果〔の摂〕、或いは処無し。

②—4—6　無色界の見道所断の結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。四沙門果〔の摂〕なり。

②—4—7　無色界の修所断の結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。阿羅漢果〔の摂〕なり。

②—5　三結乃至九十八随眠（ずいめん）の一一の尽は、何れの果の摂なる。

答う。三結の中、有身見の尽は四沙門果の摂、或いは処無し。三結中の有身見の尽の如く、応に知るべし、五順下分結中の有身見、五見中の有身見と辺執見の尽も亦た爾り、と。戒禁取と疑の尽は四沙門果の摂なり。三結中の戒禁取と疑の尽の如く、応に知るべし、四

㊇九四一上

瀑流・軛中の見瀑流・軛、四取中の見取と戒禁取、四身繋中の戒禁取と此実執身繋、五順下分結中の戒禁取と疑、五見中の邪見と見取と戒禁取、七随眠中の見・疑随眠、九結中の見・取・疑結の尽も亦た爾り、と。

三不善根の尽は不還・阿羅漢果の摂、或いは処無し。三不善根の尽の如く、応に知るべし、三漏中の欲漏、四瀑流・軛中の欲瀑流・軛、四取中の欲取、四身繋中の貪欲と瞋恚、五蓋中の前の四蓋、五結中の瞋・嫉・慳結、五順下分結中の貪欲と瞋恚、六愛身中の鼻・舌触所生愛身、七随眠中の欲貪と瞋恚、九結中の恚・嫉・慳結の尽も亦た爾り、と。

有漏・無明漏の尽は阿羅漢果の摂なり。有漏・無明漏の尽の如く、応に知るべし、四瀑流・軛中の有・無明瀑流・軛、四取中の我語取、五結中の貪・慢結、五順上分結中の色貪を除ける余の四、六愛身中の意触所生愛身、七随眠中の有・貪・無明・慢、九結中の愛・慢・無明結の尽も亦た爾り、と。

疑蓋の尽は四沙門果の摂、或いは処無し。

色貪順上分結の尽は阿羅漢果の摂、或いは処無し。色貪順上分結の尽の如く、応に知るべし、眼・耳・身触所生愛身の尽も亦た爾り、と。

九十八随眠の中、欲界の見苦・〔見〕集・〔見〕滅・〔見〕道所断の随眠の尽は、四沙門果の摂、或いは処無し。欲界の修所断の随眠の尽は、不還・阿羅漢果の摂、或いは処無し。色

界の見苦・〔見〕集・〔見〕滅・〔見〕道所断の随眠の尽は、四沙門果の摂、或いは処無し。色界の修所断の随眠の尽は、阿羅漢果の摂、或いは処無し。無色界の見苦・〔見〕集・〔見〕滅所断の随眠の尽は、四沙門果の摂、或いは処無し。無色界の見道所断の随眠の尽は、四沙門果の摂。無色界の修所断の随眠の尽は、阿羅漢果の摂なり。

②―6―1　預流向中の諸もろの結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。処無し。

②―6―2　預流果中の諸もろの結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。預流果〔の摂〕なり。

②―6―3　一来向中の諸もろの結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。預流果〔の摂〕、或いは処無し。

②―6―4　一来果中の諸もろの結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。一来果〔の摂〕なり。

㊅九四一中

②―6―5　不還向中の諸もろの結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。一来果〔の摂〕、或いは処無し。

②―6―6　不還果中の諸もろの結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。不還果〔の摂〕なり。

②―6―7　阿羅漢向中の諸もろの結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。不還果〔の摂〕、或いは処無し。

②―6―8　阿羅漢果中の諸もろの結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。阿羅漢果〔の摂〕なり。

②―7―1　見を具うる世尊の弟子の未だ欲染を離れざるものの欲界の修所断の諸もろの結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。一来果〔の摂〕、或いは処無し。

②―7―2　已に欲染を離るるも、未だ色染を離れざるものの色界の修所断の諸もろの結の尽は、何れの果の摂なる。

答う。処無し。

②―7―3　已に色染を離るるも、未だ無色染を離れざるものの無色の修所断の諸もろの結の尽は、何れの果の摂なりや。

答う。処無し。

③―1―1　諸もろの預流の者の成就する所の学法、此の法 預流果の摂なりや。

答う。或いは摂、或いは摂ならず。

云何んが摂なる。

答う。有為の預流果にして、已に得て失わざるなり。

云何んが摂ならざる。

答う。諸もろの預流の者の得る所の六勝進の無漏根等の有為法なり。

設し法 預流果の摂ならば、此れは是れ学法なりや。

答う。或いは学、或いは非学非無学なり。

六 勝進　修行の道において、到達した階位からさらに勝れた階位へ進むこと。「預流の者の得る所の勝進の無漏根」とは、欲界の修所断の煩悩に九品ある中の第六品までを離れるための加行道とそれを離れるところの世間道の無漏慧と、第五品までを断ずるところの解脱道の無漏慧とをいう(第六品を断ずる解脱道が含まれないのは、それが生じたとき行者は一来果を獲ることになって「預流の者」ではなくなるから)。

云何んが学なる。
答う。有為の預流果なり。
云何んが非学非無学なる。
答う。無為の預流果なり。

③—1—2　諸もろの一来の者の成就する所の学法、此の法　一来果の摂なりや。
答う。或いは摂、或いは摂ならず。
云何んが摂なる。
答う。有為の一来果にして、已に得て失わざるなり。
云何んが摂ならざる。
答う。諸もろの一来[七]の者の得る所の勝進の無漏根等の有為法なり。
設し法　一来果の摂ならば、此れは是れ学法なりや。
答う。或いは学、或いは非学非無学なり。
云何んが学なる。
答う。有為の一来果なり。
云何んが非学非無学なる。
答う。無為の一来果なり。

③—1—3　諸もろの不還の者の成就する所の学法、此の法　不還果の摂なりや。
答う。或いは摂、或いは摂ならず。
云何んが摂なる。

七　一来の者の得る所の勝進の無漏根　欲界の修所断の煩悩の第七ないし第九品を離れるための加行道とそれを離れるところの無間道の無漏慧と、第七・第八を断ずるところの解脱道の無漏慧と、をいう。

答う。有為の不還果にして、已に得て失わざるなり。
云何んが摂ならざる。
答う。諸もろの不還[八]の者の得る所の勝進の無漏根等の有為法なり。
設し法 不還果の摂ならば、此れは是れ学法なりや。
答う。或いは学、或いは非学非無学なり。
云何んが学なる。
答う。有為の不還果なり。
云何んが非学非無学なる。
答う。無為の不還果なり。

③—1—4　諸もろの阿羅漢の成就する所の学法、此の法 阿羅漢果の摂なりや。
答う。是くの如し。
設し法 阿羅漢果の摂ならば、此れは是れ無学の法なりや。
答う。或いは無学、或いは非学非無学なり。
云何んが無学なる。
答う。有為の阿羅漢果なり。
云何んが非学非無学なる。
答う。無為の阿羅漢果なり。

③—2—1　諸もろの預流の者の成就する所の無漏法、此の法 預流果の摂なりや。
答う。或いは摂、或いは摂ならず。

八　不還の者の得る所の勝進の無漏根　色・無色界の修所断の煩悩を離れるための加行道とそれを離れるところの無間道の無漏慧と、それを断ずるところの解脱道の無漏慧（ただし最後の尽智を除く）と、をいう。

㊅九四一下

云何んが摂なる。
答う。有為と無為の預流果にして、已に得て失わざるなり。
云何んが摂ならざる。
答う。諸もろの預流の者の得る所の勝進の無漏根等の有為法と、及び彼れ[九]の證する所の諸もろの結の尽と、並（なら）びに預流の者の成就する所の非択滅（ひちゃくめつ）なり。
設し法 預流果の摂ならば、此れは是れ無漏法なりや。
答う。是くの如し。
③—2—2　諸もろの一来の者の成就する所の無漏法、此の法 一来果の摂なりや。
答う。或いは摂、或いは摂ならず。
云何んが摂なる。
答う。有為と無為の一来果にして、已に得て失わざるなり。
云何んが摂ならざる。
答う。諸もろの一来の者の得る所の勝進の無漏根等の有為法と、及び彼れの證する所の諸もろの結の尽と、並びに一来の者の成就する所の非択滅となり。
設し法 一来果の摂ならば、此れは是れ無漏法なりや。
答う。是くの如し。
③—2—3　諸もろの不還の者の成就する所の無漏法、此の法 不還果の摂なりや。
答う。或いは摂、或いは摂ならず。
云何んが摂なる。

九　彼れの證する所の諸もろの結の尽　預流果を得た者が進んで一来果を得るまでの間に證する諸結の尽。結は随煩悩であるから、その尽は随眠の断と別に考えられている。次下に挙げる一来果を得た者および不還果を得た者の場合も、同様に知るべきである。

答う。有為と無為の不還果にして、已に得て失わざるなり。
云何んが摂ならざる。
答う。諸もろの不還の者の得る所の勝進の無漏根等の有為法と、及び彼れの證する所の諸もろの結の尽と、并びに不還の者の成就する所の非択滅となり。
設し法 不還果の摂ならば、此れは是れ無漏法なりや。
答う。是くの如し。
③―2―4　諸もろの阿羅漢の成就する所の無漏法、此の法 阿羅漢果の摂なりや。
答う。或いは摂、或いは摂ならず。
云何んが摂なる。
答う。有為と無為の阿羅漢果にして、已に得て失わざるなり。
云何んが摂ならざる。
答う。阿羅漢の成就する所の非択滅なり。
設し法 阿羅漢果の摂ならば、此れは是れ無漏法なりや。
答う。是くの如し。
③―3―1　諸法の、預流の者の成就せる、此の法 預流果の摂なりや。
答う。応に四句を作るべし。(a)法にして、預流の者 成就するも、預流果の摂に非ざる有り。謂わく、預流の者の得る所の勝進の無漏根等の有為法と、及び彼れの證する所の諸もろの結の尽と、并びに預流の者の成就する所の非択滅の有漏法となり。(b)法にして、預流果の摂なるも、預流の者の成就するに非ざる有り。謂わく、預流果の未だ得ざると、已

㊅九四二上

に失えるとなり。(c)法にして、預流の者 成就し、亦た預流果の摂なるも有り。謂わく、預流果の已に得て失わざるなり。(d)法にして、預流の者 成就するにも非ず、亦た預流果の摂なるにも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

③―3―2 諸法の、一来の者の成就せる、此の法 一来果の摂なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法にして、一来の者 成就するも、一来果の摂に非ざる有り。謂わく、一来の者の得る所の勝進の無漏根等の有為法と、及び彼れの證する所の諸もろの結の尽と、并びに一来の者の成就する所の非択滅の有為法となり。(b)法にして、一来果の摂なるも、一来の者の成就するに非ざる有り。謂わく、一来果の未だ得ざると、已に失えるとなり。(c)法にして、一来の者 成就し、亦た一来果の摂なるも有り。謂わく、一来果の已に得て失わざるなり。(d)法にして、一来の者 成就するにも非ず、亦た一来果の摂なるにも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

③―3―3 諸法の、不還の者の成就せる、此の法 不還果の摂なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法にして、不還の者 成就するも、不還果の摂に非ざる有り。謂わく、不還の者の得る所の勝進の無漏根等の有為法と、及び彼れの證する所の諸もろの結の尽と、并びに不還の者の成就する所の非択滅の有為法となり。(b)法にして、不還果の摂なるも、不還の者の成就するに非ざる有り。謂わく、不還果の未だ得ざると、已に失えるとなり。(c)法にして、不還の者 成就し、亦た不還果の摂なるも有り。謂わく、不還果の已に得て失わざるなり。(d)法にして、不還の者 成就するにも非ず、亦た不還果の摂なるにも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

③―3―4　諸法の、阿羅漢の成就せる、此の法 阿羅漢果の摂なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法にして、阿羅漢 成就するも、阿羅漢果の摂に非ざる有り。謂わく、阿羅漢の成就する所の非択滅の有漏法なり。(b)法にして、阿羅漢果の摂なるも、阿羅漢の成就するに非ざる有り。謂わく、阿羅漢果の未だ得ざると、已に失えるとなり。(c)法にして、阿羅漢 成就し、亦た阿羅漢果の摂なるも有り。謂わく、阿羅漢果の已に得て失わざるなり。(d)法にして、阿羅漢 成就するにも非ず、亦た阿羅漢果の摂なるにも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

④―1―1　諸もろの、欲界に在りて死し生ずる者、皆な欲有を受くや。

答う。応に四句を作るべし。(a)欲界に在りて死し生ずるも、欲有を受くるに非ざる有り。謂わく、欲界より没し、色界の中有[一〇]を起こすなり。(b)欲有を受くるも、欲界に在りて死し生ずるに非ざる有り。謂わく、色界より没し、欲界の中有を起こすなり。(c)欲界に在りて死し生じ、亦た欲有を受くるも有り。謂わく、欲界より没し、欲界の中有・生有[一一]を起こすなり。(d)欲界に在りて死し生ずるにも非ず、亦た欲有を受くるにも非ざる有り。謂わく、色界より没し、色・無色界に生ずると、無色界より没し、無色・色界に生ずるとなり。

④―1―2　諸もろの、色界に在りて死し生ずる者、皆な色有を受くや。

答う。応に四句を作るべし。(a)色界に在りて死し生ずるも、色有を受くるに非ざる有り。謂わく、色界より没し、欲界の中有を起こすなり。(b)色有を受くるも、色界に在りて死し生ずるに非ざる有り。謂わく、欲界より没し、色界の中有を起こすなり。(c)色界に在りて

一〇　中有　第二篇第一章頭註二五を見よ。

一一　生有　三界のいずれかの生存に生まれ出る瞬間を生有という。生有に引き続いてその界の生存が続く間を本有といい、その生存が尽きる瞬間を死有という。有情の輪廻的生存は、生有→本有→死有→中有を経て次の生存の生有に続き、さらに→本有→死有→……と繰り返す。生有・本有・死有・中有を四有と呼ぶ。　㊅九四二中

死し生じ、亦た色有を受くるも有り。謂わく、色界より没し、色界の中有・生有を起こすなり。(d)色界に在りて死し生ずるにも非ず、亦た色有を受くるにも非ざる有り。謂わく、欲界より没し、欲・無色界に生ずると、無色界より没し、無色・欲界に生ずるとなり。

④―1―3　諸もろの、無色界に在りて死し生ずる者、皆な無色有を受くや。

答う。諸もろの、無色界に在りて死し生ずる者、皆な無色有を受くるも、無色有を受けて、無色界に在りて死するに非ず、而も無色界に在りて生ずる有り。謂わく、欲・色界より没し、無色界に生ずるなり。

④―1―4　諸もろの、欲界に在りて死し生ずる者に、幾ばくか有る。

答う。四あり。謂わく、欲・色界の異生と聖者となり。

④―1―5　諸もろの、色界に在りて死し生ずる者に、幾ばくか有る。

答う。三あり。謂わく、欲界の異生と、色界の異生と聖者となり。

④―1―6　諸もろの、無色界に在りて死し生ずる者に、幾ばくか有る。

答う。二あり。謂わく、無色界の異生と聖者となり。

④―2―1　諸もろの、欲界に在りて死し生ずるに非ざる者、皆な欲有を受くるにも非ずや。

答う。応に四句を作るべし。(a)欲界に在りて死し生ずるに非ざるも、欲有を受けざるに非ざるもの有り。謂わく、色界より没し、欲界の中有を起こすなり。(b)欲有を受くるに非ざるも、欲界に在りて死し生ぜざるに非ざる有り。謂わく、欲界より没し、色界の中有を起こすなり。(c)欲界に在りて死し生ずるにも非ず、亦た欲有を受くるにも非ざる有り。謂わく、色界より没し、色・無色界に生ずると、無色界より没し、無色界に生ずるとなり。

(d)欲界に在りて死し生ぜざるにも非ず、亦た欲有を受けざるにも非ざる有り。謂わく、欲界より没し、欲界の中有・生有を起こすなり。

④—2—2　諸もろの、色界に在りて死し生ずるに非ざる者、皆な色有を受くるにも非ずや。

答う。応に四句を作るべし。(a)色界に在りて死し生ずるに非ざるも、色有を受けざるに非ざるもの有り。謂わく、欲界より没し、色界の中有を起こすなり。(b)色有を受くるに非ざるも、色界に在りて死し生ぜざるに非ざるもの有り。謂わく、色界より没し、欲界の中有を起こすなり。(c)色界に在りて死し生ずるにも非ず、亦た色有を受くるにも非ざる有り。謂わく、欲界より没し、欲・無色界に生ずると、無色界より没し、無色・欲界に生ずるとなり。(d)色界に在りて死し生ぜざるにも非ず、亦た色有を受くるにも非ざる有り。謂わく、色界より没し、色界の中有・生有を起こすなり。

㊅九四二下

④—2—3　諸もろの、無色界に在りて死し生ずるに非ざる者、皆な無色有を受くるにも非ずや。

答う。諸もろの、無色界に在りて死し生ずる者、皆な無色有を受くるに非ざるも、無色有を受くるに非ずして、無色界に在りて死せざるに非ず、而も無色界に在りて生ずるに非ざる有り。謂わく、無色界より没し、欲・色界に生ずるなり。

④—2—4　諸もろの、欲界に在りて死し生ずるに非ざる者に、幾ばくか有る。

答う。五あり。謂わく、欲界の異生と、色・無色界の異生と聖者となり。

④—2—5　諸もろの、色界に在りて死し生ずるに非ざる者に、幾ばくか有る。

答う。六あり。謂わく、三界の異生と聖者となり。

④—2—6　諸もろの、無色界に在りて死し生ずるに非ざる者に、幾ばくか有る。
答う。四あり。謂わく、欲・色界の異生と聖者となり。

④—3—1　頗（すく）なくも欲界より死して、欲界に生ぜざる有りや。
答う。有り。謂わく、欲・色界の中有を起こすと、無色界に生ずると、或いは般涅槃（はつねはん）[一二]するとなり。

④—3—2　頗なくも欲界より死して、色界に生ぜざる有りや。
答う。有り。謂わく、欲・色界の中有を起こすと、無色界に生ずると、或いは般涅槃するとなり。

④—3—3　頗なくも欲界より死して、無色界に生ぜざる有りや。
答う。有り。謂わく、欲・色界の中有を起こすと、或いは般涅槃するとなり。

④—3—4　頗なくも色界より死して、色界に生ぜざる有りや。
答う。有り。謂わく、欲・色界の中有を起こすと、無色界に生ずると、或いは般涅槃するとなり。

④—3—5　頗なくも色界より死して、欲界に生ぜざる有りや。
答う。有り。謂わく、欲・色界の中有を起こすと、無色界に生ずると、或いは般涅槃するとなり。

④—3—6　頗なくも色界より死して、無色界に生ぜざる有りや。
答う。有り。謂わく、欲・色界の中有を起こすと、或いは般涅槃するとなり。

④—3—7　頗なくも無色界より死して、無色界に生ぜざる有りや。

一二　般涅槃　般涅槃すれば輪廻を離れるからもはや生ずる、すなわち三界のいずれかに生まれる、ことはない。

答う。有り。謂わく、欲・色界の中有を起こすと、或いは般涅槃するとなり。

④—3—8　頗なくも無色界より死して、欲界に生ぜざる有りや。

答う。有り。謂わく、欲・色界の中有を起こすと、無色界に生ずると、或いは般涅槃するとなり。

④—3—9　頗なくも無色界より死して、色界に生ぜざる有りや。

答う。有り。謂わく、欲・色界の中有を起こすと、無色界に生ずると、或いは般涅槃するとなり。

④—3—10　諸もろの、欲界より死して欲界に生ぜざる者に、幾ばくか有る。

答う。六あり。謂わく、三界の異生と聖者となり。

④—3—11　諸もろの、欲界より死して色界に生ぜざる者に、幾ばくか有る。

答う。六あり。謂わく、三界の異生と聖者となり。

④—3—12　諸もろの、欲界より死して無色界に生ぜざる者に、幾ばくか有る。

答う。四あり。謂わく、欲・色界の異生と聖者となり。

④—3—13　諸もろの、色界より死して色界に生ぜざる者に、幾ばくか有る。

答う。五あり。謂わく、欲界の異生と、色・無色界の異生と聖者となり。

④—3—14　諸もろの、色界より死して欲界に生ぜざる者に、幾ばくか有る。

答う。五あり。謂わく、欲界の異生と、色・無色界の異生と聖と者となり。

④—3—15　諸もろの、色界より死して無色界に生ぜざる者に、幾ばくか有る。

答う。三あり。謂わく、欲界の異生と、色界の異生と聖者となり。

㊅九四三上

④—3—16　諸もろの、無色界より死して無色界に生ぜざる者に、幾ばくか有る。
答う。二あり。謂わく、欲・色界の異生なり。
④—3—17　諸もろの、無色界より死して欲界に生ぜざる者に、幾ばくか有る。
答う。四あり。謂わく、無色界の異生と聖者と、欲・色界の異生となり。
④—3—18　諸もろの、無色界より死して色界に生ぜざる者に、幾ばくか有る。
答う。四あり。謂わく、無色界の異生と聖者と、欲・色界の異生となり。
④—4—1　頗なくも欲界より死して、三界に生ぜざる有りや。
答う。有り。謂わく、欲・色界の中有を起こすと、或いは般涅槃するとなり。
④—4—2　頗なくも色界より死して、三界に生ぜざる有りや。
答う。有り。謂わく、欲・色界の中有を起こすと、或いは般涅槃するとなり。
④—4—3　頗なくも無色界より死して、三界に生ぜざる有りや。
答う。有り。謂わく、欲・色界の中有を起こすと、或いは般涅槃するとなり。
④—4—4　諸もろの、欲界より死して三界に生ぜざる者に、幾ばくか有る。
答う。四あり。謂わく、欲・色界の異生と聖者となり。
④—4—5　諸もろの、色界より死して三界に生ぜざる者に、幾ばくか有る。
答う。三あり。謂わく、欲界の異生と、色界の異生と聖者となり。
④—4—6　諸もろの、無色界より死して三界に生ぜざる者に、幾ばくか有る。
答う。二あり。謂わく、欲・色界の異生なり。
④—5—1　頗なくも、未だ欲染[一三]を離れざるに命終（みょうじゅう）して、欲界に生ぜざる有りや。

一三　欲染　欲界の煩悩の総称。次下に出る色染・無色染も同様に解せよ。

答う。有り。謂わく、欲界の中有を起こすなり。

④―5―2　頗なくも、未だ色染を離れざるに命終して、欲・色界に生ぜざる有りや。

答う。有り。謂わく、欲・色界の中有を起こすなり。

④―5―3　頗なくも、未だ無色染を離れざるに命終して、三界に生ぜざる有りや。

答う。有り。謂わく、欲・色界の中有を起こすなり。

④―5―4　諸もろの、未だ欲染を離れざるに命終して、欲界に生ぜざる者に、幾ばくか有る。

答う。二あり。謂わく、欲界の異生と聖者となり。

④―5―5　諸もろの、未だ色染を離れざるに命終して、欲・色界に生ぜざる者に、幾ばくか有る。

答う。四あり。謂わく、欲・色界の異生と聖者となり。

④―5―6　諸もろの、未だ無色染を離れざるに命終して、三界に生ぜざる者に、幾ばくか有る。

答う。四あり。謂わく、欲・色界の異生と聖者となり。

④―6―1　此の中、欲界の異生と聖者は、幾ばくの随眠 随増し、幾ばくの結 繋すや。

答う。異生は、九十八随眠 随増し、九結 繋す。聖者は、[14]十随眠 随増し、[15]六結 繋す。

④―6―2　色界の異生と聖者は、幾ばくの随眠 随増し、幾ばくの結 繋すや。

答う。異生は、[16]六十二随眠 随増し、[17]六結 繋す。聖者は、六随眠 随増し、[18]三結 繋す。

④―6―3　無色界の異生と聖者は、幾ばくの随眠 随増し、幾ばくの結 繋すや。

答う。異生は、三十一随眠 随増し、六結 繋す。聖者は、三随眠 随増し、三結 繋す。

一四　十随眠　九十八随眠中、見所断の八十八を除く。すなわち、欲界の修所断四(貪・瞋・慢・無明)、色界の修所断三(貪・慢・無明)、無色界の修所断三(貪・慢・無明)。

一五　六結　見結・取結・疑結は見所断であるから除かれる。

一六　六十二随眠　九十八の中、欲界繋の三十六を除く。聖者の場合や無色界の場合も同様に推せよ。

一七　六結　恚結・嫉結・慳結は欲界にのみあるとされる。

一八　三結　恚・嫉・慳のほかに見・取・疑(いずれもただ見所断)をも除くから、愛・慢・無明の三結のみとなる。

(大)九四三中

結蘊 第二の中、十門納息 第四の一

①四十二の随増と ②二縁と③無間と④有〔尋〕と⑤根と⑥成・不〔成〕と⑦〔遍〕知と⑧證とを此の章にて願わくば具さに説かん

① [一]二十二根と、[二]十八界と、[三]十二処と、五蘊と、五取蘊と、[四]六界と、[五]有色・無色法と、[六]有見・無見法と、[七]有対・無対法と、有漏・無漏法と、有為・無為法と、過去・未来・現在法と、善・不善・無記法と、欲界・色界・無色界繫法と、[八]学・無学・非学非無学法と、見所断・修所断・無断法と、四諦と、四静慮と、[九]四無量と、四無色と、[一〇]八解脱と、[一一]八勝処と、[一二]十遍処と、[一三]八智と、[一四]三三摩地(samādhi)と、[一五]三重三摩地と、[一六]三結と、三不善根と、三漏と、四瀑流と、四軛と、四取と、四身繫と、五蓋と、五結と、五順下分結と、五順上分結と、五見と、六愛身と、七随眠と、九結と、九十八随眠とあり。

眼根乃至無色界の修所断の無明随眠には、九十八随眠の中に於て、一一幾ばくの随眠の随増すること有りや。

答う。〔二十二根の中〕[一七]眼根には、欲・色界の[一八]遍行と、及び修所断の随眠 随増す。耳・鼻・舌・身根も亦た爾り。[一九]女根には、欲界の遍行と、及び修所断の随眠 随増す。男・苦根も亦た爾り。[二〇]命根には、三界の遍行と、及び修所断の随眠 随増す。[二一]信等の五根

第二篇第四章

一 二十二根 眼・耳・鼻・舌・身・意の六、女・男・命の三、苦・楽・憂・喜・捨の五受根、信・勤・念・定・慧の五作根、および未知当知・已知・具知の三無漏根。(倶II 1)

二 十八界 眼・耳・鼻・舌・身・意の六根と、色・声・香・味・触・法の六境と、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の六識と。(倶I 14~16)

三 十二処 眼・耳・鼻・舌・身・意の六内処と、色・声・香・味・触・法の六外処と。(倶I 14~16)

四 六界 地・水・火・風・空・識の六界。

五 有色・無色 物質的な存在を成す法、すなわち色蘊に属する法、が有色法と呼ばれ、そうでない法が無色法と呼ばれる。(倶I 29)

六 有見・無見 眼に見えない存在を成す法が有見法、そうでない法が無見法。(倶I 29)

七 有対・無対 ある時間にある空間を占有しそこにおいては他の存在と抵触するごとき物質的存在を成す法を有対法といい、そうでない存在を成す法を無対法という。(倶I 29)

八 学・無学・非学非無学　有学の聖者に属する無漏法を学法といい、無学の阿羅漢に属する無漏法を無学法といい、その他の有為・無為の法を非学非無学法という。（倶Ⅱ39、Ⅳ33、92、93）

九 四無量　無量の有情に対して慈・悲・喜・捨の心を起こし、あるいは慈・悲・喜・捨の禅定に入ること。慈は他に楽を与えること、悲は他の苦を除くこと、喜は他が楽を得るのを喜ぶこと、捨は他に対して愛・憎の心をもたず中正平等であること。（倶Ⅷ29〜31）

一〇 八解脱　禅定の力によって貪欲や執著の心を捨てる八段階の実修。第一は心の中にいろ・かたちに貪著する想いがあるのを去るために、外界の色処を不浄と観ずる。第二は、そのような貪著の想いを去った者が、さらに外界の色処を不浄と観ずる。第三は、外界を不浄と観ずる実修を離れて、外界の浄なるを見てもそれに貪著する心を起こさない。第四〜第七は四無色定、第八は滅尽定によって外界の色法に対する貪著から解脱する。（倶Ⅷ32〜34）

一一 八勝処　欲界におけるいろ・かたちをもつものへの貪欲執著に打ち克つ実修の八段階。第一は内に色想を有する者が外に少しの美・醜の色をみて、それに対する貪著に打ち克つ。第二は同じく外に多くの美・醜の色を見て、それに対する貪著に打ち克つ。この二つは八解脱の第一に当たる。第三第四は内に色想を有しない者が同様に見て貪著に打つ克つ。この二つは八解脱の第二に当たる。第五〜第八は内に色想を有しない者が外に美しい青・黄・赤・白をみてそれに対する貪著に打つ克つ。この四つは八解脱の第三に当たる。ただ、八解脱は貪著の心を離れるに留まるが、八勝処は貪著の心に打ち克って外界の対象に対して自在を得るに至る。（倶Ⅷ35）

一二 十遍処　十種類のものがあらゆる場所に行きわたって間隙がないことを観想する実修。十とは地・水・火・風・青・黄・赤・白・空・識。（倶Ⅷ36）

一三 八智　法智・類智・他心智・世俗智・苦智・集智・滅智・道智。

一四 三三摩地　空・無願・無相の三つの三昧。（倶Ⅷ24、25）

一五 三重三摩地　空空・無願無願・無相無相の三つの三昧。（倶Ⅷ25、26）

一六 三結　以下、七随眠までの個々の名目は第一章の冒頭に出ている。

一七 眼根には…身根も亦た爾り　五根は無色界に存しない。（倶Ⅰ30）

一八 遍行　第一篇第二章註五三を見よ。三界の各々における見苦所断の五見と疑と無明と、および見集所断の邪見と見取と疑と無明とを十一遍行と数える。

一九 女根には…苦根も亦た爾り　女・男・苦・憂根は色・無色界には無い。（倶Ⅱ13）

二〇 命根　十四不相応行の一。法処に含まれる。欲・色・無色界を通じて存する。（倶Ⅰ13）

二一 信等の五根　法処に含まれ、三界を通じて存する。（倶Ⅰ13）

も亦た爾り。意根には、一切の随眠 随増す。捨根も亦た爾り。楽根には、色界の一切と、欲界の遍行と、及び修所断の随眠 随増す。喜根には、色界の一切と、欲界の無漏縁[二二]の疑と及び彼れと相応する無明とを除きて余の一切の随眠 随増す。憂根には、欲界の一切の随眠 随増す。三無漏根には、随眠の随増すること無し。

〔十八界の中〕眼・耳・鼻・舌・身と、色・声・触と、眼・耳・身識界には、欲・色界の遍行と、及び修所断の随眠 随増す。〔十二処の中〕眼・耳・鼻・舌・身〔処〕と、色・声・触処と、色蘊と、色取蘊と、〔六界[二三]の中〕前の五界と、有色と、有見と、有対の法も亦た爾り。香・味と、鼻・舌識界には、欲界の遍行と、及び修所断の随眠 随増す。香・味処も亦た爾り。意・法・意識界には、一切の随眠 随増す。意・法処と、後の四蘊と、後の四取蘊と、〔六界の中〕識界と、無色[二四]と、無見[二五]と、無対[二六]と、有漏と、有為との法と、過去・未来・現在と、非学非無学の法[二七]も亦た爾り。

無漏・無為法には、随眠の随増すること無し。学・無学・無断法[二八]も亦た爾り。

善と、及び修所断の法には、三界の遍行と、及び修所断の随眠 随増す。不善と、及び欲界繫の法には、欲界の一切の随眠 随増す。無記の法には、色・無色界の一切と、欲界の二部[二九]と、及び見集所断の遍行の随眠 随増す。

色界繫の法には、色界の一切の随眠 随増す。無色界繫の法には、無色界の一切の随眠 随増す。

見所断の法には、見所断の一切の随眠 随増す。

苦・集諦には、一切の随眠 随増す。滅・道諦には、随眠の随増すること無し。法・類

二二　無漏縁　見滅所断および見道所断の邪見と疑と、それらと相応する無明と不共の無明とを無漏縁（無漏を所縁とする、の意）の惑という。（倶V 14）

二三　六界　地・水・火・風・空・識の六界。　大九四三下

二四　無色　色・声・香・味・触・眼・耳・鼻・舌・身の十界以外の八界。（cf. 倶I 29）

二五　無見　見えないもの、の意。色界以外の十七界。（cf. 倶I 29）

二六　無対　抵触されることのないもの、の意。互に抵触して同一時間に同一空間を共有できない色・声・香・味・触・眼・耳・鼻・舌・身の十界が有対であり、それ以外の八界が無対である（倶I 29）

二七　非学非無学の法　有漏法および無為法をいう。（cf. 倶II 39）

二八　学・無学・無断法　学法とは有学の位における無漏法。無学法とは無学の位における無漏法。無断法は多分非所断法に同じと思われ、そうであればそれはすべての無漏法を意味する。

二九　二部　見苦所断と修所断と。

〔智〕と、苦・集・滅・道智と、三三摩地も亦た爾り。
四静慮には、色界の一切の随眠　随増す。
四無量には、色界の遍行と、及び修所断の随眠　随増す。前の三解脱と、八勝処と、前の八遍処と、他心智も亦た爾り。
四無色には、無色界の一切の随眠　随増す。
後の五解脱と、後の二遍処には、無色界の遍行と、及び修所断の随眠　随増す。
世俗智には、無漏縁の見を除ける余の一切の随眠　随増す。
三重三摩地には、三界の遍行と、及び修所断の随眠　随増す。
〔三結の中〕有身見結には、見苦所断の一切と、及び見集所断の遍行の随眠　随増す。有[三〇]身見順下分結と、〔五見の中〕有身見・辺執見も亦た爾り。〔三結の中〕戒禁取結には、見苦所断の一切と、及び見集所断の遍行と、見道所断の有漏縁の随眠　随増す。〔四取の中〕戒禁取と、及び戒禁取身繫と、〔戒禁取〕順下分結と、〔五見の中〕戒禁取も亦た爾り。
〔三結の中〕疑結には、見所断の有漏縁と、及び疑と相応する無漏縁の無明の随眠　随増す。疑順下分結と、〔七随眠の中〕疑随眠と、〔九結の中〕疑結も亦た爾り。
〔三不善根の中〕貪・瞋不善根には、欲界の有漏縁の随眠　随増す。前の二身繫と、前の二蓋と、〔五結の中〕瞋結と、前の二順下分結と、〔七随眠の中〕前の二随眠と、〔九結の中〕恚結も亦た爾り。癡不善根には、欲界の、無漏縁の無明を除ける余の一切の随眠　随増す。
〔三漏の中〕欲漏には、欲界の一切の随眠　随増す。欲瀑流・軛・取と、惛沈睡眠・掉挙蓋も亦た爾り。〔三漏の中〕有漏には、色・無色界の一切の随眠　随増す。有瀑流・軛と、

三〇　有身見順下分結　五順下分結の一なる有身見。

㊅九四四上

我語取も亦た爾り。無明漏には、無漏縁の無明を除ける一切の随眠 随増す。無明瀑流・軛と、〔七随眠の中〕無明随眠と、〔九結の中〕無明結も亦た爾り。

〔四瀑流・軛の中〕見瀑流・軛には、見所断の有漏縁と、及び見と相応する無漏縁の無明の随眠 随増す。〔四取の中〕見取と、〔五見の中〕邪見と、〔七随眠の中〕見随眠と、〔九結の中〕見結も亦た爾り。

〔四身繋の中〕此実執身繋には、見所断の有漏縁の随眠 随増す。〔五見の中〕見取〔見〕と、〔九結の中〕取結も亦た爾り。

〔五蓋の中〕悪作（あくさ）蓋（がい）には、欲界の遍行と、及び修所断の随眠 随増す。〔五結の中〕嫉・慳結と、鼻・舌触所生愛身と、〔九結の中〕嫉・慳結も亦た爾り。疑蓋には、欲界の見所断の有漏縁と、及び疑と相応する無漏縁の無明の随眠 随増す。

〔五結の中〕貪・慢結には、三界の有漏縁の随眠 随増す。意触所生愛身と、慢随眠と、〔九結の中〕愛・慢結も亦た爾り。

〔五順上分結の中〕色貪には、色界の遍行と、及び修所断の随眠 随増す。無色貪には、無色界の遍行と、及び修所断の随眠 随増す。後の三順上分結には、色・無色界の遍行と、及び修所断の随眠 随増す。

〔六愛身の中〕眼・耳・身触所生愛身には、欲・色界の遍行と、及び修所断の随眠 随増す。

〔七随眠の中〕有貪随眠には、色・無色界の有漏縁の随眠 随増す。

〔九十八随眠の中〕欲界の見苦所断の随眠には、欲界の見苦所断の一切と、及び見集所

断の遍行の随眠 随増す。欲界の見集所断の随眠には、欲界の見集所断の一切と、及び見苦所断の遍行の随眠 随増す。欲界の見滅所断の随眠には、欲界の見滅所断の、無漏縁の不共無明（ふぐうむみょう）を除ける余の一切と、及び遍行の随眠 随増す。欲界の見道所断の随眠には、欲界の見道所断の、無漏縁の不共無明を除ける余の一切と、及び遍行の随眠 随増す。欲界の修所断の随眠には、欲界の修所断の一切と、及び遍行の随眠 随増す。色・無色界の五部の随眠を広説（こうぜつ）するも亦た爾り。差別（しゃべつ）は、応に自界を説くべきなり。

② 眼根乃至無色界の修所断の無明随眠の縁識[三一]と及び縁縁識[三二]には、九十八随眠の中に於て、一一幾ばくの随眠 随増すや。

答う。〔二十二根の中〕眼根の縁識には、欲・色界の三部[三三]と、無色界の遍行及び修所断、縁縁識には、三界の四部[三四]なり。耳・鼻・舌・身根も亦た爾り。女根の縁識には、欲界の三部と、色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の四部と、色界の三部と、無色界の遍行と及び修所断となり。男・苦根も亦た爾り。命根の縁識には、三界の三部、縁縁識には三界の四部なり。意根の縁識と縁縁識には、有為縁[三五]なり。捨根も亦た爾り。楽根の縁識には、欲界の四部と、色界の有為縁と、無色界の二部[三六]と及び遍行、縁縁識には、欲・無色界の四部と、色界の有為縁なり。喜根の縁識には、欲・色界の有為縁と、無色界の二部と及び遍行、縁縁識には、欲・色界の有為縁と、無色界の四部なり。憂根の縁識には、欲界の有漏縁と、色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の有為縁と、色界の三部と、無色界の遍行と及び修所断となり。信等の五根の縁識と縁縁識には、三界の四部なり。三無漏

三一 縁識　境を縁ずる識。

三二 縁縁識　縁識を境として縁ずる識。　（大九四四中）

三三 三部　見苦所断・見集所断・修所断。

三四 四部　五部の中、見滅所断を除く。

三五 有為縁　有為法を所縁とする、の意。

三六 無色界の二部　無色界の見道所断および修所断の煩悩。

根の縁識には、[三七]三界の二部と及び遍行、縁縁識には、三界の四部なり。

〔十八界の中〕眼・耳・鼻・舌・身と、色・声・触界の縁識には、欲・色界の三部と、無色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、三界の四部なり。〔十二処の中〕眼・耳・鼻・舌・身〔処〕と、色・声・触処と、色取蘊と、〔六界の中〕前の五界と、有見と、有対の法も亦た爾り。香・味と、鼻・舌識界の縁識には、欲界の三部と、色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の四部と、色界の三部と、無色界の遍行と及び修所断となり。香・味処も亦た爾り。眼・耳・身識界の縁識には、欲・色界の三部、縁縁識には、欲・色界の四部と、無色界の二部と及び遍行となり。意界と意識界の縁識と縁縁識には、有為縁なり。意処と、後の四蘊と、有為の法と、過去・未来・現在の法も亦た爾り。法界の縁識には、三界の一切、縁縁識には、有為縁なり。法処と、無色と、無見と、無対と、善の法も亦た爾り。

〔五蘊の中〕色蘊の縁識には、欲・色界の四部と、無色界の二部と及び遍行、縁縁識には、三界の四部なり。有色の法も亦た爾り。

〔五取蘊の中〕と後の四取蘊の縁識には、有漏縁、縁縁識には有為縁なり。〔六界の中〕と識界と、有漏法と、見所断の法も亦た爾り。

[三八]無漏法の縁識には、三界の三部と及び遍行、縁縁識には、有為縁なり。無断法も亦た爾り。

無為法の縁識には、三界の二部と及び遍行、縁縁識には、有為縁なり。

不善法の縁識には、欲界の有漏縁と、色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の有為縁と、色界の三部と、無色界の遍行と及び修所断となり。欲界繫の法も亦た爾り。無記法の縁識には、欲界の三部と、色・無色界の有漏縁、縁縁識には、欲界の四部と、色・無

三七　三界の二部　欲・色・無色界の見道所断と修所断との煩悩。

㊅九四四下

三八　無漏法の縁識・縁縁識　上記三無漏根のそれに同じ。

色界の有為縁なり。
色界繋の法の縁識には、欲界の三部と、色界の有漏縁と、無色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の三部と、色界の有為縁と、無色界の四部なり。無色界繋の法の縁識には、欲・色界の三部と、無色界の有漏縁、縁縁識には、欲界の三部と、色界の四部と、無色界の有為縁となり。

学・無学の法の縁識には、三界の二部及び遍行、縁縁識には、三界の四部なり。非学非無学の法の縁識には、三界の四部と及び見道所断の有漏縁、縁縁識には、有為縁なり。修所断の法の縁識には、三界の三部、縁縁識には、三界の四部なり。

〔四諦の中〕苦・集諦の縁識には、有漏縁、縁縁識には有為縁なり。世俗智も亦た爾り。滅諦の縁識には、三界の二部と及び遍行、縁縁識には、有為縁なり。道諦の縁識には、三界の二部と及び遍行、縁縁識には、三界の四部なり。苦・集・滅・道智と、及び三三摩地も亦た爾り。

四静慮の縁識には、欲界の四部と、色界の有為縁と、無色界の二部と及び遍行、縁縁識には、欲・無色界の四部と、色界の有為縁なり。

〔四無量の中〕慈・悲・捨無量の縁識には、欲・色界の三部と、無色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の三部と、色・無色界の四部なり。[三九]浄解脱と、後の四勝処と、前の八遍処も亦た爾り。喜無量の縁識には、欲・色界の三部、縁縁識には、欲界の三部と、色界の四部と、無色界の二部と及び遍行となり。初の二解脱と、前の四勝処も亦た爾り。

〔四無色の中〕と前の三無色の縁識と縁縁識には、欲界の三部と、色界の四部と、無色

三九　浄解脱　浄色を観じて貪を起こらぬようにする三昧。八解脱の第三の内容。

界の有為縁となり。非想非非想処の縁識には、欲・色界の三部と、無色界の有漏縁、縁縁識には、欲界の三部と、色界の四部と、無色界の有為縁となり。

〔八解脱の中〕空・識無辺処と無所有処との解脱の縁識と縁縁識には、欲界の三部と、色・無色界の四部なり。後の二解脱と及び後の二遍処の縁識には、三界の三部、縁縁識には、欲界の三部と、色・無色界の四部なり。

〔八智の中〕法智の縁識には、欲界の二部[四〇]及び遍行と、色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の四部と、色界の三部と、無色界の遍行と及び修所断となり。類智の縁識には、[四一]色・無色界の二部と及び遍行と、欲界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の三部と色・無色界の四部なり。他心智の縁識には、欲・色界の四部と、無色界の二部と及び遍行、縁縁識には、三界の四部なり。

三重三摩地の縁識には、三界の三部、縁縁識には、三界の四部なり。

〔三結の中〕有身見結の縁識には、三界の三部、縁縁識には、三界の四部なり。有身見順下分結と、〔五見の中〕有身見・辺執見も亦た爾り。戒禁取結の縁識には、三界の三部と及び見道所断の有漏縁、縁縁識には、三界の四部なり。〔四取の中〕戒禁取と、及び戒禁取身繫と、戒禁取順下分結と、〔五見の中〕戒禁取も亦た爾り。疑結の縁識には、有漏縁、縁縁識には、有為縁なり。無明漏・瀑流・軛と、〔四取の中〕見取と、此実執身繫と、〔五結の中〕貪・慢結と、疑順下分結と、〔五見の中〕邪見・見取と、意触所生愛身と、〔七随眠の中〕慢・無明・見・疑随眠と、〔九結の中〕愛・慢・無明・見・取・疑結も亦た爾り。

四〇　欲界の二部　欲界の見道所断および修所断の煩悩。
四一　色・無色界の二部　上界の見道所断および修所断の煩悩。

三不善根と及び欲漏の縁識には、欲界の有漏縁と、色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の有為縁と、色界の三部と、無色界の遍行と及び修所断となり。欲瀑流・軛・取と、前の二身繫と、悪作を除ける余の蓋と、〔五結の中〕瞋結と、前の二順下分結と、〔七随眠の中〕欲貪・瞋恚随眠と、〔九結の中〕恚結も亦た爾り。

〔三漏の中〕有漏の縁識には、欲界の三部と、色・無色界の有漏縁、縁縁識には、欲界の三部と、色・無色界の有為縁なり。有瀑流・軛と、〔五見の中〕我語取と、〔七随眠の中〕有貪随眠も亦た爾り。

〔五蓋の中〕悪作蓋の縁識には、欲界の三部と、色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の四部と、色界の三部と、無色界の遍行と及び修所断となり。〔五結の中〕嫉・慳結と、鼻・舌触所生愛身と、〔九結の中〕嫉・慳結も亦た爾り。

㊅九四五中

〔五順上分結の中〕色貪順上分結の縁識には、欲・色界の三部と、無色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の三部と、色・無色界の四部なり。後の四順上分結の縁識には、三界の三部、縁縁識には、欲界の三部と、色・無色界の四部なり。

〔六愛身の中〕眼・耳・身触所生愛身の縁識には、欲・色界の三部、縁縁識には、欲・色界の四部と、無色界の遍行と及び修所断となり。

〔九十八随眠の中〕欲界の見苦・〔見〕集〔所断〕と及び修所断の随眠の縁識には、欲界の三部と、色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の四部と、色界の三部と、無色界の遍行と及び修所断となり。欲界の見滅所断の随眠の縁識には、欲界の三部と及び見滅所断の有漏縁と、色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の有為縁と、色界の三部と、無

色界の遍行と及び修所断となり。欲界の見道所断の随眠の縁識には、欲界三部と及び見道所断の有漏縁と、色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の四部と、色界の三部と、無色界の遍行と及び修所断となり。色界の見苦・〔見〕集〔所断〕と及び修所断の随眠の縁識には、欲・色界の三部と、無色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の三部と、色・無色界の四部なり。色界の見滅所断の随眠の縁識には、欲・色界の三部と、及び色界の見滅所断の有漏縁と、無色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の三部と、色界の有為縁と、無色界の四部なり。色界の見道所断の随眠の縁識には、欲・色界の三部と、及び色界の見道所断の有漏縁と、無色界の遍行と及び修所断、縁縁識には、欲界の三部と、色・無色界の四部なり。無色界の見苦・〔見〕集〔所断〕と及び修所断の随眠の縁識には、三界の三部、縁縁識には、欲界の三部と、色・無色界の四部なり。無色界の見滅所断の随眠の縁識には、三界の三部と、及び無色界の見滅所断の有漏縁、縁縁識には、欲界の三部と、色界の四部と、無色界の有為縁となり。無色界の見道所断の随眠の縁識には、三界の三部と、及び無色界の見道所断の有漏縁、縁縁識には、欲界の三部と、色・無色界の四部なり。

㊅九四五下

説一切有部発智論 巻の五

阿毘達磨発智論

尊者迦多衍尼子 造
三蔵法師玄奘 詔を奉じて訳す

巻の第六

結蘊 第二の中、十門納息 第四の二

③ 意根乃至無色界の修所断の無明随眠は、[四二]三界の十五部の心の中に於て、一一等無間に幾ばくの心をか生ずる。

答う。意根は、等無間に十五心を生ず。捨と及び信等の五根も亦た爾り。楽根は、等無間に十[四三]一心を生ず。苦根は、等無間に五[四四]心を生ず。憂根も亦た爾り。喜根は、等無間に十[四五]心を生ず。未知当知根は、等無間に心を生ぜず。已知・具知根は、等無間に三[四六]心を生ず。眼・耳・身識界は、等無間に十心を生ず。鼻・舌識界は、等無間に五[四七]心を生ず。不善の

四二 三界十五部　欲・色・無色界のおのおのについて見苦所断・見集所断・見滅所断・見道所断・無漏の五部の心を数える。つごう十五部の心に無漏心を加えて十六心となる。
四三 十一心　十五心の中、無色界の見苦・集・滅・道所断を除く。
四四 五心　欲界の五部の心。
四五 十心　欲・色界の五部の心。
四六 三心　欲・色・無色界の修所断の善心。
四七 五心　色界の五部を除く。鼻・舌根は色界に存しない。

法も亦た爾り。意・法・意識界は、等無間に十五心を生ず。意・法処と、後の四蘊と、後の四取蘊と、〔六界の中〕識界と、無色・無見・無対・有漏・有為法と、現在と、善・無記と、三界繋と、非学非無学と、見・修所断との法も亦た爾り。

無漏法は、等無間に三心を生ず。学・無学と、無断の法も亦た爾り。

過去の法は、等無間に二[48]心を生ず。未来の法は、心を生ぜず。

苦・集諦は、等無間に十五心を生ず。四静慮と、四無色と、世俗智も亦た爾り。道諦は、等無間に三心を生ず。類・苦・集・滅・道智と、三三摩地も亦た爾り。

四無量は、等無間に六[49]心を生ず。第一・第二・第[50]四・第五解脱と、前の四勝処と、他心智も亦た爾り。

第三・第六・第七解脱は、等無間に五[51]心を生ず。後の四勝処と、十遍処も亦た爾り。第八解脱は、心を生ぜず。

法智は、等無間に二[52]心を生ず。

三結は、等無間に十五心を生ず。有・無明漏と、有見・無明瀑流・軛と、後の三取と、後の二身繋と、貪・慢結と、後の三順下分結と、後の四順上分結と、五見と、意触所生愛身と、後の五随眠と、愛等の六結も亦た爾り。

三不善根と、及び欲漏は、等無間に五[53]心を生ず。欲瀑流・軛・取と、前の二身繋と、五蓋と、〔五結の中〕瞋・嫉・慳結と、前の二順下分結と、鼻・舌触所生愛身と、欲貪・瞋恚随眠と、〔九結の中〕恚・嫉・慳結も亦た爾り。

[54]色・無色貪順上分結は、等無間に二[55]心を生ず。後の四順上分結は、等無間に三[56]心を生ず。

四八　二心　過去の法の等無間に心を生ずるのは出定の場合に限る。すなわち滅尽定より出でるとき無色界の修所断の心を、無想果あるいは無想定より出でるとき色界の修所断の心を生ずる。

四九　六心　色界の五部の心と欲界の修所断の心と。

五〇　第四・第五解脱　等無間に六心を生ずることは同様であるが、その六心は無色界の五部と色界の修所断である。

五一　五心　色界の五部の心。ただし、『大毘婆沙論』は、第六・第七解脱を挙げぬ。また、十遍処の中、最後の二の等無間に生ずる五心は、無色界の五部の心である。

五二　二心　欲・色界の修所断。　(大)九四六上

五三　五心　欲界の五部の心。

五四　色・無色貪　次下に「四順上分結」とあるから、単に「色貪」とすべきであろうと思われる。『大毘婆沙論』も「色貪」としている。『八犍度論』には相当文がない。

五五　二心　欲・色界の修所断。

五六　三心　三界の修所断。

眼・耳・身触所生愛身も亦た爾り。

欲界の三十六随眠は、等無間に五心を生ず。色界の三十一随眠は、等無間に十心を生ず。無色界の三十一随眠は、等無間に十五心を生ず。

④　眼根乃至無色界の修所断の無明随眠の、一一増す所の随眠は[五七]、当に有尋有伺と言うべしや、無尋唯伺なりや、無尋無伺なりや。

答う。応に言うべし。〔二十二根の中〕眼根の増す所の随眠は三を具う。耳・鼻・舌・身・命・意・楽・喜と、信等の五根の増す所の随眠も亦た爾り。女根の増す所の随眠は有尋有伺なり。男・苦・憂根の増す所の随眠も亦た爾り。

〔十八界の中〕眼・耳・鼻・舌・身と、色・声・触と、意・法・意識界の増す所の随眠は三を具う。〔十二処の中〕眼・耳・鼻・舌・身と、色・声・触と、意・法処と、五蘊と、五取蘊と、六界と、有色・無色と、有見・無見と、有対・無対と、有漏と、有為の法と、過去・未来・現在と、善・無記と、色界繫と、非学非無学と、見・修所断の法の増す所の随眠も亦た爾り。香・味と、鼻・舌識界の増す所の随眠は有尋有伺なり。香・味処と、不善と、欲界繫の法の増す所の随眠も亦た爾り。眼・耳・身識界の増す所の随眠は、或いは有尋有伺、或いは無尋唯伺なり。

無色界繫の法の増す所の随眠は、無尋無伺なり。

苦・集諦の増す所の随眠は三を具う。四無量と、初の二解脱と、前の四勝処と、他心・世俗智と、三重三摩地の増す所の随眠も亦た爾り。

五七　一一増す所の…無尋無伺なりや　ここに「増す」とは随眠が随増することをいう。随眠はある法を所縁として、あるいはある法と相応して、随増する。その法が欲界・未至定・初静慮のいずれかの地に属するとき、随増する煩悩は有尋有伺である。その法が静慮中間(中間定)地に属するとき、随増する随眠は無尋唯伺である。その法が第二静慮地以上に属するとき、随増する随眠は無尋無伺である。

初静慮の増す所の随眠は、或いは有尋有伺、或いは無尋唯伺なり。後の三静慮の増す所の随眠は無尋無伺なり。四無色と、後の六解脱と、後の四勝処と、十遍処の増す所の随眠も亦た爾り。

㊅九四六中 三結の増す所の随眠は三を具う。有・無明漏と、後の三瀑流・軛・取と、後の二身繫と、〔五結の中〕貪・慢結と、後の三順下分結と、無色貪を除ける余の四順上分結と、五見と、第六愛身と、〔七随眠の中〕後の五随眠と、〔九結の中〕愛等の六結の増す所の随眠も亦た爾り。

三不善根の増す所の随眠は有尋有伺なり。欲漏・瀑流・軛・取と、前の二身繫と、五蓋と、〔五結の中〕瞋・嫉・慳結と、前の二順下分結と、鼻・舌触所生愛身と、〔七随眠の中〕初の二随眠と、〔九結の中〕恚・嫉・慳結の増す所の随眠も亦た爾り。

無色貪〔順上分結〕の増す所の随眠は無尋無伺なり。

眼・耳・身触所生愛身の増す所の随眠は、或いは有尋有伺、或いは無尋唯伺なり。

欲界の三十六随眠の増す所の随眠は有尋有伺なり。色界の三十一随眠の増す所の随眠は三を具う。無色界の三十一随眠の増す所の随眠は無尋無伺なり。

⑤ 眼根乃至無色界の修所断の無明随眠の、[五八]一一増す所の随眠は、当に楽根・苦根・喜根・憂根・捨根と相応すと言うべしや。

答う。応に言うべし。〔二十二根の中〕眼根の増す所の随眠は、四根と相応し、苦根を除く。耳・鼻・舌・身・命・楽・捨〔根〕と、信等の五根の増す所の随眠も亦た爾り。女根

五八　一一増す所の…相応すと言うべしや　前註に準じて理解すべきである。楽根すなわち楽受は欲界と初・第二・第三静慮地にあり、喜根すなわち喜受は欲界と初・第二静慮地にあり、苦根すなわち苦受と憂根すなわち憂受は欲界にのみあり、捨根すなわち捨受はすべての地にある、ということ(倶Ⅷ2)と、苦根と第三静慮地以外の楽根とは身受であって五識相応であり、憂根と喜根は心受であって意識相応であり、捨根は身受でも心受でもある、ということ(倶Ⅱ7、8)とを知れば、以下の所説は解し得るであろう。

の増す所の随眠は、三根と相応し、楽・苦根を除く。男・喜・憂根の増す所の随眠も亦た爾り。意根の増す所の随眠は、五根と相応す。苦根の増す所の随眠は、四根と相応し、楽根を除く。

〔十八界の中〕眼・耳・鼻・舌・身と及び意識界の増す所の随眠は、四根と相応し、苦根を除く。〔十二処の中〕眼・耳・鼻・舌・身処と、見所断の法の増す所の随眠も亦た爾り。色・声・香・味・触と、眼・耳・鼻・舌・身識と、意・法界の増す所の随眠は、五根と相応す。色・声・香・味・触〔処〕と意・法処と、五蘊と、五取蘊と、六界と、有色・無色と、有見・無見と、有対・無対と、有漏と、有為の法と、過去・未来・現在と、善・不善・無記と、欲界繋と、非学非無学と、修所断の法の増す所の随眠も亦た爾り。

色界繋の法の増す所の随眠は、三根と相応し、苦・憂根を除く。無色界繋の法の増す所の随眠は、捨根と相応す。

苦・集諦の増す所の随眠は、五根と相応す。世俗智の増す所の随眠も亦た爾り。

初静慮の増す所の随眠は、三根と相応し、苦・憂根を除く。慈・悲・捨無量と、他心智の増す所の随眠も亦た爾り。第二静慮の増す所の随眠は、喜・捨根と相応す。喜無量と、初の二解脱と、前の四勝処の増す所の随眠も亦た爾り。第三静慮の増す所の随眠は、楽・捨根と相応す。第四静慮の増す所の随眠は、捨根と相応す。四無色と、後の六解脱と、後の四勝処と、十遍処の増す所の随眠も亦た爾り。

三重三摩地の増す所の随眠は、四根と相応し、苦根を除く。

三結の増す所の随眠は、四根と相応し、苦根を除く。貪不善根と、見瀑流・軛・取と、

㊅九四六下

〔四取の中〕戒禁取と、貪欲・戒禁取・此実執身繋と、貪欲蓋と、〔五結の中〕貪・慢結と、貪欲・有身見・戒禁取・疑順下分結と、五見と、六愛身と、〔七随眠の中〕欲貪・慢・見・疑随眠と、〔九結の中〕愛・慢・見・取・疑結の増す所の随眠も亦た爾り。

〔三不善根の中〕瞋不善根の増す所の随眠は、四根と相応し、楽根を除く。瞋恚身繋と、瞋恚蓋と、〔五結の中〕瞋結と、瞋恚順下分結と、〔七随眠の中〕瞋恚随眠と、〔九結の中〕恚結の増す所の随眠も亦た爾り。癡不善根の増す所の随眠は、五根と相応す。欲・無明漏・瀑流・軛と、欲取と、惛沈・掉挙蓋と、無明随眠・結の増す所の随眠も亦た爾り。

〔三漏の中〕有漏の増す所の随眠は、三根と相応し、苦・憂根を除く。有瀑流・軛と、我語取と、色貪・掉挙・慢・無明順上分結と、有貪随眠の増す所の随眠も亦た爾り。

〔五蓋の中〕睡眠・悪作・疑蓋の増す所の随眠は、三根と相応し、楽・苦根を除く。〔五結の中〕嫉・慳結と、及び九結の中の嫉・慳結の増す所の随眠も亦た爾り。

無色貪〔順上分結〕の増す所の随眠は、捨根と相応す。

〔九十八随眠の中〕欲界の見所断の一切と、及び修所断の慢随眠の増す所の随眠は、三根と相応し、楽・苦根を除く。欲界の修所断の貪随眠の増す所の随眠は、四根と相応し、苦根を除く。欲界の修所断の瞋随眠の増す所の随眠は、四根と相応し、楽根を除く。欲界の修所断の無明随眠の増す所の随眠は、五根と相応す。色界の三十一随眠の増す所の随眠は、三根と相応し、苦・憂根を除く。無色界の三十一随眠の増す所の随眠は、捨根と相応す。

⑥　眼根乃至無色界の修所断の無明随眠は、誰れか成就[五九]し、誰れか成就せざる。

五九　成就　ある者がある法を成就するとは、かれがその法を具有しているという意味。

答う。〔二十二根の中〕眼根は、色界と、及び欲界の已に得て失わざるもの 成就し、無色界なると、及び欲界の未だ得ざると、已に失えるは成就せず。耳・鼻・舌根も亦た爾り。身根は、欲・色界なるは成就し、無色界なるは成就せず。女・男根は、欲界の已に得て失わざるもの 成就し、[六〇]色・無色界なると、及び欲界の未だ得ざると、已に失えるは成就せず。命・意・捨根は、一切の有情 皆な成就す。楽根は、[六一]遍浄以下と及び聖者の上[六二]に生ずるもの 成就し、異生の上に生ずるは成就せず。苦根は、欲界なるは成就し、色・無色界なるは成就せず。喜根は、[六三]極光浄以下と及び聖者の上に生ずるもの 成就し、異生の上に生ずるは成就せず。憂根は、未だ欲染を離れざるもの 成就し、已に欲染を離るるは成就せず。信等の五根は、善根を断たざるもの 成就し、已に善根を断てるは成就せず。三無漏根は、已に得て失わざるもの 成就し、未だ得ざると、已に失えるは成就せず。

〔十八界の中〕眼・耳・鼻・舌界は、色界なると、及び欲界の已に得て失わざるもの 成就し、無色界なると、及び欲界の未だ得ざると、已に失えるは成就せず。眼・耳・鼻・舌処も亦た爾り。身・色・声・触界は、欲・色界なるは成就し、無色界なるは成就せず。身・色・声・触処と、色取蘊と、前の五界と、有見・有対の法と、欲・色界繫の法も亦た爾り。香・味と、鼻・舌識界は、欲界なるは成就し、色・無色界なるは成就せず。香・味処も亦た爾り。眼・耳・身識界は、[六四]梵世以下と、及び上の三静慮に生じて現在前するもの 成就し、現在前せざると、及び無色界なるは成就せず。意・法・意識界は、一切の有情 皆な成就す。意・法処と、後の四蘊と、四取蘊と、〔六界の中〕識界と、無色と、無見と、無対と、有漏・無漏と、有為・無為の法と、過去・未来・現在と、無記と、無色界繫と、

(大)九四七上

六〇 色　色界に女・男根は存しない。(倶II 13)

六一 遍浄　第三禅天の最上処。遍浄以下とは第三禅天以下のすべての天衆(天界の有情)を指す。

六二 上　上界、すなわち色・無色界。

六三 極光浄　第二禅天の最高処。極光浄以下とは第二禅天以下のすべての天衆を指す。

六四 梵世　初禅天をいう。

非学非無学と、修所断と、無断の法も亦た爾り。

色蘊は、欲・色界なると、及び無色界の聖者[六五] 成就し、無色界の異生は成就せず。有色法も亦た爾り。

善法は、善根を断たざるもの 成就し、已に善根を断てるは成就せず。不善法は、未だ欲染を離れざるもの 成就し、已に欲染を離るるは成就せず。

学・無学の法は、已に得て失わざるもの 成就し、未だ得ざると、已に失えるは成就せず。見所断の法は、道類智の未だ已生ならざるもの 成就し、已に生ぜる[六六]は成就せず。

苦・集諦は、一切の有情 皆な成就す。非想非非想処と、世俗智も亦た爾り。滅諦は、已に得て失わざるもの 成就し、未だ得ざると、已に失えるは成就せず。四無量と、八解脱と、八勝処と、十遍処と、他心智も亦た爾り。道諦は、已に得たるもの 成就し、未だ得ざるは成就せず。法・類・苦・集・滅・道智と、三三摩地と、三重三摩地も亦た爾り。

初静慮は、梵世以下と及び聖者の上に生ずるもの 成就し、異生の上に生ずるは成就せず。第二静慮は、極光浄以下と及び聖者の上に生ずるもの 成就し、異生の上に生ずるは成就せず。第三静慮は、遍浄以下と、及び聖者の上に生ずるもの 成就し、異生の上に生ずるは成就せず。第四静慮は、広果以下と、及び聖者の上に生ずるもの 成就し、異生の上に生ずるは成就せず。

空無辺処は、空無辺処以下と、及び聖者の上に生ずるもの 成就し、異生の上に生ずるは成就せず。識無辺処は、識無辺処以下と、及び聖者の上に生ずるもの 成就し、異生の上に生ずるは成就せず。無所有処は、無所有処以下と、及び聖者の上に生ずるもの 成就

(大)九四七中

六五　無色界の聖者　無色界には十八界のうち意界・法界・意識界の三つしか存在しないから、無色界の色蘊とは法処(すなわち法界)所摂の色である無表色のみ。無色界の聖者が成就する色蘊とは聖者が具有する戒体としての無表色。

六六　已に生ぜる　道類智が生じたとき、行者は修道に入る。すなわち見所断はすべて断ぜられている。

し、異生の上に生ずるは成就せず。

〔三結の中〕有身見結は、苦類智[六七]の未だ已生ならざるもの　成就し、已に生ぜるは成就せず。有身見順下分結と、〔五見の中〕有身見・辺執見も亦た爾り。戒禁取・疑結は、道類智[六八]の未だ已生ならざるもの　成就し、已に生ぜるは成就せず。見瀑流・軛・取と、〔四取の中〕戒禁取と、後の二身繫と、戒禁取・疑順下分結と、〔五見の中〕後の三見と、〔七随眠の中〕見・疑随眠と、〔九結の中〕見・取・疑結も亦た爾り。

三不善根は、未だ欲染を離れざるもの　成就し、已に欲染を離るるは成就せず。〔三漏の中〕欲漏と、〔欲〕瀑流・軛・取と、前の二身繫と、前の四蓋と、〔五結の中〕瞋・嫉・慳結と、前の二順下分結と、鼻・舌触所生愛身と、〔七随眠の中〕欲貪・瞋恚随眠と、〔九結の中〕恚・嫉・慳結も亦た爾り。

〔三漏の中〕有・無明漏は、未だ無色染を離れざるもの　成就し、已に無色染を離るるは成就せず。有・無明瀑流・軛と、〔四取の中〕我語取と、〔五結の中〕貪・慢結と、後の四順上分結と、意触所生愛身と、〔七随眠の中〕有貪・慢・無明随眠と、〔九結の中〕愛・慢・無明結も亦た爾り。

〔五蓋の中〕疑蓋[六九]は、未だ欲染を離れざる異生と、及び未だ欲染を離れざる聖者にして道法智の未だ已生ならざるもの　成就し、已に欲染を離るる異生と聖者と、及び未だ欲染を離れざる聖者にして道法智の已に生ぜるは成就せず。

色貪順上分結は、未だ色染を離れざるもの　成就し、已に色染を離るるは成就せず。

眼・耳・身触所生愛身は、未だ梵世染を離れざるもの　成就し、已に梵世染を離るるは

六七　苦類智の未だ已生ならざるもの　有身見と辺執見とはただ見苦所断である。

六八　道類智の未だ已生ならざるもの　疑・戒禁取・邪見・見取はすべて見所断である。前出註六六参照。

六九　疑蓋　前出の疑結などと異なるのは、疑蓋といえばただ欲界の疑のみを指すからである。(倶Ⅴ58)

㊅九四七下

成就せず。

〔九十八随眠の中〕欲界の見苦所断の随眠は、未だ欲染を離れざる異生と、及び未だ欲染を離れざる聖者にして苦法智の未だ已生ならざるもの成就し、已に欲染を離るる異生と聖者と、及び未だ欲染を離れざる聖者にして苦法智の已に生ぜるは成就せず。欲界の見集所断の随眠は、未だ欲染を離れざる異生と、及び未だ欲染を離れざる聖者にして集法智の未だ已生ならざるもの成就し、已に欲染を離るる異生と聖者と、及び未だ欲染を離れざる聖者にして集法智の已に生ぜるは成就せず。欲界の見滅所断の随眠は、未だ欲染を離れざる異生と、及び未だ欲染を離れざる聖者にして滅法智の未だ已生ならざるもの成就し、已に欲染を離るる異生と聖者と、及び未だ欲染を離れざる聖者にして滅法智の已に生ぜるは成就せず。欲界の見道所断の随眠は、未だ欲染を離れざる異生と、及び未だ欲染を離れざる聖者にして道法智の未だ已生ならざるもの成就し、已に欲染を離るる異生と聖者と、及び未だ欲染を離れざる聖者にして道法智の已に生ぜるは成就せず。欲界の修所断の随眠は、未だ欲染を離れざるもの成就し、已に欲染を離るるは成就せず。

色界の見苦所断の随眠は、未だ色染を離れざる異生と、及び未だ色染を離れざる聖者にして苦類智の未だ已生ならざるもの成就し、已に色染を離るる異生と聖者と、及び未だ色染を離れざる聖者にして苦類智の已に生ぜるは成就せず。色界の見集所断の随眠は、未だ色染を離れざる異生と、及び未だ色染を離れざる聖者にして集類智の未だ已生ならざるもの成就し、已に色染を離るる異生と聖者と、及び未だ色染を離れざる聖者にして集類智の已に生ぜるは成就せず。色界の見滅所断の随眠は、未だ色染を離れざる異生と、及び

未だ色染を離れざる聖者にして滅類智の未だ已生ならざるもの 成就し、已に色染を離るる異生と聖者と、及び未だ色染を離れざる聖者にして滅類智の已に生ぜるは成就せず。色界の見道所断の随眠は、未だ色染を離れざる異生と、及び未だ色染を離れざる聖者にして道類智の未だ已生ならざるもの 成就し、已に色染を離るる異生と聖者と、及び未だ色染を離れざる聖者にして道類智の已に生ぜるは成就せず。色界の修所断の随眠は、未だ色染を離れざるもの 成就し、已に色染を離るるは成就せず。

無色界の見苦所断の随眠は、苦類智の未だ已生ならざるもの 成就し、已に生ぜるは成就せず。無色界の見集所断の随眠は、集類智の未だ已生ならざるもの 成就し、已に生ぜるは成就せず。無色界の見滅所断の随眠は、滅類智の未だ已生ならざるもの 成就し、已に生ぜるは成就せず。無色界の見道所断の随眠は、道類智の未だ已生ならざるもの 成就し、已に生ぜるは成就せず。無色界の修所断の随眠は、未だ無色染を離れざるもの 成就し、已に無色染を離るるは成就せず。

(大)九四八上

⑦ 眼根乃至無色界の修所断の無明随眠は、一一遍知を得る時、九十八随眠の中に於て、幾ばくの随眠 遍知するを得、九結中に於て、幾ばくの結 尽くや。

答う。〔二十二根の中〕眼根は、遍知するを得る時、色愛[70] 尽く。異生は、三十一[71]随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無く、聖者は、三随眠[72]の遍知するを得るも、結の尽くること無し。耳・鼻・舌・身根も亦た爾り。女・男根は、遍知するを得る時、欲愛 尽く。異生は、三十六随眠[73]の遍知するを得て、三結 尽き、聖者は、四随眠[74]の遍知するを得て、

七〇 色愛尽く　眼根は欲・色界地に存するが無色界には存しない。

七一 三十一随眠　色界繫の随眠のすべて。補註10参照。

七二 三随眠　色界繫の修所断の随眠、すなわち貪・無明・慢を指す。

七三 三十六随眠　欲界繫の随眠のすべて。したがって恚・嫉・慳の三結が尽きる。

七四 四随眠　欲界繫の修所断の随眠、すなわち貪・瞋・無明・慢。

三結 尽く。苦・憂根も亦た爾り。命根は、遍知するを得る時、無色愛 尽く。[七五]三随眠の遍知するを得て、三結 尽く。意・捨と、信等の根も亦た爾り。楽根は、遍知するを得る時、遍浄の愛 尽く。即ち楽根の遍知するを得るも、結の尽くること無し。喜根は、遍知するを得る時、極光浄の愛 尽く。即ち喜根の遍知するを得るも、結の尽くること無し。

〔十八界の中〕眼・耳・鼻・舌・身と、色・声・触界は、遍知を得る時、色愛 尽く。異生は、三十一随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無く、聖者は、三随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。〔十二処の中〕眼・耳・鼻・舌・身と、色・声・触処と、色蘊と、色取蘊と、〔六界の中〕前の五界と、有色と、有見と、有対の法と、色界繋の法も亦た爾り。香・味と、鼻・舌識界は、遍知するを得る時、欲愛 尽く。異生は、三十六随眠の遍知するを得て、三結 尽き、聖者は、四随眠の遍知することを得て、三結 尽く。香・味処と、不善と、欲界繋の法も亦た爾り。眼・耳・身識界は、遍知するを得る時、梵世の愛 尽く。即ち眼・耳・身識界の遍知するを得るも、結の尽くること無し。意・法・意識界は、遍知するを得る時、無色愛 尽く。三随眠の遍知するを得て、三結 尽く。意・法処と、後の四蘊と四取蘊と、〔六界の中〕識界と、無色と、無見と、無対と、有漏と、有為の法と、過去・未来・現在と、善・無記と、無色界繋と、非学非無学と、修所断の法も亦た爾り。

見所断の法は、遍知するを得る時、未だ色愛を離れざる者にして道類智の現在前するは、十四随眠の遍知するを得て、三結 尽き、已に色愛を離るる者にして道類智の現在前するは、七随眠の遍知するを得て、三結 尽く。

㊅九四八中

七五　三随眠　無色界繋の修所断の随眠。したがって愛・慢・無明の三結が尽きる。

苦・集諦は、遍知するを得る時、無色愛尽く。三随眠の遍知するを得て、三結尽く。非想非非想処と、〔八解脱の中〕後の二解脱と、世俗智と、三重三摩地も亦た爾り。

初静慮は、遍知するを得る時、梵世の愛尽く。即ち初静慮の遍知するを得るも、結の尽くること無し。第二静慮は、遍知するを得る時、極光浄の愛尽く。即ち第二静慮の遍知するを得るも、結の尽くること無し。喜無量と、初の二解脱と、前の四勝処も亦た爾り。第三静慮は、遍知するを得る時、遍浄の愛尽く。即ち第三静慮の遍知することを得るも、結の尽くること無し。第四静慮は、遍知するを得る時、色愛尽く。異生は、三十一随眠の遍知することを得るも、結の尽くること無く、聖者は、三随眠の遍知することを得るも、結の尽くること無し。〔慈・悲・捨の〕三無量と、浄解脱と、後の四勝処と、前の八遍処と、他心智も亦た爾り。

空無辺処は、遍知するを得る時、空無辺処の愛尽く。即ち空無辺処の遍知するを得るも、結の尽くること無し。空無辺処解脱・遍処も亦た爾り。識無辺処は、遍知するを得る時、識無辺処の愛尽く。即ち識無辺所の遍知するを得るも、結の尽くること無し。識無辺処解脱・遍処も亦た爾り。無所有処は、遍知するを得る時、無所有処の愛尽く。即ち無所有処の遍知するを得るも、結の尽くる無し。無所有処解脱も亦た爾り。

〔三結の中〕有身見結は、遍知するを得る時、苦類智現在前す。未だ色染を離れざる者は、十八随眠[七六]の遍知するを得るも、結の尽くること無く、已に色染を離るる者は、九随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。有身見順下分結と、〔五見の中〕有身見・辺執見も亦た爾り。戒禁取・疑結は、遍知するを得る時、道類智現在前す。未だ色染を離

七六　十八随眠　色・無色界繫の見苦所断。

れざる者は、十四随眠の遍知するを得て、三結 尽き、已に色染を離るる者は、七随眠の遍知することを得て、三結 尽く。見瀑流・軛・取と、〔四取の中〕戒禁取と、後の二身繫と、後の二順下分結と、〔五見の中〕後の三見と、〔七随眠の中〕見・疑随眠と、〔九結の中〕見・取・疑結も亦た爾り。

三不善根と、及び〔三漏の中〕欲漏は、遍知するを得る時、欲愛 尽く。異生は、三十六随眠の遍知することを得て、三結 尽き、聖者は、四随眠の遍知することを得て、三結 尽く。欲瀑流・軛・取と、前の二身繫と、前の四蓋と、〔五結の中〕瞋・嫉・慳結と、前の二順下分結と、鼻・舌触所生愛身と、〔七随眠の中〕欲貪・瞋恚随眠と、〔九結の中〕恚・嫉・慳結も亦た爾り。

〔三漏の中〕有漏・無明漏は、遍知するを得る時、無色愛 尽く。三随眠の遍知するを得て、三結 尽く。有・無明瀑流・軛と、〔四取の中〕我語取と、〔五結の中〕貪・慢結と、後の四順上分結と、意触所生愛身と、〔七随眠の中〕有貪・慢・無明随眠と、〔九結の中〕愛・慢・無明結も亦た爾り。

〔五蓋の中〕疑蓋は、遍知するを得る時、異生は、欲愛 尽き、三十六随眠の遍知するを得て、三結 尽く。聖者は、道法智 現在前して、八随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。

色貪〔順上分結〕は、遍知するを得る時、色愛 尽く。異生は、三十一随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無く、聖者は、三随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。

〔六愛身の中〕眼・耳・身触所生愛身は、遍知するを得る時、梵世の愛 尽く。即ち三愛

七七　十四随眠　色・無色界繫の見道所断。したがって見・取・疑の三結が尽きる。

㊅九四八下

身の遍知するを得るも、結の尽くること無し。

欲界の見苦所断の随眠は、遍知するを得る時、異生は、欲愛 尽き、三十六随眠の遍知するを得て、三結 尽く。聖者は、苦法智 現在前して、[78]十随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。欲界の見集所断の随眠は、遍知するを得る時、異生は、欲愛 尽き、三十六随眠の遍知するを得て、三結 尽く。聖者は、集法智 現在前して、[79]七随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。欲界の見滅所断の随眠は、遍知するを得る時、異生は、欲愛 尽き、三十六随眠の遍知するを得て、三結 尽く。聖者は、滅法智 現在前して、[80]七随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。欲界の見道所断の随眠は、遍知するを得る時、異生は、欲愛 尽き、三十六随眠の遍知するを得て、三結 尽く。聖者は、道法智 現在前して、[81]八随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。欲界の修所断の随眠は、遍知するを得る時、欲愛 尽く。異生は、三十六随眠の遍知するを得て、三結 尽く。聖者は、[82]四随眠の遍知するを得て、三結 尽く。

色界の見苦所断の随眠は、遍知するを得る時、異生は、色愛 尽き、三十一随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。聖者は、苦類智 現在前して、[83]十八随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。色界の見集所断の随眠は、遍知するを得る時、異生は、色愛 尽き、三十一随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。聖者は、集類智 現在前して、[84]十二随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。色界の見滅所断の随眠は、遍知するを得る時、異生は、色愛 尽き、三十一随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。聖者は、滅類智 現在前して、[85]十二随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無

七八 十随眠 欲界繋の見苦所断。

七九 七随眠 欲界繋の見集所断。

八〇 七随眠 欲界繋の見滅所断。

八一 八随眠 欲界繋の見道所断。

八二 四随眠 欲界繋の修所断。

八三 十八随眠 註七六に同じ。

八四 十二随眠 色・無色界繋の見集所断。 ㊅九四九上

八五 十二随眠 色・無色界繋の見滅所断。

し。色界の見道所断の随眠は、遍知するを得る時、異生は、色愛 尽き、三十一随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。聖者は、道類智 現在前して、十四[86]随眠の遍知するを得て、三結 尽く。色界の修所断の随眠は、遍知するを得る時、色愛 尽く。異生は、三十一随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無く、聖者は、三[87]随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。

無色界の見苦所断の随眠は、遍知するを得る時、苦類智 現在前す。未だ色染を離れざる者は、十八[88]随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無く、已に色染を離れたる者は、九随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無し。無色界の見集所断の随眠は、遍知するを得る時、集類智 現在前す。未だ色染を離れざる者は、十二随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無く、已に色染を離れたる者は、六随眠の遍知することを得るも、結の尽くること無し。無色界の見滅所断の随眠は、遍知するを得る時、滅類智 現在前す。未だ色染を離れざる者は、十二随眠の遍知するを得るも、結の尽くること無く、已に色染を離れたる者は、六随眠の遍知することを得るも、結の尽くること無し。無色界の見道所断の随眠は、遍知するを得る時、道類智 現在前す。未だ色染を離れざる者は、十四随眠の遍知することを得て、三結 尽き、已に色染を離れたる者は、七随眠の遍知することを得て、三結 尽く。無色界の修所断の随眠は、遍知するを得る時、無色愛 尽く。三随眠の遍知するを得て、三結 尽く。

⑧ 眼根乃至無色界の修所断の無明随眠の一一の滅を作證（さしょう）する時、九十八随眠の中に於て、

八六 十四随眠　色・無色界繫の見道所断。註七参照。

八七 三随眠　色界の修所断。

八八 十八随眠　以下の遍知される随眠の数は前に準じて知るべきである。

幾ばくの随眠の滅を作證し、九結中の幾ばくの結 尽くや。

答う。〔二十二根の中〕眼根の滅を作證する時、色愛 尽く。異生は、三十一随眠の滅を作證するも、結の尽くること無く、聖者は、三随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證して、九結 尽く。耳・鼻・舌・身根も亦た爾り。女・男根の滅を作證する時、欲愛 尽く。異生は、三十六随眠の滅を作證し、三結尽き、聖者は、不還果（ふげんか）を得て、[八九]九十二随眠の滅を作證し、[九〇]六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。苦・憂根も亦た爾り。命根の滅を作證する時、阿羅漢果を得て、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。意・捨と、信等の五根も亦た爾り。楽根の滅を作證する時、遍浄の愛 尽く。即ち楽根の滅を作證するも、結の尽くること無し。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。喜根の滅を作證する時、極光浄の愛 尽く。即ち喜根の滅を作證するも、結の尽くること無し。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證して、九結 尽く。

㊅九四九中

〔十八界の中〕眼・耳・鼻・舌・身と、色・声・触界の滅を作證する時、色愛 尽く。異生は、三十一随眠の滅を作證するも、結の尽くること無く、聖者は、三随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證して、九結 尽く。〔十二処の中〕眼・耳・鼻・舌・身と、色・声・触処と、色蘊と、色取蘊と、〔六界の中〕前の五界と、有色と、有見と、有対の法と、色界繫の法も亦た爾り。香・味・舌識界の滅を作證する時、欲愛 尽く。異生は、三十六随眠の滅を作證して、三結 尽き、聖者は、不還果を得て、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を

八九 九十二随眠 九十八随眠中、色・無色界の修所断の六を除く。

九〇 六結 九結の中、愛・無明・慢を除く。

作證して、九結尽く。香・味処と、不善と、欲界繋の法も亦た爾り。眼・耳・身識界の滅を作證する時、梵世の愛尽く。即ち三識界の滅を作證するも、結の尽くること無し。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證して、九結尽く。意・法・意識界の滅を作證する時、阿羅漢果を得て、九十八随眠の滅を作證し、九結尽く。意・法処と、後の四蘊と四取蘊と、識界と、無色・無見・無対・有漏・有為法と、過去・未来・現在と、善・無記と、無色界繋と、非学非無学と、修所断の法も亦た爾り。

見所断の法の滅を作證する時、預流果（よるか）を得て、八十八随眠[91]の滅を作證し、三結尽く。一来果（いちらいか）に至るも亦た爾り。不還果に至るは、九十二随眠の滅を作證して、六結尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證して、九結尽く。

苦・集諦の滅を作證する時、阿羅漢果を得て、九十八随眠の滅を作證し、九結尽く。非想非非想処と、後の二解脱と、世俗智と、三重三摩地も亦た爾り。

初静慮の滅を作證する時、梵世の愛尽く。即ち初静慮の滅を作證するも、結の尽くること無し。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證して、九結尽く。第二静慮の滅を作證する時、極光浄の愛尽く。即ち第二静慮の滅を作證するも、結の尽くること無し。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證して、九結尽く。喜無量と初の二解脱と、前の四勝処も亦た爾り。第三静慮の滅を作證する時、遍浄の愛尽く。即ち第三静慮の滅を作證するも、結の尽くること無し。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證して、九結尽く。第四静慮の滅を作證する時、色愛尽く。異生は、三十一随眠の滅を作證するも、結の尽くること無く、聖者は、三随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。阿羅漢に至るは、

九一　八十八随眠　三界の見所断のすべて。いわゆる見惑八十八使。したがって有身見・戒禁取・疑の三結が尽きる。

㊅九四九下

㊅九五〇上

九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。三無量と、浄解脱と、後の四勝処と、前の八遍処と、他心智も亦た爾り。

空無辺処の滅を作證する時、空無辺処の愛 尽く。即ち彼の滅を作證するも、結の尽くること無し。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。空無辺処解脱と遍処も亦た爾り。識無辺処の滅を作證する時、識無辺処の愛 尽く。即ち彼の滅を作證するも、結の尽くること無し。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。識無辺処解脱と遍処も亦た爾り。無所有処の滅を作證する時、無所有処の愛 尽く。即ち彼の滅を作證するも、結の尽くること無し。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證して、九結 尽く。無所有処解脱も亦た爾り。

〔三結の中〕有身見結の滅を作證する時、苦類智 現在前し、十八随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。預流果に至るは、八十八随眠の滅を作證し、三結 尽く。一来果に至るも亦た爾り。不還果に至るは、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。有身見順下分結と、〔五見の中〕有身見と辺執見も亦た爾り。戒禁取・疑結の滅を作證する時、預流果を得て、八十八随眠の滅を作證し、三結 尽く。一来果に至るも亦た爾り。不還果に至る時、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。見瀑流・軛・取と、〔四取の中〕戒禁取と、後の二身繋と、戒禁取・疑順下分結と、〔五見の中〕後の三見と、〔七随眠の中〕見・疑随眠と、〔九結の中〕見・取・疑結も亦た爾り。

三不善根と、及び〔三漏の中〕欲漏の滅を作證する時、異生は、欲愛 尽き、三十六随眠

の滅を作證し、三結 尽く。聖者は、不還果を得、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。欲瀑流・軛・取と、前の二身繋と、前の四蓋と、〔五結の中〕瞋・嫉・慳結と、前の二順下分結と、鼻・舌触所生愛身と、〔七随眠の中〕欲貪・瞋恚随眠と、〔九結の中〕恚・嫉・慳結も亦た爾り。

〔三漏の中〕有漏と無明漏の滅を作證する時、阿羅漢果を得て、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。有・無明瀑流・軛と、〔四取の中〕我語取と、〔五結の中〕貪・慢結と、後の四順上分結と、意触所生愛身と、〔七随眠の中〕有貪・慢・無明随眠と、〔九結の中〕愛・慢・無明結も亦た爾り。

〔五蓋の中〕疑蓋の滅を作證する時、異生は、欲愛 尽き、三十六随眠の滅を作證し、三結 尽く。聖者は、道法智 現在前し、八十[九二]八随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。預流果に至るは、八十八随眠の滅を作證し、三結 尽く。一来果に至るも亦た爾り。不還果に至るは、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。

色貪〔順上分結〕の滅を作證する時、色愛 尽く。異生は、三十一随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。聖者は、三随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。

〔六愛身の中〕眼・耳・身触所生愛身の滅を作證する時、梵世の愛 尽く。即ち三愛身の滅を作證するも、結の尽くること無し。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。

九二　八随眠　欲界繋の見道所断。

欲界の見苦所断の随眠の滅を作證する時、異生は、欲愛 尽き、三十六随眠の滅を作證し、三結 尽く。聖者は、苦法智 現在前し、十随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。預流果に至るは、八十八随眠の滅を作證し、三結 尽く。一来果に至るも亦た爾り。不還果に至るは、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。欲界の見集所断の随眠の滅を作證する時、異生は、欲愛 尽き、三十六随眠の滅を作證し、三結 尽く。聖者は、集法智 現在前し、七随眠の滅を作證する ㊅九五〇中 も、結の尽くること無し。預流果に至るは、八十八随眠の滅を作證し、三結 尽く。一来果に至るも亦た爾り。不還果に至るは、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。欲界の見滅所断の随眠の滅を作證する時、異生は、欲愛 尽き、三十六随眠の滅を作證し、三結 尽く。聖者は、滅法智 現在前し、七随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。預流果に至るは、八十八随眠の滅を作證し、三結 尽く。一来果に至るも亦た爾り。不還果に至るは、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。欲界の見道所断の随眠の滅を作證する時、異生は、欲愛 尽き、三十六随眠の滅を作證し、三結 尽く。聖者は、道法智 現在前し、八随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。預流果に至るは、八十八随眠の滅を作證し、三結 尽く。一来果に至るも亦た爾り。不還果に至るは、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。欲界の修所断の随眠の滅を作證する時、異生は、欲愛 尽き、三十六随眠の滅を作證し、三結 尽く。聖者は、不還果を得、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、

九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。

色界の見苦所断の随眠の滅を作證する時、異生は、色愛 尽き、三十一随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。聖者は、苦類智 現在前し、十八随眠の滅を作證し、三結 尽く。一来果に至るも亦た爾り。不還果に至るは、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。色界の見集所断の随眠の滅を作證する時、異生は、色愛 尽き、三十一随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。聖者は、集類智 現在前し、十二随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。預流果に至るは、八十八随眠の滅を作證し、三結 尽く。一来果に至るも亦た爾り。不還果に至るは、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。色界の見滅所断の随眠の滅を作證する時、異生は、色愛 尽き、三十一随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。聖者は、滅類智 現在前し、十二随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。預流果に至るは、八十八随眠の滅を作證し、三結 尽く。一来果に至るも亦た爾り。不還果に至るは、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。色界の見道所断の随眠の滅を作證する時、異生は、色愛 尽き、三十一随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。聖者は、預流果を得、八十八随眠の滅を作證し、三結 尽く。一来果に至るも亦た爾り。不還果に至るは、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。色界の修所断の随眠の滅を作證する時、色愛 尽く。異生は、三十一随眠の滅を作證する

(大)九五〇下

も、結の尽くること無し。聖者は、三随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。

無色界の見苦所断の随眠の滅を作證する時、苦類智 現在前し、十八随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。預流果に至るは、八十八随眠の滅を作證し、三結 尽く。一来果に至るも亦た爾り。不還果に至るは、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。無色界の見集所断の随眠の滅を作證する時、集類智 現在前し、十二随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。預流果に至るは、八十八随眠の滅を作證し、三結 尽く。一来果に至るも亦た爾り。不還果に至るは、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。無色界の見滅所断の随眠の滅を作證する時、滅類智 現在前し、十二随眠の滅を作證するも、結の尽くること無し。預流果に至るは、八十八随眠の滅を作證し、三結 尽く。一来果に至るも亦た爾り。不還果に至るは、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。無色界の見道所断の随眠の滅を作證する時、預流果を得、八十八随眠の滅を作證し、三結 尽く。一来果に至るも亦た爾り。不還果に至るは、九十二随眠の滅を作證し、六結 尽く。阿羅漢に至るは、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。無色界の修所断の随眠の滅を作證する時、阿羅漢果を得、九十八随眠の滅を作證し、九結 尽く。

㊅九五一上

説一切有部発智論 巻の第六

阿毘達磨発智論

尊者迦多衍尼子　造る
三蔵法師玄奘　詔を奉じて訳す

巻の第七

智蘊第三の中、覚支納息第一

①八学と②十無学と　③見等と④覚・道の三と
⑤俗と⑥無漏の見と智とを　此の章にて願わくば具さに説かん

① 世尊の「[一]学見迹は学の[二]八支を成就す」と説きたもうが如き、彼れの成就するは、過去に幾ばく、未来に幾ばく、現在に幾ばくなりや。

答う。若し有尋有伺定に依りて、初めて学の[三]見現在前せば、過去には無く、未来・現

第三篇第一章

一　学見迹　『大毘婆沙論』の釈によれば、道類智がすでに生じた(すなわち修道に入った)有学を、つぶさに四諦の迹を見た者の意で、学見迹という。
二　八支　八正道の各支分。正見ないし正定の八。
三　見　見道においてはたらく無漏の慧。

在には八なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し復た有尋有伺定に依りて学の見 現在前せば、過去・未来・現在に八なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し無尋無伺定に依りて学の見 現在前せば、過去・未来には八、現在には七なり。[四] 彼れ 滅し已るも失わず、若し無色定に依りて学の見 現在前せば、過去・未来には八、現在には四なり。[五] 彼れ 滅し已るも失わず、若し滅定に入り、或いは世俗心 現在前せば、過去・未来には八、現在には無し。

若し無尋無伺定に依りて、初めて学の見 現在前せば、過去には無く、未来には八、現在には七なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し復た無尋無伺定に依りて学の見 現在前せば、過去・現在には七、未来には八なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し無色定に依りて学の見 現在前せば、過去には七、未来には八、現在には四なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し滅定に入り、或いは世俗心 現在前せば、過去には七、未来には八、現在には無し。彼れ 滅し已るも失わず、若し有尋有伺定に依りて学の見 現在前せば、過去には七、未来・現在には八なり。

若し無色定に依りて、初めて学の見 現在前せば、過去には無く、未来には八、現在には四なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し復た無色定に依りて学の見 現在前せば、過去・現在には四、未来には八なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し滅定に入り、或いは世俗心 現在前せば、過去には四、未来には八、現在には無し。彼れ 滅し已るも失わず、若し有尋有伺定に依りて学の見 現在前せば、過去には四、未来・現在には八なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し無尋無伺定に依りて学の見 現在前せば、過去には四、未来には八、現在には七なり。

㊅九五一中

四　七　無尋無伺なるゆえ正思惟を除く。

五　四　正思惟・正語・正業・正命を除く。

② 世尊の「漏尽(ろじん)の阿羅漢(あらかん)は十無学支(じゅうむがくし)[六]を成就す」と説きたもうが如き、彼れの成就するは、過去に幾ばく、未来に幾ばく、現在に幾ばくなりや。

答う。若し有尋有伺定に依りて、初めて無学の智 現在前せば、過去には無く、未来には十、現在には九なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し復た有尋有伺定に依りて無学の智 現在前せば、過去・現在には九[七]、未来には十なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し無尋無伺定に依りて無学の智 現在前せば、過去には九、未来には十、現在には八[八]なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し無色定に依りて無学の智 現在前せば、過去には九、未来には十、現在には五[九]なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し滅定に入り、或いは世俗心 現在前せば、過去には九、未来には十、現在には無し。彼れ 滅し已るも失わず、若し有尋有伺定に依りて、初めて無学の智と見と現在前せば、過去・現在には九[一〇]、未来には十なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し復た有尋有伺定に依りて、無学の若しくは智、若しくは見 現在前せば、過去・未来には十、現在には九なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し無尋無伺定に依りて、無学の若しくは智、若しくは見 現在前せば、過去・未来には十、現在には八[一一]なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し無色定に依りて、無学の若しくは智、若しくは見 現在前せば、過去・未来には十、現在には五[一二]なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し滅定に入り、或いは世俗心 現在前せば、過去・未来には十、現在には無し。

若し無尋無伺定に依りて、初めて無学の智 現在前せば、過去には無く、未来には十、現在には八[一三]なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し復た無尋無伺定に依りて無学の智 現在前

六 十無学支 無学の正見ないし正定の八支と、無学の正解脱・正智と。

七 九 正見を除く。

八 八 正見のほか正思惟をも除く。

九 五 正見・正思惟のほか正語・正業・正命をも除く。

一〇 九 過去の九は上説のとおり。現在の九は正智を除く。別々の見と智とが倶起するということはないから。

一一 八 正思惟と、正見あるいは正智のいずれかと、を除く。

一二 五 正思惟・正語・正業・正命と、正見あるいは正智のいずれかと、を除く。

(大)九五一下

一三 八 正思惟と正見とを除く。以下、無学支の数字は類比して知り得よう。

せば、過去・現在には八、未来には十なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し無色定に依りて無学の智 現在前せば、過去には八、未来には十、現在には五なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し滅定に入り、或いは世俗心 現在前せば、過去には八、未来には十、現在には無し。彼れ 滅し已るも失わず、若し有尋有伺定に依りて無学の智 現在前せば、過去には八、未来には十、現在には九なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し無尋無伺定に依りて、初めて無学の見 現在前せば、過去・現在には八、未来には十なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し復た無尋無伺定に依りて、無学の若しくは智、若しくは見 現在前せば、過去には九、未来には十、現在には八なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し無色定に依りて、無学の若しくは智、若しくは見 現在前せば、過去には九、未来には十、現在には五なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し滅定に入り、或いは世俗心 現在前せば、過去には九、未来には十、現在には無し。彼れ 滅し已るも失わず、若し有尋有伺定に依りて、無学の若しくは智、若しくは見 現在前せば、過去・現在には九、未来には十なり。

若し無色定に依りて、初めて無学の智 現在前せば、過去には無く、未来には十、現在には五なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し復た無色定に依りて無学の智 現在前せば、過去・現在には五、未来には十なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し滅定に入り、或いは世俗心 現在前せば、過去には五、未来には十、現在には無し。彼れ 滅し已るも失わず、若し有尋有伺定に依りて無学の智 現在前せば、過去には五、未来には十、現在には九なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し無尋無伺定に依りて無学の智 現在前せば、過去には五、未来には十、現在には八なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し無色定に依りて、初めて無学

の見 現在前せば、過去・現在には五、未来には十なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し復た無色定に依りて、無学の若しくは智、若しくは見 現在前せば、過去には六、未来には十、現在には五なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し滅定に入り、或いは世俗心 現在前せば、過去には六、未来には十、現在には無し。彼れ 滅し已るも失わず、若し有尋有伺定に依りて、無学の若しくは智、若しくは見 現在前せば、過去には六、未来には十、現在には九なり。彼れ 滅し已るも失わず、若し無尋無伺定に依りて、無学の若しくは智、若しくは見 現在前せば、過去には六、未来には十、現在には八なり。

㊅九五二上

③―1―1　云何んが見なる。

答う。眼根と、五見と、世俗の正見と、学・無学の見となり。

③―1―2　云何んが智なる。

答う。五識相応の慧と、無漏の忍を除きて余の意識相応の慧となり。

③―1―3　云何んが慧なる。

答う。六識相応の慧なり。

③―2―1　[補註14]諸見は是れ智なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)見にして智に非ざる有り。謂わく、眼根と及び無漏の忍なり。(b)智にして見に非ざる有り。謂わく、五識身相応の慧と、尽・無生智と、五見及び世俗の正見を除ける余の意識相応の有漏の慧となり。(c)見にして亦た智なる有り。謂わく、五見と、世俗の正見と、無漏の忍及び尽・無生智を除ける余の無漏の慧となり。(d)見にも

非ず智にも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

③―2―2　諸見は是れ慧なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)見にして慧に非ざる有り。謂わく、眼根なり。(b)慧にして見に非ざる有り。謂わく、五識身相応の慧と、尽・無生智と、五見及び世俗の正見を除ける余の意識相応の有漏の慧となり。(c)見にして亦た慧なる有り。謂わく、尽・無生智を除ける余の無漏の慧と、及び五見と、世俗の正見なり。(d)見にも非ず慧にも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

③―2―3　諸智は是れ慧なりや。

答う。諸智は皆な是れ慧なるも、慧にして智に非ざる有り。謂わく、無漏の忍なり。

③―3―1　見　智を摂むや、智　見を摂むや。

答う。応に四句を作るべし。(a)見にして、智の摂むるに非ざる有り。謂わく、眼根と及び無漏の忍なり。(b)智にして、見の摂むるに非ざる有り。謂わく、五識相応の慧と、尽・無生智と、五見及び世俗の正見を除ける余の意識相応の有漏の慧となり。(c)見にして亦た智の摂むる有り。謂わく、五見と、世俗の正見と、無漏の忍及び尽・無生智を除ける余の無漏の慧となり。(d)見にも非ず亦た智の摂むるにも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

③―3―2　見　慧を摂むや、慧　見を摂むや。

答う。応に四句を作るべし。(a)見にして、慧の摂むるに非ざる有り。謂わく、眼根なり。(b)慧にして、見の摂むるに非ざる有り。謂わく、五識相応の慧と、尽・無生智と、五見及

び世俗の正見を除ける余の意識相応の有漏の慧となり。(c)見にして亦た慧に摂むる有り。謂わく、五見と、世俗の正見と、尽・無生智を除ける余の無漏の慧となり。(d)見にも非ず亦た慧の摂むるにも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

③—3—3　智 慧を摂むや、慧 智を摂むや。

答う。慧 智を摂め、智 慧を摂むるに非ず。何等をか摂めざる。謂わく、無漏の忍なり。

③—4—1　諸もろの見を成就するもの、彼れ 智もなりや。

答う。是(か)くの如し。

設(も)し智を成就せば、彼れ 見もなりや。

答う。是くの如し。

③—4—2　諸もろの見を成就するもの、彼れ 慧もなりや。

答う。是くの如し。

設し慧を成就せば、彼れ 見もなりや。

答う。是くの如し。

③—4—3　諸もろの智を成就するもの、彼れ 慧もなりや。

答う。是くの如し。

設し慧を成就せば、彼れ 智もなりや。

答う。是くの如し。

③—5—1　諸もろの、見 已(すで)に断じ已に遍知せる、彼れ 智もなりや。

㊅九五二中

答う。是くの如し。

設し智 已に断じ已に遍知せば、彼れ 見もなりや。
答う。是くの如し。
③—5—2　諸もろの、見 已に断じ已に遍知せる、彼れ 慧もなりや。
答う。是くの如し。
設し慧 已に断じ已に遍知せば、彼れ 見もなりや。
答う。是くの如し。
③—5—3　諸もろの、智 已に断じ已に遍知せる、彼れ 慧もなりや。
答う。是くの如し。
設し慧 已に断じ已に遍知せば、彼れ 智もなりや。
答う。是くの如し。

④—1—1　諸もろの正見は是れ択法(ちゃくほう)の覚支(かくし)なりや。
答う。応に四句を作るべし。(a)正見にして択法の覚支に非ざる有り。謂わく、世俗の正見なり。(b)択法の覚支にして正見に非ざる有り。謂わく、尽・無生智なり。(c)正見にして亦た択法の覚支なる有り。謂わく、尽・無生智を除ける余の無漏の慧なり。(d)正見にも非ず亦た択法の覚支にも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。
④—1—2　諸もろの正智は是れ択法の覚支なりや。
答う。応に四句を作るべし。(a)正智にして択法の覚支に非ざる有り。謂わく、世俗の正智なり。(b)択法の覚支にして正智に非ざる有り。謂わく、無漏の忍なり。(c)正智にして亦

た択法の覚支なる有り。謂わく、無漏の忍を除ける余の無漏の慧なり。(d)正智にも非ず亦た択法の覚支にも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

④—2　七覚支と八道支の一一現在前する時、幾ばくの覚支と幾ばくの道支 現在前すや。

答う。若し未至定(みしじょう)に依りて念覚支 現在前する時は、学には、[一四]六覚支と八道支 現在前し、無学には、六覚支と[一五]九道支 現在前す。若し初静慮(しょじょうりょ)に依りて念覚支 現在前する時は、学には、七覚支と八道支 現在前し、無学には、七覚支と九道支 現在前す。若し静慮中間(ちゅうげん)に依りて念覚支 現在前する時は、学には、六覚支と[一六]七道支 現在前し、無学には、六覚支と[一七]八道支 現在前す。第三・第四静慮に依るも亦た爾(しか)り。若し第二静慮に依りて念覚支 現在前する時は、学には、七覚支と[一八]七道支 現在前し、無学には、七覚支と八道支 現在前す。若し無色定に依りて念覚支 現在前する時は、学には、[一九]六覚支と[二〇]四道支 現在前し、無学には、六覚支と[二一]五道支 現在前す。択法・精進(しょうじん)・軽安(きょうあん)・定・捨覚支と、正見・正精進・正念・正定道支も亦た爾り。

若し初静慮に依りて喜覚支 現在前する時は、学には、七覚支と八道支 現在前し、無学には、七覚支と九道支 現在前す。若し第二静慮に依りて喜覚支 現在前する時は、学には、七覚支と七道支 現在前し、無学には、七覚支と八道支 現在前す。

若し未至定に依りて正思惟(しょうしゆい) 現在前する時は、学には、六覚支と八道支 現在前し、無学には、六覚支と九道支 現在前す。若し初静慮に依りて正思惟 現在前する時は、学には、七覚支と八道支 現在前し、無学には、七覚支と九道支 現在前す。

若し未至定に依りて正語 現在前する時は、学には、六覚支と八道支 現在前し、無学に

一四　六覚支　すべて近分地(未至定は初静慮の近分)には喜は無いとされるから喜覚支を除く。

一五　九道支　八道支に無学の正智・正解脱を加えた十の中、正見か正智かいずれかを除く。

一六　七道支　正思惟を除く。

一七　八道支　十無学支から正思惟を除き正見・正智の中のいずれか一つを除く。

一八　七道支　第二静慮地には正思惟がない。

一九　六覚支　喜覚支を除く。

二〇　四道支　正思惟・正語・正業・正命を除く。

㊅九五二下

二一　五道支　八道支に正智・正解脱の二支を加えた中から正思惟・正語・正業・正命の四と正見か正智かの一とを除くこと、前記註三のとおり。以下もこれに準じて考えるべきである。

は、六覚支と九道支 現在前す。若し初静慮に依りて正語 現在前する時は、学には、七覚支と八道支 現在前し、無学には、七覚支と九道支 現在前す。若し静慮中間に依りて正語 現在前する時は、学には、六覚支と七道支 現在前し、無学には、六覚支と八道支 現在前す。第三・第四静慮に依るも亦た爾り。若し第二静慮に依りて正語 現在前する時は、学には、七覚支と七道支 現在前し、無学には、七覚支と八道支 現在前す。正業・正命も亦た爾り。

④—3—1　諸法の念覚支相応なる、彼の法 択法覚支相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の念相応にして択法〔相応〕に非ざる有り。謂わく、択法覚支なり。(b)[三二]法の択法相応にして念〔相応〕に非ざる有り。謂わく、念覚支なり。(c)法の念相応にして亦た択法〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の念相応にも非ず亦た択法〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行なり。

択法覚支に対するが如く、精進・軽安・定・捨覚支と、正精進・正定に対するも亦た爾り。

④—3—2　諸法の念覚支相応なる、彼の法 喜覚支相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の念相応にして喜〔相応〕に非ざる有り。謂わく、喜覚支と、及び喜と相応せざる念覚支相応の法なり。(b)[三三]法の喜相応にして念〔相応〕に非ざる有り。謂わく、喜覚支相応の念なり。(c)法の念相応にして亦た喜〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の念相応にも非ず亦た喜〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、喜と

三二　法の択法相応…念覚支なり　択法覚支と相応する法と念覚支と相応する法とはすべて相互に相応する。しかし念覚支は念自体と相応せず択法覚支は択法自体と相応しない。補註15参照。

三三　法の喜相応…喜覚支相応の念なり　喜覚支と相応する法はすべて念覚支と相応する法と相応する（ただし念覚支は念自体は相応しない）。念覚支と相応する法には喜覚支と相応するものと相応しないものとがある。補註16参照。

㊅九五三上

相応せざる念覚支と、及び余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

喜覚支に対するが如く、正見・正思惟に対するも亦た爾り。

④—3—3　諸法の念覚支相応なる、彼の法 正念相応なりや。

答う。是くの如し。

諸法の正念相応なる、彼の法 念覚支相応なりや。

答う。是くの如し。

④—3—4　諸法の択法覚支相応なる、彼の法 精進覚支相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の択法相応にして精進〔相応〕に非ざる有り。謂わく、精進覚支なり。(b)法の精進相応にして択法〔相応〕に非ざる有り。謂わく、択法覚支なり。(c)法の択法相応にして亦た精進〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の択法相応にも非ず亦た精進〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

精進覚支に対するが如く、軽安・定・捨覚支と、正精進・正念・正定に対するも亦た爾り。

④—3—5　諸法の択法覚支相応なる、彼の法 喜覚支相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の択法相応にして喜〔相応〕に非ざる有り。謂わく、喜覚支と、及び喜と相応せざる択法覚支相応の法なり。(b)法の喜相応にして択法〔相応〕に非ざる有り。謂わく、喜覚支相応の択法なり。(c)法の択法相応にして亦た喜〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の択法相応にも非ず亦た喜〔相応〕にも非ざる有り。謂

わく、喜と相応せざる択法覚支と、及び余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

喜覚支に対するが如く、正思惟に対するも亦た爾り。

④―3―6　諸法の択法覚支相応なる、彼の法　正見相応なりや。

答う。諸法の正見相応なるは、亦た択法相応なるも、法の択法相応にして正見相応に非ざる有り。謂わく、正見に摂めざる所の択法覚支相応の法なり。

④―3―7　諸法の精進覚支相応なる、彼の法　喜覚支相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の精進相応にして喜〔相応〕に非ざる有り。謂わく、喜覚支と、及び喜と相応せざる精進覚支相応の法なり。(b)喜相応にして精進〔相応〕に非ざる有り。謂わく、喜覚支相応の精進なり。(c)法の精進相応にして亦た喜〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の精進相応にも非ず亦た喜〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、喜と相応せざる精進覚支と、及び余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

喜覚支に対するが如く、正見・正思惟に対するも亦た爾り。

㊅九五三中

④―3―8　諸法の精進覚支相応なる、彼の法　軽安覚支相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の精進相応にして軽安〔相応〕に非ざる有り。謂わく、軽安覚支なり。(b)法の軽安相応にして精進〔相応〕に非ざる有り。謂わく、精進覚支なり。(c)法の精進相応にして亦た軽安〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の精進相応にも非ず亦た軽安〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、余の心・心所法と、色と、無為

と、心不相応行となり。

軽安覚支に対するが如く、定・捨覚支と、正念・正定に対するも亦た爾り。

④—3—9　諸法の精進覚支相応なる、彼の法 正精進相応なりや。

答う。是くの如し。

設し法 正精進相応ならば、彼の法 精進覚支相応なりや。

答う。是くの如し。

④—3—10　諸法の喜覚支相応なる、彼の法 軽安覚支相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の喜相応にして軽安〔相応〕に非ざる有り。謂わく、喜相応の軽安覚支なり。(b)法の軽安相応にして喜〔相応〕に非ざる有り。謂わく、喜覚支と、及び喜と相応せざる軽安覚支相応の法なり。(c)法の喜相応にして亦た軽安〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の喜相応にも非ず亦た軽安〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、喜と相応せざる軽安覚支と、及び余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

軽安覚支に対するが如く、定・捨覚支と、正精進・正念・正定に対するも亦た爾り。

④—3—11　諸法の喜覚支相応なる、彼の法 正見相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の喜相応にして正見〔相応〕に非ざる有り。謂わく、喜覚支相応の正見と、及び正見と相応せざる喜覚支相応の法なり。(b)[二四]法の正見相応にして喜〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正見相応の喜覚支と、及び喜覚支と相応せざる正見相応の法なり。(c)法の喜相応にして亦た正見〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)

二四　法の正見相応…正見相応の法なり　喜覚支と相応する法には正見と相応するものと相応しないものとがある。正見と相応する法にも喜覚支と相応するものと相応しないものとがある。補註17参照。

法の喜相応にも非ず亦た正見〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、喜覚支と相応せざる正見と、正見と相応せざる喜覚支と、及び余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

正見に対するが如く、正思惟も亦た爾り。

④—3—12　諸法の軽安覚支相応なる、彼の法 定覚支相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の軽安相応にして定〔相応〕に非ざる有り。謂わく、定覚支なり。(b)法の定相応にして軽安〔相応〕に非ざる有り。謂わく、軽安覚支なり。(c)法の軽安相応にして亦た定〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の軽安相応にも非ず亦た定〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

定覚支に対するが如く、捨覚支と、正精進・正念・正定に対するも亦た爾り。

④—3—13　諸法の軽安覚支相応なる、彼の法 正見相応なりや。

(大)九五三下

答う。応に四句を作るべし。(a)法の軽安相応にして正見〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正見と、及び正見と相応せざる軽安覚支相応の法なり。(b)法の正見相応にして軽安〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正見相応の軽安覚支なり。(c)法の軽安相応にして亦た正見〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の軽安相応にも非ず亦た正見〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、正見と相応せざる軽安覚支と、及び余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

正見に対するが如く、正思惟に対するも亦た爾り。

④—3—14　諸法の定覚支相応なる、彼の法 捨覚支相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の定相応にして捨〔相応〕に非ざる有り。謂わく、捨覚支なり。(b)法の捨相応にして定〔相応〕に非ざる有り。謂わく、定覚支なり。(c)法の定相応にして亦た捨〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の定相応にも非ず亦た捨〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

捨覚支に対するが如く、正精進・正念に対するも亦た爾り。

④―3―15　諸法の定覚支相応なる、彼の法　正見相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の定相応にして正見〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正見と、及び正見と相応せざる定覚支相応の法なり。(b)法の正見相応にして定〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正見相応の定覚支なり。(c)法の定相応にして亦た正見〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の定相応にも非ず亦た正見〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、正見と相応せざる定覚支と、及び余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

正見に対するが如く、正思惟に対するも亦た爾り。

④―3―16　諸法の定覚支相応なる、彼の法　正定相応なりや。

答う。是くの如し。

設し法　正定相応ならば、彼の法　定覚支相応なりや。

答う。是くの如し。

④―3―17　諸法の捨覚支相応なる、彼の法　正見相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の捨相応にして正見〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正

見と、及び正見と相応せざる捨覚支相応の法なり。(b)法の正見相応にして捨〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正見相応の捨覚支なり。(c)法の捨相応にして亦た正見〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の捨相応にも非ず亦た正見〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、正見と相応せざる捨覚支と、及び余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

正見に対するが如く、正思惟に対するも亦た爾り。

④—3—18　諸法の捨覚支相応なる、彼の法 正精進相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の捨相応にして正精進〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正精進なり。(b)法の正精進相応にして捨〔相応〕に非ざる有り。謂わく、捨覚支なり。(c)法の捨相応にして亦た正精進〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の捨相応にも非ず亦た正精進〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

正精進に対するが如く、正念・正定に対するも亦た爾り。

④—3—19　諸法の正見相応なる、彼の法 正思惟相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の正見相応にして正思惟〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正見相応の正思惟と、及び正思惟と相応せざる正見相応の法なり。(b)法の正思惟相応にして正見〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正思惟相応の正見と、及び正見と相応せざる正思惟相応の法なり。(c)法の正見相応にして亦た正思惟〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の正見相応にも非ず亦た正思惟〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、正見と相応

㊅九五四上

せざる正思惟と、正思惟と相応せざる正見と、及び余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

④—3—20　諸法の正見相応なる、彼の法　正精進相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の正見相応にして正精進〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正見と、及び正見と相応せざる正精進なり。(b)法の正精進相応にして正見〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正見相応の正精進なり。(c)法の正見相応にして亦た正精進〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の正見相応にも非ず亦た正精進〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、正見と相応せざる正精進と、及び余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

正精進に対するが如く、正念・正定に対するも亦た爾り。

④—3—21　諸法の正思惟相応なる、彼の法　正精進相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の正思惟相応にして正精進〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正思惟相応の正精進なり。(b)法の正精進相応にして正思惟〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正思惟と、及び正思惟と相応せざる正精進相応の法なり。(c)法の正思惟相応にして亦た正精進〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)〔法の〕正思惟相応にも非ず亦た正精進〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、正思惟と相応せざる正精進と、及び余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

正精進に対するが如く、正念・正定に対するも亦た爾り。

④—3—22　諸法の正精進相応なる、彼の法　正念相応なりや。

㊅九五四中

答う。応に四句を作るべし。(a)法の正精進相応にして正念〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正念なり。(b)法の正念相応にして正精進〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正精進なり。(c)法の正精進相応にして亦た正念〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の正精進相応にも非ず亦た正念〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

正念に対するが如く、正定に対するも亦た爾り。

④—3—23　諸法の正念相応なる、彼の法 正定相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の正念相応にして正定〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正定なり。(b)法の正定相応にして正念〔相応〕に非ざる有り。謂わく、正念なり。(c)法の正念相応にして亦た正定〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の正念相応にも非ず亦た正定〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

⑤—1—1　云何んが世俗の正見なる。

答う。[二五]意識相応の善なる有漏の慧なり。

⑤—1—2　云何んが世俗の正智なる。

答う。[二六]五識相応の善なる慧と、及び意識相応の善なる有漏の慧なり。

⑤—2　諸もろの世俗の正見は是れ世俗の正智なりや。

答う。諸もろの世俗の正見は是れ世俗の正智なるも、世俗の正智にして世俗の正見に非

二五　意識相応…有漏の慧なり　「世俗」であるから有漏、「正」であるから善、「見」であるから意識相応の慧である。

二六　五識相応…有漏の慧なり　「智」であるから五識とも意識とも相応する。「五識相応」はすべて有漏。「意識相応」には有漏と無漏とがあるからことさらに「有漏の慧」といって殊別する。

ざる有り。謂わく、五識相応の善なる慧なり。

⑤—3　世俗の正見 世俗の正智を摂むや、世俗の正智 世俗の正見を摂むや。

答う。世俗の正智 世俗の正見を摂め、世俗の正見 世俗の正智を摂むるに非ず。何等をか摂めざる。謂わく、五識相応の善なる慧なり。

⑤—4　諸もろの世俗の正見を成就せる、彼れ 世俗の正智もなりや。

答う。是くの如し。

設し世俗の正智を成就せば、彼れ 世俗の正見もなりや。

答う。是くの如し。

⑤—5　諸もろの、世俗の正見 已に断じ已に遍知せる、彼れ 世俗の正智もなりや。

答う。是くの如し。

設し世俗の正智 已に断じ已に遍知せば、彼れ 世俗の正見もなりや。

答う。是くの如し。

⑥—1—1　云何んが無漏の見なる。

答う。尽・無生智を除きて余の無漏の慧なり。

⑥—1—2　[二七]云何んが無漏の智なる。

答う。無漏の忍を除きて余の無漏の慧なり。

⑥—2　諸もろの無漏の見は是れ無漏の智なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)無漏の見にして無漏の智に非ざる有り。謂わく、無漏の

二七　云何んが無漏の智なる　以下については補註14参照。

忍なり。(b)無漏の智にして無漏の見に非ざる有り。謂わく、尽・無生智なり。(c)無漏の見にして亦た無漏の智なる有り。謂わく、無漏の忍と尽・無生智とを除ける余の無漏の慧なり。(d)無漏の見にも非ず亦た無漏の智にも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

⑥―3　無漏の見 無漏の智を摂むや、無漏の智 無漏の見を摂むや。

答う。応に四句を作るべし。(a)無漏の見にして、無漏の智の摂むるに非ざる有り。謂わく、無漏の忍なり。(b)無漏の智にして、無漏の見の摂むるに非ざる有り。謂わく、尽・無生智なり。(c)無漏の見にして、亦た無漏の智の摂むる有り。謂わく、無漏の忍と尽・無生

㊅九五四下

智とを除ける余の無漏の慧なり。(d)無漏の見にも非ず、亦た無漏の智の摂むるにも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

⑥―4　諸もろの無漏の見を成就せる、彼れ 無漏の智もなりや。

答う。諸もろの無漏の智を成就せるは、亦た無漏の見も〔成就するも〕、無漏の見を成就して無漏の智〔を成就する〕に非ざる有り。謂わく、苦法智忍の現在前する時なり。

智蘊　第三の中、五種納息　第二

①邪・正の見・智の五と　②左慧と③学等の三と
④梵と⑤忍と⑥五悪見とを　此の章にて願わくば具さに説かん

①―1―1―1　云何んが邪見なる。
答う。若し安立[一]せずんば、則ち五見は皆な邪見と名づく。若し安立せば、則ち唯だ「施与無し」、「愛楽無し」、「祠祀無し」、「妙行無し」、「悪行無し」、「妙悪行無し」、「業・果・異熟〔無し〕」等の見のみを邪見と名づく。
①―1―1―2　云何んが邪智なる。
答う。六識相応の染汚の慧なり。
①―1―2　諸もろの邪見は是れ邪智なりや。
答う。諸もろの邪見は是れ邪智なるも、邪智にして邪見に非ざる有り。謂わく、五識相応の染汚の慧と、及び五見を除きて余の意識相応の染汚の慧となり。
①―1―3　邪見 邪智を摂むや、邪智 邪見を摂むや。
答う。邪智 邪見を摂め、邪見 邪智を摂むるに非ず。何等をか摂めざる。謂わく、五識相応の染汚の慧と、及び五見を除きて余の意識相応の染汚の慧となり。
①―1―4　諸もろの邪見を成就せる、彼れ 邪智もなりや。
答う。諸もろの邪見を成就せるは、亦た邪智も〔成就するも〕、邪智を成就して邪見〔を成就する〕に非ざる有り。謂わく、学見迹[二]なり。
①―1―5　諸もろの、邪見 已に断じ已に遍知せる、彼れ 邪智もなりや。
答う。諸もろの、邪智 已に断じ已に遍知せるは、亦た邪見もなるも、邪見 已に断じ已に遍知するも、邪智〔已に断じ已に遍知する〕に非ざる有り。謂わく、学見迹なり。
①―2―1―1　云何んが正見なる。

一　安立せずんば　殊別を立てなければ、という程の意味。「安立せば」とは、五見についてそれぞれを殊別して考えるときはという程の意味で、その場合は五見の中の一つを特に邪見と呼ぶ。

二　学見迹　第三篇第一章頭註一を見よ。

答う。尽・無生智に摂めざる所の意識相応の善なる慧なり。

①―2―1―2　云何んが正智なる。

答う。五識相応の善なる慧と、及び無漏の忍に摂めざる所の意識相応の善なる慧となり。

①―2―2　諸もろの正見は是れ正智なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)正見にして正智に非ざる有り。謂わく、無漏の忍なり。(b)正智にして正見に非ざる有り。謂わく、五識相応の善なる慧と、及び尽・無生智なり。(c)正見にして亦た正智なる有り。謂わく、無漏の忍と、及び尽・無生智に摂めざる所の意識相応の善なる慧となり。(d)正見にも非ず亦た正智にも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

①―2―3　正見 正智を摂むや、正智 正見を摂むや。

答う。応に四句を作るべし。(a)正見にして正智の摂むるに非ざる有り。謂わく、無漏の忍なり。(b)正智にして正見の摂むるに非ざる有り。謂わく、五識相応の善なる慧と、及び尽・無生智なり。(c)正見にして亦た正智の摂むる有り。謂わく、無漏の忍と、尽・無生智の摂めざる所の意識相応の善なる慧となり。(d)正見にも非ず亦た正智の摂むるにも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

①―2―4　諸もろの正見を成就せる、彼れ 正智もなりや。

答う。是くの如し。

設し正智を成就せば、彼れ 正見もなりや。

答う。是くの如し。

大九五五上

①—2—5　諸もろの、正見 已に断じ已に遍知せる、彼れ 正智もなりや。
答う。是くの如し。
設し正智 已に断じ已に遍知せば、彼れ 正見もなりや。
答う。是くの如し。

②　諸もろの左慧(さえ)[三]は、皆な是れ結なりや。
答う。応に四句を作るべし。(a)左慧にして結に非ざる有り。謂わく、二結[四]を除きて余の染汚の慧なり。(b)結にして左慧に非ざる有り。謂わく、七結なり。(c)左慧にして亦た結なる有り。謂わく、二結なり。(d)左慧にも非ず亦た結にも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

③—1—1　云何んが学の見なる。
答う。学の慧なり。
③—1—2　云何んが学の智なる。
答う。学の八智[五]なり。
③—1—3　云何んが学の慧なる。
答う。学の見と学の智とを総じて学の慧と名づく。
③—1—4　諸もろの学の見は是れ学の智なりや。
答う。諸もろの学の智は亦た学の見なるも、学の見にして学の智に非ざる有り。謂わく、

三　左慧　染汚の慧をいう。サンスクリット語で「左の」を意味する語(vāma)は「逆の」、「邪悪な」、「低級な」などの意味でも用いられる。
四　二結　見結と取結。
五　八智　四法智と四類智と。

無漏の忍なり。

③―1―5　諸もろの学の見は是れ学の慧なりや。

答う。是くの如し。

設し学の慧ならば、是れ学の見なりや。

答う。是くの如し。

③―1―6　諸もろの学の智は是れ学の慧なりや。

答う。諸もろの学の智は亦た学の慧なるも、学の慧にして学の智に非ざる有り。謂わく、無漏の忍なり。

③―1―7　学の見　学の智を摂むや、学の智　学の見を摂むや。

答う。学の見　学の智を摂め、学の智　学の見を摂むるに非ず。何等をか摂めざる。謂わく、無漏の忍なり。

③―1―8　学の見　学の慧を摂むや、学の慧　学の見を摂むや。

答う。展転(てんでん)[六]して相(あ)い摂む。

③―1―9　学の智　学の慧を摂むや、学の慧　学の智を摂むや。

答う。学の慧　学の智を摂め、学の智　学の慧を摂むるに非ず。何等を摂めざる。謂わく、無漏の忍なり。

③―1―10　諸もろの、学の見を成就せる、彼れ　学の智もなりや。

答う。諸もろの、学の智を成就せるは、亦た学の見も〔成就するも〕、学の見を成就して、学の智〔を成就する〕には非ざる有り。謂わく、苦法智忍の現在前する時なり。

六　展転して　互いに、の意。

③―1―11　諸もろの、学の見を成就せる、彼れ 学の慧もなりや。
答う。是くの如し。
設し学の慧を成就せば、彼れ 学の見もなりや。
答う。是くの如し。
③―1―12　諸もろの、学の智を成就せる、彼れ 学の慧もなりや。
答う。諸もろの、学の智を成就せるは、亦た学の慧も〔成就するも〕、学の慧を成就して、学の智〔を成就する〕には非ざる有り。謂わく、苦法智忍の現在前する時なり。
③―2―1　云何んが無学の見なる。
答う。尽・無生智に摂めざる所の無学の慧なり。
③―2―2　云何んが無学の智なる。
答う。無学の八智なり。
③―2―3　云何んが無学の慧なる。
答う。無学の見と無学の智とを総じて無学の慧と名づく。
③―2―4　諸もろの無学の見は、是れ無学の智なりや。
答う。諸もろの無学の見は亦た無学の智なるも、無学の智にして無学の見に非ざる有り。
謂わく、尽・無生智なり。
③―2―5　諸もろの無学の見は、是れ無学の慧なりや。
答う。諸もろの無学の見は亦た無学の慧なるも、無学の慧にして無学の見に非ざる有り。
謂わく、尽・無生智なり。

㊅九五五中

③—2—6　諸もろの無学の智は、是れ無学の慧なりや。
答う。是くの如し。
設し無学の慧ならば、是れ無学の智なりや。
答う。是くの如し。
③—2—7　無学の見 無学の智を摂むや、無学の智 無学の見を摂むや。
答う。無学の智 無学の見を摂め、無学の見 無学の智を摂むるに非ず。何等をか摂めざる。謂わく、尽・無生智なり。
③—2—8　無学の見 無学の慧を摂むや、無学の慧 無学の見を摂むや。
答う。無学の慧 無学の見を摂め、無学の見 無学の慧を摂むるに非ず。何等をか摂めざる。謂わく、尽・無生智なり。
③—2—9　無学の智 無学の慧を摂むや、無学の慧 無学の智を摂むや。
答う。展転して相い摂む。
③—2—10　諸もろの、無学の見を成就せる、彼れ 無学の智もなりや。
答う。是くの如し。
設し無学の智を成就せば、彼れ 無学の見もなりや。
答う。是くの如し。
③—2—11　諸もろの、無学の見を成就せる、彼れ 無学の慧もなりや。
答う。是くの如し。
設し無学の慧を成就せば、彼れ 無学の見もなりや。

答う。是くの如し。

③—2—12　諸もろの、無学の智を成就せる、彼れ無学の慧もなりや。

答う。是くの如し。

設し無学の慧を成就せば、彼れ無学の智もなりや。

答う。是くの如し。

③—3—1　云何んが非学非無学の見なる。

答う。眼根と、五見と、世俗の正見なり。

③—3—2　云何んが非学非無学の智なる。

答う。五識相応の慧と、及び意識相応の有漏の慧なり。

③—3—3　云何んが非学非無学の慧なる。

答う。五識相応の慧と、及び意識相応の有漏の慧なり。

③—3—4　諸もろの非学非無学の見は、是れ非学非無学の智なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)非学非無学の智にして、非学非無学の見に非ざる有り。謂わく、五識相応の慧と、及び五見と世俗の正見とを除ける余の意識相応の有漏の慧となり。(b)非学非無学の見にして、非学非無学の智に非ざる有り。謂わく、眼根なり。(c)非学非無学の見にして、亦た非学非無学の智なる有り。謂わく、五見と、世俗の正見なり。(d)非学非無学の見にも非ず、亦た非学非無学の智にも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

③—3—5　諸もろの非学非無学の見は、是れ非学非無学の慧なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)非学非無学の慧に非ざる有り。謂わく、眼根なり。(b)非学非無学の慧にして、非学非無学の見に非ざる有り。謂わく、五識相応の慧と、及び五見と世俗の正見とを除ける余の意識相応の有漏の慧となり。(c)非学非無学の見にして、亦た非学非無学の慧なる有り。謂わく、五見と、世俗の正見なり。(d)非学非無学の見にも非ず、亦た非学非無学の慧にも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

㊅九五五下

③—3—6　諸もろの非学非無学の智は、是れ非学非無学の慧なりや。

答う。是くの如し。

設し非学非無学の慧ならば、是れ非学非無学の智なりや。

答う。是くの如し。

③—3—7　非学非無学の見　非学非無学の智　非学非無学の智を摂むや、非学非無学の見を摂むや。

答う。応に四句を作るべし。(a)非学非無学の見にして、非学非無学の智の摂むるに非ざる有り。謂わく、眼根なり。(b)非学非無学の智にして、非学非無学の見の摂むるに非ざる有り。謂わく、五識相応の慧と、及び五見と世俗の正見とを除ける余の意識相応の有漏の慧となり。(c)非学非無学の見にして、亦た非学非無学の智の摂むる有り。謂わく、五見と、世俗の正見なり。(d)非学非無学の見にも非ず、亦た非学非無学の智の摂むるにも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

③—3—8　非学非無学の見　非学非無学の慧　非学非無学の慧を摂むや、非学非無学の見

を摂むや。

答う。応に四句を作るべし。(a)非学非無学の見にして、非学非無学の慧の摂むるに非ざる有り。謂わく、眼根なり。(b)非学非無学の慧にして、非学非無学の見の摂むるに非ざる有り。謂わく、五識相応の慧と、及び五見と世俗の正見とを除ける余の意識相応の有漏の慧となり。(c)非学非無学の見にして、亦た非学非無学の慧の摂むる有り。謂わく、五見と、世俗の正見なり。(d)非学非無学の見にも非ず、亦た非学非無学の慧の摂むるにも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

③—3—9　非学非無学の智　非学非無学の慧を摂むや、非学非無学の慧　非学非無学の智を摂むや。

答う。展転して相い摂む。

③—3—10　諸もろの、非学非無学の見を成就せる、彼れ　非学非無学の智もなりや。

答う。是くの如し。

設し非学非無学の智を成就せば、彼れ　非学非無学の見もなりや。

答う。是くの如し。

③—3—11　諸もろの、非学非無学の見を成就せる、彼れ　非学非無学の慧もなりや。

答う。是くの如し。

設し非学非無学の慧を成就せば、彼れ　非学非無学の見もなりや。

答う。是くの如し。

③—3—12　諸もろの、非学非無学の智を成就せる、彼れ　非学非無学の慧もなりや。

㊅九五六上

答う。是くの如し。

設し非学非無学の慧を成就せば、彼れ 非学非無学の智もなりや。

答う。是くの如し。

③—3—13 諸もろの、非学非無学の見 已に断じ已に遍知せる、彼れ 非学非無学の智もなりや。

答う。是くの如し。

設し非学非無学の智 已に断じ已に遍知せば、彼れ 非学非無学の見もなりや。

答う。是くの如し。

③—3—14 諸もろの、非学非無学の見 已に断じ已に遍知せる、彼れ 非学非無学の慧もなりや。

答う。是くの如し。

設し非学非無学の慧 已に断じ已に遍知せば、彼れ 非学非無学の見もなりや。

答う。是くの如し。

③—3—15 諸もろの、非学非無学の智 已に断じ已に遍知せる、彼れ 非学非無学の慧もなりや。

答う。是くの如し。

設し非学非無学の慧 已に断じ已に遍知せば、彼れ 非学非無学の智もなりや。

答う。是くの如し。

④—1　大梵天の是くの如きの説を作すが如き、「我れは是れ梵、是れ大梵にして、自在を得。我れ 世間に於て、能く造化し、能く出生すれば、是れ彼れの父たり」とは、此れ 五見に於て、何れの見の摂なりや。何れの諦をか見て、此の見を断ぜん。

答う。「我れは是れ梵、是れ大梵にして、自在を得」とは、劣法を取りて勝ると為せば、見取の摂、見苦所断なり。「我れ 世間に於て、能く造化し、能く出生すれば、是れ彼れの父たり」とは、因に非ざるを因と計せば、戒禁取の摂、見苦所断なり。

④—2　梵衆天の是くの如きの説を作すが如き、「此れ[七]は是れ梵、是れ大梵にして、自在を得。此れ 世間に於て、能く造化し、能く出生すれば、是れ我れ等が父なり」とは、此れ 五見に於て、何れの見の摂なりや。何れの諦をか見て、此の見を断ぜん。

答う。「此れは是れ梵、是れ大梵にして、自在を得」とは、劣法を取りて勝ると為せば、見取の摂、見苦所断なり。「此れ 世間に於て、能く造化し、能く出生すれば、是れ我れ等が父なり」とは、因に非ざるを因と計せば、戒禁取の摂、見苦所断なり。

⑤—1　諸もろの、此の見「我れ 一切を忍ず[八]」を起こすは、此れ 五見に於て、何れの見の摂なりや。何れの諦をか見て、此の見を断ぜん。

答う。辺執見中の常見の摂、見苦所断なり。

⑤—2　諸もろの、此の見「我れ 一切を忍ぜず」を起こすは、此れ 五見に於て、何れの見の摂なりや。何れの諦をか見て、此の見を断ぜん。

答う。辺執見中の断見の摂、見苦所断なり。

七　此れ　大梵天を指す。

八　忍ず　認める、認知する、承認する、の意。

⑤—3　諸もろの、此の見「我れ一分を忍じ、一分を忍ぜず」を起こすは、此れ五見に於て、何れの見の摂なりや。何れの諦をか見て、此の見を断ぜん。

答う。「一分を忍ず」とは、辺執見中の常見の摂、「一分を忍ぜず」とは、辺執見中の断見の摂にして、倶に見苦所断なり。

㊅九五六中

⑥—1　諸もろの、此の見「阿羅漢有り。天魔に嬈られ、不浄を漏失す」を起こすは、此れ五見に於て、何れの見の摂なりや。何れの諦をか見て、此の見を断ぜん。

答う。因に非ざるを因と計せば、戒禁取の摂、見苦所断なり。

⑥—2　諸もろの、此の見「阿羅漢有り。自らの解脱に於て、猶お無知有り」を起こすは、此れ五見に於て、何れの見の摂なりや。何れの諦をか見て、此の見を断ぜん。

答う。阿羅漢の無漏の智見を謗れば、邪見の摂、見道所断なり。

⑥—3　諸もろの、此の見「阿羅漢有り。自らの解脱に於て、猶お疑惑有り」を起こすは、此れ五見に於て、何れの見の摂なりや。何れの諦をか見て、此の見を断ぜん。

答う。阿羅漢の疑惑を越度せるを謗れば、邪見の摂、見道所断なり。

⑥—4　諸もろの、此の見「阿羅漢有り。但だ他に由りてのみ度さる」を起こすは、此れ五見に於て、何れの見の摂なりや。何れの諦をか見て、此の見を断ぜん。

答う。阿羅漢の無障・無背にして、現量の慧眼もて身證自在なるを謗れば、邪見の摂、見道所断なり。

⑥—5　諸もろの、此の見「道と及び道支は『苦なり』との言に召かる」を起こすは、此

れ五見に於て、何れの見の摂なりや。何れの諦をか見て、此の見を断ぜん。
答う。因に非ざるを因と計せば、戒禁取の摂、見苦所断なり。

説一切有部発智論　巻の第七

阿毘達磨発智論

尊者迦多衍尼子 造る
三蔵法師玄奘 詔を奉じて訳す

巻の第八

智蘊 第三の中、他心智納息 第三

①二智と②二解脱と　③明・智の三と④證浄と
⑤顚倒と等持と⑥修とを　此の章にて願わくば具さに説かん

①—1　云何んが他心智なる。
答う。若し、智の修所成[一]なる、是れ修の果たりて、修に依止し、已に得て失わず、能く[二]他相続の現在の欲・色界の心・心所法、或いは無漏の心・心所法を知らば、是れを他心智

第三篇第三章

一　修所成　聞所成および思所成に対する。聴聞によって得られる智、考察思惟によって得られる智に対して、実践修行によって得られる智をいう。

二　他相続　他者、他の個体、の意。いかなる個体的生存も、さまざまな原因によってもろもろの法が結合したものにすぎず、それらが刹那刹那に消滅しつつ連続継起してゆくところに個体の生が成り立つのであるから「相続」という語でそれを呼ぶ。

と謂う。

①―2　云何んが宿住随念智なる。

答う。若し、智の修所成なる、是れ修の果たりて、修に依止し、已に得て失わず、能く現に、諸もろの宿住[三]の事の種種の相状、及び言説せる所を憶知せば、是れを宿住随念智と謂う。

①―3　諸もろの他心智は、皆な現に他の心・心所法を知るや。

答う。応に四句を作るべし。(a)他心智にして、現に他の心・心所法を知るに非ざる有り。謂わく、過去・未来の他心智なり。(b)現に他の心・心所法を知りて、他心智に非ざる有り。謂わく、一り有りて、或いは相を覩[四]、或いは語を聞き、或いは是くの如き生処[五]にして得る智を得て、能く現に他の心・心所法を知るが如し。(c)他心智にして、亦た現に他の心・心所法を知る有り。謂わく、智の修所成なる、是れ修の果たりて、修に依止し、已に得て失わず、能く現に、他の現在の欲・色界の心・心所法、或いは無漏の心・心所法を知るが若し。(d)他心智にも非ず、亦た現に他の心・心所法を知るにも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

①―4　諸もろの宿住随念智は、皆な現に諸もろの宿住の事を憶知すや。

答う。応に四句を作るべし。(a)宿住随念智にして、現に諸もろの宿住の事を憶知するに非ざる有り。謂わく、過去・未来の宿住随念智なり。(b)現に諸もろの宿住の事を憶知し、宿住随念智に非ざる有り。謂わく、一り有りて、本性[六]として生を念ずる智を得、或いは是くの如き生処にして得る智を得て、能く現に諸もろの宿住の事を憶知するが如し。(c)宿住

三　宿住　「宿」は先の、以前の、過去の、の意。「住」は住まいのしかた、生存のあり方、の意。宿住とは前世における生存の状況をいう。　(大)九五六下

四　相を覩(る)　(他人の)様子を観察する、という程の意。

五　生処にして得る智　地獄・傍生・鬼・天に生まれた者はそれぞれ、その趣に生まれた者に特有の他心を知る智を具有することがあるという。

六　本性として生を念ずる智　生まれつき宿世の生涯を記憶している智、の意。人趣に生まれた者の中にのみ、そのような智を具有することがあるという。

大九五七上

随念智にして、亦た現に諸もろの宿住の事を憶知する有り。謂わく、智の修所成なる、是れ修の果たりて、修に依止し、已に得て失わず、能く現に、諸もろの宿住の事の種種の相状、及び言説せる所を憶知するが若し。(d)宿住随念智にも非ず、亦た現に諸もろの宿住の事を憶知するにも非ざる有り。謂わく、前の〔三〕相を除けるなり。

①—5　諸もろの宿住随念智は、皆な他の過去の蘊・処・界と心相続を知るや。

答う。応に四句を作るべし。(a)宿住随念智にして、他の過去の蘊・処・界と心相続を知るに非ざる有り。謂わく、智の修所成なる、是れ修の果たりて、修に依止し、已に得て失わず、自らの前の生の過去の蘊・処・界と心相続を知るが若し。(b)他の過去の蘊・処・界と心相続を知りて、宿住随念智に非ざる有り。謂わく、智の修所成なる、是れ修の果たりて、修に依止し、已に得て失わず、他の此の生の過去の蘊・処・界と心相続を知るが若し。(c)宿住随念智にして、亦た他の過去の蘊・処・界と心相続を知る有り。謂わく、智の修所成なる、是れ修の果たりて、修に依止して、已に得て失わず、他の前生の過去の蘊・処・界と心相続を知るが若し。(d)宿住随念智にも非ず、亦た他の過去の蘊・処・界と心相続を知るにも非ざる有り。謂わく、智の修所成なる、是れ修の果たりて、修に依止し、已に得て失わず、自らの此の生の過去の蘊・処・界と心相続を知るが若し。

②—1　云何んが時愛心解脱なる。

答う。時解脱阿羅漢の尽智、或いは無学の正見と相応する心の勝解すると、已に勝解せると、当に勝解すべきとなり。

②—2　云何んが不動心解脱なる。

答う。不動法阿羅漢の尽智・無生智、或いは無学の正見と相応する心の勝解すると、已に勝解せると、当に勝解すべきとなり。

②—3　諸もろの時愛心解脱は、皆な尽智相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)時愛心解脱にして、尽智相応に非ざる有り。謂わく、時解脱阿羅漢の、無学の正見と相応する心の勝解すると、已に勝解せると、当に勝解すべきとなり。(b)尽智相応にして、時愛心解脱に非ざる有り。謂わく、不動法阿羅漢の尽智と相応する心の勝解すると、已に勝解せると、当に勝解すべきとなり。(c)時愛心解脱にして、亦た尽智相応なる有り。謂わく、時解脱阿羅漢の尽智と相応する心の勝解すると、已に勝解せると、当に勝解すべきとなり。(d)時愛心解脱にも非ず、亦た尽智相応にも非ざる有り。謂わく、不動法阿羅漢の無生智、或いは無学の正見と相応する心の勝解すると、已に勝解せると、当に勝解すべきとなり。

②—4　諸もろの不動心解脱は、皆な無生智相応なりや。

答う。諸もろの無生智相応なるは、皆な不動心解脱なるも、不動心解脱にして、無生智相応に非ざる有り。謂わく、不動法阿羅漢の尽智、或いは無学の正見と相応する心の勝解すると、已に勝解せると、当に勝解すべきとなり。

②—5　何に縁りてか時心解脱を愛と名づくる。

答う。時解脱阿羅漢は、恒に此の法に於て、慇懃に「我れ縁に遇い、此の法より退失すること勿らん」と守護し、宝愛し、執蔵す。一目の人は、自らと及び親友と慇懃に「寒

熱・塵翳等の縁に遇いて、此の一目をして更に当に失壊せしむること勿らん」と守護し、宝愛し、執蔵するが如く、彼れも亦た是くの如くするが故に、名づけて愛と為す。

③—1　云何んが学の明なる。
答う。学の慧なり。

③—2　云何んが学の智なる。
答う。学の八智なり。

③—3　云何んが無学の明なる。
答う。無学の慧なり。

③—4　云何んが無学の智なる。
答う。無学の八智なり。

④　諦現観の時、何に於てか最初、七證浄を得る。仏なりや、法なりや、僧なりや。
答う。苦・集・滅を現観する時は、法に於て最初に證浄を得、道を現観する時は、仏・法・僧に於て最初に證浄を得。

⑤—1　諸もろの預流の者　四顚倒に於て、幾ばくか已に断じ、幾ばくか未だ断ぜざる。
答う。一切　已に断ぜり。

⑤—2　諸もろの預流の者　空・無願・無相の三三摩地(samādhi)に於て、過去に幾ばく、

七　證浄　不壊浄ともいう。仏・法・僧（および戒）に対して堅固な浄信を抱くこと。

㊅九五七中

未来に幾ばく、現在に幾ばくを成就すや。

答う。未来には一切を、過去には已に滅して失わざるが若きを、現在には現在前するが若きを〔成就す〕。

⑥―1 諸もろの道の過去なるは、皆な已に修し已に息むや。

答う。諸もろの道の過去なるは、皆な已に修し已に息むも、道の已に修し已に息むも、過去に非ざる有り。謂わく、道の未来にして、已に修し已に息むなり。

⑥―2 諸もろの道の未来なるは、皆な未だ已に修し已に息まざるや。

答う。応に四句を作るべし。(a)道の未来にして、未だ已に修し已に息まざるに非ざる有り。謂わく、道の未来にして、已に修し已に息むなり。(b)道の未だ已に修し已に息まざるも、未来に非ざる有り。謂わく、未だ曾つて得ざる道の初めて現在前するなり。(c)道の未来にして、亦た未だ已に修し已に息まざる有り。謂わく、道の未来にして、未だ已に修し已に息まざるなり。(d)道の未来なるにも非ず、亦た未だ已に修し已に息むにも非ざる有り。謂わく、道の過去なると及び曾つて得たる道の、今 現在前するなり。

⑥―3 諸もろの道の現在なるは、皆な正に修すや。

答う。諸もろの道の現在なるは、皆な正しく修するも、道の正しく修して、現在に非ざる有り。謂わく、未だ曾つて得ざる道 初めて現在前するに、修する所の未来の彼の種類の道なり。

智蘊 第三の中、修智納息 第四の一

①八智の②摂と③成と④修と　⑤相い縁ずると⑥縁たると⑦断と⑧證と
⑨智の知ると⑩想と⑪七善とを　此の章にて願わくば具さに説かん

①—1　八智有り。謂わく、法智乃至道智なり。云何んが法智なる。
答う。欲界の諸行と、諸行の因と、諸行の滅と、諸行の能断の道に於ける所有る無漏智と、又た法智と、及び法智の地に於ける所有る無漏智と、是れを法智と謂う。

①—2　云何んが類智なる。
答う。色・無色界の諸行と、諸行の因と、諸行の滅と、諸行の能断の道に於ける所有る無漏智と、又た類智と、及び類智の地に於ける所有る無漏智と、是れを類智と謂う。

①—3　云何んが他心智なる。
答う。智の是れ修果にして、他の現在の心・心所法を知るが若きなり。

①—4　云何んが世俗智なる。
答う。三界の有漏の慧なり。

①—5　云何んが苦智なる。
答う。諸行に於て、苦・非常・空・非我の行相と作りて転ずる智なり。

①—6　云何んが集智（じっち）なる。

答う。諸行の因に於て、因・集・生・縁の行相と作りて転ずる智なり。

①—7　云何んが滅智なる。

答う。諸行の滅に於て、滅・静・妙・離の行相と作りて転ずる智なり。

①—8　云何んが道智なる。

答う。諸行の対治道（たいじどう）に於て、道・如・行・出と作りて転ずる智なり。

㊅九五七下

②　法智乃至道智は、八智の中に於て一一幾ばくか摂（おさ）むる。

答う。法智は、法智と、五智の少分を摂む。謂わく、他心智と、苦・集・滅・道智なり。

類智は、類智と、五智の少分を摂む。謂わく、他心智と、苦・集・滅・道智なり。

他心智は、他心智と、四智の少分を摂む。謂わく、法・類・世俗・道智なり。

世俗智は、世俗智と、他心智の少分を摂む。

苦智は、苦智と、二智の少分を摂む。謂わく、法・類智なり。

集智は、集智と、二智の少分を摂む。謂わく、法・類智なり。

滅智は、滅智と、二智の少分を摂む。謂わく、法・類智なり。

道智は、道智と、三智の少分を摂む。謂わく、法・類・他心智なり。

③—1　若し法智を成就せば、此の八智に於て、幾ばくか成就し、幾ばくか成就せざる。

答う。或いは三、四、五、六、七、八なり。謂わく、苦法智と苦類智忍の時、他心智無

きは三を成就し、他心智有るは四を成就す。
苦類智と集法智忍の時、他心智無きは四を成就し、他心智有るは五を成就す。
集法智乃至滅法智忍の時、他心智無きは五を成就し、他心智有るは六を成就す。
滅法智乃至道法智忍の時、他心智無きは六を成就し、他心智有るは七を成就す。
道法智乃至道類智の時、他心智無きは七を成就し、他心智有るは八を成就す。

③―2　若し類智を成就せば、此の八智に於て、幾ばくか成就し、幾ばくか成就せざる。
答う。或いは四、五、六、七、八なり。謂わく、苦類智と集法智忍の時、他心智無きは四を成就し、他心智有るは五を成就す。
集法智乃至滅法智忍の時、他心智無きは五を成就し、他心智有るは六を成就す。
滅法智乃至道法智忍の時、他心智無きは六を成就し、他心智有るは七を成就す。
道法智乃至道類智の時、他心智無きは七を成就し、他心智有るは八を成就す。

③―3　若し他心智を成就せば、此の八智に於て、幾ばくか成就し、幾ばくか成就せざる。
答う。或いは二、四、五、六、七、八なり。謂わく、異生と及び聖者と、苦法智忍の時、二を成就す。
苦法智と苦類智忍の時、四を成就す。
苦類智と集法智忍の時、五を成就す。
集法智乃至滅法智忍の時、六を成就す。
滅法智乃至道法智忍の時、七を成就す。
道法智乃至道類智の時、八を成就す。

㊅九五八上

③―4　若し世俗智を成就せば、此の八智に於て、幾ばくか成就し、幾ばくか成就せざる。

答う。或いは一、二、三、四、五、六、七、八なり。謂わく、異生と及び聖者と、苦法智忍の時、他心智無きは一を成就し、他心智有るは二を成就す。

苦法智と苦類智忍の時、他心智無きは三を成就し、他心智有るは四を成就す。

苦類智と集法智忍の時、他心智無きは四を成就し、他心智有るは五を成就す。

集法智乃至滅法智忍の時、他心智無きは五を成就し、他心智有るは六を成就す。

滅法智乃至道法智忍の時、他心智無きは六を成就し、他心智有るは七を成就す。

道法智乃至道類智の時、他心智無きは七を成就し、他心智有るは八を成就す。

③―5　若し苦智を成就せば、此の八智に於て、幾ばくか成就し、幾ばくか成就せざる。

答う。或いは三、四、五、六、七、八なり。謂わく、苦法智と苦類智忍の時、他心智無きは三を成就し、他心智有るは四を成就す。

苦類智と集法智忍の時、他心智無きは四を成就し、他心智有るは五を成就す。

集法智乃至滅法智忍の時、他心智無きは五を成就し、他心智有るは六を成就す。

滅法智乃至道法智忍の時、他心智無きは六を成就し、他心智有るは七を成就す。

道法智乃至道類智の時、他心智無きは七を成就し、他心智有るは八を成就す。

③―6　若し集智を成就せば、此の八智に於て、幾ばくか成就し、幾ばくか成就せざる。

答う。或いは五、六、七、八なり。謂わく、集法智乃至滅法智忍の時、他心智無きは五を成就し、他心智有るは六を成就す。

滅法智乃至道法智忍の時、他心智無きは六を成就し、他心智有るは七を成就す。

一　現観に入りて　すなわち、見道に入って。

道法智乃至道類智の時、他心智無きは七を成就し、他心智有るは八を成就す。

③―7　若し滅智を成就せば、此の八智に於て、幾ばくか成就し、幾ばくか成就せざる。

答う。或いは六、七、八なり。謂わく、滅法智乃至道法智忍の時、他心智無きは六を成就し、他心智有るは七を成就す。

道法智乃至道類智の時、他心智無きは七を成就し、他心智有るは八を成就す。

③―8　若し道智を成就せば、此の八智に於て、幾ばくか成就し、幾ばくか成就せざる。

答う。或いは七、八なり。謂わく、他心智無きは七を成就し、他心智有るは八を成就す。

④―1―1　若し法智を修せば[補註18]、亦た類智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法智を修して、類智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて[一]、苦・集・滅・道法智の時と、学見迹と阿羅漢[二]の已得の法智[三] 現在前する時なり。(b)類智を修して、法智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、苦[四]・集・滅類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の類智 現在前する時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の未だ得ざる無漏智[五] 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前して、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、学見迹と阿羅漢の已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、倶に修せざる時と、一切の異生[六]の染汚心[七]・無記心と、無想定[八]・滅定と、無想天と、無漏の忍[九]の時なり。

④―1―2　若し法智を修せば、亦た他心智もなりや。

二 学見迹と阿羅漢　すなわち、修道にある行者と無学道にある行者。

三 已得の法智現在前する　先に見道において得修された法智が現在前する。

四 苦・集・滅類智　道類智においても当然類智が修せられ法智は修せられないと考えられそうであるが、現観の第十六 ㊅九五八中 心である道類智が生ずるとき、行者は修道に入るのであり、修道における無漏智には法智・類智の別が立てられないから、道類智においては類智も法智もともに修せられることになる。

五 未だ得ざる無漏智現在前する時　先に見道において得修された智でなく、いま修道あるいは無学道において行修されて現在前する智には法智・類智の別を立てないから、殊別して「法智」とはいわず、「無漏智」という。

六 一切の異生〔心〕　法智も類智も無漏であるから、異生心はたとえ善心であっても法智・類智を修することがない。

七 染汚心・無記心　得修も習修も、無漏心か有漏の善心においてのみ修せられる。

八 無想定・滅定と無想天と　これらはいずれも心のはたらきが全く無い状態であるから、いかなる智も修せられない。

九 無漏の忍　いうまでもなく忍は自性として智でないから、忍の現在している時、智は修せられない。

答う。応に四句を作るべし。(a)法智を修して、他心智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、[一〇]苦・集・滅・道法智の時と、[一一]未だ欲染を離れざる者 現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の法智 現在前し、他心智〔現在前する〕に非ざる時と、未だ得ざる無漏智 現在前するも、他心智を修せざる時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、法智を修して他心智〔を修する〕には非ざる時なり。(b)他心智を修して、法智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、[一二]異生の已得・未得の他心智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、他心智を修する時と、学見迹と阿羅漢の已得の他心智 現在前するも、法智〔現在前する〕に非ざる時なり。(c)俱に修する有り。謂わく、已に欲染を離れたるものの現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の法智 現在前し、[一三]是れ他心智なる時と、未だ得ざる無漏智 現在前して、他心智を修する時と、未だ得ざる世俗智 現在前して、能く[一四]俱に修する時なり。(d)俱に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・滅類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、法智と他心智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前するも、他心智〔現在前する〕に非ざる時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、[一五]俱に修せざる時と、異生の他心智を修せざる時と、[一六]一切の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④―1―3　若し法智を修せば、亦た世俗智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法智を修して、世俗智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・滅・道法智と道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の法智 現在前する時と、未だ得ざる無漏智 現在前するも、世俗智を修せざる時なり。(b)世俗智を修

一〇　苦・集・滅・道法智の時　見道には他心智は無い。(俱IV 6参照)

一一　未だ欲染を離れざる者…道類智の時　道類智の時、法智は修せられるが、欲界より離染していないから、他心智は修せられない。

一二　異生　法智は異生の位では修せられないが、他心智には有漏智もある。

一三　是れ他心智なる時　他心智は法智に摂せられる場合もあり、類智に摂せられる場合もある。いまは、先に見道で得修された法智が現在前するとき、それに摂せられるところの他心智を指していう。

一四　俱に修する時　法智と他心智とを俱に修する時、の意。

一五　俱に修せざる時　他心智を俱に修するのでない場合、の意。

㊅九五八下

一六　一切の染汚心・無記心　他心智は異生の善心においても修せられる。したがって、異生であっても善心の場合はこの項(四句分別の中のd)には該当しない。上掲頭註六と比較せよ。

一七 苦・集・滅類智の時　苦・集・滅類智を修する時は、また、それぞれの諦現観ののちに続いて生ずべき世俗智を得修する。(倶VII 23)

して、法智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、諸もろの異生の已得・未得の世俗智 現在前する時と、現観に入りて、苦・集・滅類智[一七]の時と、学見迹と阿羅漢の已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、法智を修せざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、学見迹と阿羅漢の未だ得ざる無漏智 現在前し、世俗智を修する時と、未だ得ざる世俗智 現在前して、法智を修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、法智〔現在前する〕に非ざる時と、一切の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④—1—4　若し法智を修せば、亦た苦智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法智を修して、苦智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、集・滅・道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の法智 現在前し、苦智〔現在前する〕に非ざる時なり。(b)苦智を修して、法智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、苦類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の苦智 現在前し、法智〔現在前する〕に非ざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、苦法智と及び道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の苦法智 現在前する時と、未だ得ざる無漏智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、集・滅類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するに、法・苦智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、法・苦智を修せざる時と、一切の異生の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

㊅九五九上

④—1—5　若し法智を修せば、亦た集智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法智を修して、集智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・滅・道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の法智 現在前し、集智〔現在前する〕に非ざる時なり。(b)集智を修して、法智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、集類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の集智 現在前し、法智〔現在前する〕に非ざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、集法智と道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の集法智 現在前する時と、未だ得ざる無漏智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、法・集智を修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・滅類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前し、法・集智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、法・集智を修せざる時と、一切の異生の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④—1—6　若し法智を修せば、亦た滅智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法智を修して、滅智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の法智 現在前し、滅智〔現在前する〕に非ざる時なり。(b)滅智を修して、法智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、滅類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の滅智 現在前し、法智〔現在前する〕に非ざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、滅法智と道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の滅法智 現在前する時と、未だ得ざる無漏智 現在前する時と、未だ

得ざる世俗智 現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前し、法・滅智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、倶に修せざる時と、一切の異生の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④―1―7 若し法智を修せば、亦た道智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法智を修して、道智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・滅法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の法智 現在前し、道智〔現在前する〕に非ざる時なり。(b)道智を修して、法智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、学見迹と阿羅漢の已得の道智 現在前し、法智〔現在前する〕に非ざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、道法智と道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の道法智 現在前する時と、未だ得ざる無漏智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・滅類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、法・道智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、倶に修せざる時と、一切の異生の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

㊅九五九中

④―2―1 若し類智を修せば、亦た他心智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)類智を修して、他心智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・滅類智の時と、未だ欲染を離れざる者の道類智の時と、学見迹と

阿羅漢の已得の類智　現在前するも、他心智〔現在前する〕に非ざる時と、未だ得ざる無漏智　現在前するも、他心智を修せざる時と、未だ得ざる世俗智　現在前するに、類智を修して他心智〔を修する〕に非ざる時なり。(b)他心智を修して、類智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、異生の已得・未得の他心智　現在前する時と、未だ得ざる世俗智　現在前するに、他心智を修する時と、学見迹と阿羅漢の已得の他心智　現在前するも、類智〔現在前する〕に非ざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、已に欲染を離るる者の現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の類智　現在前し、是れ他心智なる時と、未だ得ざる無漏智　現在前するに、他心智を修する時と、未だ得ざる世俗智　現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・滅・道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智　現在前するも、類・他心智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智　現在前するも、他心智〔現在前する〕に非ざる時と、未だ得ざる世俗智　現在前するに、倶に修せざる時と、異生の他心智を修せざる時と、一切の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④―2―2　若し類智を修せば、亦た世俗智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)類智を修して、世俗智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の類智　現在前する時と、未だ得ざる無漏智　現在前するに、世俗智を修せざる時なり。(b)世俗智を修して、類智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、異生の已得・未得の世俗智　現在前する時と、学見迹と阿羅漢の已得の世俗智　現在前する時と、未だ得ざる世俗智　現在前するも、類智を修せざる時なり。

㊅九五九下

(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・滅類智の時と、学見迹と阿羅漢の未だ得ざる無漏智 現在前するに、世俗智を修する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、類智を修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・滅・道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、類智〔現在前する〕に非ざる時と、一切の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④―2―3　若し類智を修せば、亦た苦智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)類智を修して、苦智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、集・滅類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の類智 現在前するも、苦智〔現在前する〕に非ざる時なり。(b)苦智を修して、類智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、苦法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の苦智 現在前するも、類智〔現在前する〕に非ざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、苦・道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の苦類智 現在前する時と、未だ得ざる無漏智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、集・滅・道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、類・苦智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、倶に修せざる時と、一切の異生の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④―2―4　若し類智を修せば、亦た集智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)類智を修して、集智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、

現観に入りて、苦・滅類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の類智 現在前するも、集智〔現在前する〕に非ざる時なり。(b)集智を修して、類智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、集法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の集智 現在前するも、類智〔現在前する〕に非ざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、集・道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の集類智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・滅・道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、類・集智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、倶に修せざる時と、一切の異生の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④—2—5　若し類智を修せば、亦た滅智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)類智を修して、滅智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の類智 現在前するも、滅智〔現在前する〕に非ざる時なり。(b)滅智を修して、類智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、滅法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の滅智 現在前するも、類智〔現在前する〕に非ざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、滅・道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の滅類智 現在前する時と、未だ得ざる無漏智 現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、類

㊀九六〇上

・滅智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前するも、倶に修せざる時と、一切の異生の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④―2―6　若し類智を修せば、亦た道智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)類智を修して、道智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・滅類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の類智 現在前するも、道智〔現在前する〕に非ざる時なり。(b)道智を修して、類智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の道智 現在前するも、類智〔現在前する〕に非ざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の道類智 現在前する時と、未だ得ざる無漏智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・滅法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、道類智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、倶に修せざる時と、一切の異生の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④―3―1　若し他心智を修せば、亦た世俗智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)他心智を修して、世俗智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、已に欲染を離れたる者の現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の他心智 現在前するも、世俗智〔現在前する〕に非ざる時と、未だ得ざる無漏智 現在前するに、

大九六〇中

他心智を修して世俗智〔を修する〕に非ざる時なり。(b)世俗智を修して、他心智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、他心智無き異生の已得・未得の世俗智　現在前する時と、他心智有る異生の已得の世俗智　現在前するも、他心智〔現在前する〕に非ざる時と、未だ得ざる世俗智　現在前するも、他心智を修せざる時と、現観に入りて、苦・集・滅類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の世俗智　現在前するも、他心智〔現在前する〕に非ざる時と、未だ得ざる世俗智　現在前するも、他心智を修せざる時と、未だ得ざる無漏智　現在前するに、世俗智を修して他心智〔を修する〕に非ざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、異生の已得・未得の他心智　現在前する時と、未だ得ざる世俗智　現在前するに、他心智を修する時と、学見迹と阿羅漢の已得の世俗・他心智　現在前する時と、未だ得ざる世俗智　現在前するに、他心智を修する時と、未だ得ざる無漏智　現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・滅・道法智の時と、未だ欲染を離れざる者の現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智　現在前するも、他心智〔現在前する〕に非ざる時と、未だ得ざる無漏智　現在前するに、倶に修せざる時と、一切の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④―3―2　若し他心智を修せば、亦た苦智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)他心智を修して、苦智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、異生の已得・未得の他心智　現在前する時と、未だ得ざる世俗智　現在前するに、他心智を修する時と、学見迹と阿羅漢の已得の他心智　現在前する時なり。(b)苦智を修して、他心智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、苦法〔智と苦〕類智の時と、未だ欲染

を離れざる者の現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の苦智 現在前する時と、未だ得ざる無漏智 現在前するも、他心智を修せざる時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、苦智を修して、他心智〔を修する〕に非ざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、已に欲染を離れたる者の現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の未だ得ざる無漏智 現在前して、他心智を修する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、集・滅法〔智と集・滅〕類智と道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、他心・苦智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前するも、他心智〔現在前する〕に非ざる時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、倶に修せざる時と、異生の他心智を修せざる時と、一切の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

㊅九六〇下

④—3—3 若し他心智を修せば、亦た集智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)他心智を修して、集智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、異生の已得・未得の他心智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、他心智を修する時と、学見迹と阿羅漢の已得の他心智 現在前する時なり。(b)集智を修して、他心智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、集法〔智と集〕類智の時と、未だ欲染を離れざる者の現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の集智 現在前する時と、未だ得ざる無漏智 現在前するも、他心智を修せざる時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、集智を修して、他心智〔を修する〕に非ざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、已に欲染を離れたる者の現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の未だ得ざる無漏

智 現在前するに、他心智を修する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・滅法〔智と苦・滅〕類智と道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、他心・集智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前するも、他心智〔現在前する〕に非ざる時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、倶に修せざる時と、異生の他心智を修せざる時と、一切の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④—3—4　若し他心智を修せば、亦た滅智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)他心智を修して、滅智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、異生の已得・未得の他心智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、他心智を修する時と、学見迹と阿羅漢の已得の他心智 現在前する時なり。(b)滅智を修して、他心智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、滅法〔智と滅〕類智の時と、未だ欲染を離れざる者の現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の滅智 現在前する時と、未だ得ざる無漏智 現在前するも、他心智を修せざる時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、滅智を修して、他心智〔を修する〕に非ざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、

㊅九六一上

已に欲染を離れたる者の現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の未だ得ざる無漏智 現在前するに、他心智を修する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集法〔智と苦・集〕類智と道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、他心・滅智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前するも、他心智〔現在前する〕に非ざる時と、未だ得ざ

る世俗智　現在前するも、倶に修せざる時と、異生の他心智を修せざる時と、一切の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④—3—5　若し他心智を修せば、亦た道智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)他心智を修して、道智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、異生の已得・未得の他心智　現在前する時と、未だ得ざる世俗智　現在前するに、他心智を修する時と、学見迹と阿羅漢の已得の他心智　現在前するも、道智〔現在前する〕に非ざる時なり。(b)道智を修して、他心智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、道法智の時と、未だ欲染を離れざる者の現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の道智　現在前するも、他心智〔現在前する〕に非ざる時と、未だ得ざる無漏智　現在前するも、他心智を修せざる時と、未だ得ざる世俗智　現在前するに、道智を修して、他心智〔を修する〕に非ざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、已に欲染を離れたる者の現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の他心・道智　現在前する時と、未だ得ざる無漏智　現在前するに、他心智を修する時と、未だ得ざる世俗智　現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・滅法〔智と苦・集・滅〕類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智　現在前するも、他心・道智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智　現在前するも、他心智〔現在前する〕に非ざる時と、未だ得ざる世俗智　現在前するも、倶に修せざる時と、異生の他心智を修せざる時と、一切の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④—4—1　若し世俗智を修せば、亦た苦智もなりや。

㊅九六一中

答う。応に四句を作るべし。(a)世俗智を修して、苦智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、異生の已得・未得の世俗智 現在前する時と、現観に入りて、集・滅類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、苦智を修せざる時なり。(b)苦智を修して、世俗智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、苦法智と道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の苦智 現在前する時と、未だ得ざる無漏智 現在前するも、世俗智を修せざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、苦類智の時と、学見迹と阿羅漢の未だ得ざる無漏智 現在前するに、世俗智を修する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、苦智を修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、集・滅・道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、苦智〔現在前する〕に非ざる時と、一切の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④—4—2　若し世俗智を修せば、亦た集智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)世俗智を修して、集智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、異生の已得・未得の世俗智 現在前する時と、現観に入りて、苦・滅類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、集智を修せざる時なり。(b)集智を修して、世俗智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、集法智と道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の集智 現在前する時と、未だ得ざる無漏智 現在前するも、世俗智を修せざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、集類智の時と、学見迹と阿羅漢の未だ得ざる無漏智 現在前するに、世俗智を修する時と、

未だ得ざる世俗智 現在前するに、集智を修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて苦・滅・道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、集智〔現在前する〕に非ざる時と、一切の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④—4—3　若し世俗智を修せば、亦た滅智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)世俗智を修して、滅智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、異生の已得・未得の世俗智 現在前する時と、現観に入りて、苦・集類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、滅智を修せざる時なり。(b)滅智を修して、世俗智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、滅法智と道類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の滅智 現在前する時と、未だ得ざる無漏智 現在前するも、世俗智を修せざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、滅類智の時と、学見迹と阿羅漢の未だ得ざる無漏智 現在前するに、世俗智を修する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、滅智を修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、滅智〔現在前する〕に非ざる時と、一切の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④—4—4　若し世俗智を修せば、亦た道智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)世俗智を修して、道智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、異生の已得・未得の世俗智 現在前する時と、現観に入りて、苦・集・滅類智の時と、学

㊅九六一下

見迹と阿羅漢の已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、道智を修せざる時なり。(b)道智を修して、世俗智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、道法〔智と道〕類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の道智 現在前する時と、未だ得ざる無漏智 現在前するも、世俗智を修せざる時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するに、世俗智を修する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、道智を修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集・滅法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、道智〔現在前する〕に非ざる時と、一切の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

説一切有部発智論 巻の第八

㊅九六二上

阿毘達磨発智論

尊者迦多衍尼子 造る
三蔵法師玄奘 詔を奉じて訳す

巻の第九

智蘊 第三の中、修智納息 第四の二

④—5—1　若し苦智を修せば、亦た集智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)苦智を修して、集智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、苦法〔智と苦〕類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の苦智 現在前する時なり。(b)集智を修して、苦智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、集法〔智と集〕類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の集智 現在前する時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の未だ得ざる無漏智 現在前する時

と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、法類智と道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、苦・集智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、倶に修せざる時と、一切の異生の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④—5—2　若し苦智を修せば、亦た滅智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)苦智を修して、滅智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、苦法〔智と苦〕類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の苦智 現在前する時なり。(b)滅智を修して、苦智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、滅法〔智と滅〕類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の滅智 現在前する時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の未だ得ざる無漏智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、集法〔智と集〕類智と道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、苦・滅智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、倶に修せざる時と、一切の異生の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

㊅九六二中

④—5—3　若し苦智を修せば、亦た道智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)苦智を修して、道智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、苦法〔智と苦〕類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の苦智 現在前する時な

り。(b)道智を修して、苦智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の道智 現在前する時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の未だ得ざる無漏智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、集・滅法〔智と集・滅〕類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、苦・道智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、倶に修せざる時と、一切の異生の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④―6―1　若し集智を修せば、亦た滅智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)集智を修して、滅智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、集法〔智と集〕類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の集智 現在前する時なり。(b)滅智を修して、集智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、滅法〔智と滅〕類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の滅智 現在前する時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の未だ得ざる無漏智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦法〔智と苦〕類智と道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智 現在前するも、集・滅智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、倶に修せざる時と、一切の異生の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

④—6—2　若し集智を修せば、亦た道智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)集智を修して、道智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、集法〔智と集〕類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の集智　現在前する時なり。(b)道智を修して、集智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の道智　現在前する時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の未だ得ざる無漏智　現在前する時と、未だ得ざる世俗智　現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・滅法〔智と苦・滅〕類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智　現在前するも、集・道智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智　現在前する時と、未だ得ざる世俗智　現在前するも、倶に修せざる時と、一切の異生の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

大九六二下

④—7　若し滅智を修せば、亦た道智もなりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)滅智を修して、道智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、滅法〔智と滅〕類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の滅智　現在前する時なり。(b)道智を修して、滅智〔を修する〕に非ざる有り。謂わく、現観に入りて、道法智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の道智　現在前する時なり。(c)倶に修する有り。謂わく、現観に入りて、道類智の時と、学見迹と阿羅漢の未だ得ざる無漏智　現在前する時と、未だ得ざる世俗智　現在前するに、能く倶に修する時なり。(d)倶に修せざる有り。謂わく、現観に入りて、苦・集法〔智と苦・集〕類智の時と、学見迹と阿羅漢の已得の無漏智　現在前す

るも、滅・道智〔現在前する〕に非ざる時と、已得の世俗智 現在前する時と、未だ得ざる世俗智 現在前するも、倶に修せざる時と、一切の異生の染汚心・無記心と、無想定・滅定と、無想天と、無漏の忍の時なり。

⑤ 法智乃至道智は、八智の中に於て、一一幾ばくの智か縁ずる。

答う。法智は七智を縁じ、類智を除く。類智は七智を縁じ、法智を除く。他心智と世俗智は、倶に八智を縁ず。苦智と集智は、倶に二智を縁ず。謂わく、他心・世俗智なり。滅智は智を縁ぜず。道智は七智を縁じ、世俗智を除く。

⑥ 法智乃至道智は、自他相い望んで、幾ばく[一八]の縁とか為る。

答う。法智は、法智の与めには四縁と為る。類智の与めには三縁と為り、所縁を除く。他心智の与めには四縁と為り、若し彼れの与めに因・等無間と為らば、所縁に非ず、若し彼れの与めに所縁と為らば、因・等無間に非ず。世俗智の与めには三縁と為り、因を除く。苦・集・滅智の与めには三縁と為り、所縁を除く。道智の与めには四縁となる。

類智は、類智の与めには四縁と為る。他心智の与めには四縁と為り、若し彼れの与めに因・等無間と為らば、所縁に非ず、若し彼れの与めに所縁と為らば、因・等無間に非ず。世俗智の与めには三縁と為り、因を除く。苦・集・滅智の与めには三縁と為り、所縁を除く。道智の与めには四縁と為る。法智の与めには三縁と為り、所縁を除く。

他心智は、他心智の与めには四縁と為り、若し彼れの与めに因・等無間と為らば、所縁

㊅九六三上

一八 幾ばくの縁とか為る　所縁縁・因縁・等無間縁・増上縁の四の中の幾ばくとなるかを問うのである。

に非ず、若し彼れの与めに所縁と為らば、因・等無間に非ず。世俗智の与めには四縁と為る。苦・集智の与めには四縁と為り、若し彼れの与めに因と為らば、所縁に非ず、若し彼れの与めに所縁と為らば、因に非ず。滅智の与めには三縁と為り、所縁を除く。道法〔智・道〕類智の与めには四縁と為る。

世俗智は、世俗智の与めには四縁と為る。苦・集智の与めには三縁と為り、因を除く。滅・道智の与めには二縁と為る。謂わく、等無間と増上なり。法類智の与めには三縁と為り、因を除く。他心智の与めには四縁と為り、若し彼れの与めに因・等無間と為らば、所縁に非ず、若し彼れの与めに所縁と為らば、因・等無間に非ず。

苦智は、苦智と及び集・滅智の与めに三縁と為り、所縁を除く。道法〔智・道〕類智の与めには四縁と為る。他心智の与めには四縁と為り、若し彼れの与めに因・等無間と為らば、所縁に非ず、若し彼れの与めに所縁と為らば、因・等無間に非ず。世俗智の与めには三縁と為り、因を除く。

集智は、集智と及び滅智の与めに三縁と為り、所縁を除く。道法〔智・道〕類智の与めには四縁と為る。他心智の与めには四縁と為り、若し彼れの与めに因・等無間と為らば、所縁に非ず、若し彼れの与めに所縁と為らば、因・等無間に非ず。世俗智の与めには三縁と為り、因を除く。苦智の与めには三縁と為り、所縁を除く。

滅智は、滅智の与めには三縁と為り、所縁を除く。道法〔智・道〕類智の与めには四縁と為る。他心智の与めには四縁と為り、若し彼れの与めに因・等無間と為らば、所縁に非ず、若し彼れの与めに所縁と為らば、因・等無間に非ず。世俗智の与めには三縁と為り、因を

除く。苦・集智の与めには三縁と為り、所縁を除く。

道智は、道智と及び法類智の与めには四縁と為る。他心智の与めには四縁と為り、若し彼れの与めに因・等無間と為らば、所縁に非ず、若し彼れの与めに所縁と為らば、因・等無間に非ず。世俗智の与めには三縁と為り、因を除く。苦・集・滅智の与めには三縁と為り、所縁を除く。

㊅九六三中

⑦—1　諸もろの結の欲界繋なる、彼の結 法智の断なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)結の欲界繋にして、法智の断に非ざる有り。謂わく、欲界の結にして、或いは忍の断、或いは余智の断、或いは断ぜざるなり。(b)結の法智の断にして、欲界繋に非ざる有り。謂わく、色・無色界の結にして、法智の断なるなり。(c)結の欲界繋にして亦た法智の断なる有り。謂わく、欲界の結にして、法智の断なるなり。(d)結の欲界繋にも非ず、亦た法智の断にも非ざる有り。謂わく、色・無色界の結にして、或いは忍の断、或いは余智の断、或いは断ぜざるなり。

⑦—2　諸もろの結の色・無色界繋なる、彼の結 類智の断なりや。

答う。諸もろの結の類智の断なる、彼の結は色・無色界繋なるも、結の色・無色界繋にして、類智の断に非ざる有り。謂わく、色・無色界の結にして、或いは忍の断、或いは余智の断、或いは断ぜざるなり。

⑦—3　諸もろの結の見苦所断（けんくしょだん）なる、彼の結 苦智の断なりや。

答う。諸もろの結の見苦所断なる、彼の結は苦智の断に非ず、或いは忍の断、或いは余

智の断、或いは断ぜざるなり。
設し結にして苦智の断ならば、彼の結 見苦所断なりや。
答う。諸もろの結の苦智の断なる、彼の結は見苦所断に非ず、是れ修所断なり。
⑦—4　諸もろの結の見集・〔見〕滅・〔見〕道所断なる、彼の結 集・滅・道智の断なりや。
答う。諸もろの結の見集・〔見〕滅・〔見〕道所断なる、彼の結は集・滅・道智の断に非ず、或いは忍の断、或いは余智の断、或いは断ぜざるなり。
設し結にして集・滅・道智の断ならば、彼の結 見集・〔見〕滅・〔見〕道所断なりや。
答う。諸もろの結の集・滅・道智の断なる、彼の結は見集・〔見〕滅・〔見〕道所断に非ず、是れ修所断なり。
⑧—1　諸もろの結の法智の断なる、彼の結の滅は法智の作證[一九]なりや。
答う。諸もろの結の法智の断なる、彼の結の滅は法智の作證なるも、結の滅 法智の作證にして、彼の結 法智の断に非ざる有り。謂わく、或いは忍の断、或いは余智の断にして、彼の結の滅は法智の作證なり。
⑧—2　諸もろの結の類智の断なる、彼の結の滅は類智の作證なりや。
答う。諸もろの結の類智の断なる、彼の結の滅は類智の作證なるも、結の滅 類智の作證にして、彼の結 類智の断に非ざる有り。謂わく、或いは忍の断、或いは余智の断にして、彼の結の滅は類智の作證なり。
⑧—3　諸もろの結の苦智の断なる、彼の結の滅は苦智の作證なりや。

一九　作證　煩悩の断とその滅の作證との関係が考察される。法智（類智）が結を断じ、かつその滅を作證する場合と、忍・世俗智・類智（法智）が結を断じ、法智（類智）がその滅を作證する場合とがあることを、以下に説く。

答う。諸もろの結の苦智の断なる、彼の結の滅は苦智の作証なるも、結の滅 苦智の作証にして、彼の結 苦智の断に非ざる有り。謂わく、或いは忍の断、或いは余智の断にして、彼の結の滅は苦智の作証なり。

⑧—4　諸もろの結の集・滅・道智の断なる、彼の結の滅は集・滅・道智の作証なりや。

答う。諸もろの結の集・滅・道智の断なる、彼の結の滅は集・滅・道智の作証なるも、結の滅 集・滅・道智の作証にして、彼の結 集・滅・道智の断に非ざる有り。謂わく、或いは忍の断、或いは余智の断にして、彼の結の滅は集・滅・道智の作証なり。

㊅九六三下

⑨　眼根乃至無色界の修所断の無明随眠は、十智の中に於て、幾ばくの智 知るや。

答う。〔二十二根の中〕眼根は、七智 知る。他心・滅・道智を除く。耳・鼻・舌・身・命根も亦た爾り。女根は、六智 知る。類・他心・滅・道智を除く。男根も亦た爾り。意根は、九智 知る。滅智を除く。楽・喜・捨・信等の五根も亦た爾り。苦根は、七智 知る。類・滅・道智を除く。憂根も亦た爾り。三無漏根は、七智 知る。苦・集・滅智を除く。〔十八界の中〕眼・耳・鼻・舌・身、色・声・触界は、七智 知る。他心・滅・道智を除く。〔十二処の中〕眼・耳・鼻・舌・身、色・声・触処と、色取蘊と、〔六界の中〕前五界と、有見・有対法も亦た爾り。香・味界は、六智 知る。類・他心・滅・道智を除く。香・味処も亦た爾り。眼・耳・身識界は、八智 知る。滅・道智を除く。後の四取蘊と、識界と、有漏法と、無記と、見・修所断の法も亦た爾り。鼻・舌・識界は、七智 知る。類・滅・道智を除く。不善の欲界繫の法も亦た爾り。意界・意識界は、九智 知る。滅智

を除く。意処と、後の四蘊と、有為法と、過去・未来・現在法も亦た爾り。法界は、十智知る。法処と、無色・無見・無対法と、善法も亦た爾り。

色蘊は、八智知る。他心・滅智を除く。有色法も亦た爾り。

無漏法は、八智知る。苦・集智を除く。無断法も亦た爾り。

無為法は、六智知る。他心・苦・集・道智を除く。

色界繋の法は、七智知る。法・滅・道智を除く。無色界繋の法は、六智知る。法・他心・滅・道智を除く。

学・無学法は、七智知る。苦・集・滅智を除く。非学非無学法は、九智知る。道智を除く。

苦・集諦は、八智知る。滅・道智を除く。世俗智と三重三摩地も亦た爾り。滅諦は、六智知る。他心・苦・集・道智を除く。道諦は、七智知る。苦・集・滅智を除く。苦・集・滅・道智と、三三摩地も亦た爾り。

四静慮は、九智知る。滅智を除く。他心智も亦た爾り。

四無量は、七智知る。法・滅・道智を除く。初の三解脱と、八勝処と、前の八遍処も亦た爾り。

下の三無色は、七智知る。法・他心・滅智を除く。第四・第五・第六解脱も亦た爾り。

第四無色は、六智知る。法・他心・滅・道智を除く。第七・第八解脱と、後の二遍処も亦た爾り。

㊅九六四上

法智は、六智知る。類・苦・集・滅智を除く。類智は、六智知る。法・苦・集・滅智

を除く。

三結は、八智 知る。滅・道智を除く。無明漏と、見・無明瀑流〔と見・無明〕軛と、〔四取の中〕見・戒禁取と、後の二身繫と、〔五結の中〕貪・慢結と、後の三順下分結と、五見と、眼・耳・身・意触所生愛身と、後の四随眠と、〔九結の中〕愛・慢・無明・見・取・疑結も亦た爾り。

三不善根は、七智 知る。類・滅・道智を除く。欲瀑流・軛・取と、前の二身繫と、五蓋と、〔五結の中〕瞋・嫉・慳結と、前の二順下分結と、鼻・舌触所生愛身と、欲貪・瞋恚随眠と、〔九結の中〕恚・嫉・慳結も亦た爾り。

〔三漏の中〕有漏は、七智 知る。法・滅・道智を除く。有瀑流・軛と、〔四取の中〕我語取と、無色貪を除きて余の四順上分結と、有貪随眠も亦た爾り。

無色貪〔順上分結〕は、六智 知る。法・他心・滅・道智を除く。

〔九十八随眠の中〕欲界の三十六随眠は、七智 知る。類・滅・道智を除く。色界の三十一随眠は、七智 知る。法・滅・道智を除く。無色界の三十一随眠は、六智 知る。法・他心・滅・道智を除く。

⑩—1 「無常想は、若しくは習し、若しくは修し、若しくは作す所 多からば、能く一切の欲貪・色貪・無色貪と、掉挙・慢・無明を除く」と説くが如き、此の想 当に幾ばくの智と相応すと言うべしや。

答う。応に言うべし、「能く欲貪を除くは、法智・苦智と相応し、能く色・無色貪を除

くは、類智・苦智と相応し、能く掉挙・慢・無明を除くは、法智・類智・苦智と相応す」と。

⑩—2 此の想 当に有尋有伺と言うべしや、無尋唯伺なりや、無尋無伺なりや。

答う。応に言うべし、「能く欲貪を除くは、有尋有伺、能く色・無色貪と掉挙・慢・無明を除くは、或いは有尋有伺、或いは無尋唯伺、或いは無尋無伺なり」と。

⑩—3 此の想 当に幾ばくの根と相応すと言うべしや。

答う。応に言うべし、「能く欲貪を除くは、捨根と相応し、能く色・無色貪と掉挙・慢・無明を除くは、楽・喜・捨根と相応す」と。

⑩—4 此の想 当に空・無願・無相と倶なりと言うべしや。

答う。応に言うべし、「無願と倶なり」と。

⑩—5 此の想 当に何れの界繫を縁ずと言うべしや。

答う。応に言うべし、「能く欲貪を除くは、欲界繫を縁じ、能く色貪を除くは、色界繫を縁じ、能く無色貪を除くは、無色界繫を縁じ、能く掉挙・慢・無明を除くは、三界繫を縁ず」と。

㊅九六四中

⑪—1 「七処善と三義観は、能く此の法毘奈耶の中に於て、速やかに諸もろの漏を尽くす。云何んが七と為す。謂わく、如実に、色と、色の集と、色の滅と、色の滅に趣く行と、色の味と、色の患と、色の出を知るなり。如実に受・想・行・識の七を知るも亦た爾り」と説くが如き、此の智 当に法智乃至道智なりと言うべしや。

答う。応に言うべし、「如実に色を知るは、是れ四智なり。謂わく、法・類・世俗・苦智なり。如実に色の集を知るは、是れ四智なり。謂わく、法・類・世俗・集智なり。如実に色の滅を知るは、是れ四智なり。謂わく、法・類・世俗・滅智なり。如実に色の滅に趣く行を知るは、是れ四智なり。謂わく、法・類・世俗・道智なり。如実に色の味を知るは、是れ四智なり。謂わく、法・類・世俗・集智なり。如実に色の患を知るは、是れ四智なり。謂わく、法・類・世俗・苦智なり。如実に色の出を知るは、是れ四智なり。謂わく、法・類・世俗・滅智なり。如実に受・想・行・識の七を知るも亦た爾り」と。

⑪—2　色乃至識の滅(nirodha)と、色乃至識の出(niḥsaraṇa)と、何の差別かある。

答う。若し此の愛に由りて、諸もろの色の集 起こらば、彼の断を色の滅と名づく。若し諸もろの余の愛 色を縁じて増広せば、彼の断を色の出と名づく。復た次に、若し此の業・煩悩に由りて、諸もろの色の集 起こらば、彼の断を色の滅と名づく。若し余の業・煩悩 色を縁じて増広せば、彼の断を色の出と名づく。復た次に、若し此の愛と及び業・煩悩に由りて、諸もろの色の集 起こらば、彼の断を色の滅と名づく。若し諸もろの余の愛と及び業・煩悩 色を縁じて増広せば、彼の断を色の出と名づく。受・想・行・識の滅と出も亦た爾り。是れを差別と謂う。

智蘊　第三の中、七聖納息　第五の一

七聖の五徳に於ける　①二の成と②現と③三と④現と
⑤相応事と⑥四門とを　此の章にて願わくば具さに説かん

(大)九六四下

①—1　[補註19]随信行乃至倶解脱は、八智に於て、幾ばくか成就し、幾ばくか成就せざる。

答う。随信行は、八智に於て、或いは一、二、三、四、五、六、七、八を成就す。謂わく、苦法智忍の時、他心智無きは一、他心智有るは二なり。苦法智と苦類智忍の時、他心智無きは三、他心智有るは四なり。苦類智と集法智忍の時、他心智無きは四、他心智有るは五なり。集法智乃至滅法智忍の時、他心智無きは五、他心智有るは六なり。滅法智乃至道法智忍の時、他心智無きは六、他心智有るは七なり。道法智と道類智忍の時、他心智無きは七、他心智有るは八なり。

随法行も亦た爾り。

信勝解は、八智に於て、或いは七、八を成就す。謂わく、他心智無きは七、他心智有るは八なり。

見至も亦た爾り。

身證と、慧解脱と、倶解脱は、八智に於て、皆な成就す。

①―2　随信行乃至倶解脱は[補註20]、八智に於て、過去に幾ばく、未来に幾ばく、現在に幾ばくを成就すや。

答う。随信行は、八智に於て、苦法智忍の時、他心智無きは、過去・未来に一、現在に無し。他心智有るは、過去・未来に二、現在に無し。苦法智の時、他心智無きは、過去に一、未来に三、現在に二なり。他心智有るは、過去に二、未来に四、現在に二なり。苦類智忍の時、他心智無きは、過去・未来に三、現在に無し。他心智有るは、過去・未来に四、現在に無し。苦類智の時、他心智無きは、過去に三、未来に四、現在に二なり。他心智有るは、過去に四、未来に五、現在に二なり。集法智忍の時、他心智無きは、過去・未来に四、現在に無し。他心智有るは、過去・未来に五、現在に無し。集法智の時、他心智無きは、過去に四、未来に五、現在に二なり。他心智有るは、過去に五、未来に六、現在に二なり。集類智忍の時、他心智無きは、過去・未来に五、現在に無し。他心智有るは、過去・未来に六、現在に無し。集類智の時、他心智無きは、過去・未来に五、現在に二なり。他心智有るは、過去・未来に六、現在に二なり。滅法智忍の時、他心智無きは、過去・未来に五、現在に無し。他心智有るは、過去・未来に六、現在に無し。滅法智の時、他心智無きは、過去に五、未来に六、現在に二なり。他心智有るは、過去に六、未来に七、現在に二なり。滅類智忍の時、他心智無きは、過去・未来に六、現在に無し。他心智有るは、過去・未来に七、現在に無し。滅類智の時、他心智無きは、過去・未来に六、現在に二なり。他心智有るは、過去・未来に七、現在に二なり。道法智忍の時、他心智無きは、過去・未来に六、現在に無し。他心智有るは、過去・未来に七、現在に無し。道法智の時、

㊅九六五上

他心智無きは、過去に六、未来に七、現在に二なり。他心智有るは、過去に七、未来に八、現在に二なり。道類智忍の時、他心智無きは、過去・未来に七、現在に無し。他心智有るは、過去・未来に八、現在に無し。

随法行も亦た爾り。

信勝解は、八智に於て、他心智無きは、未来に七、他心智有るは、未来に八なり。過去に若し已に滅するも失わず、現在に若し現在前せば〔成就する〕なり。

見至も亦た爾り。

身證と、慧解脱と、倶解脱は、八智に於て、皆な未来に八なり。過去に若し已に滅するも失わず、現在に若し現在前せば〔成就する〕なり。

② 随信行乃至倶解脱は、法智乃至道智 現在前する時、幾ばくの智 現在前すや。[補註21]

答う。随信行は、法智 現在前する時、二智 現在前す。謂わく、法・苦智の二、法・集智の二、法・滅智の二、法・道智の二なり。類智 現在前する時、二智 現在前す。謂わく、類・苦智の二、類・集智の二、類・滅智の二なり。苦智 現在前する時、二智 現在前す。謂わく、苦・法智の二、苦・類智の二なり。集智 現在前する時、二智 現在前す。謂わく、集・法智の二、集・類智の二なり。滅智 現在前する時、二智 現在前す。謂わく、滅・法智の二、滅・類智の二なり。道智 現在前する時、二智 現在前す。謂わく、道・法智の二なり。

随法行も亦た爾り。

信勝解は、法智 現在前する時、或いは二、三智 現在前す。謂わく、法・苦智の二、法・集智の二、法・滅智の二、法・道智にして他心智に非ざるは二、是れ他心智ならば三なり。類智 現在前する時、或いは二、三智 現在前す。謂わく、類・苦智の二、類・集智の二、類・滅智の二、類・道智にして他心智に非ざるは二、是れ他心智ならば三なり。他心智 現在前する時、或いは二、三智 現在前す。謂わく、他心・世俗智の二、他心・道・法智の三、他心・道・類智の三なり。世俗智 現在前する時、或いは一、二智 現在前す。

(大)九六五中

謂わく、世俗智にして他心智に非ざるは一、是れ他心智ならば二なり。苦智 現在前する時、二智 現在前す。謂わく、苦・法智の二、苦・類智の二なり。集智 現在前する時、二智 現在前す。謂わく、集・法智の二、集・類智の二なり。滅智 現在前する時、二智 現在前す。謂わく、滅・法智の二、滅・類智の二なり。道智 現在前する時、或いは二、三智 現在前す。謂わく、道・法智にして他心智に非ざるは二、是れ他心智ならば三、道類智にして他心智に非ざるは二、是れ他心智ならば三なり。

見至と身證も亦た爾り。

慧解脱は、法智 現在前する時、或いは二、三智 現在前す。謂わく、法・苦智にして尽(じん)・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、法・集智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、法・滅智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、法・道智にして尽・無生・他心智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生、或いは他心智ならば三なり。類智 現在前する時、或いは二、三智 現在前す。謂わく、類・苦智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、類・

集智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、類・滅智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、類・道智にして尽・無生・他心智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生、或いは他心智ならば三なり。他心智 現在前する時、或いは二、三智 現在前す。謂わく、他心・世俗智の二、他心・道・法智の三、他心・道・類智の三なり。世俗智 現在前する時、或いは一、二智 現在前す。謂わく、世俗智にして他心智に非ざるは一、是れ他心智ならば二なり。苦智 現在前する時、或いは二、三智 現在前す。苦・法智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、苦・類智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三なり。集智 現在前する時、或いは二、三智 現在前す。謂わく、集・法智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、集・類智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三なり。滅智 現在前する時、或いは二、三智 現在前す。謂わく、滅・法智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、滅・類智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三なり。道智 現在前する時、或いは二、三智 現在前す。謂わく、道・法智にして尽・無生・他心智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生、或いは他心智ならば三、道・類智にして尽・無生・他心智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生、或いは他心智ならば三なり。

㊅九六五下

俱解脱も亦た爾り。

③—1　随信行乃至俱解脱は、三三摩地(samādhi)に於て、幾ばくか成就し、幾ばくか成

就せざる。
答う。随信行は、三三摩地に於て、滅法智忍 未だ已生ならざるは二を成就し、已生なるは三を成就す。随法行も亦た爾り。
信勝解乃至倶解脱は、三三摩地に於て、皆な成就す。

③—2 [補註22]随信行乃至倶解脱は、三三摩地に於て、過去に幾ばく、未来に幾ばく、現在に幾ばくを成就すや。

答う。随信行は、三三摩地に於て、若し空〔三摩地〕に依りて正性離生に入らば、苦法智忍の時、過去に無く、未来に二、現在に一なり。苦法智乃至集法智忍の時、過去に一、未来に二、現在に一なり。集法智乃至集類智の時、過去・未来に二、現在に二なり。滅法智忍の時、過去に二、未来に三、現在に一なり。滅法智乃至道類智忍の時、過去・未来に三、現在に一なり。若し無願〔三摩地〕に依りて正性離生に入らば、苦法智忍の時、過去に無く、未来に二、現在に一なり。苦法智乃至集類智の時、過去に一、未来に二、現在に一なり。滅法智忍の時、過去に一、未来に三、現在に一なり。滅法智乃至道類智忍の時、過去に二、未来に三、現在に一なり。
随法行も亦た爾り。
信勝解乃至倶解脱は、三三摩地に於て、皆な未来に三、過去に、若し已に滅すも失わざれば〔成就し〕、現在は、若し現在前せば〔成就する〕なり。

③—3 [補註23]随信行乃至倶解脱は、空・無願・無相三摩地の現在前する時、幾ばくの智 現在前すや。

一二 空三摩地と無願三摩地と。空三摩地は苦諦の四行相の中の空・無我の二と相応する三昧であり、無願三摩地は苦諦の余他の二行相(苦・非常)と集諦・道諦の各四行相と相応する三昧である。いっぽう、無相三摩地は滅諦の四行相と相応する三昧であるから、滅法智忍が生ずるときはじめて成就する。

答う。随信行は、空三摩地 現在前する時、或いは二、或いは無し。謂わく、苦・法智の二、苦・類智の二、[二]二忍の時無し。無願三摩地 現在前する時、或いは二、或いは無し。謂わく、苦・法智の二、苦・類智の二、集・法智の二、集・類智の二、道・法智の二、[三]六忍の時無し。無相三摩地 現在前する時、或いは二、或いは無し。謂わく、滅・法智の二、滅・類智の二、[四]二忍の時無し。

[五]随法行も亦た爾り。

信勝解は、空三摩地 現在前する時、二智 現在前す。謂わく、苦・法智の二、苦・類智の二なり。無願三摩地 現在前する時、或いは二、或いは三なり。謂わく、苦・法智の二、苦・類智の二、集・法智の二、集・類智の二、道・法智にして他心智に非ざるは二、是れ他心智ならば三、道・類智にして他心智に非ざるは二、是れ他心智ならば三なり。無相三摩地 現在前する時、二智 現在前す。謂わく、滅・法智の二、滅・類智の二なり。

見至・身證も亦た爾り。

慧解脱は、空三摩地 現在前する時、二智 現在前す。謂わく、苦・法智の二、苦・類智の二なり。無願三摩地 現在前する時、或いは二、或いは三なり。謂わく、苦法智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、苦・類智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、集・法智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、集・類智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、道・法智にして尽・無生・他心智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生、或いは他心智ならば三、道・類智にして尽・無生・他心智に非ざるは二、是れ尽、或いは

(大)九六六上

二 二忍 苦法智忍と苦類智忍と。
三 六忍 苦法智忍・苦類智忍・集法智忍・集類智忍・道法智忍・道類智忍。
四 二忍 滅法智忍と滅類智忍と。
五 随法行も亦た爾り ここまでの一節の所説については、③-1を参照。

無生、或いは他心智ならば三なり。無相三摩地 現在前する時、或いは二、或いは三なり。謂わく、滅・法智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、滅・類智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三なり。

倶解脱も亦た爾り。

④ 随信行乃至倶解脱は、三無漏根・七覚支・八道支の、応ずるに随い現在前する時、幾ばくの智 現在前すや。

答う。随信行は、未知当知根[六] 現在前する時、或いは二、或いは無し。謂わく、苦・法智の二、苦・類智の二、集・法智の二、集・類智の二、滅・法智の二、滅・類智の二、道・法智の二、八忍の時無し。七覚支・八道支の現在前する時も亦た爾り。

随信行の如く、随法行も亦た爾り。

信勝解は、已知根[七] 現在前する時、或いは二、或いは三なり。謂わく、苦・法智の二、苦・類智の二、集・法智の二、集・類智の二、滅・法智の二、滅・類智の二、道・法智にして他心智に非ざるは二、是れ他心智ならば三、道・類智にして他心智に非ざるは二、是れ他心智ならば三なり。七覚支・八道支の現在前する時も亦た爾り。

信勝解の如く、見至・身證も亦た爾り。

慧解脱は、具知根[八] 現在前する時、或いは二、或いは三なり。謂わく、苦・法智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、苦・類智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、集・法智にして尽・無生智に非ざるは二、

(大)九六六中

六 未知当知根 見道に属する無漏の九根(意・楽・喜・捨・信・勤・念・定・慧)。

七 已知根 修道に属する無漏の九根。

八 具知根 無学道に属する無漏の九根。

是れ尽、或いは無生智ならば三、集・類智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、滅・法智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、滅・類智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生智ならば三、道・法智にして尽・無生・他心智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生、或いは他心智ならば三、道・類智にして尽・無生智に非ざるは二、是れ尽、或いは無生、或いは他心智ならば三なり。七覚支・七道支も亦た爾り。正見 現在前する時、或いは二、或いは三なり。苦・法智の二、苦・類智の二、集・法智の二、集・類智の二、滅・法智の二、滅・類智の二、道・法智にして他心智に非ざるは二、是れ他心智ならば三、道・類智にして他心智に非ざるは二、是れ他心智ならば三なり。

慧解脱の如く、倶解脱も亦た爾り。

⑤—1—1　諸法の法智相応なる、彼の法 類智相応なりや。

答う。爾らず。

設し法 類智相応ならば、彼の法 法智相応なりや。

答う。爾らず。[九]世俗智に対するも亦た爾り。

⑤—1—2　諸法の法智相応なる、彼の法 他心智相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の法智相応にして、他心智〔相応〕に非ざる有り。謂わく、他心智に摂めざる所の法智相応の法なり。(b)法の他心智相応にして、法智〔相応〕に非ざる有り。謂わく、法智に摂めざる所の他心智相応の法なり。(c)法の法智相応にして、亦

九　世俗智に対するも亦た爾り　法智相応の法と世俗智相応の法との間の関係も同様である、との意。

た他心智〔相応〕なる有り。謂わく、法智に摂めらるる他心智相応の法なり。(d)法の法智相応にも非ず、亦た他心智〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、法智と、他心智と、及び法智と他心智に摂めず、相応せざる諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

苦・集・滅・道智と及び正見に対するも亦た爾り。

⑤―1―3　諸法の法智相応なる、彼の法　空三摩地相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の法智相応にして、空〔三摩地相応〕に非ざる有り。謂わく、法智相応の空と、及び空と相応せざる法智相応の法なり。(b)法の空〔三摩地〕相応にして、法智〔相応〕に非ざる有り。謂わく、空相応の法智と、及び法智と相応せざる空相応の法なり。(c)法の法智相応にして、亦た空〔三摩地相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の法智相応にも非ず、亦た空〔三摩地相応〕にも非ざる有り。謂わく、法智と相応せざる空と、空と相応せざる法智と、及び法智と空に摂めず、相応せざる諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

無願[10]・無相・喜(き)覚支(かくし)・正思惟(しょうしゆい)も亦た爾り。

⑤―1―4　諸法の法智相応なる、彼の法　未知当知根相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の法智相応にして、未知当知根〔相応〕に非ざる有り。謂わく、未知当知根に摂めざる所の法智相応の法なり。(b)法の未知当知根相応にして、法智〔相応〕に非ざる有り。謂わく、未知当知根に摂めらるる法智と、及び法智に摂めず、相応せざる未知当知根相応の法なり。(c)法の法智相応にして、亦た未知当知根〔相応〕なる有

㊅九六六下

10 無願…正思惟も亦た爾り　「諸法の法智相応なる、彼の法は無願三摩地と相応なりや」、「諸法の法智相応なる、彼の法は無相三摩地と相応なりや」等々が同様に理解さるべきである、との意。

り。謂わく、未知当知根に摂めらるる法智相応の法なり。(d)法の法智相応にも非ず、亦た未知当知根〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、未知当知根に摂めざる所の法智と、及び法智と未知当知根に摂めず、相応せざる諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

已知・具知根に対するも亦た爾り。

⑤―1―5　諸法の法智相応なる、彼の法念覚支相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の法智相応にして、念〔覚支相応〕に非ざる有り。謂わく、法智相応の念覚支なり。(b)法の念覚支相応にして、法智〔相応〕に非ざる有り。謂わく、法智と、及び法智と相応せざる念覚支相応の法なり。(c)法の法智相応にして、亦た念〔覚支相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の法智相応にも非ず、亦た念〔覚支相応〕にも非ざる有り。謂わく、法智と相応せざる念覚支と、及び余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

精進・軽安・定・捨覚支と、正精進・正念・正定に対するも亦た爾り。

⑤―1―6　諸法の法智相応なる、彼の法択法覚支相応なりや。

答う。諸法の法智相応なるは、亦た択法覚支相応なるも、法の択法覚支相応にして、法智〔相応〕に非ざる有り。謂わく、法智に摂めざる所の択法覚支相応の法なり。

法智の後[一]に対するが如く、類智の後[二]に対するも亦た爾り。

説一切有部発智論　巻の第九

一　後　類智ないし正定を指す。
二　後　他心智ないし正定を指す。

㊅九六七上

阿毘達磨発智論

尊者迦多衍尼子 造
三蔵法師玄奘 詔を奉じて訳す

巻の第十

智蘊 第三の中、七聖納息 第五の二

⑤―2―1　諸法の他心智相応なる、彼の法 世俗智相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の他心智相応にして、世俗智〔相応〕に非ざる有り。謂わく、世俗智に摂めざる所の他心智相応の法なり。(b)法の世俗智相応にして、他心智〔相応〕に非ざる有り。謂わく、他心智に摂めざる所の世俗智相応の法なり。(c)法の他心智相応にして、亦た世俗智〔相応〕なる有り。謂わく、他心智に摂めらるる世俗智相応の法なり。(d)法の他心智相応にも非ず、亦た世俗智〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、他心・世俗智と、

及び他心・世俗智に摂めず、相応せざる諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

道智と、択法覚支と、正見に対するも亦た爾り。

⑤―2―2 諸法の他心智相応なる、彼の法 苦智相応なりや。

答う。爾らず。

設し法 苦智相応ならば、彼の法 他心智相応なりや。

答う。爾らず。

集・滅智と、空・無相三摩地(samādhi)と、未知当知根に対するも亦た爾り。

⑤―2―3 諸法の他心智相応なる、彼の法 無願三摩地相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の他心智相応にして、無願〔三摩地相応〕に非ざる有り。謂わく、他心智相応の無願と、及び無願と相応せざる他心智相応の法なり。(b)法の無願〔三摩地〕相応にして、他心智〔相応〕に非ざる有り。謂わく、無願相応の他心智と、及び他心智と相応せざる無願相応の法なり。(c)法の他心智相応にして、亦た無願〔三摩地相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の他心智相応にも非ず、亦た無願〔三摩地相応〕にも非ざる有り。謂わく、他心智と相応せざる無願と、無願と相応せざる他心智と、及び諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

念・精進・喜・軽安・定・捨覚支と、正思惟・正精進・正念・正定に対するも亦た爾り。

⑤―2―4 諸法の他心智相応なる、彼の法 已知根相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の他心智相応にして、已知根〔相応〕に非ざる有り。謂

わく、已知根に摂めざる所の他心智相応の法なり。(b)法の已知根相応にして、他心智〔相応〕に非ざる有り。謂わく、已知根に摂めらるる他心智と、及び他心智に摂めず、相応せざる已知根相応の法なり。(c)法の他心智相応にして、亦た已知根〔相応〕なる有り。謂わく、已知根に摂めらるる他心智相応の法なり。(d)法の他心智相応にも非ず、亦た已知根〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、已知根に摂めざる所の他心智と、及び他心智と、已知根に摂めず、相応せざる諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

具知根に対するも亦た爾り。

⑤―3　諸法の世俗智相応なる、彼の法　苦智乃至正定相応なりや。

答う。爾らず。

設し法　苦智乃至正定相応ならば、彼の法　世俗智相応なりや。

答う。爾らず。

⑤―4―1　諸法の苦智相応なる、彼の法　集智相応なりや。

答う。爾らず。

設し法　集智相応ならば、彼の法　苦智相応なりや。

答う。爾らず。

滅・道智と、無相三摩地に対するも亦た爾り。

⑤―4―2　諸法の苦智相応なる、彼の法　空三摩地相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の苦智相応にして、空〔三摩地相応〕に非ざる有り。謂わく、苦智相応の空と、及び空と相応せざる苦智相応の法なり。(b)法の空三摩地相応にし

て、苦智〔相応〕に非ざる有り。謂わく、空相応の苦智と、及び苦智と相応せざる空相応の法なり。(c)法の苦智相応にして、亦た空〔三摩地相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の苦智相応にも非ず、亦た空〔三摩地相応〕にも非ざる有り。謂わく、苦智と相応せざる空と、空と相応せざる苦智と、及び諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

無願〔三摩地〕に対するも亦た爾り。三無漏根と、七覚支と、八道支に対するは、法智に[一三]説けるが如し。

⑤—5—1　諸法の集智相応なる、彼の法　滅智相応なりや。

答う。爾らず。

設し法　滅智相応ならば、彼の法　集智相応なりや。

答う。爾らず。

道智と、空・無相三摩地に対するも亦た爾り。

⑤—5—2　諸法の集智相応なる、彼の法　無願三摩地相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の集智相応にして、無願〔三摩地相応〕に非ざる有り。謂わく、集智相応の無願なり。(b)法の無願〔三摩地〕相応にして、集智〔相応〕に非ざる有り。謂わく、集智と、及び集智と相応せざる無願相応の法なり。(c)法の集智相応にして、亦た無願〔三摩地相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の集智相応にも非ず、亦た無願〔三摩地相応〕にも非ざる有り。謂わく、集智と相応せざる無願と、及び諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

一三　法智に説ける　⑤—1—4から⑤—1—6までに説いた。

(大)九六七下

三無漏根と、七覚支と、八道支に対するは、法智に説けるが如し。

⑤―6―1　諸法の滅智相応なる、彼の法 道智相応なりや。

答う。爾らず。

設し法 道智相応ならば、彼の法 滅智相応なりや。

答う。爾らず。

空・無願三摩地に対するも亦た爾り。

⑤―6―2　諸法の滅智相応なる、彼の法 無相三摩地相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の滅智相応にして、無相〔三摩地相応〕に非ざる有り。謂わく、滅智相応の無相なり。(b)法の無相三摩地相応にして、滅智〔三摩地相応〕に非ざる有り。謂わく、滅智と、及び滅智と相応せざる無相相応の法なり。(c)法の滅智相応にして、亦た無相〔三摩地相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の滅智相応にも非ず、亦た無相〔三摩地相応〕にも非ざる有り。謂わく、滅智と相応せざる無相と、及び諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

三無漏根と、七覚支と、八道支に対するは、法智に説けるが如し。

⑤―7―1　諸法の道智相応なる、彼の法 空三摩地相応なりや。

答う。爾らず。

設し法 空三摩地相応ならば、彼の法 道智相応なりや。

答う。爾らず。

無相三摩地に対するも亦た爾り。

⑤—7—2　諸法の道智相応なる、彼の法 無願三摩地相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の道智相応にして、無願〔三摩地相応〕に非ざる有り。謂わく、道智相応の無願なり。(b)法の無願〔三摩地〕相応にして、道智〔相応〕に非ざる有り。謂わく、道智と、及び道智と相応せざる無願相応の法なり。(c)法の道智相応にして、亦た無願〔三摩地相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の道智相応にも非ず、亦た無願〔三摩地相応〕にも非ざる有り。謂わく、道智と相応せざる無願と、及び諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

三無漏根と、七覚支と、八道支に対するは、法智に説けるが如し。

⑤—8—1　諸法の空三摩地相応なる、彼の法 無願三摩地相応なりや。

答う。爾らず。

設し法 無願三摩地相応ならば、彼の法 空三摩地相応なりや。

答う。爾らず。

無相〔三摩地〕に対するも亦た爾り。

⑤—8—2　諸法の空三摩地相応なる、彼の法 未知当知根相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の空〔三摩地〕相応にして、未知当知根〔相応〕に非ざる有り。謂わく、未知当知根に摂めざる所の空相応の法なり。(b)法の未知当知根相応にして、空〔三摩地相応〕に非ざる有り。謂わく、未知当知根に摂めらるる空と、及び空に摂めず、相応せざる未知当知根相応の法なり。(c)法の空〔三摩地〕相応にして、亦た未知当知根〔相応〕なる有り。謂わく、未知当知根に摂めらるる空相応の法なり。(d)法の空〔三摩地〕相応

㊅九六八上

にも非ず、亦た未知当知根〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、未知当知根に摂めざる所の空と、及び空と未知当知根に摂めず、相応せざる諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

已知・具知根に対するも亦た爾り。

⑤—8—3　諸法の空三摩地相応なる、彼の法　念覚支相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の空〔三摩地〕相応にして、念覚支〔相応〕に非ざる有り。謂わく、空相応の念覚支なり。(b)法の念覚支相応にして、空〔三摩地相応〕に非ざる有り。謂わく、空と、及び空と相応せざる念覚支相応の法なり。(c)法の空〔三摩地〕相応にして、亦た念覚支〔相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の空〔三摩地〕相応にも非ず、亦た念覚支〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、空と相応せざる念覚支と、及び諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

択法・精進・軽安・捨覚支と、正見・正精進・正念に対するも亦た爾り。

⑤—8—4　諸法の空三摩地相応なる、彼の法　喜覚支相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の空〔三摩地〕相応にして、喜〔覚支相応〕に非ざる有り。謂わく、空相応の喜覚支と、及び喜と相応せざる空相応の法なり。(b)法の喜覚支相応にして、空〔三摩地相応〕に非ざる有り。謂わく、喜覚支相応の空と、空と相応せざる喜覚支相応の法なり。(c)法の空〔三摩地〕相応にして、亦た喜〔覚支相応〕なる有り。謂わく、二と相応する法なり。(d)法の空〔三摩地〕相応にも非ず、亦た喜〔覚支相応〕にも非ざる有り。謂わく、空と相応せざる喜覚支と、喜覚支と相応せざる空と、及び諸もろの余の心・心所法と、

色と、無為と、心不相応行なり。

正思惟に対するも亦た爾り。

⑤—8—5　諸法の空三摩地相応なる、彼の法　定覚支相応なりや。

答う。諸法の空〔三摩地〕相応なる、彼の法は亦た定覚支相応なるも、法の定覚支相応にして、空〔三摩地相応〕に非ざる有り。謂わく、空に摂めざる所の定覚支相応の法なり。

正定に対するも亦た爾り。

空の後に対するが如く、無願・無相の後に対するも亦た爾り。差別(しゃべつ)有るは、空の、喜覚支と正思惟に対するが如く、無願・無相は、喜覚支と、正見・正思惟に対するも亦た爾なるなり。

⑤—9—1　諸法の未知当知根相応なる、彼の法　已知根相応なりや。

㊅九六八中

答う。爾らず。

設し法　已知根相応ならば、彼の法　未知当知根相応なりや。

答う。爾らず。

具知根に対するも亦た爾り。

⑤—9—2　諸法の未知当知根相応なる、彼の法　念覚支相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の未知当知根相応にして、念〔覚支相応〕に非ざる有り。謂わく、未知当知根に摂めらるる念覚支なり。(b)法の念覚支相応にして、未知当知根〔相応〕に非ざる有り。謂わく、未知当知根に摂めざる所の念覚支相応の法なり。(c)法の未知当知根相応にして、亦た念〔覚支相応〕なる有り。謂わく、未知当知根に摂めらるる念覚支

相応の法なり。(d)法の未知当知根相応にも非ず、亦た念〔覚支相応〕にも非ざる有り。謂わく、未知当知根に摂めざる所の念覚支と、及び諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

択法・精進・定覚支と、正見・正精進・正念・正定も亦た爾り。

⑤―9―3　諸法の未知当知根相応なる、彼の法 喜覚支相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の未知当知根相応にして、喜〔覚支相応〕に非ざる有り。謂わく、未知当知根に摂めらるる喜覚支と、及び喜覚支に摂めず、相応せざる未知当知根相応の法なり。(b)法の喜覚支相応にして、未知当知根〔相応〕に非ざる有り。謂わく、未知当知根に摂めざる所の喜覚支相応の法なり。(c)法の未知当知根相応にして、亦た喜〔覚支相応〕なる有り。謂わく、未知当知根に摂めらるる喜覚支相応の法なり。(d)法の未知当知根相応にも非ず、亦た喜〔覚支相応〕にも非ざる有り。謂わく、未知当知根に摂めざる所の喜覚支と、及び喜覚支・未知当知根に摂めず、相応せざる諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

⑤―9―4　諸法の未知当知根相応なる、彼の法 軽安覚支相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の未知当知根相応にして、軽安〔覚支相応〕に非ざる有り。謂わく、未知当知根相応の軽安覚支なり。(b)法の軽安〔覚支〕相応にして、未知当知根〔相応〕に非ざる有り。謂わく、未知当知根と相応せざる軽安覚支相応の法なり。(c)法の未知当知根相応にして、亦た軽安〔覚支相応〕なる有り。謂わく、未知当知根相応の軽安覚支相応の法なり。(d)法の未知当知根相応にも非ず、亦た軽安〔覚支相応〕にも非ざる有り。謂

わく、未知当知根と相応せざる軽安覚支と、及び諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

捨覚支に対するも亦た爾り。

⑤―9―5　諸法の未知当知根相応なる、彼の法 正思惟相応なりや。

答う。応に四句を作るべし。(a)法の未知当知根相応にして、正思惟〔相応〕に非ざる有り。謂わく、未知当知根相応の正思惟と、及び正思惟と相応せざる未知当知根相応の法なり。(b)法の正思惟相応にして、未知当知根〔相応〕に非ざる有り。謂わく、未知当知根と相応せざる正思惟相応の法なり。(c)法の未知当知根相応にして、亦た正思惟〔相応〕なる有り。謂わく、未知当知根相応の正思惟相応の法なり。(d)法の未知当知根相応にも非ず、亦た正思惟〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、未知当知根と相応せざる正思惟と、及び未知当知根・正思惟と相応せざる諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

未知当知根の後に対するが如く、已知・具知根の後に対するも亦た爾り。差別有るは、具知根の正見に対するに、応に四句を作るべし。(a)法の具知根相応にして、正見〔相応〕に非ざる有り。謂わく、具知根に摂めらるる正見と、及び正見に摂めず、相応せざる具知根相応の法なり。(b)法の正見相応にして、具知根〔相応〕に非ざる有り。謂わく、具知根に摂めざる所の正見相応の法なり。(c)法の具知根相応にして、亦た正見〔相応〕なる有り。謂わく、具知根に摂めらるる正見相応の法なり。(d)法の具知根相応にも非ず、亦た正見〔相応〕にも非ざる有り。謂わく、具知根に摂めざる所の正見と、及び正見・具知根に摂めず、相応せざる諸もろの余の心・心所法と、色と、無為と、心不相応行となり。

念覚支乃至正念の後に対するは、広説せば、覚支納息[一四]の如し。

⑥—1 「苾芻。吾れ当に汝が為めに四十四智事を説くべし。汝応に諦らかに聴き、極めて善く作意すべし。云何んが四十四智事なる。謂わく、老死を知る智、老死の集を知る智、老死の滅を知る智、老死の滅に趣く行を知る智、是くの如く、生・有・取・愛・受・触・六処・名色・識〔と次第し〕、行を知る智、行の集を知る智、行の滅を知る智、行の滅に趣く行を知る智あり。是れを四十四智事と名づく」と説きたもうが如き、此の中の老死を知る智等の四十四智事は、当に法智乃至道智と言うべしや。

答う。応に言うべし、「老死を知る智は是れ四智なり。謂わく、法・類・世俗・苦智なり。老死の集を知る智は是れ四智なり。謂わく、法・類・世俗・集智なり。老死の滅を知る智は是れ四智なり。謂わく、法・類・世俗・滅智なり。老死の滅に趣く行を知る智は是れ四智なり。謂わく、法・類・世俗・道智なり。生乃至行の四智なるも亦た爾り」と。

㊅九六九上

⑥—2 「苾芻。吾れ当に汝が為めに七十七智事を説くべし。汝応に諦らかに観じ、極めて善く作意すべし。云何んが七十七智事なる。謂わく、生縁たりて老死ありと知る智、生縁たらずして老死あるに非ずと知る智、過去に生縁たりて老死ありと知る智、彼れは、生縁たらずして老死あるに非ずと知る智、未来に生縁たりて老死ありと知る智、彼れは、生縁たらずして老死あるに非ずと知る智、及び法住智[一五]の、此の事は無常・有為にして、心の所作、縁より生ぜる尽法・滅法・離法・滅法なりと遍知するもの、是くの如く、有・取・愛・受・触・六処・名色・識・行〔と次第し〕、無明縁たりて行ありと知る智、無明

一四 覚支納息 第三篇第一章。

一五 法住智 『大毘婆沙論』の説明に依れば、「法」は果であり「住」は因である。果である法の住するところの因を知る智であるから、「法住智」と名づけられる、という。

縁たらずして行あるに非ずと知る智、過去に無明 縁たりて行ありと知る智、彼れは、無明 縁たらずして行あるに非ずと知る智、未来に無明 縁たりて行ありと知る智、彼れは、無明 縁たらずして行あるに非ずと知る智、及び法住智の、此の事は是れ無常・有為にして、心の所作、縁より生ぜる尽法・滅法・離法・滅法なりと遍知するものなり」と説くが如き、此の中の、生 縁たりて老死ありと知る智等の七十七智事は、当に法智乃至道智と言うべしや。

答う。応に言うべし、「生 縁たりて老死ありと知る等の前の六智は、皆な是れ四智なり。謂わく、法・類・世俗・集智なり。第七の法住智は、是れ一のみにして、世俗智なり。生 縁たりて老死ありと知る七智の如く、乃至(ないし)、無明 縁たりて行ありと知る七智も亦た爾り。

⑥—3—1—1　若し法智を成就せば、彼れ 類智もなりや。

答う。[16]若し得ば〔さなり〕。

設し類智を成就せば、彼れ 法智もなりや。

答う。[17]是くの如し。

⑥—3—1—2　若し法智を成就せば、彼れ 他心智もなりや。

答う。若し得て[18]失わずば〔さなり〕。

設し他心智を成就せば、彼れ 法智もなりや。

答う。[19]若し得ば〔さなり〕。

⑥—3—1—3　若し法智を成就せば、彼れ 世俗智もなりや。

一六　若し得ば〔さなり〕　苦類智が現前するより以後ならば類智も成就する、の意。

一七　是くの如し　苦類智を得るとき（すなわちはじめて類智を成就するとき）苦法智は必ずすでに得られている（すなわち法智は成就されている）。

一八　失わずば　欲染が生ずれば他心智は失われるが、それがなければ。

一九　若し得ば　苦法智が生じて以後ならば。

答う。是くの如し。[二〇]
設し世俗智を成就せば、彼れ 法智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
⑥—3—1—4　若し法智を成就せば、彼れ 苦智もなりや。
答う。是くの如し。
設し苦智を成就せば、彼れ 法智もなりや。
答う。是くの如し。
⑥—3—1—5　若し法智を成就せば、彼れ 集智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し集智を成就せば、彼れ 法智もなりや。
答う。是くの如し。
⑥—3—1—6　若し法智を成就せば、彼れ 滅智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し滅智を成就せば、彼れ 法智もなりや。
答う。是くの如し。
⑥—3—1—7　若し法智を成就せば、彼れ 道智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し道智を成就せば、彼れ 法智もなりや。
答う。是くの如し。

㊅九六九中

二〇　是くの如し　すべての有漏心は世俗智を倶有せざるは無い。

⑥—3—2—1　若し類智を成就せば、彼れ 他心智もなりや。
答う。若し得て失わずば〔さなり〕。
設し他心智を成就せば、彼れ 類智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
⑥—3—2—2　若し類智を成就せば、彼れ 世俗智もなりや。
答う。是くの如し。
設し世俗智を成就せば、彼れ 類智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
⑥—3—2—3　若し類智を成就せば、彼れ 苦智もなりや。
答う。是くの如し。
設し苦智を成就せば、彼れ 類智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
⑥—3—2—4　若し類智を成就せば、彼れ 集智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し集智を成就せば、彼れ 類智もなりや。
答う。是くの如し。
⑥—3—2—5　若し類智を成就せば、彼れ 滅智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し滅智を成就せば、彼れ 類智もなりや。

答う。是くの如し。
⑥―3―2―6　若し類智を成就せば、彼れ 道智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し道智を成就せば、彼れ 類智もなりや。
答う。是くの如し。
⑥―3―3―1　若し他心智を成就せば、彼れ 世俗智もなりや。
答う。是くの如し。
設し世俗智を成就せば、彼れ 他心智もなりや。
答う。若し得て失わずば〔さなり〕。
⑥―3―3―2　若し他心智を成就せば、彼れ 苦智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し苦智を成就せば、彼れ 他心智もなりや。
答う。設し得て失わずば〔さなり〕。
⑥―3―3―3　若し他心智を成就せば、彼れ 集智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し集智を成就せば、彼れ 他心智もなりや。
答う。若し得て失わずば〔さなり〕。
⑥―3―3―4　若し他心智を成就せば、彼れ 滅智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。

設し滅智を成就せば、彼れ他心智もなりや。
答う。若し得て失わずば〔さなり〕。
⑥―3―3―5　若し他心智を成就せば、彼れ道智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し道智を成就せば、彼れ他心智もなりや。
答う。若し得て失わずば〔さなり〕。
⑥―3―4―1　若し世俗智を成就せば、彼れ苦智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し苦智を成就せば、彼れ世俗智もなりや。
答う。是くの如し。
⑥―3―4―2　若し世俗智を成就せば、彼れ集智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し集智を成就せば、彼れ世俗智もなりや。
答う。是くの如し。
⑥―3―4―3　若し世俗智を成就せば、彼れ滅智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し滅智を成就せば、彼れ世俗智もなりや。
答う。是くの如し。
⑥―3―4―4　若し世俗智を成就せば、彼れ道智もなりや。

答う。若し得ば〔さなり〕。
設し道智を成就せば、彼れ 世俗智もなりや。
答う。是くの如し。
⑥―3―5―1　若し苦智を成就せば、彼れ 集智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し集智を成就せば、彼れ 苦智もなりや。
答う。是くの如し。
⑥―3―5―2　若し苦智を成就せば、彼れ 滅智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し滅智を成就せば、彼れ 苦智もなりや。
答う。是くの如し。
⑥―3―5―3　若し苦智を成就せば、彼れ 道智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し道智を成就せば、彼れ 苦智もなりや。
答う。是くの如し。
⑥―3―6―1　若し集智を成就せば、彼れ 滅智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し滅智を成就せば、彼れ 集智もなりや。
答う。是くの如し。

㊅九六九下

⑥—3—6—2　若し集智を成就せば、彼れ 道智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し道智を成就せば、彼れ 集智もなりや。
答う。是くの如し。

⑥—3—7　若し滅智を成就せば、彼れ 道智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し道智を成就せば、彼れ 滅智もなりや。
答う。是くの如し。

⑥—4—1—1　若し過去の法智を成就せば、彼れ 未来もなりや。
答う。是くの如し。
設し未来を成就せば、彼れ 過去もなりや。
答う。若し已(すで)に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥—4—1—2　若し過去の法智を成就せば、彼れ 現在もなりや。
答う。若し現在前せば〔さなり〕。
設し現在を成就せば、彼れ 過去もなりや。
答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥—4—1—3　若し未来の法智を成就せば、彼れ 現在もなりや。

答う。若し現在前せば〔さなり〕。
設し現在を成就せば、彼れ 未来もなりや。
答う。是くの如し。
⑥—4—1—4　若し過去の法智を成就せば、彼れ 未来・現在もなりや。
答う。未来は、定んで成就し、現在は、若し現在前せば〔さなり〕。
設し未来・現在を成就せば、彼れ 過去もなりや。
答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。
⑥—4—1—5　若し未来の法智を成就せば、彼れ 過去・現在もなりや。
答う。(a)未来なるも、過去・現在に非ざる有り。謂わく、彼れ 已に得て未だ滅せざるか、設い滅すとも已に失い、現在前せざるなり。(b)未来と及び過去なるも、現在に非ざる有り。謂わく、彼れ 已に滅して失わざるも、現在前せざるなり。(c)未来と及び現在なるも、過去に非ざる有り。謂わく、彼れ 現在前し、未だ滅せざるか、設い滅すとも已に失えるなり。(d)未来と及び過去・現在なる有り。謂わく、彼れ 已に滅するも失わず、亦た現在前するなり。
設し過去・現在を成就せば、彼れ 未来もなりや。
答う。是くの如し。
⑥—4—1—6　若し現在の法智を成就せば、彼れ 過去・未来もなりや。
答う。未来は、定んで成就し、過去は、若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し

未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。
設し過去・未来を成就せば、彼れ現在もなりや。
答う。若し現在前せば〔さなり〕。
法智の六類を歴るが如く、苦・集・滅・道智も亦た爾り。
⑥—4—1—7　若し過去の他心智を成就せば、彼れ未来もなりや。
答う。是くの如し。
設し未来を成就せば、彼れ過去もなりや。
答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。
⑥—4—1—8　若し過去の他心智を成就せば、彼れ現在もなりや。
答う。若し現在前せば〔さなり〕。
設し現在を成就せば、彼れ過去もなりや。
答う。是くの如し。
⑥—4—1—9　若し未来の他心智を成就せば、彼れ現在もなりや。
答う。若し現在前せば〔さなり〕。
設し現在を成就せば、彼れ未来もなりや。
答う。是くの如し。
⑥—4—1—10　若し過去の他心智を成就せば、彼れ未来・現在もなりや。
答う。未来は定んで成就し、現在は、若し現在前せば〔さなり〕。

二　六類を歴る　1過去と未来、2過去と現在、3未来と現在、4過去と未来・現在、5未来と過去・現在、6現在と過去・未来の相互の間の成就、不成就の関係を考えること。法智についてのそれは⑥—4—1—1から⑥—4—1—6までに説かれた。苦・集・滅・道智の場合も同様である。他心智についてのそれが⑥—4—1—7から⑥—4—1—12までに説かれ、世俗智についてのそれが⑥—4—1—13から⑥—4—1—18までに説かれる。

㊅九七〇上

設し未来・現在を成就せば、彼れ 過去もなりや。

答う。是くの如し。

⑥―4―1―11　若し未来の他心智を成就せば、彼れ 過去・現在もなりや。

答う。(a)未来にして過去・現在に非ざる有り。謂わく、彼れ 已に得て失わずして、未だ滅せざるか、設い滅すとも已に失い、現在前せざるなり。(b)未来と及び過去にして現在に非ざる有り。謂わく、彼れ 已に滅して失わざるも、現在前せざるなり。(c)未来と及び過去・現在なる有り。謂わく、彼れ 現在前するなり。

設し過去・現在を成就せば、彼れ 未来もなりや。

答う。是くの如し。

⑥―4―1―12　若し現在の他心智を成就せば、彼れ 過去・未来もなりや。

答う。是くの如し。

設し過去・未来を成就せば、彼れ 現在もなりや。

答う。若し現在前せば〔さなり〕。

⑥―4―1―13　若し過去の世俗智を成就せば、彼れ 未来もなりや。

答う。是くの如し。

設し未来を成就せば、彼れ 過去もなりや。

答う。是くの如し。

⑥―4―1―14　若し過去の世俗智を成就せば、彼れ 現在もなりや。

答う。若し現在前せば〔さなり〕。

設し現在を成就せば、彼れ 過去もなりや。
答う。是くの如し。
⑥—4—1—15　若し未来の世俗智を成就せば、彼れ 現在もなりや。
答う。若し現在前せば〔さなり〕。
設し現在を成就せば、彼れ 未来もなりや。
答う。是くの如し。
⑥—4—1—16　若し過去の世俗智を成就せば、彼れ 未来・現在もなりや。
答う。未来は定んで成就し、現在は、若し現在前せば〔さなり〕。
設し未来・現在を成就せば、彼れ 過去もなりや。
答う。是くの如し。
⑥—4—1—17　若し未来の世俗智を成就せば、彼れ 過去・現在もなりや。
答う。過去は定んで成就し、現在は、若し現在前せば〔さなり〕。
設し過去・現在を成就せば、彼れ 未来もなりや。
答う。是くの如し。
⑥—4—1—18　若し現在の世俗智を成就せば、彼れ 過去・未来もなりや。
答う。是くの如し。
設し過去・未来を成就せば、彼れ 現在もなりや。
答う。若し現在前せば〔さなり〕。
⑥—4—2—1　若し過去の法智を成就せば、彼れ 過去の類智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。
設し過去の類智を成就せば、彼れ過去の法智もなりや。
答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。
⑥―4―2―2　若し過去の法智を成就せば、彼れ未来の類智もなりや。
答う。若し得ば〔さなり〕。
設し未来の類智を成就せば、彼れ過去の法智もなりや。
答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。
⑥―4―2―3　若し過去の法智を成就せば、彼れ現在の類智もなりや。
答う。若し現在前せば〔さなり〕。
設し現在の類智を成就せば、彼れ過去の法智もなりや。
答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば成就せず。
⑥―4―2―4　若し過去の法智を成就せば、彼れ過去・現在の類智もなりや。
答う。(a)過去の法智にして過去・現在の類智に非ざる有り。謂わく、法智已に滅するも失わず、類智未だ滅せざるか、設い滅すとも已に失い、現在前せざるなり。(b)過去の法智と、及び過去の類智にして、現在に非ざる有り。謂わく、法・類智已に滅するも失

㊅九七〇中

わず、類智 現在前せざるなり。(c)過去の法智と、及び現在の類智にして、過去に非ざる有り。謂わく、法智 已に滅するも失わず、類智 現在前して、未だ滅せざるか、設い滅すとも已に失えるなり。(d)過去の法智と及び過去・現在の類智なる有り。謂わく、法・類智已に滅するも失わず、類智 現在前するなり。

設し過去・現在の類智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥―4―2―5　若し過去の法智を成就せば、彼れ 未来・現在の類智もなりや。

答う。(a)過去の法智にして、未来・現在の類智に非ざる有り。謂わく、法智 已に滅して失わざるも、未だ類智を得ざるなり。(b)過去の法智と、及び未来の類智にして、現在に非ざる有り。謂わく、法智 已に滅するも失わず、已に類智を得るも、現在前せざるなり。(c)過去の法智と、及び未来・現在の類智なる有り。謂わく、法智 已に滅するも失わず、類智 現在前するなり。

設し未来・現在の類智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥―4―2―6　若し過去の法智を成就せば、彼れ 過去・未来の類智もなりや。

答う。(a)過去の法智にして、過去・未来の類智に非ざる有り。謂わく、法智 已に滅して失わざるも、未だ類智を得ざるなり。(b)過去の法智と、及び未来の類智にして、過去に

非ざる有り。謂わく、法智 已に滅するも失わず、已に類智を得て、未だ滅せざるか、設い滅すとも已に失えるなり。(c)過去の法智と、及び過去・未来の類智なる有り。謂わく、法・類智 已に滅するも失わざるなり。

設し過去・未来の類智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥—4—2—7　若し過去の法智を成就せば、彼れ 過去・未来・現在の類智もなりや。　(大)九七〇下

答う。(a)過去の法智にして、過去・未来・現在の類智に非ざる有り。謂わく、法智 已に滅して失わざるも、未だ類智を得ざるなり。(b)過去の法智と、及び未来の類智にして、過去・現在に非ざる有り。謂わく、法智 已に滅して失わず、已に類智を得て未だ滅せざるか、設い滅すとも已に失い、現在前せざるなり。(c)過去の法智と、及び未来・現在の類智にして、過去に非ざる有り。謂わく、法智 已に滅するも失わず、類智 現在前して未だ滅せざるか、設い滅すとも已に失えるなり。(d)過去の法智と、及び過去・未来の類智にして、現在に非ざる有り。謂わく、法・類智 已に滅して失わず、類智 現在前せざるなり。(e)過去の法智と、及び過去・未来・現在の類智なる有り。謂わく、法・類智 已に滅して失わず、類智 現在前するなり。

設し過去・未来・現在の類智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

類智に対して小の七を作るが如く、集・滅・道智に対するも亦た爾り。[三]

⑥―4―2―8　若し過去の法智を成就せば、彼れ 過去の他心智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

設し過去の他心智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥―4―2―9　若し過去の法智を成就せば、彼れ 未来の他心智もなりや。

答う。若し已に得て失わずば〔さなり〕。

設し未来の他心智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥―4―2―10　若し過去の法智を成就せば、彼れ 現在の他心智もなりや。

答う。若し現在前せば〔さなり〕。

設し現在の他心智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥―4―2―11　若し過去の法智を成就せば、彼れ 過去・現在の他心智もなりや。

答う。(a)過去の法智にして、過去・現在の他心智に非ざる有り。謂わく、法智 已に滅

三　小の七を作る　過去の法智と1過去2未来3現在4過去・現在5未来・現在6過去・未来7過去・未来・現在の類智との相互の間の成就・不成就の関係を⑥―4―2―1から⑥―4―2―7までに説いたことをいう。過去の法智と、同じ七種の集智・滅智・道智の各々と、の間の相互の関係も同様である。過去の法智と七種の他心智の各々との間の相互の関係は⑥―4―2―8から⑥―4―2―14までに説かれる。過去の法智と七種の世俗智の各々との間の相互の関係は⑥―4―2―15から⑥―4―2―21までに説かれる。過去の法智と七種の苦智の各々との間の相互の関係は⑥―4―2―22から⑥―4―2―28までに説かれる。

するも失わず、他心智 未だ滅せざるか、設い滅すとも已に失い、現在前せざるなり。(b)過去の法智と、及び過去の他心智にして、現在に非ざる有り。謂わく、法・他心智 已に滅するも失わず、他心智 現在前せざるなり。(c)過去の法智と、及び過去・現在の他心智なる有り。謂わく、法智 已に滅するも失わず、他心智 現在前するなり。

設し過去・現在の他心智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

大九七一上

⑥―4―2―12　若し過去の法智を成就せば、彼れ 未来・現在の他心智もなりや。

答う。(a)過去の法智にして、未来・現在の他心智に非ざる有り。謂わく、法智 已に滅して失わざるに、未だ他心智を得ざるか、設い得るも已に失えるなり。(b)過去の法智と、及び未来の他心智にして、現在に非ざる有り。謂わく、法智 已に滅するも失わず、他心智 已に得て失わずして、現在前せざるなり。(c)過去の法智と、及び未来・現在の他心智なる有り。謂わく、法智 已に滅するも失わず、他心智 現在前するなり。

設し未来・現在の他心智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥―4―2―13　若し過去の法智を成就せば、彼れ 過去・未来の他心智もなりや。

答う。(a)過去の法智にして、過去・未来の他心智に非ざる有り。謂わく、法智 已に滅して失わざるも、未だ他心智を得ざるか、設い得るも已に失えるなり。(b)過去の法智と、

及び未来の他心智にして、過去に非ざる有り。謂わく、法智 已に滅するも失わず、他心智 已に得て失わず、未だ滅せざるか、設い滅すとも已に失えるなり。(c)過去の法智と、及び過去・未来の他心智なる有り。謂わく、法・他心智 已に滅するも失わざるなり。

設し過去・未来の他心智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥—4—2—14　若し過去の法智を成就せば、彼れ 過去・未来・現在の他心智もなりや。

答う。(a)過去の法智にして、過去・未来・現在の他心智に非ざる有り。謂わく、法智 已に滅して失わざるも、未だ他心智を得ざるか、設い得るも已に失えるなり。(b)過去の法智と、及び未来の他心智にして、過去・現在に非ざる有り。謂わく、法智 已に滅して失わず、他心智 已に得て失わず、未だ滅せざるか、設い滅すとも已に失い、現在前せざるなり。(c)過去の法智と、及び過去・未来の他心智にして、現在に非ざる有り。謂わく、法・他心智 已に滅するも失わず、他心智 現在前せざるなり。(d)過去の法智と、及び過去・未来・現在の他心智なる有り。謂わく、法智 已に滅するも失わず、他心智 現在前するなり。

設し過去・未来・現在の他心智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥—4—2—15　若し過去の法智を成就せば、彼れ 過去の世俗智もなりや。

大九七一中

答う。是くの如し。

設し過去の世俗智を成就せば、彼れ過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥―4―2―16　若し過去の法智を成就せば、彼れ未来の世俗智もなりや。

答う。是くの如し。

設し未来の世俗智を成就せば、彼れ過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥―4―2―17　若し過去の法智を成就せば、彼れ現在の世俗智もなりや。

答う。若し現在前せば〔さなり〕。

設し現在の世俗智を成就せば、彼れ過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥―4―2―18　若し過去の法智を成就せば、彼れ過去・現在の世俗智もなりや。

答う。過去〔の世俗智〕は定んで成就す。現在は、若し現在前せば〔成就す〕。

設し過去・現在の世俗智を成就せば、彼れ過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥—4—2—19　若し過去の法智を成就せば、彼れ 未来・現在の世俗智もなりや。
答う。未来〔の世俗智〕は定んで成就す。現在は、若し現在前せば〔成就す〕。
設し未来・現在の世俗智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。
答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。
⑥—4—2—20　若し過去の法智を成就せば、彼れ 過去・未来の世俗智もなりや。
答う。是くの如し。
設し過去・未来の世俗智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。
答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。
⑥—4—2—21　若し過去の法智を成就せば、彼れ 過去・未来・現在の世俗智もなりや。
答う。過去・未来〔の世俗智〕は定んで成就す。現在は、若し現在前せば〔成就す〕。
設し過去・未来・現在の世俗智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。
答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。
⑥—4—2—22　若し過去の法智を成就せば、彼れ 過去の苦智もなりや。
答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。
設し過去の苦智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥―4―2―23　若し過去の法智を成就せば、彼れ未来の苦智もなりや。

答う。是くの如し。

設し未来の苦智を成就せば、彼れ過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥―4―2―24　若し過去の法智を成就せば、彼れ現在の苦智もなりや。

若し現在前せば〔さなり〕。

設し現在の苦智を成就せば、彼れ過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥―4―2―25　若し過去の法智を成就せば、彼れ過去・現在の苦智もなりや。

答う。(a)過去の法智にして、過去・現在の苦智に非ざる有り。謂わく、法智已に滅するも失わず、苦智未だ滅せざるか、設い滅すとも已に失ひ、現在前せざるなり。(b)過去の法智と、及び過去の苦智にして、現在に非ざる有り。謂わく、法・苦智已に滅して失わざるも、苦智現在前せざるなり。(c)過去の法智と、及び現在の苦智にして、過去に非ざる有り。謂わく、法智已に滅するも失わず、苦智現在前して、未だ滅せざるか、設い滅すとも已に失えるなり。(d)過去の法智と、及び過去・現在の苦智なる有り。謂わく、法

㊅九七一下

・苦智 已に滅するも失わず、苦智 現在前するなり。

設し過去・現在の苦智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥―4―2―26　若し過去の法智を成就せば、彼れ 未来・現在の苦智もなりや。

答う。未来〔の苦智〕は定んで成就し、現在は、若し現在前せば〔さなり〕。

設し未来・現在の苦智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥―4―2―27　若し過去の法智を成就せば、彼れ 過去・未来の苦智もなりや。

答う。未来〔の苦智〕は定んで成就し、過去は、若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

設し過去・未来の苦智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

⑥―4―2―28　若し過去の法智を成就せば、彼れ 過去・未来・現在の苦智もなりや。

答う。(a)過去の法智と、及び未来の苦智にして、過去・現在に非ざる有り。謂わく、法智 已に滅するも失わず、苦智 未だ滅せざるか、設い滅すとも已に失い、現在前せざるなり。(b)過去の法智と、及び未来・現在の苦智にして、過去に非ざる有り。謂わく、法智

已に滅するも失わず、苦智 現在前して、未だ滅せざるか、設い滅すとも已に失えるなり。(c)過去の法智と、及び過去・未来の苦智にして、現在に非ざる有り。謂わく、法・苦智已に滅して失わざるも、苦智 現在前せざるなり。(d)過去の法智と、及び過去・未来・現在の苦智なる有り。謂わく、法・苦智 已に滅するも失わず、苦智 現在前するなり。

設し過去・未来・現在の苦智を成就せば、彼れ 過去の法智もなりや。

答う。若し已に滅するも失わずんば則ち成就す。若し未だ滅せずば〔成就せず〕、設い滅すとも已に失わば則ち成就せず。

(大)九七二上

[二三]法智の後に対して小の七を作るが如く、[二四]乃至、滅智の道智に対するも、其の応ずる所に随いて小の七を作ることも亦た爾り。

小の七の如く、[二五]大の七も亦た爾り。差別は、二或いは多を以って一に対し、或いは一を以って二或いは多に対するなり。過去を首(はじめ)と為(な)して七有るが如く、未来、乃至、過去・未来・現在を首と為すも亦た各おの七有ること、応ずるが如くに当に知るべし。

説一切有部発智論 巻の第十

[二三] 法智の後に対して 以上、⑥—4—2—1から⑥—4—2—28までに法智をそれ以下の七智(類ないし苦)との関係において考察して、の意。

[二四] 乃至 「乃至」の語で略されているのは、類智の他心智に対する、世俗智に対する、苦智に対する、集智に対する、滅智に対する、道智に対する、他心智の世俗智に対する、苦智に対する、集智に対する、滅智に対する、道智に対する、世俗智の苦智に対する、集智に対する、滅智に対する、道智に対する、苦智の集智に対する、滅智に対する、道智に対する、集智の滅智に対する、道智に対する、の二十とおりの関係。そして次に「滅智の道智に対する」関係が考察されて「小の七」の論議が完了するわけである。

[二五] 大の七 「小の七」が一智と一智との間の関係を論じたのに対して、「大の七」とは、二智をもって一智に対し、一智をもって二智に対し、乃至、七智をもって残余の一智に対し、その一智をもって七智に対して、同様に関係論を展開することを意味する。

テクスト訂正一覧表

校異の詳細については『大正新脩大蔵経』第26巻の当該箇所を参照されたい。

略符号

〔三〕＝宋・元・明，三本　　〔聖〕＝正倉院聖語蔵本

〔宮〕＝宮内省図書寮本　　〔大〕＝大正新脩大蔵経

頁	段	行	訂正
919	a	5	有少信受 → 有少信愛(〔三〕〔宮〕)
923	c	1	又何所欲 → 又汝何所欲(〔三〕〔宮〕)
923	c	12	又何所欲 → 又汝何所欲(〔三〕〔宮〕)
924	a	22	不類不能 → 一類不能(〔大〕の誤植)
926	b	25	多欲 → 臣欲(〔聖〕，〔三〕〔宮〕には「巨」とある)
927	b	1	諸饕餮極饕餮 → 諸饕極饕餮極餮(〔聖〕)
927	b	6-7	諸不饕餮不極饕餮 → 諸不饕不極饕不餮不極餮(〔聖〕)
928	b	7	身燋 → 身焦(前後に合わせる)
928	b	22	同上
933	a	5	此於五見 → 於五見(〔三〕〔宮〕)
933	c	8	為等無間所縁増上 → 為等無間増上(〔三〕〔宮〕)
933	c	20	見説 → 具説(〔大〕の誤植)
935	b	24	謂具結者 → 謂具縛者(〔宮〕〔聖〕)
935	b	28	一結 → 二結(〔三〕〔宮〕〔聖〕)
936	b	5	即繫 → 則繫(〔宮〕〔聖〕)
936	b	5	即不繫 → 則不繫(〔三〕〔宮〕〔聖〕)
937	c	4	苦前未生 → 若前未生(〔大〕の誤植)
939	b	12	嫉恚 → 恚嫉(〔三〕〔宮〕)
939	b	23	初三依 → 初二依(〔元〕〔明〕〔宮〕)
944	b	29	有漏縁縁識 → 有漏縁縁縁識(〔三〕)
946	a	6	生十心 → 生二心(〔三〕〔宮〕〔聖〕)
946	c	12	瞋恚結 → 瞋結(〔聖〕)
948	b	5	寂慮 → 静慮(〔大〕の誤植)
948	b	7	初解脱 → 初二解脱(〔三〕〔宮〕)

949	b	7	至阿羅漢果 → 至阿羅漢(三宮聖)
949	c	27	至不還果時 → 至不還果(大の誤植)
950	a	21	無結愛尽 → 無結尽(三宮)
950	b	3-4	至阿羅漢果 → 至阿羅漢(三宮聖)
950	c	19	至阿羅漢果 → 至阿羅漢(三宮聖)
951	b	22	無学知見 → 無学智見(三宮)
951	c	28	従滅已不失 → 彼滅已不失(大の誤植)
952	a	15	諸智彼慧耶 → 諸智是慧耶(三宮聖)
953	a	17	正見如応耶 → 正見相応耶(大の誤植)
953	c	8	有定相応 → 有法定相応(三宮)
956	b	5	諸阿羅漢 → 謗阿羅漢(前後に基づき改める，宮聖には「諦」とある)
956	b	8	同上
956	b	11	諸阿羅漢 → 謗阿羅漢(宮聖)
956	b	26	能随憶知 → 能現憶知(三宮聖)
958	c	29	非修智 → 非集智(大の誤植)
959	c	27	已得無漏 → 已得無漏智(前後に基づき補う)
960	c	21	入無想定 → 無想定(聖)
963	b	12	彼繫非見 → 彼結非見(前後に基づき改める)
963	b	12	見修所断 → 是修所断(三宮聖)
965	b	20	現在前 → 現在前時(三宮)
965	c	14	未来一現在一 → 未来二現在一(三宮聖)
965	c	26	三忍時 → 二忍時(三宮)
968	b	7	亦爾 → 亦念(三宮)
969	a	9	滅法 → 減法(宮聖)
969	a	12	未来無明 → 知未来無明(前後に基づき補う)
969	a	13	行智非 → 行智知彼非(三宮)
969	a	14	滅法 → 減法(宮聖)

補　　註

補註 1 (第一篇第一章頭註 1)

完成された説一切有部の教義学に説かれる修行の階程は大略下のように表示できる。

1 順解脱分

2 順決択分

　a. 煖

　b. 頂

　c. 忍

　d. 世第一法

3 見　道

4 修　道

5 無 学 道

1と2とは準備段階，3と4とがまさしく煩悩を断ずる(すなわち，断ち切る)無漏道(聖道，道諦)の階程，5はすべての煩悩を断じおわった位ですなわち修行道の完成である。この『発智論』の冒頭では，2の中のd，b，aの順に論じているが，cには触れていない。

補註 2 (第一篇第一章頭註 1)

あらゆる存在(一切法)を分かって有漏・無漏の二とし，また，有為・無為の二とする。それらと四諦との関係を図示すれば以下のようになる。

	有為法	無為法
有漏法	苦，集	／
無漏法	道	滅

補註 3 (第一篇第一章頭註 2)

完成された説一切有部の教義学では，一切法を分かって五位・七十五法とする。表示すれば以下のごとくである。

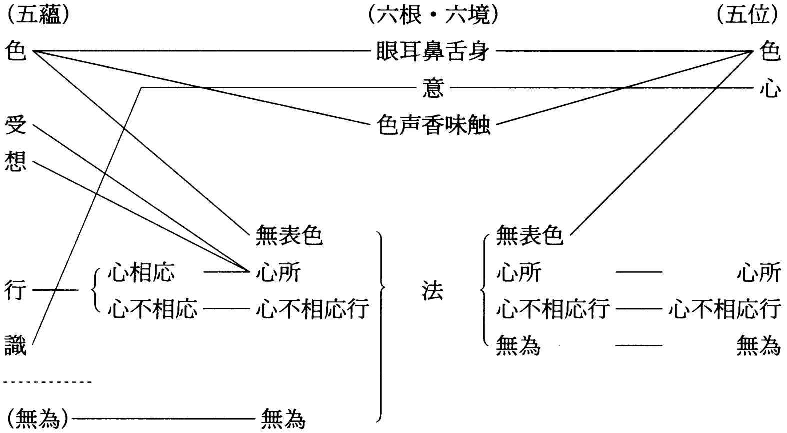
色11 ── 眼・耳・鼻・舌・身(五根)
　　　　 色・声・香・味・触(五境)

一

- 有為法 72
  - （色）…… 無表色
  - 心 1 ——（分かてば，眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の六識と意根との七となる）
  - 心所 46
    - 十　大　地 —— 受・想・思・触・欲・慧・念・作意・勝解・三摩地
    - 十 大 善 地 —— 信・勤・捨・慚・愧・無貪・無瞋・不害・軽安・不放逸
    - 六大煩悩地 —— 無明・放逸・懈怠・不信・惛沈・掉挙
    - 二大不善地 —— 無慚・無愧
    - 十小煩悩地 —— 忿・覆・慳・嫉・悩・害・恨・諂・誑・憍
    - 八　不　定 —— 悪作・睡眠・尋・伺・貪・瞋・慢・疑
  - 心不相応行 14 —— 得・非得・衆同分・無想果・無想定・滅尽定・命根・生・住・異・滅・名身・句身・文身
- 無為法 3 —— 択滅・非択滅・虚空

上の中，五境の一の「触」は触覚器官によって感受される感触を意味し，十大地の一の「触」は感官が対象と接触するときはたらく心の作用を意味する。「欲」は欲念や愛欲ではなく，意欲する心の作用を意味する。「無明」は［癡」と同じ，「三摩地」は「定」と同じである。

五蘊と五位との関係を図示すれば以下のようになる。



補註 4 (第一篇第一章頭註 12)

三界と五趣との関係は下図のとおり。

(三界) (五趣)

- 無色界(無色天) ─┐
- 色界(色天) ├─ 天
- 欲界 ─┬─ 六欲天(天界) ─┘
  - (地表) ── 人・傍生(畜生)・鬼(餓鬼)
  - (地下) ── 地獄

補註 5 (第一篇第一章頭註 14)

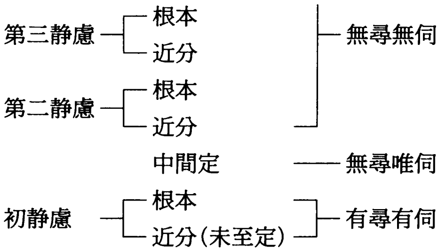
色・無色界と定(四静慮・四無色定)との関係は下図のとおり。

	[天]	[定]	
無色界	非想非非想処天(有頂天)	非想非非想処定	四無色定
	無所有処天	無所有処定	
	識無辺処天	識無辺処定	
	空無辺処天	空無辺処定	
色界	第四禅天 (色究竟天・善見天・善現天・無熱天・無煩天・広果天・福生天・無雲天)	第四静慮	四静慮
	第三禅天 (遍浄天・無量浄天・少浄天)	第三静慮	
	第二禅天 (極光浄天・無量光天・少光天)	第二静慮	
	初禅天 (大梵天・梵輔天・梵衆天)	初静慮	

補註 6 (第一篇第一章頭註 25)

尋・伺と静慮との関係は下図のとおり。

第四静慮 ─┬─ 根本
　　　　　└─ 近分



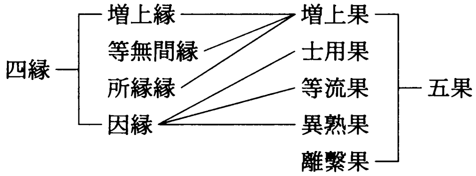
補註 7 (第一篇第一章頭註 28)

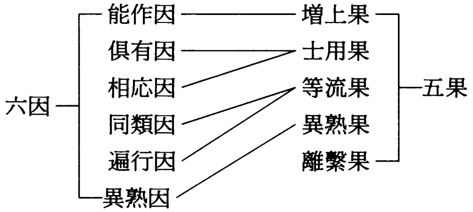
五受根の図示

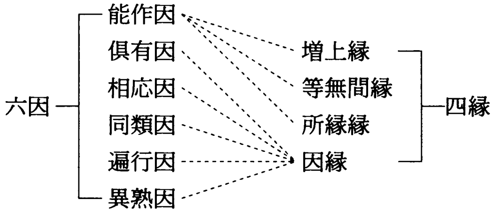
	快	不　快	非快非不快
心　受	喜(ただし第三静慮地では楽)	憂	捨
身　受	楽	苦	

補註 8 (第一篇第二章頭註 35)

完成された説一切有部の教義学では因果関係について四縁・六因・五果の説を立てる。すなわち原因を分類して四縁あるいは六因とし，結果を分類して五果とする。それらの相互関係を図示すれば，下のようになる。







補註 9　(第一篇第七章頭註 18)

天界は欲・色・無色の三界に亘る。色界・無色界の天については補註 5 を見よ。欲界の天は上下に重なった六つの領域に分けられ，それを六欲天という。下より順に四大王衆天(略して四王天)・三十三天・夜摩天・都史多天(兜率天ともいう)・楽変化天(化楽天ともいう)・他化自在天である。

補註 10　(第二篇第一章頭註 38)

九十八随眠を図示すれば下のとおり。

		貪	瞋	無明	慢	疑	有身見	辺執見	邪見	見取	戒禁取	計	
欲　界	見苦所断	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10	36
	見集所断	○	○	○	○	○			○	○		7	
	見滅所断	○	○	○	○	○			○	○		7	
	見道所断	○	○	○	○	○			○	○	○	8	
	修所断	○	○	○	○							4	
色　界	見苦所断	○		○	○	○	○	○	○	○	○	9	31
	見集所断	○		○	○	○			○	○		6	
	見滅所断	○		○	○	○			○	○		6	
	見道所断	○		○	○	○			○	○	○	7	
	修所断	○		○	○							3	
無色界	見苦所断	○		○	○	○	○	○	○	○	○	9	31
	見集所断	○		○	○	○			○	○		6	
	見滅所断	○		○	○	○			○	○		6	
	見道所断	○		○	○	○			○	○	○	7	
	修所断	○		○	○							3	

補註 11　(第二篇第二章頭註 1)

一行として示される九結の繋の相互関係(①-1-1 ～①-8-1)の図示。

	愛	慢	恚	無明	見	疑	取	嫉
慢	1-2	×	3-0	×	×	×	×	×
恚	1-1	(-1)	×	×	×	×	×	×
無明	1-3	(-2)	3-1	×	×	×	×	×
見	1-4	(-3)	3-2	4-1	×	×	×	×
疑	1-5	2 ― (-4)	3-3	4-2	5-2	×	7-0	×
取	1-6	(-5)	3-4	4-3	5-1	(-1)	×	×
嫉	1-7	(-6)	3-5	4-4	5-3	6 ― (-2)	7-1	×
慳	1-8	(-7)	3-6	4-5	5-4	(-3)	7-2	8

＊ 表の中の数字 1-1 は本文における①-1-1 を，8 は①-8 を示す。

補註 12 （第二篇第二章　②-1-1）

歴六として示される三世の結の繋の相互関係（②-1-1～2-9）の図示。

	愛	恚	慢	嫉	慳	無明 非遍行	無明 遍行	見	取	疑
過去と 未来と	1-1	|	|	|	|	|	|	7-1	|	|
過去と 現在と	1-2	|	|	|	|	|	|	7-2	|	|
未来と 現在と	1-3	|	|	|	|	|	|	7-3	|	|
		(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(10)		(8)	(9)
過去と 未来・現在と	1-4	|	|	|	|	|	|	7-4	|	|
未来と 過去・現在と	1-5	|	|	|	|	|	|	7-5	|	|
現在と 過去・未来と	1-6	|	|	|	|	|	|	7-6	|	|

＊ 表の中の数字 1-1 は本文における②-1-1 を，7-6 は②-7-6 を示す。

補註 13 （第二篇第二章　③-1-1-1 ）

小の七を説く中の，③-1-1 ～③-1-8 を図示すれば下のごとくになろう。

	恚	慢	無明	見	取	疑	嫉	慳
愛	1-1	1-4	1-5	1-6	1-7	1-8	1-2	1-3
恚	×	(2-1)	(2-2)	(2-3)	(2-4)	(2-5)	(2-6)	(2-7)
慢	×	×	(3-1)	(3-2)	(3-3)	(3-4)	(3-5)	(3-6)
無明	×	×	×	(4-1)	(4-2)	(4-3)	(4-4)	(4-5)
見	×	×	×	×	(5-1)	(5-2)	(5-3)	(5-4)
取	×	×	×	×	×	(6-1)	(6-2)	(6-3)
疑	×	×	×	×	×	×	(7-1)	(7-2)
嫉	×	×	×	×	×	×	×	8

六

＊ 表の中の数字 1-1 は本文における③-1-1(-1 ～-7)を，8 は 3-8 を示す。

数字を括弧で囲んだ部分は，本文に記述が省略されているので，考察される結の順序はまさしくこのようであるかどうか，保しがたい。

小の七として，過去の愛結の繫との相互関係を示される余他の結の三世七種(③-1-1-1〜3-1-8)の図示。

	恚	嫉	慳	慢	無明	見	取	疑
過去	1-1	―	―	4-1	5-1	6-1	―	―
未来	1-2	―	―	4-2	5-2	6-2	―	―
現在	1-3	―	―	4-3	5-3	6-3	―	―
過去・現在	1-4	(2)	(3)	4-4	5-4	6-4	(7)	(8)
未来・現在	1-5	―	―	4-5	5-5	6-5	―	―
過去・未来	1-6	―	―	4-6	5-6	6-6	―	―
過去・未来・現在	1-7	―	―	4-7	5-7	6-7	―	―

＊ 表の中の数字 1-1 は本文における③-1-1-1 を，6-7 は③-1-6-7 を示す。

補註 14 (第三篇第一章③-2 ，-3)

智と見と慧との関係を図示すれば下のごとくになる。

<table>
<tr><td></td><td>見</td><td>見にあらず</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td rowspan="3">智</td><td>／</td><td>五識相応の有漏慧</td><td rowspan="2">有漏</td><td rowspan="4">慧</td></tr>
<tr><td>世間の正見と染汚の五見</td><td>左以外の意識相応の有漏慧</td></tr>
<tr><td>忍・尽智・無生智以外の無漏慧</td><td>尽智・無生智</td><td rowspan="2">無漏</td></tr>
<tr><td rowspan="2">智にあらず</td><td>忍</td><td>／</td></tr>
<tr><td>眼根</td><td>慧・眼根以外の諸法</td><td colspan="2">慧にあらず</td></tr>
</table>

補註 15 (第三篇第一章頭註 22)

念覚支相応法と択法覚支相応法との関係を図示すれば下のとおり。次下に説く択法覚支相応法と精進覚支相応法との関係，精進覚支相応法と軽安覚支相応法との関係，軽安覚支相応法と定覚支相応法との関係，定覚支相応法と捨覚支相応法との関係なども同様である。

	択法相応	択法不相応
念相応	両者と相応する法	択法覚支
念不相応	念覚支	余他の心・心所，色，心不相応行，無為

七

補註 16　(第三篇第一章頭註 23)

念覚支相応法と喜覚支相応法との関係を図示すれば下のとおり。次下に説く択法覚支相応法と喜覚支相応法との関係，精進覚支相応法と喜覚支相応法との関係，軽安覚支相応法と喜覚支相応法との関係，軽安覚支相応法と正見相応法との関係なども同様である。

	喜相応	喜不相応
念相応	両者と相応する法	喜覚支。喜と相応せず念と相応する法
念不相応	念覚支	余他の心・心所，色，心不相応行，無為

補註 17　(第三篇第一章頭註 24)

喜覚支相応法と正見相応法との関係を図示すれば下のとおり。次下に説く正見相応法と正思惟相応法との関係も同様である。

	正見相応	正見不相応
喜相応	両者と相応する法	喜覚支と相応する正見 正見と相応せぬ喜覚支相応の法
喜不相応	正見と相応する喜覚支 喜覚支と相応せぬ正見相応の法	喜と相応せぬ正見 正見と相応せぬ喜 余他の心・心所，色，心不相応行，無為

補註 18　(第三篇第四章④-1-1)

智を修するということについて，四種の修(得修・習修・対治修・除遣修)が区別される(倶Ⅶ 33)。その中，以下の記述は得修と習修とに関わる。得修とは，現在に善法を修し，その善法の得を獲ることによって，未来におけるその善法の現前を結果することをいい，習修とは，已得の善法を重ねて現前せしめることをいう。以下，④-7までは，八智の一つ一つについて，それを修するときその他の智のおのおのを倶に修することになるかどうかを検討して，それぞれの場合について分別し考察する。

補註 19　(第三篇第五章①-1)

八　随信行あるいは随法行の者に苦法智忍が生じた瞬間においては，彼れはただ世俗智のみを成就する(具有する)。いかなる無漏の智も未だ生じていないからである。ついで，彼れが苦法智を得るとき，彼れには苦智と法智とが増す。ついで苦類智を

得るとき，類智を増す。ついで集法智を得るとき，集智を増す。ついで滅法智を得るとき，滅智をます。ついで道法智を得るとき，道智を増す。他心智は，以上のすべての場合を通じて，それを具有する者もあり，具有しない者もあるから，もし行者が他心智を具有するときは，おのおのの場合について，その一智を増す。また，信勝解あるいは見至の者はいずれも他心智以外の八智を必ず具有し，他心智については随信行・随法行の場合と同様である。身証・慧解脱あるいは倶解脱の者は，必ず他心智を具有するから，すべてが八智を具有することになる。

補註 20 （第三篇第五章①-2）

随信行あるいは随法行の者が苦法智忍を生ずるとき，その具有する世俗智は，過去あるいは未来であり，もしかれが他心智を有すればそれも同じく過・未である。なぜならば，忍は智でないから現在前する智はそこに無い。ついで，苦法智を生ずるときは，苦智・法智が初めて現在に生ずる。苦智・法智という無漏の智が現在前するのであるから，世俗智は当然現在であり得ない。また，他心智は見道においてけっして現在前することがない。したがって，苦智・法智は現在あるいは未来，世俗智は過去あるいは未来，そして他心智がある場合はそれも過去あるいは未来である。次に苦類智忍を生ずるときには，苦智・法智は現在しない。したがって，苦智・法智は過・未のみである。世俗智・他心智については，前刹那(苦法智のとき)と同様に，過・未である。次に，苦類智を生ずるときには，苦智は過・未・現であり，法智は過・未であり，類智は現・未であり，世俗智は過・未である。もし他心智を具有するならば，それも過・未である。集法智忍以下の場合についても，同様に考えれば，理解は容易であろう。信勝解ないし倶解脱の者は，未来の八智のすべてを具有する(ただし信勝解には他心智がないこともある)が，過去の智として具有するのはかつて得られ今はすでに滅しはしたが失なわれてはいない限りであり，現在の智として具有するのは現に生起していていまだ滅しない限りである。

補註 21 （第三篇第五章②）

随信行あるいは随法行の者において，法智と類智とは当然同時に現在せず，苦・集・滅・道智は当然互いに同時に現在せず，また道智と類智とも同時に現在しない(その二智が同時に現在する道類智の生ずるときに，行者はすでに見道を離れて修道に入っているから，もはや随信行・随法行ではない)。以上の場合を除けば，六智のおのおのは互いに他の智と同時に現在する。すなわち，法智は苦・集・滅・道智のいずれとも，また類智は苦・集・滅智のいずれとも，同時に現在することがあり得る。次に，信勝解・見至・身証の者においては，類智と道智とも同時に現在することがあり得る。また道智が他心智としてもはたらくことがあるから，その場合は道・法・他心の三智があるいは道・類・他心の三智が同時に現在する。また，世俗智が他心智と同時に現在することもある。次に，慧解脱・倶解脱の者において

は，信勝解の場合と同様であるが，六無漏智が尽智あるいは無生智としてはたらくときは，その一智(すなわち尽智かあるいは無生智)もまた同時に現在することになる。

補註 22 (第三篇第五章③-2)

図示すれば下のとおり。無相三摩地は滅智のみと相応するからである。

	過去	現在	未来
苦法智忍	―	空	空・無願
苦法智	空	空	空・無願
苦類智忍	空	空	空・無願
苦類智	空	空	空・無願
集法智忍	空	無願	空・無願
集法智	空・無願	無願	空・無願
集類智忍	空・無願	無願	空・無願
集類智	空・無願	無願	空・無願
滅法智忍	空・無願	無相	三
滅法智	三	無相	三
滅類智忍	三	無相	三
滅類智	三	無相	三
道法智忍	三	無願	三
道法智	三	無願	三
道類智忍	三	無願	三

補註 23 (第三篇第五章③-3)

上に掲げた図の中，苦法智ないし集法智忍の過去の欄の「空」を「無願」に改め，滅法智ないし道類智忍の過去の欄の「三」を「無相・無願」に改めれば，この場合の図示となる。無願三摩地に依って正性離性に入る者においては，空三摩地が現在することはないからである。

校註者紹介

桜部 建（さくらべ はじめ）　1925年、京都市生まれ。大谷大学卒。
元、大谷大学教授。現在、同朋大学講師。

加治洋一（かじ よういち）　大谷大学卒。現在、金沢市在住。大谷大学短期大学部助手。大阪外国語大学非常勤講師。

⑮毘曇部 1　新国訳大蔵経

1996年2月10日　第1刷　発行　©

校註者　桜部　建・加治洋一

発行者　鈴木正明

〒112 東京都文京区目白台1-17-6
発行所　大蔵出版株式会社
TEL. 03(3941)1950　FAX. 03(3943)3740

印刷所　中央印刷㈱・㈱厚徳社
製本所　㈱関山製本社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN4-8043-8011-6

発智論Ⅰ　正誤表（誤→正）

頁	行	誤→正
3	12	テキスト→テクスト
6	8	八頁第十行から一四頁→六頁第十行から一二頁
7	11	八犍度度→八犍度
9	15	体系化発展の段階→体系化の発展段階
21	上段図式	巻四＝Ⅱ－1＝巻三 巻五 巻六 }Ⅱ－2＝巻四 → 巻四＝Ⅱ－1 巻五 巻六 }Ⅱ＝2＝巻四 （Ⅱ－1、Ⅱ＝2 }巻三）
24	4	校異表（三三三、四ページ）→テクスト訂正一覧表（三三五、六ページ）
25	2	16ページ→14ページ
31	頭註5〜7	浅い方から数えて第二。その静慮に入れば、心に尋・伺は無く、喜受・楽受がある。→浅い方から数えて第一と第二。その静慮に入れば、心に喜受・楽受がある。
33	8	集（しゅう）→集（じゅう）
36	4	⑧疑と名・句・⑨文身と→⑧疑と⑨名・句・文身と
36	5	随眠心（ずいみんしん）→随眠心（ずいめんしん）
43	2	説きたまう→説きたもう
46	2	随眠（ずいみん）→随眠（ずいめん）
47	1	随眠（ずいみん）→随眠（ずいめん）
51	6	謂いたもう。→謂（のたも）う。
51	7	謂いたもう。→謂（のたも）う。
51	7	謂う。→謂（い）う。
64	7	交われば→交わらば

頁	行	誤 → 正
69	16	説きたまうなり → 説きたもうなり
72	12	執せざるなり。→ 執せざるなり」と。
87	1	告げたまう → 告げたもう
94	頭註21	比の忍 → 此の忍
117	頭註1	見を具ふる → 見を具うる
190	13	〔五取蘊の中〕と後の → 〔五取蘊の中〕後の
190	14	と識界と → 識界と
191	19	〔四無色の中〕と前の → 〔四無色の中〕前の
193	6	〔五見の中〕→〔四取の中〕
220	10	無学の智と見と → 無学の見
238	3~4	「妙悪行無し」、「業・果・異熟〔無し〕」→「妙・悪行の業・果・異熟無し」
249	14	度さる → 度(わた)さる
257	15	行相と作りて → 行相を作して（258頁2・4・6行も同様）
261	17	一切の異生の → 一切の異生〔心〕と、（263頁18行、264頁11行、265頁4・16行、267頁16行、268頁9行、269頁2・14行、278頁4・15行、279頁7・18行、280頁10行、281頁2行も同様）
278	2	法類智 → 滅法〔智と滅〕類智
288	15	法毘奈耶 → 法・毘奈耶
302	1	摂めず、相応せざる → 摂めず相応せざる
303	5~6	他心智と、已知根に摂めず、相応せざる → 他心智と已知根に摂めず相応せざる
335	6	無学智見(三宮) → 無学見(文意に基づき改める、三宮は「知」を「智」とする)
341	下から3行目	3-8 → ③-8